風に翼を広げて

凪沙　峻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風に翼を広げて

【Ｎコード】

Ｎ５７６５Ｄ

【作者名】

凪沙　峻

【あらすじ】

「わたし、飛びたい。自分の翼で風の中を飛びたいの！」絵里は両親と兄に言った。（第一話・「北星へ」より。）読んでくれる人に優しさと感動を与えたい。そんな気持ちでこの小説を書いた。こんな田舎の高校があってもいいし、純粋無垢な女子高生がいてもいいではないか。主人公の板倉絵里は、人口５００人にも満たない北海道の片田舎にある北星高校への入学した。爽やかで奇想天外なストーリーで描ききった「各話完結式」の学園小説。

第1話　北星へ

一月末のある日、ＪＲ函館本線札幌駅午前七時三十分、粉雪の舞う下りの十七番ホームにひとりの女子中学生が立っていた。名前は板倉絵里、十四歳。二月十三日で十五歳になる。三月には高校受験を控えている。

絵里は札幌市立南部第二中学校に通っていて、クラブ活動は剣道部に所属している。剣道は姿勢が良くなり、礼儀作法も覚えるとの父からのすすめで習いはじめ、一応は女子ジュニアの二段だ。スポーツは一応何でもこなすが、器械体操は一番得意な種目だ。

家族は両親と三歳上の兄がいて、シェルティー（シェットランド・シープドッグ）のトムという室内犬を飼っている。いつも旭と絵里をかわいがってくれた祖父は五年前、祖母は二年前に病死した。

父親は小さいながらも外科医院を開業している。兄は市立南部高校の三年生で、兄もまた大学受験を控えていた。どこにでもあるような家庭環境の中で絵里は育った。

両親は、どちらかといえば子供に対しては野放し状態だ。しかし自分勝手になにをしてもよいということではなく、善と悪の区別は厳しすぎるほど叩き込まれいている。三つ子の魂百までという言葉を父の優一はそのまま実践し、小学校を卒業するまでは、悪いことをしたとき、旭も絵里も何度父親から体罰を受けたかわからない。そのせいか父の優一よりも身体が大きくなり、腕相撲でも父より強くなった高校三年生の旭も、父親の怖さと偉大さだけは認めている。しっかりものの母親の小枝子も子供の行動はおおむね把握していて、曲がった方向に足を踏み入れそうになると、そのつど修正してくれる。

家庭内は明るいほうだと絵里は思っている。

子供のことは母親に任せきりで、父親は仕事仕事で子供との接点もなく、会話も少ない。子供たちは食事が終わると、さっさと自分

の部屋に鍵をかけてこもってしまう。そんな話をよく友達から聞いていたが、絵里の家庭ではそんなことはなかった。

父の優一は冗談が好きで、「こう見えても父さんは腕がいいんだ。おまえたちはバカだから、勉強のことで困ったときはいつでも相談しろ。脳みそのバカなところをタダで切ってやるぞ」などとオヤジギャグを飛ばしてはみんなを笑わせたり、時には失笑をかったりする。

母の小枝子は呆れ顔で夫を見つめながらも、子供たちの前では決して父親の悪口を言うことはない。両親も仲がよく、時にはあきれるくらいにベタベタするときがある。

学校のことでもほとんど野放し状態で、「勉強ばかりしてるとバカになるぞ。もっと遊べ」と言い、勉強している旭と絵里を無理やり家から連れ出す。

「試験が近いから、きょうはかんべんしてよ。トムと行けばいいじゃないか」と言う旭に、「つきあいの悪いやつだ。教科書や参考書のどこが面白いんだ。まったく親の顔が見たいよ」とブツブツ言いながら、「絵里、絵里。天気がいいぞ。公園に行こう！」と、次は絵里を連れ出そうとする。

「わかったよ。つきあうから…。まったく…。親は自分じゃないか」と、旭もあきれがおで椅子から立ち上がる。

両親は結婚したころ、父親の医学の勉強のため五年ほどアメリカに住んでいたせいで生活風習もアメリカ式のところが多い。両方とも五十歳になろうとしているが、家族の朝の挨拶は抱擁とキスから始まり、両親は出かけるときも堂々と手をつないで町を歩くし、家族で出かけることも多い。

兄の旭は高校三年生だが、親と一緒に出歩くことも嫌がらないし、父親似なのか性格は明るい。だから友達の言う夫婦の会話がないとか、子供を介して夫婦が物を言うとか、そういう家庭は絵里には信じられなかった。もちろん自分の部屋もドアは開けっ放しで、部屋の鍵などは家を建てたときからついていない。

その絵里も思春期にさしかかっていて、身体も心も少女から大人の女へと変化しつつあった。しかしそんな思春期の娘の心を知ってか知らずか、両親も兄もまったく気を使おうともしない。開けっぴろげな家庭環境のせいか、自分の身体の変調で憂鬱になっている暇もない。

あるとき、風呂から上がって身体を拭いていると突然浴室のドアが開いた。

「おっ、よし見たぞ！」

そう声をあげたのは兄の旭だった。月に一度くらいの割合で、旭は絵里の裸を覗きにくるのだ。

「変態！」

そう叫んで絵里は慌ててタオルで胸を覆った。が、もしかすると姿見に映った全身をしっかり見られたかもしれない。

「見たでしょ！」

浴室から出て居間に戻った絵里はそういって旭をにらんだ。

「いいじゃないか、見たからって別に減るもんじゃないだろ。だいいち、入浴中の札を出しておかなかったおまえが悪いんだ。それに、おまえの成長ぶりを確かめてこいって言ったのは父さんなんだぞ」

旭は、チラッと絵里のふくれっ面を振り返りながら、笑ってテレビの画面を見た。

最近でこそ父と一緒に風呂に入ることはなくなったが、中学一年までは毎日のように父と一緒に風呂に入っていた。絵里自身は今でも父と風呂に入りたいのだが、絵里の身体の変化に気を使っているのか、このごろは父のほうから一緒に入ることを避けているようだった。

「旭、絵里の裸はどうだった？」

父の優一はウィスキーを飲みながら笑って旭に聞いた。母は笑い出したいのをこらえている。

「だいじょうぶだ。ちゃんと胸はふくれてた…。ちょっと足が太いけどね」

旭は小声で父に言っている。その兄と父の目は完全に笑っていた。
「そうか、成長はしているんだな。安心したよ」
父はそう言ってまた新聞に目を落としたが、チラチラと絵里のほうを見ている。
「もう、最低…」
絵里はふくれながら母の小枝子が出した牛乳を飲み干した。母も笑っていた。トムが絵里の足元に寝そべっている。
「母さんもな…」
優一が旭の耳元に口を近づけた。
「世界のトップモデルに勝るくらい魅力的な裸だぞ。今でもだ！」
優一が小声で言った。
「父さんが惚れたわけだね」
旭が笑った。
「最近は見たことあるの？」
旭が目を丸くして聞いた。
「うーん。それが、なかなか忙しくてな…」
優一はそう言って腕を組んだ。
「もう…。ふたりとも、いいかげんにしないと怒るから！」
小枝子は振り向いて優一と旭をにらんだ。
「変体親子！」
絵里は、嬉しそうな顔で母と自分を交互に見る父と兄をにらんだ。

自分は幸せなのだろうと絵里は思った。家族みんなにかわいがられているし、自分も家族が大好きだった。
でも…。もしかすると、自分は大好きなその家族を裏切ることをしようとしているのでは…。自分のしようとしていることを知ったら、天国の祖父と祖母は、父は、母は、やさしくて大好きな兄はどんな顔をするだろうか。それを考えると気が重かった。
翼が欲しい。自分の翼で風の中を飛びたい。その思いを家族はわ

かってくれるだろうか。
絵里はホームを流れる冷たい真冬の風の中で肩をすくめた。髪と紺色のオーバーのすそが風になびいている。
午前七時四十一分、その風に乗って旭川行き特急〈スーパーおおぞら〉がホームに滑り込んできた。八時近い列車とあって通勤客や学生が多い。絵里はその列車に乗った。学生のほとんどは高校生だった。それぞれの学校によって制服の色や形は違っている。中には何色もの色を使った奇抜なデザインの制服もある。
札幌市内の中学校でもいろいろとこったデザインの制服を採用しているなかで、昔ながらの紺色を基調としたセーラー服の上に同じ紺色の外套を着ている絵里を、高校生たちはもの珍しそうに見ている。その上、中学校はほとんどその地元にあり、札幌駅から特急に乗って新札幌や江別方面まで通学する中学生はいないからなおのことだ。
「きみ、かわいいね。どこの中学?」
窓際に立っている絵里に、どこかの男子高校生たちがさかんに声をかけてきた。
「南部第二中学です」と絵里は笑顔で答えるが、どこにあるかもわからない名前に、男子高校生たちは笑って首を傾げるだけだった。
特急〈スーパーおおぞら〉は新札幌駅で二分間停車した。通勤と通学の客が半分ほど降りたところで、絵里は空いている席に座った。〈スーパーおおぞら〉は雑踏の新札幌駅を発車した。雪に覆われた石狩平野の景色が窓の外を流れている。その白い景色の中に両親と兄の笑顔が浮かんで、そして消えた。
「ごめんね、みんな…」
絵里は小さな声でつぶやいた。
家族には黙って出てきた。学校には風邪で休むと電話をしている。何かを理由に学校を休むのは三年間の中学校生活で初めてのことだった。
絵里は滝川駅で〈スーパーおおぞら〉を降り、滝川から接続する

根室本線の列車に乗った。二両編成の列車は乗客の姿もまばらで、一両に四・五人ほどしか乗っていない。
根室本線は富良野駅で旭川に接続する富良野線と別れ、列車は一両だけになった。富良野駅から数人の客が乗り込んだが、布部、山部と停車するうち、その乗客もいなくなり、町並みが消えて一面の銀世界の山あいを走るころになると、列車にはいつしか絵里だけが残っていた。たったひとりの乗客しかいない列車の中は一段と寒さが増し、絵里が外の景色を眺めている窓も少しずつ凍ってきていた。列車は金山駅で停車したが、絵里はまだ座席に座っていた。
やがて列車は動き出した。コトトン、カタタンと、車輪がレールの継ぎ目にあたる規則正しい音だけが聞こえている。その淋しい音を響かせながら列車はいくつかの長いトンネルをくぐった。絵里は凍って見えなくなった窓に息を吹きかけ、ハンカチでふいてかろうじて出来た透明なところから、外を流れる山の白い景色とその中にポツリポツリと見える民家、雪と氷に覆われた湖をながめていた。
「次の停車駅は、北星、北星です」という車内アナウンスが流れた。

「バカモノ！」
夜の九時過ぎに家に戻った絵里に父の優一が顔を真っ赤にして怒鳴った。
夕方の五時過ぎに北星駅の公衆電話から「今から帰る…」と、一方的に電話だけはしておいたが、家に着いたのは午後九時を過ぎていた。母の小枝子は絵里を見て安心した様な表情でソファーに座り込んだ。兄の旭は父の後ろから両手の人差し指で鬼の真似をして歯を剥き出し、父を指差して笑っている。トムは自分がしかられたと思っているのか、逃げるように小枝子の膝の上に飛び上がった。
「ごめんなさい…」
絵里は父に頭を下げてあやまった。
「どんなに心配したか…。このバカ娘！」

父はそう言って絵里の頭を軽くこぶしでたたいたあと、絵里を引き寄せてしっかりと抱きしめた。
「学校から電話がきて、今まで一度も休んだことのないおまえが風邪で休んだと聞いたときは、てっきり事故か家出かと思ったんだぞ。母さんも旭もどんなに心配したか…」
父はそう言いながら絵里の頬に唇をつけ、その頭を何度もなで回した。
「ごめんなさい」
父に抱きしめられながら涙があふれてきた。そして声を出して泣きじゃくった。
「おじいちゃんとおばあちゃんにあやまってこい」
父はそう言って絵里の背中を押した。
絵里は和室にある仏壇の前に座ってろうそくに火をつけた。線香を立て、りんを鳴らして手を合わせた。両親と兄も絵里の後ろに正座して仏壇に手を合わせている。トムは絵里の隣に座っている。
〈おじいちゃん、おばあちゃん、ごめんね…〉心の中で絵里は祖父と祖母に謝った。
〈わたしを応援してね〉
絵里は仏壇に上に飾ってある祖母と祖父の遺影を見上げた。
兄の旭が「バカ絵里」と言って絵里の頭をたたいて笑った。

「絵里、何があったの?。学校をずる休みしていったいどこへ行ってたの。ちゃんとみんなにわかるように説明しなさい!」
母の小枝子がトムをなでながら絵里をにらんだ。
「かあさん、刑事ドラマの取り調べじゃあるまいし、そんなに睨まなくてもいいじゃないか。なあ絵里」
旭が絵里の隣に腰をおろして言った。父の優一は腕を組んで絵里を見つめている。
「旭、今度ばかりは絵里をかばわないでちょうだい。かあさん本当

に怒っているんだからね。警察に捜索願いを出すところだったのよ！」
そう言った母の顔はまだ青ざめていた。
「心配かけてごめんなさい…」
絵里は下を向いたまま、また頭を下げて両親にあやまった。
「絵里、母さんの言うとおりだ。わけは言えないなんていうなよな。もしも言えないようなことなら、家族の中で、でっかい秘密を持つ第一号になるぞ」
旭は絵里の肩をたたいた。
「南富良野…」
絵里はうつむいたまま小さな声で言った。
「南、富良野？…」
母が絵里を覗き込むように言った。
「わたし、南富良野の北星高校に入学しようと思って、教頭先生と生活指導の先生の面接を受けたの。入学願書も出してきた…」
絵里は下を向いたままそう言った。
「……」
あまりに突然の絵里の言葉に、三人は意味が飲み込めず言葉を失っていた。
「ち、ちょっと…」
「わたし、飛びたいの！」
絵里は母の言葉をさえぎるように顔をあげて言った。
「わたし、動物の勉強をしたいの。将来は獣医さんになりたい。そのために北星高校の獣医学科で勉強したいの。ねえいいでしょう！」
絵里はそう言いながら父と母を見つめた。
「わたし、飛びたい。自分の翼で風の中を飛びたいの！。お父さんとお母さんがくれた翼で飛んでみたいの！」
絵里は両親を見ながら必死に言った。
「だからって、なにもあんな遠くの、それも田舎でなくったって…」
「ここじゃだめ！」

母の言葉を打ち消すように絵里が言った。
「ここじゃだめなの。何でもある町の中や、みんながいて甘えられる環境じゃ、わたし、自分自身を成長させられないと思うの。だから、みんなに内緒で手続きに行く決心をしたの。きっとみんなに止められる。止められたら決心が鈍る。そうなったら自分の翼で飛び立てない。そう思って！」
絵里は叫んだ。両親や兄に何かを言われる前に自分の気持ちだけは言おうと思った。言わなければ引き止められる。三人に引き止められたら決心は鈍って、ポトリと落ちた線香花火のようにあえなく消えてしまう。自分の翼で飛ぶことはできないのだ。両親と兄に自分の気持ちを必死に訴える絵里の目からは涙があふれそうになっていた。
「南富良野の、その北星とかいうところで、やっと十五歳になろうとするおまえがどうやって暮らす。札幌から通うわけにはいかないんだ。たったひとりで、下宿とか、学校の寮とかにはいらなきゃならない。いままで家族に包まれて生活してきたおまえに、それができる覚悟はあるのか？」
父が言った。母も射るようなまなざしで絵里を見つめている。
「うん。合格したらという条件で、寮に入る手続きもしてきた…」
絵里はまたうつむいて言った。
「……」
その絵里を見つめて父と母はため息をついた。旭は黙って絵里の横顔を見つめていた。
「それで、教頭先生はなんと言った？」
ため息をついたあと、父が聞いた。
「両親がいいと言えば、改めて相談しましょうって…。とりあえず試験だけは受けてくださいって…」
「……」
父の優一は腕を組んで、またため息をついた。
「試験はいつなんだ？」

旭が聞いた。
「三月六日…」
絵里は蚊のなくような声でつぶやいた。
「……」
両親は無言で絵里を見つめていた。何か言葉を出そうにも出てこないのだった。家族に黙って学校を休んだうえに、ひとりで南富良野まで出かけ、田舎の学校の受験の手続きをしてきたとは、半分あきれて次の言葉が出なかった。

「おにいちゃん、ちょっといい？」
絵里は開けっ放しの旭の部屋にはいった。
「うん…」
旭は勉強の手を止めて振り返った。パジャマ姿の絵里は旭のベッドに座った。絵里についてきたトムもベッドの上に上がった。
「お父さんとお母さん、怒ってるかな…」
絵里は旭を見つめて言った。
「まあな…。だけど怒ってるっていうより、突然でびっくりしてるっていうのが正直なところじゃないのか。俺だって驚いたよ」
旭はそう言って笑った。じっと自分を見つめる絵里は不安そうな表情だった。ただの生意気な妹と思っていた絵里が、両親や兄の自分も知らないところで自身の将来を考え、そのために自分で行動するまでになっていた。
旭自身、春には高校を卒業しようとしているのに、次の進路はいまだに決められないでいる。しかし絵里は将来獣医師になると心に決め、そのために誰にも甘えられないところに自分を追いつめて、家族の傘が届かない田舎の高校で動物の勉強をしようと、その場を南富良野の北星に決めた。中学生の絵里には並々ならぬ決意だっただろう。
南富良野の北星高校といえば、人口わずか五百人にも満たない田

舎の高校とはいえ、北海道ではダントツの学力を誇る学校で、日本全国でも三本の指にはいるといわれるほどの有名進学校だ。その中の農学科にある獣医学科は日本でも一・二を争う名門学科と聞く。その名門学科を選んだ妹が旭には少しまぶしく見えた。

絵里を見つめる旭の視界に、ドアのところに立って、どうしたものかと旭の部屋に入るのを躊躇している両親の姿が映った。旭は両親をチラッと見て視線を絵里に移した。

「おまえ…。この家や、俺たち家族と一緒にいるのが嫌になって、南富良野を選んだんじゃないんだな？」

旭は、自分の膝元に座ったトムをなでながら絵里に聞いた。

「ちがうわ。お父さんもお母さんも大好きよ。お兄ちゃんだって大好きよ。でもわたし…」

絵里はそう言うとうつむいて泣き出した。

「絵里…」

旭は絵里の隣に腰をおろして肩を抱いた。

「翼が…。わたし、翼が欲しかったの」

絵里は旭の胸に顔をうずめた。

「翼か…」

旭は絵里の頭をなでながらつぶやいた。

「飛びたくなったんだな…」

旭は絵里の頭を引き寄せた。

「自分の翼で飛び立つときがきたと、おまえはそう感じたから巣の外へ出て翼を広げてみた…。おまえの翼は、小さいながらも何とか風を受け止められるほどに羽根が生えてきた。だから飛び立つ決心をした…。そうなんだな、絵里」

旭は絵里を覗き込みながら言った。絵里は何度もうなずきながら旭の胸に顔をうずめて泣いていた。トムがふたりを見上げて尻尾を振っている。

「おまえがうらやましい。妹のおまえに先に巣立たれるとは…」

旭はふと笑った。

「応援するぞ、絵里！」
旭は力強くそう言って絵里を抱きしめ、頭を軽くたたいた。

「かあさん、どうしたもんかな…」
優一は隣に寝ている小枝子に言った。小枝子も寝付かれずにいた。
「絵里の話を聞いたときはさすがに驚いたけど、本心を言えば、子供のひとり立ちは仕方がないかなって…。少し早すぎるかなって気もするけど…」
小枝子は天井を見ながら言った。
「早すぎるに決まってるじゃないか。獣医の勉強するにしたって、なにも南富良野ってことはないだろうに…。札幌にだっていくらでもそのての学校はあるだろう」
優一は天井から小枝子に視線を移して言った。
「おとうさん。絵里がいなくなったら、お父さんが一番淋しいでしょうね」
小枝子は笑った。
「バカなことを…。それにしても、絵里はまだ十四歳だぞ」
優一が天井に向かってつぶやいた。
「十三日で十五歳よ」
小枝子が笑った。
「同じようなものだ。まだ子供に変わりはない…」
優一はブスッとして言った。
「あら、わたしの母なんか十八歳でお嫁にいったわ」
「十五歳と十八歳じゃ違うさ」
「そうね…。違うわね…」
小枝子は天井を見つめて言った。
「でもね…」
小枝子は夫のほうに顔を向けた。
「わたしたちの十五歳って、どんなだったか覚えてる？」

小枝子はまた天井を見た。
「真っ白で純粋で、右も左もわからないころで、高校受験のことばかりを考えて…。それが当たり前だと思っていたわ。でも今の十五歳は違う。自分の歩きたい道を見つけて、それに向かって走り出す決断ができる年齢なのよ。そういう意味では、義務教育を終える十五才は、大人になる第一歩のスタート地点かもしれないわ。わたしは、絵里がどんな人間になるか本当に楽しみ…」
小枝子は笑いながらつぶやいた。
「絵里が、あんなにはっきりと自分の意思を言葉にしたのは初めてよ。それだけ成長してるってことじゃないかしら」
小枝子が言った。
「ねえ、お父さん。少し遠くたって、同じ北海道なんだし、旅をさせてみるのも悪くないわよ。きっと絵里はひと回り大きな人間になると思うわ。おじいちゃんやおばあちゃんが生きていらしたら、きっと絵里を応援するでしょうね」
小枝子は、旭と絵里をかわいがっていた夫の両親を頭に思い浮かべた。
「旅か…」
そう言いながらも、優一は娘がいなくなったときのことを想像していた。
別に嫁に出すわけではないから、とも思ったが、それでも一番淋しくなるのは父親の自分であろうことはわかっていた。母親に似た顔立ちと、母親に追いつこうかという身長。絵里の成長は優一の自慢だった。あと数年もすればどんな美人になるか、父親として心の中で楽しみにしていた。その娘がこの家を出て、遠く南富良野の田舎の高校へいく決心をしていたとは、家族の誰もが想像すらしていないことだった。
「旭の励ましで、絵里の決心はかたまったみたいね」
小枝子は、旭の部屋で涙ながらに自分の気持ちを訴える絵里と、その妹の肩を抱きながら、自分の翼で羽ばたくことを応援すると言

った息子の言葉を思い出した。
「旭のやつ、よけいなことを…。もう寝るぞ」
優一はそう言って目を閉じた。

第2話　入学試験

絵里は二月十三日に十五歳の誕生日を迎えた。いつものとおりに家では誕生日の祝いをしてくれたが、自分勝手に北星高校を受験すると決めたことを、絵里は家族に申し訳ないことをしているような、何か悪いことをしているような後ろめたさを感じていた。

ごめんね…。

いつもと変わらぬ両親と兄に心の中で何度も謝りながら、絵里は十五本のろうそくを吹き消した。トムが足元に座っている。

自分の成長を楽しみにしている両親と兄。十五歳になった絵里に心からの祝いを送ってくれた両親と兄。絵里を抱きしめ、誕生日おめでとうと頬にキスをしてくれた両親と兄。こんなに家族から愛され可愛がられているのに、自分のしたことは…。それを思うと気が重くなり、母がせっかく作ってくれたケーキもあまりのどを通らなかった。

三月六日、北星高校の受験当日がきた。

「絵里、父さんはおまえが北星高校に入学するのは反対だ。しかし旭の話を聞くと、北星高校は北海道でも一番の難関らしい。入学するかしないかは別として、受験するからには絶対に合格だけはしてこい」

父は絵里を見つめて言った。

「試験に落ちたりしてみろ。家になんか入れてやらないからな」

旭はそう言って笑った。

「うん、精一杯がんばってくる」

絵里は父と兄の見送りを受け、午前三時三十分発、旭川行きの高速バスに間に合うよう、札幌駅まで母の小枝子に車で送ってもらった。トムが一緒だ。

粉雪が舞い上がる深夜の国道を走りながらも、母の小枝子は北星や南富良野のことはいっさい口に出さなかった。車がバスターミナルに到着したとき、ただひと言「がんばってらっしゃい！」と笑顔で絵里を抱きしめた。その母を見つめて絵里は大きくうなずいた。絵里は足元で尻尾を振るトムの頭をなでた。

三月六日午前八時〇三分、板倉絵里はＪＲ根室線の北星駅に降り立った。教頭と生活指導教諭の面接を受け、入学願書を出してから一ヶ月が過ぎていた。

晴天の中に小さな雪が降り続いていて、その雪が昇ったばかりの太陽にキラキラと反射している。

絵里はしばらくホームにたたずみ、雪化粧の北星を見回した。駅員がいない無人の木造駅舎だけが積もった雪の中に黒く建っている。風がホームの雪を舞い上げた。絵里は学生服の上に着ている外套の襟をあげ、後ろに下がっている帽子を引き上げて頭を覆った。舞い上がった雪が絵里のまつ毛に付いている。

自分の翼でこの地に舞い降りる。そして三年間の高校生活をここで送る。畑と山以外に何もないこの北星で、思春期と青春の三年間を綴る。家にも帰らない。三年間は何があってもここで頑張りとおす。

降りしきる細かい雪を見つめる絵里の表情に固い決意が表れていた。

とにかく入学試験に合格してからすべてが始まるのだ。絵里はゆっくりとした足取りでホームから無人の駅舎に入った。

「あれまあ、どこから来なさったね」

一ヶ月前にきたときは誰もいなかった駅舎に人がいた。年は八十歳に手が届こうかと思われる老人だった。

「こんにちわ！」

絵里は外套の帽子を後ろに倒して老人に頭を下げた。

「はいこんにちわ…。見かけねえ娘さんだが、どこから来なさった」
老人はストーブにマキを入れながら笑顔で絵里を見上げた。
「ここの北星高校に入学したくて、札幌から受験に来ました」
絵里は老人に答えた。
「北星高校を受験とな。札幌の娘さんが…」
老人は驚いた様子で絵里を見つめた。
「はい。もしも合格したら、三年間この北星でお世話になります。板倉絵里といいます」
絵里は笑顔で老人に頭を下げた。
「そうかね。わしは水島玄作いうて、駅の向かいでばあさんと雑貨屋をしておる。入学して学校に通うようになったら、遊びにくるとええ」
水島老人は駅の外を指さした。
「はい、おじさんと知り合いになれてよかった。北星で最初のお友達になれましたね」
絵里は笑顔で水島老人を見つめた。
「ははは…。まあ、あたっていかんか。茶でも入れようかい」
水島は目を細めてストーブの近くにある椅子を指さした。
「ありがとうございます。でも九時から試験なんです。そのあとで時間があったらご馳走になります。向かいの雑貨屋さんですね。またあとで！」
絵里はそう言って駅の外に出る戸を開けた。
「そうかい。がんばるんじゃよ。たしか、結果は即日発表のはずじゃから、みごと合格のときは知らせて欲しいもんじゃ」
水島は絵里に笑顔で手を振った。
「はい、がんばってきます。合格したらお知らせにうかがいます！」
絵里は水島玄作に頭を下げて駅の戸を閉めた。外はまだ雪が降り続いていた。

入学試験は北星高校の体育館で行われた。
受験者数は三百五十三人で、合格定員は五十人と決められていた。試験は国語、数学、英語、化学、歴史、地理の六科目で、各科目の出題は百問。合格ラインは各科目の得点が九十五点以上と決められ、一科目でもそのレベルに達していなければ、ほかの科目でいかに高得点をとっても合格はない。情けで合格させても、その後の授業で北星高校の学力レベルに付いて来れない生徒がかわいそうだということもある。
合格者が定員に達しないときには他の学校のように次点合格制度はなく、改めて入学希望者を募って試験を行い、合格者が多いときには面接時の成績と中学の内申書で決めるという、他の公立高校にはない制度をとっている。
いかに田舎の高校とはいえ北星高校のレベルは極めて高く、北海道では断然トップで、全国でもベストスリーに数えられる有名進学校だ。
高校の入学試験はたいてい二月末には終わるが、北星高校の試験はだけは三月上旬と決まっている。北海道最大の難関校である北星高校を第一志望として受験する学生のため、ギリギリまで試験勉強を出来るように期間をとっている。
普通教科課目は、姉妹校の提携を結んでいる東京の都立京王高校と同じ教科書を使って進められ、卒業生の多くは東大や京大など全国の有名国立大学に進学している。
その北星高校には、普通科のほかに定員十人と決められている獣医学科があり、そのレベルは高く、牛、馬、犬や猫、そのほか、小鳥などを含む小動物の研究や治療などの授業に関しては、日本でも一・二を争うほどの名門学科だ。絵里の目標はその獣医学科に合格することだ。
教科書を姉妹校の都立京王高校から取り寄せているため、試験も京王高校と同じ問題が出される。試験問題は、試験の前日午後に校長宛の宅急便で届き、そのまま北星駐在所の金庫に保管されるため、

試験問題の事前漏洩は絶対にない。
生半可な学力では到底合格ラインには達せない。何としてでもベストテン以内の成績をとらなければならない。獣医学科は受験者の中から上位十人しか入ることができない。競争率は約三十倍。ほとんどの受験生は地元の北星中学校の生徒だった。この北星高校がある地元の中学校も、レベルの高さは北海道でも有名だ。受験生の多くは、近隣からは別として、ほとんどは富良野や滝川からきた生徒で、札幌からの受験は絵里だけだった。
もともと競争ということが嫌いな絵里だった。剣道でも体育祭でもそうだ。スポーツは何でもこなす絵里だが、人を蹴落としてまで前に出るということがいやで、落ちた人のことを考えると気が重い。
しかし、きょうだけは誰にも負けられない。自分が目標に掲げた北星高校の門が目の前にある。その門をくぐらなければならない。絵里は体育館のごみ籠で、父の優一からもらった小さなポケットナイフで鉛筆を丁寧に削りながら気持ちを落ち着けた。
この北星高校に入学するために必死で勉強してきた。その力を出せば決して合格できないはずはない。ただ、ベストテンに入れるかどうかが問題だ。獣医学科に合格しなければ何の意味もない。
午前九時、試験は開始された。絵里は冷え切った両手に息を吹きかけ、問題用紙を見つめて大きく深呼吸して鉛筆を握った。

午後四時で試験は終了した。そして採点はコンピューター処理され、遠くから受験に来ている生徒や父兄のためにと、午後五時に結果が張り出された。
大勢の父兄と学生たちが、張り出された合否の結果を見て一喜一憂している。肩を落としている生徒と父兄を見るのが辛かった。
絵里は、張り出された表に目を移した。絵里の受験番号の八十七番にひときわ大きな赤いバラの花が付けられ、獣医学科を専攻できることを表している。絵里はふーっとため息をついた。

やった、これで自分の翼で羽ばたける。
おじいちゃん、おばあちゃん。お父さんお母さん、お兄ちゃん。わたし合格したよ！。トムも喜んでね。
心の中でそう叫んだ絵里の顔に笑顔があふれた。
「きみ、板倉くん」
絵里は肩をたたかれた。振り向くと、以前に面接を受けた教頭の田上が立っていた。絵里は教頭に頭を下げた。
「全科目満点でトップ合格だよ。しかし、東京の京王高校にでもはいれる学力なのに、なぜここを…」と、小声で言った。
田上教頭の横では、生活指導教諭の月丘恵子が笑顔で絵里を見つめていた。月丘は面接にきたときに田上教頭と一緒にいた教諭だった。月丘は新入生の担任となることが決まっていて、歴史、国語、音楽の教鞭をとる。身長は百七十センチくらいでスタイルもよく、ふだんは細い鎖のついた眼鏡をかけているが、眼鏡をはずしたときの月丘恵子は、はっとするほどの美人だ。
絵里が専攻する獣医学科は、校長の三宅と教頭の田上が指導する。ふたりとも獣医学の博士号を持っていて、大学に勤めれば教授と助教授の椅子は確実だといわれている。
「三年間お世話になります。それに、もうお友達もできました。これから合格の報告に行って来ます」
絵里は満面の笑顔で二人に頭を下げた。
「お友達って、学校の人？」
月丘が驚いた表情で絵里を見つめた。
「いえ、駅前の水島さんです。けさ駅でお会いしたばかりなんです」
「まあ、水島さんと…」
「はい、合格したらお知らせするって約束したんです」
絵里はそう言って廊下にかけてあった外套を着た。
「水島さんのところなら、夕ご飯の心配はいらないわね。たくさんご馳走になってらっしゃい。寮の門限は八時だから忘れないで」
きょう絵里は学校の寮に宿泊することになっていた。夕食は道の

駅〈星の降る里・北星〉の開いている時間に行って食べるはずだった。朝食はパンと牛乳が用意されている。
絵里は月丘と田上に頭を下げ、廊下を歩いて校門に向かった。田上と月丘は複雑な表情で絵里のうしろ姿を見送った。

「こんにちわ！。水島さんのおじさん、いらっしゃいますか？」
絵里は降り積もっている雪の中、白い息を吐きながら北星駅の前にある水島商店の戸を開けた。中はお菓子や文房具、日用雑貨品がところせましと並んでいる。北星でただ一軒の雑貨屋だ。
「おう、きよったか！。中へ入るがええ。その笑顔じゃと、どうじゃったと聞くまでもないようじゃな」
中から笑顔の水島老人がでてきた。その後ろには初老の婦人が笑顔で立っている。
「ばあさん、話をしておった札幌からきた娘さんじゃよ。もうすぐ北星の住人になるんじゃ。祝杯をあげるぞ！」
水島はそう言いながら絵里の手を引いて中へ入れた。
「はじめまして、板倉絵里といいます」
絵里は外套を畳において正座して挨拶した。
「まあまあ、よくきたこと。礼儀正しくて…。こちらこそよろしく。水島アキヨです」
アキヨも正座して絵里に挨拶した。
「うちの人から絵里ちゃんのことは聞いてるんだよ。午前中、ずーっと絵里ちゃんのことばかり…。めんこいめんこいって…」
アキヨは水島と絵里を交互に見つめながら目を細めた。水島老人が目を細めて何度もうなずいている。
「おかげさまで合格しました。これから三年間、ここで勉強することになりました。いろいろとお世話になると思います。おじさんとおばさん、よろしくおねがいします」
絵里は、正座したまま畳に両手をついて頭を下げた。剣道を習っ

ていたから正座の一時間や二時間は平気だった。
「こちらこそ。それにしてもまあ、なんと礼儀の正しい…」
アキヨがまた目を細めた。
「さあさあ、膝をくずして…。ゆっくりしていってね。晩ご飯も食べて。たしか寮の門限は八時だから、それまでいてちょうだい。生活指導の先生には電話しとくから。いろいろ話も聞きたいし…」
アキヨはそう言い、お茶を出すからと立ち上がった。
絵里は水島夫婦に自分がなぜ北星高校を受験したのか、その経緯などを聞かれるままに説明した。ふたりは驚いたり感心したり、そして、絵里が自分の翼で風に向かって飛び立ちたいのだと熱く語ったとき、ふたりは涙を流した。
「よくまあ、そこまで決心したもんだねえ。許した親御さんも立派だけど、絵里ちゃんの決心も…」
アキヨが目頭を押さえながら涙声で言った。
「いろいろなことがあるのは覚悟しています。家族や家が恋しくてホームシックにもかかって、きっと何度も泣くと思います。泣いて済むことならいくらでも泣いて、そしてまた元気になります。淋しくて泣きそうになったら、おじさんとおばさんのところへ来ますから、ここで泣かせてくださいね」
絵里はそう言ってふたりを見つめた。
そして午後七時三十分、絵里は水島夫婦に付き添われて北星高校の寮に入った。この日、寮に宿泊するのは札幌からきた絵里だけだった。寮では生活指導の月丘恵子が絵里を待っていた。
「一応、簡単に校則を言っておくけど、ここの校則は厳しいわよ」
月丘はそう言って笑った。
北星高校は、十四年前までは小・中学校と合同で校舎を使っていたが、今は小学校と中学校は独立している。学校として開校して今年で一〇二年になる。つまり絵里は第一〇二期生だ。
北星高校は、原則的に北海道以外からの生徒は受け入れないことにしている。理由は、田舎の学校で交通の便が極端に良くないため、

生徒や家族に何かあったとき、素早い対応ができないからだ。
小さな地区で一番困るのは医療だが、保健体育の井上教諭と地理の北川教諭がそれぞれ内科、外科の医師免許を持っていて、校門のすぐ内側にある独立した保健室が学校と兼務した区の診療所になっている。ただひとりの女性教諭である月丘恵子が看護師の資格を持っているから、たいていの診療は間に合うのだ。
校舎の並びにある学生寮は、北星以外の遠距離の生徒が入学できるようにと、八年前に六億円をかけて建てられたものだ。集中暖房と、夏は冷房が完備された二階建て。生徒や教師が除雪に悩まされぬようにとの区長のはからいで、校門から校舎、校舎から学生寮を結ぶ道はロードヒーティングが設置されている。男子と女子の出入り口は別々で建物の真ん中で仕切られ、風呂も別棟で、男女それぞれの寮の一階と廊下でつながっている。
門限は午後八時。寮の消灯は九時だが、学生の自習のため、机に取り付けられている蛍光灯だけは、深夜零時に自動停止するまでは使えるようになっている。男女とも部屋はふたり部屋で各四十室。広めに作られた部屋には、シングルベッドふたつと机がおかれ、休憩と来客用の折りたたみ椅子が四つと、小さなテーブルがある。
「立派な学生寮でしょう。北星は、住んでいる人が五百人もいない小さな地区だけど、予算だけはあきれるほどたくさんあるの。つまりお金持ちなのよ。わたしも二年前に赴任したときは驚いたくらい」
月丘恵子は笑いながら絵里に言った。
食事は朝と夕が寮の別棟にある食堂、昼は給食の係りとなる学生が厨房から運んで、それぞれの教室で担任教諭と一緒に食べる。近くから通学する生徒は給食と弁当のどちらかの選択となり、その日の朝までに寮長に申告する。
携帯電話の持ち込みは許可されているが、使用できるのは放課後だけと制限され、校舎内での使用は禁止されている。
学校内での男女交際はいっさい禁止で、もしも発覚した場合は即刻停学か、場合によっては退学処分となる。ただし保護者と一緒の

場合は良い。手紙や贈り物も禁止で、唯一認められているのは生徒の誕生日だけで、その贈り物も金額は千円以内の小物にかぎられ、買った物と領収書を提出し、生活指導教諭の確認を受けたうえで渡すことができる。

外出は北星地区内にかぎり自由だが、行く先と帰る時間は当番の寮生に伝えてゆく。外泊は原則的に禁止。特別の理由がある場合は外泊申請書にその旨を記入、外泊先の家庭から生活指導教諭に直接電話をし、それを確認のうえ生活指導と校長の許可を受ける。

「きょうここに泊まるのはあなただけなの。ひとりきりで淋しかったら、水島さんのお宅か、私の社宅に泊まってもいいのよ」

月丘が絵里に言った。中学生の少女をたった一人で寮に泊まらせるのも、と月丘は思っていた。教頭の田上もそのことを気にしていたが、月丘は本人の意思に任せることを進言した。しかしやはり月丘は気になった。

「だいじょうぶです。私には翼があるんです」

絵里は笑顔で月丘に言った。月丘はまっすぐに自分を見つめる絵里の目に何かが宿っているように感じた。そのなにかはわからないが、田舎の少年や少女にはない光だった。自分に翼があると言うこの少女は、心の中に何を秘めているのか。月丘はいずれそのことを聞いてみようと思った。

「翼か…。わたしにはよく理解できないけど、そのうち聞かせてちょうだい。ちゃんと鍵をかけてね。先生の社宅は校門の右斜め向かいだから、何時でもいいから遠慮しないでくるのよ。いい？」

月丘は、絵里の手をとって心配そうに言った。

「はい。おやすみなさい」

絵里は心配そうな月丘に頭を下げ、月丘から割り当てられた一番入り口に近い部屋に入った。

午後八時五十分、月丘から言われた消灯の時間が迫っていた。

絵里は寮の風呂に入ったあと持参したパジャマに着替えて学習机の椅子に座っていた。
すでにこの部屋に入ると決まった生徒がいるのか、物入れの中にはキチンと整頓された私物品や洋服があった。窓側にあるもうひとつの学習机には、太田めぐみ、と書かれた名札が貼られている。
絵里の手には小学校二年生のとき、元気だった祖父母と一緒に写した写真、そして両親と兄と自分が写っている写真がある。中学二年の秋に函館に旅行したとき、函館山の頂上で写した記念写真だ。近くの文房具店でラミネート加工してもらい、いつも定期券入れに入れている大切な写真だった。携帯電話を持っていない自分と家族をつなぐたった一枚の宝物だ。
写真にはいつも一緒の家族が笑顔で写っている。絵里は兄の旭に肩を抱かれている。絵里の横には母の小枝子、兄の横には父の優一がいる。もう一枚は、トムと一緒に写っている写真だ。
「わたし、風に翼を広げて飛ぶの」
絵里は写真の両親と兄にそう言った。自分の気持ちを固めるために探し当てた言葉だった。自分でも出来すぎた少し生意気な言葉だとも思っている。
三年間この北星高校で勉強すると決めたからには、何があっても札幌には帰らない。夏休みも冬休みもこの北星で過ごす。帰ったら…。札幌の自分の部屋で何日間かを過ごしたら。両親に甘え、兄に甘えたら…。せっかく生えた自分の翼の羽根が一本ずつ抜け落ちてしまう。北星に戻るのが嫌になってしまうかもしれない。それが一番の理由だ。
準備のために絵里はあす札幌に戻る。そして三月の末にふたたびこの北星にきて、寮に入ったときから三年間、絵里の生活の場はこの北星になるのだ。
誰もいない寮の中は静まり返っていた。部屋の中も絵里がいることさえ感じさせないほどの静けさだった。
「おじいちゃん、おばあちゃん…。おとうさん、おかあさん、おに

いちゃん…」
　しんとした部屋の中に絵里の声が響いた。
「勝手なことをしてごめんね。わたし、風に翼を広げるの。きっと、何度も何度も淋しくて死にそうになるわ。翼が折れそうになるわ。札幌の空が恋しくて落ちそうになるわ。毎日毎日泣くかもしれない。でも、わたしがんばるから、応援してね」
　絵里は写真に向かってそう言った。写真を見つめる絵里の目から大粒の涙があふれた。
「泣いていいでしょう？。きょうだけ、いいでしょう？」
　写真を見つめる絵里の目から涙が落ちた。そしてすすり泣きがしだいに大きくなり、その泣き声がたった一人だけの部屋に響いた。

　月丘恵子はひとりで寮に宿泊している板倉絵里のことが気になり、電気や給湯器の後始末のこともあって、消灯時間の前に寮に足を運んだ。
　板倉絵里がいる部屋のドアをノックしようとした月丘は、部屋の中から聞こえてくる声にノックの手を止めた。板倉絵里は誰かに話しかけているようだった。独り言のようだ。しんとしている廊下にまでその声が聞こえている。月丘は耳を澄ませた。独り言のあと、板倉絵里は声を出して泣き始めた。
　月丘の胸は痛くなるほどにつまされた。たった十五歳の少女がみずから親元を離れ、自分の翼で風に向かって飛び立つ決心をした。
　きょうだけ泣く。札幌にいる家族に独り言でそう告げて、あたりをはばからず大声で泣く少女の気持ちが、月丘の胸に痛く伝わってきた。
　月丘はそっと部屋の前から離れた。その目には涙が光っていた。
　遠くから来てこの寮に入るのは板倉絵里ばかりではない。入学式が終われば何十人もの生徒が親元を離れてこの学生寮で生活する。その生徒たちも板倉絵里と同じに、故郷が恋しくて人知れず涙を流すことが何度あることか。男子生徒はともかく、感じやすい女生徒

たちが暮らすには、それぞれの故郷へと歩いて帰るにはあまりにも遠い田舎だった。
月丘は今年入学する一年生の担任と決まっている。二年前にこの北星高校に赴任したときも一年生の担任だった。
でも、同じ一年生でも、あの子とは違う。
月丘恵子は、いずれは板倉絵里と顔を合わすであろう女生徒の顔を思い出していた。

第3話　翼をください

次の日、絵里は五時三十分に目を覚ました。七時すぎに日が昇り、前の日から降り積もった雪に太陽が反射している。ベッドを整えて部屋の掃除をし、洗面を済ませたところに月丘恵子がきた。

「おはようございます。昨日はありがとうございました」

絵里は月丘にあいさつをした。

「おはよう。よく眠れた？。このあたりはキツネやシカがよく出るからね。いまは冬眠しているけど、時には熊も…。訪ねてこなかった？」

月丘は笑顔で絵里を見つめた。板倉絵里の目が少しはれている。水で冷やしたのだろうが白目の部分がまだ赤く充血していた。きっとベッドの中でも泣いていたのだろう。昨夜の独り言を思い出すと、月丘はやりきれない思いだった。

「はい、来ませんでした。来てくれたら楽しかったのに…」

絵里は笑顔で月丘を見た。

「暖房は大丈夫だった？。北星は寒いから…」

「はい、ぜんぜん寒くありませんでした。寒くたってだいじょうぶです。タイツもはいてますし、身体は冷やしちゃいけないって、母がたくさん毛糸のパンツを編んでくれましたから…。今もはいてるんですよ」

絵里は黒いタイツの足を見ながら月丘に言った。月丘はそれを聞いて吹きだして笑った。いまどきこんな飾り気のない少女がいるのかと…。

月丘恵子は寮の食堂で板倉絵里といっしょに朝食のパンを食べた。

「いったん札幌へ戻るのね？…」

午前九時、絵里を見送るため月丘恵子が寮にやってきた。

「はい。九時二十六分のＪＲです。お世話になりました」
絵里は答えた。
「私服は持ってきてないの？」
月丘は学生服姿の絵里に言った。
「はい。わたしは学生ですから…。それに、私服はいつでも着られますけど、制服は今だけしか着れません」
「ここでは服装は自由なのよ。でもねえ、北星の制服は昔ながらのデザインで古臭いから、あまり着る生徒はいないけど…」
月丘が笑った。北星高校は農学科と獣医学科があるため服装は自由と定められている。学生はほとんどが思い思いのジャージ姿で通学している。農業や酪農、小動物の飼育や解剖などの実習があるからだ。それは絵里も知っていた。
「はい。でも私はセーラー服って大好きなんです。ふだんの授業では北星高校の制服を着たいと思っています。支障がなければですけれど…」
絵里は月丘に言った。
「いいわよ。あなたの判断に任せるわ」
月丘は絵里を見つめて笑った。
物事をはっきりと言う板倉絵里に、月丘は好感を抱いた。
都会の少女らしくあか抜けてもいるが、もうひとつは家族の愛情に包まれて伸び伸びと育ったことにも起因しているのだろうと思った。富良野で生まれ育った月丘には板倉絵里という少女が少しまぶしく見えた。
「あなたのほかにもうひとり、いつも制服を着ている女生徒がいるわ。そのうちわかると思うけど…」
月丘は笑顔で絵里の肩をたたいて見つめた。
月丘は板倉絵里という少女に、今まで見てきた少女とはどこか違う、まったくの無垢を感じていた。どの女子高校生も今はやりのファッションを追いかけ、髪を染め、眉毛をタレントのように剃るか抜くかして、みんな同じような顔になっている。

しかし目の前にいる板倉絵里という少女は、流行のファッションをするでもなく、眉毛も自然のものだし、ルージュソックスではなく、タイツの上に普通の白いソックスをはいている。それがかえって絵里の個性を引き出し、どこにでもいるようなタレントのような少女たちとは違う、生まれ持った自然な美を際立たせていた。

飛びぬけた美少女がまたひとり増えたと月丘は思った。この少女がそのことを自分で意識しているかどうかはわからない。板倉絵里の性格から判断すると、たぶん意識はしていないだろう。いま在学しているあの生徒も、自分が美少女だということを意識していなかった。それが悲劇を招いたのだった。この板倉絵里という少女はこの先…。

月丘は大きくため息をついて絵里を見つめた。

しかし美少女に生まれ育ったのは本人の責任ではない。自分が美少女だということを意識し、それを鼻にかけるのならばそれなりの指導の方法もあるが、この板倉絵里も、いま在学しているあの子も、自分がかわいいとか美少女だなどとは少しも意識をしていない。

「それから、もしも札幌が恋しくなったら、駅のホームで線路を見なさい。こんな小さな田舎の駅でも、線路だけは札幌に続いているからね…」

月丘はもう一度絵里を見つめて言った。

「はい、ありがとうございます！」

絵里は頭を下げた。

「先生…」

絵里はマフラーを巻きながら月丘を見た。

「なあに？」

「先生、わたし…」

「……」

月丘は黙って絵里を見つめた。

「先生、わたしの背中に翼が見えますか？」

絵里はそう言って月丘を見つめた。絵里の真剣なまなざしに月丘

もまっすぐに絵里を見つめ返した。この少女にいいかげんな返事はできない。家族のぬくもりを断ち切ってまでも自分の足で目標に進もうとしている。この少女は北星に住んでいる少年や少女とは違う。月丘は絵里のまなざしにそれを感じていた。

「今はまだ見えないけど、入学式が終わって本格的な授業が始まったら、きっと少しずつ翼が生えてくるんでしょうね。楽しみだわ」

月丘は絵里を見つめながらそう言った。この少女にはきっと翼が生えてくる。いや、すでに板倉絵里という少女は小さな翼を持っている。その小さな翼で必死に羽ばたきながらこの北星に舞い降りようとしているのだ。

「板倉絵里さん。北星高校は、あなたの入学を心から歓迎するわ。その小さな翼で元気よく飛んでいらっしゃい！」

月丘はそう言って右手を差し出した。

「はい！。お世話になります。一生懸命勉強します。よろしくお願いします。教頭先生によろしくお伝えください」

絵里は差し出された月丘の右手を両手で握って頭を下げた。

絵里は月丘に見送られて北星高校の校門を出た。紺の長靴でスキップしながら何度も手を振り、雪道を飛ぶように歩いてゆく板倉絵里のうしろ姿に、真っ白い翼を広げて巣から飛び出そうとするハトの姿が重なったような気がした。

「翼か…」

月丘恵子は、何度も振り返りながら笑顔で手を振る板倉絵里に、大きなため息をついた。

絵里は冬の北星を眺めながら、駅前の水島商店に立ち寄って三月の末には高校の寮に入ることを告げた。

「そうかい…。ほんとはうちに下宿してくれると嬉しいのにねー。今すぐとは言わないけど、考えてみてね。うちには子供がいないから、せめて卒業するまでは、うちの娘になってくれると嬉しいんだよ」

水島アキヨはそう言いながら絵里を見つめた。
「おじさん、おばさん、ありがとうございます。考えさせてください…」
絵里は笑顔で頭を下げた。そして列車が到着する時間がせまり、水島夫婦がホームまで見送りにきた。
「また来るのを首を長くして待ってるからね」
アキヨが絵里の手を握りながらそう言った。
「はい！」
絵里は笑顔で答え、午前九時二十六分発の滝川行き根室本線の列車に乗った。

三月十五日、板倉絵里は蛍の光に送られて南部第二中学を卒業した。兄の旭は父の後を継ぐべく北大の医学部に進学が決まった。
三月三十一日、絵里はひとりで家を出発した。必要な荷物はすでに送っている。絵里が北星に着くころには到着しているはずだった。
札幌駅まで見送りに行くという両親と兄の申し出を絵里は断った。せめてバス停までと三人が家を出てきた。トムが絵里のあとを付いてきている。みんな無言でバス停まで歩いた。歩道に残った雪を踏みしめる足音だけが聞こえ、その雪面に映る四人の影だけが動いている。
それぞれの思いが両親と兄の心にはあった。しかしそれを言えないでいた。言えば絵里の心が動揺する。それこそ、目の中に入れても痛くないほどかわいい娘だ。できることなら南富良野などには行かせたくない。縛り付けてでも引き止めたい。それを思うと父の優一と母の小枝子は身を引き裂かれる思いだった。
絵里とて同じ思いだ。こんなに愛されている家族やトムと離れ、自分の翼で飛び立つとは言ったものの、本当に翼を広げて飛べるのか。その不安と家族から離れる寂しさが心の中でふくれあがっていた。

絵里はしゃがんでトムを抱きしめた。トムは絵里の頬を何度もなめている。
「思いっきり飛んでいけ、絵里！」
バス停に到着したとき、旭が絵里を抱きしめ、頬に唇をつけてそう言い、絵里の頭を何度もなでた。
「うん！」
絵里は旭を見上げて力強くうなずいた。
かわいい妹が自分たちのもとを離れてゆく。旭もつらかった。しかし絵里の決心が変わるわけではない。それならば第一歩の出発点で、さあ行け、飛んでゆけと、背中をたたいて送り出すしかないのだった。
「絵里、身体に気をつけてね」
小枝子が絵里を抱きしめて頬に唇をつけた。心配そうなまなざしでじっと絵里を見つめている。
「うん…」
絵里は母に抱きつき、その頬に唇をつけてうなずいた。
「……」
父の優一は黙って絵里を抱きしめ、頬に唇をつけた。
「お父さん…」
絵里も父の首に両手を回して抱きつき、その頬に何度も唇をつけた。父はその絵里の背中を何度も軽くたたいた。
四人は無言でバスを待っていた。やがて札幌駅前行きのバスが四人の前に停車した。絵里は無言でバスのステップに足を乗せ、整理券をとった。一段目のステップを登ったところで絵里が振り返った。
「わたし、飛ぶから！。自分の翼で飛ぶから！」
絵里が大声で叫んだ。その声に乗客がいっせいに絵里を見た。そして絵里と家族をさえぎるように自動ドアが無情に閉じた。絵里は手を振った。せいいっぱいの笑顔で両親と兄に手を振り続けた。母が走ってバスを追いながら手を振っていた。その前をトムが走っている。父と兄はバス停に立ったまま手を振っていた。

飛ぶからね。わたし、風に翼を広げて…。きっと飛ぶからね！。
小さくなった両親と兄の姿を窓から見つめながら、絵里は心の中で何度も叫んだ。

その日の午後、絵里は三たび南富良野町北星駅のホームに降り立った。もう後戻りはできない。
受験の手続きのために初めてこの駅に降り立った二ヶ月前。受験。そして今。絵里はきょうから三年間の高校生活を過ごす北星駅に立っている。北星高校を卒業するまでは二度とこのホームから札幌行きの列車に乗ることはないのだ。
三月六日に受験にきたときと同じ雪が降っている。ただ、いま降っている雪は春の足音を運んでくる湿ったぼたん雪だった。絵里はいま降りた列車がきたほうの線路をじっと見つめていた。
もしも札幌が恋しくなったら、駅のホームで線路を見なさい。こんな小さな田舎の駅でも、線路だけは札幌に続いているからね。
そう言った月丘の顔と、絵里が乗ったバスのあとを手を振りながら追ってきた愛犬のトムと母の姿がオーバーラップして浮かんだ。
♪「いまー、わたしのー、ねがーいごとがー、かなうなーらばー、つばさが、ほしーい…」♪
ホームに立つ絵里は歌を唄いはじめた。高く透き通る声が、ぼたん雪が降る北星駅のホームに聞こえている。
♪「このおおぞらを、つばさをひろげ、とんでゆきたいよー。かなしみのない、じゆうなそらへ、つばさ、はためかせー、ゆきたいー…」♪
絵里の歌声はだんだん大きくなり、雪のホームに響いた。そして絵里は両手を口にあてた。
「わたしも、飛ぶぞーーっ！」
絵里は線路に向かって大声で叫んだ。家族、そしてふるさと札幌とのしばしの別れを告げる叫びだった。その絵里を水島夫婦と寮か

ら迎えにきた月丘恵子が駅舎の陰から見守っていた。感極まって絵里を迎えに出ようとした水島アキヨを月丘が引きとめた。
「アキヨさん、あの子はいま、生えたばかりの自分の小さな翼でこの北星に舞い降りたんです。なぐさめの声をかけて抱きしめるだけが愛情ではありません。いまはこのまま見ていてあげましょう」
月丘はアキヨの腕をつかんでそう言った。飛び出して声をかけてやりたいのは月丘も同じだった。
「絵里ちゃんがどんなに心細いか、それを思うとふびんで…」
アキヨはそう言って目頭を押さえた。

第４話　太田めぐみ

四月一日、北星高校の入学式が行われた。この年の新入学生は第一〇二期生となる。

会場となった体育館には、入学試験に合格し真新しい北星高校の制服に身を包んだ五十人の新入生と、その後ろには百人の二年生と三年生が整列している。大勢の新入生の父兄が入学式を見守っていた。しかし絵里の両親や兄の姿はそのなかにはなかった。

江島北星区長、三宅校長のあいさつのあと、新入生は全員壇上に並んだ。教頭の田上が新入生一人一人の名前を呼び、出身中学と専攻科を紹介している。あいうえお順に名前が呼ばれ、絵里が呼ばれる順番がきた。

「獣医学科専攻、板倉絵里。出身校、札幌市立、南部第二中学」

「はい！」

そう読み上げた教頭の声に、一年生の女子のしるしであるピンクのスカーフをつけた絵里は右手を上げて大きな声で返事をした。会場のあちこちからどよめきがわいた。札幌？。南部ってどこだ？。へえー、札幌から…。その声は壇上の絵里にも聞こえた。

きょうからわたしは、北星の空を飛ぶ！。

名前を呼ばれて一歩前に進み出た絵里は心の中で誓った。その絵里の目に教頭の田上と担任の月丘の姿が映った。その月丘が大勢並んでいる父兄のほうを小さく指差した。月丘の指差す先に、いつ来たのか水島夫婦が笑顔で手を振っていた。絵里は水島夫婦に精一杯の笑顔を送った。

「お父さま、お嬢さまはどうして北星高校を選択なさったんですか？。それに、ご両親は入学式にも…」

担任の月丘景子は札幌に電話をかけた。

板倉絵里の両親は入学式にも顔を見せなかった。それがどういう理由なのか月丘は知りたかったのだった。娘の高校入学ともなれば、親としてもその晴れ姿を見たいはずだ。しかし板倉絵里の両親はその晴れの場に姿を見せなかった。

「試験は全科目満点でトップ合格でした。この高校始まって以来のことです。その気になれば、東京の有名進学校でも楽々合格できるほどの学力ですのに、どうしてこんな田舎の北星高校を…」

月丘はその疑問をぶつけてみた。

『私どもが行きますと、娘の決心が鈍ります…』

電話に出た板倉絵里の父親の優一はそう言った。

『娘の…。目の中に入れても痛くないほど、私たち家族は絵里を愛しています。娘もわたしたち家族を愛しております。それは自信をもって言えます。その娘の晴れ姿を見たくないはずはありません。しかし、私たちが行けば絵里の決心は鈍ります。それは私たちも同じです。娘の姿を見れば、話をすれば、首に縄をつけてでも札幌へ連れ帰りたい…。それではせっかく娘が獣医になりたいと決心した自分の道を、心ならずも家族が曲げてしまうことになります…』

父の優一は自分の気持ちを押さえるように言った。

『絵里が自分で見つけた道ならば、せめて邪魔だけは、と…。先生、がんばろうとする絵里と、それを応援しようと決めた、私どもの心をどうかお察しください…』

優一は言葉を詰まらせながら月丘に言った。

月丘も言葉が詰まった。これほど強い絆で結ばれている親子。目の中に入れても痛くないほど愛する娘をたったひとりで旅立たせた親。

家族の写真に向かって、きょうだけ泣いていいでしょう、と、ひとりで泣いていた板倉絵里。北星駅のホームで、私も飛ぶと、大声で叫んだ板倉絵里。姿こそお互いに見えないものの、その家族の絆の強さを板倉絵里と父の言葉で知らされた思いだった。

北海道でも随一の有名進学校として名高い北星高校の新学期が始まった。
全校生徒百五十人のほとんどが北星地区以外の町や村からの生徒で、地元の北星や金山など、近くから通う生徒は四十五人だ。学校の寮に入ったのは各学年あわせて一〇五人。そのうち男子が四十七人、女子が五十八人。一年生の女子は十三人で、新学期が始まるまでは閑散としていた学生寮も、一〇五人の生徒が入居してにぎやかさを取り戻した。
寮に入る同室の生徒は学校側が決める。一年生は三年生と同室になり、いろいろなことを教えられながら生活し、二年生は同級生といっしょの部屋でお互いに心と学力を磨きあうという学校側の方針に沿っている。
絵里は最初に宿泊した入り口に一番近い一階の一号室に、ことし三年生になった太田めぐみと入居することが決まった。
「彼女は、一年生のときから北星高校の番長よ。つまりスケ番ってやつ…。でも別に悪いことをするわけじゃないし、頼りになるところもあるの。この学校で一番の秀才よ。文武両道で、空手、合気道、柔道の有段者なの。正義の味方ってところかな。それに、板倉さんもかわいいけど、彼女はすごい美人よ。前にも言ったけど、いつもセーラー服を着て授業を受けているもうひとりの女生徒って太田さんのことなの。あなたにはぴったりの同居人だと思うわ」
月丘は、入寮する一年生の女生徒十三人を同室となる三年生に紹介しながら、最後に絵里を連れて一号室のドアの前に立った。
太田めぐみは滝川市の出身で、この新学期までを自宅で過ごしていたのだった。絵里は月丘に寮の同室となる太田めぐみを紹介された。
「よろしくね。わたしが先輩だからって堅くならないで、気楽にね」
身長百七十センチの太田めぐみはそう言って笑った。
初めて会った太田めぐみは、どこか陰があるように絵里は感じた

が、太田めぐみはその陰を補ってあまるほどの美人で、ほかの先輩女子にはない大人の雰囲気を持っている。
「はい。きれいな先輩と同室になれて光栄です。よろしくお願いします。何でもやりますから、いろいろ教えてください」
絵里は元気よく太田めぐみにあいさつした。
「アハハ…。よく言うわ」
太田めぐみは腕を組んで笑った。
「絵里、あなたってすっごくかわいいじゃない。きっと男子が放っておかないわ。気をつけなさい」
太田めぐみはそう言いながら、しげしげと絵里の全身を見つめた。月丘はそのふたりを黙って見ていた。

「絵里、あなた札幌からきたんですって？」
太田めぐみは荷物を整理している絵里に興味深そうに聞いた。
「はい」
「うわさでは、受験のとき全科目満点でトップ合格だって聞いたけど、本当？」
めぐみは絵里の顔を覗き込んで聞いた。
「採点を見ていませんから、わたしには…」
そう言って絵里は首をかしげた。
「ただ、獣医学科の競争率が三十倍と聞いて必死で勉強はしました。どうしてもここに入りたくて」
絵里は答えた。合格発表のとき教頭の田上が全科目満点だと小さな声で告げたのは記憶にあったが、合格した嬉しさでそのことは忘れていた。
「でも、どうして？」
「はい？」
「そんなに成績がいいのに、どうしてこんな田舎の北星なんかにくる気になったの？」

太田めぐみが絵里を見つめた。
「獣医に…。特に犬が大好きで、将来は犬や猫だけじゃなく、色々な動物と接していられる獣医になるのが夢なんです。北星高校の獣医学科は、日本でもトップレベルの学校だと聞きました」
絵里は自分の希望を正直に話した。めぐみはその絵里の目をじっと見つめている。
「あなたの目、きらきら輝いてる。いいなー、絵里は…」
めぐみはそう言ってひざを両手で抱え込んだ。
「先輩の夢は何ですか？」
絵里がひざを抱えたままのめぐみに聞いた。
「夢か…」
めぐみは天井を見ながらつぶやいた。
「以前は夢もあったような気がするけど、いまは特にないわ…」
めぐみは天井から床に視線を移して言った。
「ねえ絵里…」
めぐみが顔をあげた。
「人間って色々な人生を歩むものなの。絵里とわたしの顔が違うように、育った環境が違うように、それぞれがみんな違う人生があるの。事情もね…」
そう言っためぐみに、絵里はこれ以上はめぐみの心の中に立ち入れないことを察した。いや、立ち入るべきではないと。
「お茶を入れますね」
絵里は笑顔で立ち上がってテーブルのきゅうすを持ち上げた。
「絵里、ゴメンね。でもあなたとはうまくやっていけそう…」
めぐみはそう言って絵里と向かいに腰をおろした。
「はい。よろしくおねがいします」
絵里はそう言って、めぐみと自分の茶碗にお茶を注いだ。
板倉絵里は人の心の痛みを感じる能力があるとめぐみは思った。めぐみは入学以来ほかの生徒と同室になるのは初めてだった。ある理由があって、めぐみはこの一号室で二年間ひとりで生活していた

のだ。
誰でも他人には言えないことがある。自分だけではなく友達でもそうだ。それは心の中にいつも押し込めているもので、吐き出したくても吐き出す相手がいない。親に言っても相談に乗ってくれるわけでもなく、ただ怒り、がんばれ、しっかりしろ、の型にはまった言葉しか返ってこない。それでは子供が一番聞きたい答えにはならない。ならば言わないほうがいいとなる。そしていつか親や友達から心がはなれてゆく。
板倉絵里は人が秘めている心の痛みがわかる。笑顔でお茶を入れている絵里の笑顔を、太田めぐみは黙って見つめた。

あわただしい毎日が過ぎた。国語や英語、歴史や数学などの普通科目はともかく、毎日二時間の農学科と獣医学科の実習は絵里にとってただ驚くばかりの経験だった。畑をクワで耕すのはそれなりに想像はついていたが、大根やほうれん草の種や苗を植えたり、半分に切ったジャガイモに、わらを燃やした灰を塗りつけて植えたり、牛や馬の出産の実習など、絵里には初めて体験するものばかりだった。
北星高校では、酪農の実習を兼ねて牛三頭、馬三頭、羊五頭を飼育している。それら家畜の世話は一年生と二年生が当番制ですることになっているが、夏休みや冬休みなど、長期の休みは農家に預けて世話をしてもらう。
平日早朝の乳搾りは農家の人たちがやってくれるが、週に一度の割合で生徒たちも早朝に起きて、農家の人たちの指導のもと、乳搾りと蓄舎の掃除を実体験する。それら家畜の世話はすぐに慣れたが、絵里が驚いたのは馬の出産だった。テレビなどで見ていたものとはまったく違い、感動で涙を流すどころか、数人の学生で、生まれかかった仔馬の前足を引っ張るのには芯から疲れた。そして引き出された仔馬と一緒に飛び出した羊水を頭から浴びたこともあった。

そんな時は真冬でも水道の水を頭から浴びる。そうしなければ羊水の臭いが身体に染み付いて落ちないのだ。水を浴びないと風呂にもはいれない。羊水を浴びたまま風呂に入ろうものなら、臭いが風呂に充満して他の生徒のひんしゅくをかう。だから牛や馬の出産の実習を体験した生徒は、その場ですぐに水を浴び、そのまま寮へ戻ってシャワーで身体を洗うことを認められている。もちろんその後は徹底したシャワー室の掃除をしなければならない。

絵里は毎日が必死だった。ほかの生徒はたいていが地元か富良野市周辺の出身で、農業や酪農もそれれなりに事前の知識と経験がある。しかし札幌で育った絵里にはまったくそういう経験が無かった。だから同級生よりも二倍三倍の勉強と経験を積まなければ同レベルにはならなかった。

ただ、毎週土曜日午前中に集中して行われる獣医学科の犬や猫などの小動物に関する実習は楽しかった。

小動物の身体の作り。動物によって違う骨格や性格。治療に伴う診察。レントゲン撮影。投薬、手術、縫合、剃毛、皮下・筋肉・静脈の注射など、絵里の興味をそそるものばかりだった。しかし実験動物の解剖などでは、いかに勉強のためとはいえ、つい最近まで生命が宿っていたことを考えると、絵里の心は痛んだ。

それでも、クラスメートが嫌がる解剖の実習では絵里は自ら進んでメスを持った。切り開いた動物たちの身体から出る生臭い匂いと、したたる血に気が遠くなりそうなのをこらえて絵里はメスを動かした。自分が一生懸命になることで実験台となった動物たちの供養になる。そう考えることにしたのだ。

絵里は実習の様子や、解剖の様子を詳細なメモをとり、すばやくデジカメで撮影し、パソコンにすべてを入力した。予習や復習にはもちろん、翌日に提出するレポートにも役立つからだ。

授業が終わったら終わったで、放課後の一年生は風呂の掃除、食事の後かたずけなどで振り回される。

絵里は勉強の合間には、同室の太田めぐみの身の回りのことを積

極的に世話をした。家でも洗濯や掃除を手伝っていたせいか、同級生たちが嫌がる雑用などは全然苦にならなかった。それどころか、これも自分の翼のうちと割り切っていた。どうせやるなら楽しんで。それが絵里のモットーだった。

「ちょっと絵里、下着は自分で洗うから！」というめぐみに、

「いいんです。家ではお兄ちゃんのパンツだって洗ってるんですから。先輩、恥ずかしがらないで」と笑った。

「へえー、兄貴がいるんだ…」と、めぐみは絵里を見つめた。

「はい。すっごくいい男ですよ。ことし北大に合格したんです。父の後をついでお医者さんになるらしいです」

絵里は洗濯物をたたむ手をとめ、机の中から家族の写真と、トムと一緒に写っている写真を出してめぐみに見せた。

「医者って、あんたお医者の娘なの…」

めぐみはその写真を見ながら感心したように目を丸くした。

「はい。父と母は、結婚したころ五年間アメリカに住んでいたんです。兄はそこで生まれました。だからけっこうアメリカ風の生活っていうか、あいさつのときは相手を抱きしめたり、出かけるときは頬にキスしたり…。ほかから見ると、ちょっと変ですけどね」

絵里はそう言って笑いながらめぐみと自分の洗濯物をたたんでいる。

「お兄ちゃんやお父さんなんか、わたしを抱きしめる時間が長いんですよ。そして、おっ、だいぶ胸もふくらんできたな、なんて…」

そう言って絵里は笑った。

「あんた恥ずかしくないの、そんなことされて…」

立ったままコーヒーを飲みながら、めぐみはあきれたような表情で絵里を見つめた。

「少しは恥ずかしいですけど、でも、わたしの成長を楽しみにしているんだなって思うと、ちょっとは確認させてあげないと、って…。お父さんとは、中学一年までは一緒にお風呂に入りましたよ。最近では、お父さんのほうが遠慮してるみたいですけど…」

絵里は笑った。めぐみは口を開けたまま絵里を見つめている。
「それが原因かどうかはわかりませんけど、お風呂とかシャワーを浴びているときや、上がってタオルで身体を拭いているとき、とつぜん兄に覗かれたりもしますよ。うしろ姿だけならともかく、全部見られちゃうんですから…」
「えーっ、すっ裸を見られたりするってこと？」
めぐみは目を見開きながら、飲み終えたコーヒーカップをテーブルに置いた。
「はい。月に一度くらいは…。お父さんが、わたしの成長を確認してこいって、兄に言うらしいんです。はじめのうちは用心して周りを確認したりしてましたけど、いくら用心しても、わたしの家って玄関と窓以外は鍵がついていないんですよ。そのうちあきらめて、兄妹だから、まあいいかって…」
絵里は笑ってめぐみを見た。
「ふーん。兄貴だからいいって問題じゃないような気がするけどなー。絵里の話聞いてると、なんかめまいがしそう…」
不思議な表情で絵里の話を聞くめぐみに、絵里はとつぜん立ち上がった。
「こんな風にあいさつするんです」と、絵里はめぐみにいきなり抱きつくと、その背中を軽くたたき、背伸びをしてめぐみの頬に唇をつけた。
「ち、ちょっと絵里、なにすんのよ！」
めぐみは、抱きついている絵里をあわてて押し返した。
「あいさつです。両親や兄といつもやってます…」
絵里はめぐみに押し返されたことを一瞬驚いたが、めぐみはそれ以上に驚いた表情で絵里を見つめていた。そのめぐみを見て絵里は笑い出した。
「ああ、びっくりした。もう…、変なことしないでよ！」
めぐみはそう言って自分のベッドに腰をおろした。
「すみません…」

絵里はめぐみに頭を下げてあやまり、また洗濯物をたたみはじめた。
「ねえ絵里。わたしが女番長だとか、陰の生徒会長なんて呼ばれてること知ってる？」
めぐみは絵里の表情をうかがうように聞いた。
「はい、知ってます。スケ番って言うそうですね。月丘先生から聞きました。でも、先輩は文武両道で正義の味方だから、頼りになるわよって…」
絵里が笑ってめぐみを見た。
「ったく…。月丘め、スケ番とは言ってくれるじゃない」
めぐみはひざを抱いた格好で笑った。

第5話　退学通告

絵里は持ち前のやる気を発揮して猛勉強に励み、実習には進んで手を上げてそれを体験した。その結果、七月の中間試験では、獣医学科の実習は満点を逃したものの、普通課目と農学科の学科試験は満点をとり、総合成績で二位に圧倒的な差をつけて学年トップとなった。壁に張り出された中間試験の総合成績の点数と名前で、絵里はまたたくまに全校でその名を知られるにおよんだ。

女子生徒の中でも目立つ存在の絵里は、男子生徒ばかりではなく女生徒にも人気があった。休み時間中の教室の窓に絵里を見つめる男子や女生徒の顔が並んだ。靴箱にも男女を問わない匿名の手紙が毎日入れられた。

絵里はその手紙を一通も開封することはなかったが、処分するにも処分できず困惑した。そしてとうとう、板倉絵里への手紙を禁止する通達が全校に流れたが、それでも靴箱に入れられる手紙はあとを絶たず、やがて絵里ばかりではなく、クラス中の女子たちの靴箱にも男子からの手紙が入れられるようになってしまった。

北星高校では学校内での男女交際や手紙のやりとりは厳しく禁止している。しかし絵里の靴箱に次々と入れられる手紙を発端に、ほかの女子生徒に対しても匿名の手紙が入れられるようになったのだった。

「困ったわ、板倉さん…」

「すみません…」

日曜日の夕方、生活指導で担任の月丘恵子は寮の部屋を訪れ、困惑した表情で絵里に言った。学校側がどんなにおふれを出しても、絵里やほかの女子に対する男子からの手紙はあとを絶たず、校長以下も対策に頭を痛めていた。月丘の言葉に絵里はただ黙っているしかなかった。自分でもどうしようもないのだった。

手紙はすべて匿名だった。名前が書いてあるのなら、もう手紙を

靴箱や部屋の中に入れないでと書いた当人に言えるが、相手が匿名ではそれもできなかった。
「絵里、あんたに責任はないけど、このままじゃ、転校するか退学するしかないわね」
それまで黙って月丘と絵里の話を聞いていた太田めぐみが言った。
「……」
めぐみの言葉に絵里は驚いて顔をあげた。
「太田さん、なにもそこまで…」
月丘は太田を見つめた。
「じゃあ、ほかにどんな解決法があるの。絵里に困ったって言ったって、絵里にどうしろってのよ！」
めぐみは月丘をにらんだ。
「だから、こうして板倉さんと…」
月丘はめぐみと絵里を交互に見つめた。
「これを見なよ、先生！」
めぐみは立ち上がって絵里の物入れを開けた。その中には整然と積み上げられた百通以上の封書が入っていた。すべて絵里に書かれた手紙だった。北星高校には百人もの男子生徒はいない。同じ男子が何通も書いたらしい。
「絵里の靴箱の中に、こんなに名前も書いてない手紙が入っていたんだ！。靴箱の中だけじゃないわ。放課後この部屋に戻ってみたら、ドアの下の隙間から何通も手紙が押し込まれているのよ！。絵里は捨てられないから、一通も読まないでこうしてここに入れているんだ！」
めぐみは物入れの中の手紙を指さした。絵里はうつむいたままだった。
「あたしだったら全部破いて捨てちゃうけどさ。ほかの女の子たちはどうだか知らないけど、絵里はバカだからそれができないんだ！。中はどうあれ、書いた人の気持ちを考えて、絵里は捨てられないのよ！」

めぐみは、うつむいている絵里と月丘を交互に見ながら言った。
「先生は、絵里がこんな手紙をもらって喜んでると思うの？。迷惑メールといっしょで、全部一方的に押し付けられているんじゃない。その絵里に何の責任があるっていうのよ。先生たちだけが頭を痛めてるんじゃないわ。絵里が一番困ってるんだ。先生たちが助けてあげないと、絵里は追い詰められて、そのうちに自殺しちゃうわよ。先生は絵里ひとりに責任を押し付けるつもり？」
めぐみはそう言って物入れの戸を乱暴に閉めた。
「絵里という存在が原因なのよね！。絵里がいなくなればこの騒ぎは治まるんでしょう。だったら、絵里を転校させるか退学させるしかないじゃないの。学校側としてはそれがいちばん簡単な解決法でしょう。絵里さえいなくなれば、先生たちもひと安心じゃない！」
めぐみは強い口調で月丘に言った。
太田めぐみの言葉は正論だった。それは月丘にもわかっている。
板倉絵里に責任は無い。もしもあるとすれば、明るくてどんなことにも前向きで、それを吸収して自分のものにしようとする絵里の性格と、それ以上に絵里が美少女だということだ。しかしそれは絵里が悪いのではない。絵里は何事にも一生懸命なだけで、その一生懸命さが、絵里の美少女さをさらに目立たせている。
確かに、絵里がいる限り男子生徒は絵里を見にくるし、何とかして絵里に話しかけようとする。手紙もあとを絶たないだろう。このままにしてはおけない。早急に最善の策をたてなければならなかった。
月丘は、女番長、そして陰の生徒会長と呼ばれている太田めぐみの横顔を見つめていた。
月丘は思い切ったように絵里を振り向いた。
「板倉さん…」
月丘は厳しい目で絵里を見つめた。
「はい…」
「わたしは教師なの。だからあなた個人のことより、わたしは学校

全体のことを優先する決心をしたわ。いいわね…」
月丘は眼鏡の奥で絵里を見据えたまま立ち上がった。ドアを閉めながらベッドに腰をおろしている太田めぐみを見た。太田めぐみは月丘が送る視線に気づかないのか、端正な横顔のままだった。
「先輩、わたし、どうしたら…」
絵里は、ベッドに座っている太田めぐみをすがるように見つめた。
「月丘の言うとおり、学校のことを考えれば、それなりの荒療治が必要ってことよ」
めぐみは前を見たまま言った。
「荒療治？…」
絵里は不安そうに聞いた。
「あんたへの手紙騒ぎで、学校中の風紀が乱れきっているのはたしかよ。それをどうするか、あとは先生たちの決心しだいってこと…」
めぐみはそう言って絵里を見つめた。そのまなざしは、太田めぐみが初めて見せる厳しいものだった。
「わたしのせいで…」
絵里は下をうつむいた。
「わたし、退学に…。せっかく入学したのに…」
自分の頭の中が真っ暗になるのを感じた。うつむいて目を開けたまま、床の一点を見つめた絵里の目から大粒の涙がとめどなく落ちた。ショックで声を出すことを忘れてしまったように、身体を震わせて絵里は泣いていた。
「明日の朝には、その結論が出ると思うけど…」
太田めぐみはそう言うと、大きなため息をついて部屋を出て行った。

月曜日の朝がきた。毎週月曜日は体育館での全校朝礼がある。
朝八時三十分、百五十人の全校生徒が体育館に整列した。
「本日は、校長のあいさつと、校歌の斉唱は省略いたします」

マイクの前の田上教頭はそう言って全校生徒を見回した。
「みなさんには、北星高校の生徒として、しっかりと考え、そして正しい判断をしていただくことがあります。それでは月丘先生…」
田上教頭の言葉のあと、生活指導の月丘恵子が壇上に上がった。
自分のことかもしれない。絵里はそう思いながら壇上に立った月丘恵子を見つめた。
絵里は一年生の列の真ん中あたりに並んでいた。近くに並んでいる男子生徒がチラチラとセーラー服姿の絵里を見ている。何とか絵里との接点をつかもうと小声で話しかける男子もいた。絵里は前日のショックが消えないまま、黙ってうつむいていた。
「勝手な話はやめなさい！」
きびしい月丘の声が体育館に響きわたった。体育館の照明を反射して月丘の眼鏡が光っている。
「一年生の板倉絵里さん。壇上に上がりなさい」
月丘の声に、うつむいていた絵里は我に返った。
「板倉さん、聞こえないの！。今すぐ壇上にきなさい！」
「は、はい…」
絵里は列から出て全校生徒が見つめるなかを前のほうに歩いていった。壇上から月丘恵子がきびしい目で絵里を見つめている。絵里はゆっくりと壇上にあがり、月丘の指示するまま壇の真ん中に立った。月丘は腕を組んで壇のそでへ歩いていった。そして、ぼうぜんと立っている絵里を見すえた。
「板倉絵里さん。北星高校は、あなたに退学処分を通告します。理由は…」
月丘の言葉に体育館は大きくざわめいた。
「……」
前日の月丘の言葉で、ある程度の厳しい処分を受けることは予測していたものの、その言葉は、絵里にとって死刑を宣告されたのも同じだった。誰よりも尊敬する担任の月丘恵子が、全校生徒の前で自分に退学通告を突きつけているのだ。

「静かに！」
ざわめいている生徒たちに月丘恵子の鋭い声が飛んだ。そしてまた、月丘はあ然として自分を見つめている板倉絵里に視線を移した。
「理由は、あなたが、開校一〇二年の伝統を誇る北星高校の風紀を乱したからです！。校内での男女交際をかたく禁じている校則を承知しながら、男子生徒からの数知れない手紙の受け取りと、授業中にもかかわらず、他の学年の生徒があなたをのぞきにくる！。それはすべて、そのような態度をして男子の気を引こうとする板倉さんの責任です！」
月丘の鋭い目と突き刺すような言葉は、壇上の絵里一点に向けられていた。
「いままでの北星高校では、そんなことはありませんでした。少なくとも、あなたが来るまでは…。そのことが原因で、ほかの女子の靴箱に手紙を入れる男子が急増しています。板倉さんが発端です。あなたが、一〇二年の伝統を誇る北星高校の風紀を乱したのです。校内の風紀を乱すような生徒は、この北星高校には不必要です。いいえ！。今のままでは、あなたにいられると迷惑です！」
月丘のするどい声が体育館に響いた。体育館は水を打ったように静まり、誰一人として声を出す生徒はいなかった。
絵里の身体は今にも崩れそうだった。自分を厳しく見すえて、退学という言葉を投げかける月丘だけをうつろな目で見つめていた。これが太田めぐみの言う〈荒療治〉なのか、と…。
なぜこんな…。
混乱している絵里の頭の中でその疑問だけが駆けめぐっている。何も考えられなくなっていた。足元の板が粉々になり、その中に自分が落ちてゆくのを感じた。
月丘が言うように、退学にされるようなことを自分はしたのか。自分が男子の気を引くようなことを…。それが原因で校内の風紀が乱れた…。
絵里は厳しい表情で自分を見る月丘をただぼう然と見つめていた。

絵里は目を伏せた。自分は学校内の風紀を乱すようなことはした覚えはない。しかし学
校側がそう判断したのなら、もしそうなら自分が責任を問われても仕方がないことだ。
〈あなた個人のことより、わたしは学校全体のことを優先する決心をしたわ〉と、前日、寮の部屋で月丘恵子が言った言葉を思い出した。そして学校側は、学校全体のためを考えて自分の退学処分を決定したのだ。
やっと生えかけた翼が折れた。もう羽ばたけない。
獣医師になるためにこの北星高校を自分で選び、入学試験に合格した。そして必死で勉強したのは何のためだったのか。そのことだけが絵里の頭の中を渦を巻いてかけめぐっていた。貧血を起こした絵里はその場に力なく座り込んだ。床に両手をついていなければ気を失ってしまいそうだった。
「板倉さん、しっかり立ちなさい！」
月丘のきびしい声が絵里を我に戻した。
「はい…」
絵里は両手に渾身の力をこめて立ち上がった。足が小刻みに震えるのを感じた。整列している全校生徒の視線が壇上の絵里に集中している。月丘は、絵里が立ち上がったのを見てまた腕を組んだ。
「風紀を乱したあなたの責任は大きい。しかしながら、教師全員の話し合いにより、むこう一週間の猶予を板倉絵里さんに与えます。今後一週間で、またこのようなこと…。男子からの手紙の受け取りや、教室の覗きなどがあった場合、即座にあなたの退学処分を決定します！」
厳しい声でそう言った月丘の唇が小さく震えていた。
「……」
絵里はうつろな表情で体育館の中を見た。みんなが自分に注目しているのだろうが、絵里の目の焦点は合っていなかった。みんなの顔がぼやけている。

「先生。みなさん…。お願いします、わたしをここにいさせてください。動物の勉強をさせてください。わたし、獣医になりたいんです」
絵里は蚊の鳴くような震える声で言った。絵里の全身が小刻みに震えている。立っているのがやっとだった。
「わたし、悪いところがあるのならなおします…。ほんとうにごめんなさい。これからは、先生や皆さんにご迷惑をおかけしないように心がけます。どうか、この学校にいさせてください。わたしに悪いところがあるのなら、どうぞ言ってください」
絵里はようやく顔を上げて、涙で震える細く小さな声で言った。体育館はしんと静まりかえっていた。
絵里は全身を震わせながら、そでで腕を組んでいる月丘に深く頭を下げると、力の無い足どりで壇の中央から歩き出し、階段をおりて一年生の列に戻ろうとした。しかし数歩進んだところで目の前が真っ暗になり、全身の力が抜けてそのまま壇上で倒れた。遠くでゴーンという音が聞こえた。意識が薄らいでゆくなかで、床に頭を打ったのだと絵里は思った。
「板倉さん！」
月丘が眼鏡をはずし、倒れた絵里に走りよって抱き起こした。体育館は絵里が倒れたのを見てざわめいたが、月丘が抱き起こしたのを見てまた静かになった。
「板倉さん、しっかりして！。板倉さん！」
月丘が大声で叫んだ。その声に絵里はうつろな目を開けた。
「ご迷惑を…。ごめんなさい、先生…」
絵里はかすかに見える月丘に、ようやくの思いで言った。絵里は月丘恵子の腕の中で必死に身体を起こそうとした。
〈板倉さん、ごめんね、ごめんね…〉と月丘は何度も心の中で叫んだ。まさかこんなことになろうとは…。
月丘は大声で絵里にわびて抱きしめたかった。そしていかに学校のためとはいえ、わずか十五歳の少女を人身御供にして風紀の乱れ

を直そうとした自分に腹が立った。
「自分で歩いて壇を降りなさい。ゆっくりでいいから…」
生活指導教諭として板倉絵里に退学を通告した手前、自分が絵里を助ける側にはまわれない。月丘はあふれそうな涙を必死に押さえた。
〈太田さん、何をしているの！。お願いだから早くきて！。この子を助けて…〉
月丘は心の中で叫び、体育館の中にいるであろう太田めぐみの姿を探した。
「はい、自分で、降ります…」
絵里は月丘に助けられてゆっくりと立ち上がった。体育館は無人のように静まり返っている。絵里は震える足でゆっくりと歩を進め、壇から降りる階段に近づいた。
「まちな！」
静まり返った体育館に大声が響いた。整列した全校生徒の横を、ダンボール箱を抱えたセーラー服姿の太田めぐみが歩いてきた。全校生徒の注目の中で、太田めぐみはダンボール箱を抱えたまま壇上に登った。月丘はその姿を見て大きくため息をついた。
「少しの辛抱だ。根性出して、しっかり立ってな！」
めぐみは、憔悴しきって立ちすくんでいる絵里にそう言って、壇の一番前に立つと、ダンボールの中から封筒の束をつかみ上げ、整列した生徒の頭上に二度三度と放り投げた。思いもよらぬ太田めぐみの行動に生徒たちはざわめいた。そのざわめきにかまわず、めぐみは封筒の束を投げつづけ、空になったダンボール箱を壇上から力いっぱい床にたたきつけた。ダンボール箱が転がる音がしんとした体育館に響いた。
「この手紙に心当たりのあるやつは、今すぐに拾いな！」
太田めぐみの鋭い声が体育館に響いた。
「自分の名前を書く度胸もないくせに、女子の靴箱の中に手紙を入れておくなんて、少しは高校生として恥を知ったらどうなのさ！。

絵里は、あんたたちからむりやりに押し付けられた手紙は一通も開封してないんだ。同室のあたしがよく知っている。破り捨てても燃やしちゃってもいいのに、絵里は書いた人の心を感じたから処分しないで、ごしょう大事に物入れの中にしまっておいたんだよ。学校の風紀を乱しているのは絵里じゃない。女子の靴箱に、こそこそかくれて手紙を入れるあんたたちじゃないか！」

めぐみは腕を組んで壇の一番前に立ち、居並ぶ全校生徒をにらみすえた。

「みんな絵里が憎いのかい。この学校から絵里を追い出したいのかい！。そうじゃないなら、絵里が好きなら、絵里の嫌がることをするんじゃないよ。ほかの男子もそうさ。自分が好きな女子がいるんだったら、好きな相手を追い込むようなことはやめるんだ！」

そして太田めぐみは、並んでいる教師のほうに向き直った。

「それから先生たち。絵里を退学なんかにしたら、このあたしが、学校と先生たちの家に火をつけてやるからね！。覚えてな！」

めぐみはするどい目で教師たちをにらんでそう言うと、全身を震わせて立っている絵里の腕を支えた。

「絵里、だいじょうぶ？。歩ける？」

めぐみは、気を失いそうになって今にも倒れそうな絵里を支えるように階段を降り、整列した生徒たちの横を通り過ぎて体育館の入り口に向かった。顔か真っ青になった絵里の全身がブルブルと震えていた。絵里はようやく足を前に進めていたが、支えていためぐみの腕から崩れ落ちるように床に倒れこんだ。

「絵里！。絵里！」

めぐみが大声で叫びながら、気を失いかけている絵里を抱き起こした。

「だれか手を貸しな！。あたしに背負わせるんだ！」

めぐみが大声で叫んだ。すぐに数人の生徒が駆け寄ってきた。そして倒れている絵里を男子生徒がめぐみの背中に背負わせた。絵里を背負っためぐみのあとを、ふたりの女生徒がついていこうとした。

「ついてくるんじゃない！」
めぐみは鋭い目でその女生徒と整列している全校生徒を睨んだ。ついて行こうとしたふたりの女生徒は、めぐみの鋭い目と迫力に圧倒されて立ちすくんだ。ざわめいていた体育館が、またしんと静まり返った。
北星高校のスケ番、そして陰の生徒会長と異名をとる太田めぐみの、もうひとつの顔がそこにあった。
めぐみと絵里を全校生徒と教師たちが黙って見つめていた。月丘は壇上で腕を組んだまま、太田めぐみと、そのめぐみに背負われてゆく板倉絵里の姿に大きなため息をついた。月丘恵子目からいくすじもの涙が頬を伝っていた。

「さあ絵里、ここに横になりな。いま水を持ってくるから…」
めぐみは貧血で気絶しそうな絵里を、日陰になっている校庭のベンチに横にさせ、スカートのベルトをゆるめると、直射日光が当たらないようにポケットからハンカチを出して絵里の目にかけた。
「先輩…」
意識が戻った絵里は、力のない声でめぐみを呼んで手さぐりをした。
「心配ないよ。絵里は、ずっとここにいられるからね」
めぐみはそう言って差し出された手を握り、片方の手で冷たい絵里のひたいをなでた。
「それにしても、月丘もなかなか役者だよね」
めぐみが笑いながら言った。
「え？…」
絵里は目のハンカチをずらしてめぐみの顔を見た。
「アハハハ…。絵里は、まだ気がつかないの？」
めぐみはそう言って絵里のひたいをなでた。
その日いらい、絵里やほかの女生徒の靴箱には匿名の手紙は入らなくなった。もちろん絵里の教室を覗きにくる男子生徒もいなくな

った。

第6話　夏休み

七月二十日から北星高校は夏休みにはいった。寮生たちはそれぞれの故郷に帰省し、太田めぐみも滝川の実家に帰省している。

板倉絵里は札幌には帰らなかった。絵里ひとりだけが学生寮で生活していた。

ここに来ると決心したときから、卒業するまでは何があっても札幌には戻らないと決めていた。札幌の町並みと、家族の笑顔やかわいいトムと会ったら絵里の決心を鈍らせる。

絵里は時間があると机に向かって二学期の予習と一学期の復習に専念した。自分の夢を実現するために、獣医になるために絵里はこの学校に入学した。最初の目的である北星高校の卒業にすべてを賭けていたのだった。

そんな毎日を送るなかにも、夏休みが中盤に差しかかると、少しは外で過ごす余裕も出てきた。

夏休みの自由課題は、農家の人たちや動物たちの自然な姿をデジカメで写し、それをパソコンで印刷してすでに提出している。

北星では写真の題材に困ることはない。どこにでも写真の被写体はあった。自分の目で見るのと写真に切り取るのとでは大きな違いがある。誰もが気にせず毎日見ているものの中にも、写真に写してみるとはっとするほど新鮮な被写体もあるのだった。特に札幌からきた絵里には北星の風景はめずらしく、感動するものばかりだったのだ。

「写真とらせてください！」

カメラを持って北星の農家を訪ね歩く絵里に人々は笑顔で応えてくれた。中にはちょっと化粧をしてくるからと、家に戻って口紅をつけてくる婦人もいた。絵里はありのままの姿を写したかったのだが、しかたなく化粧をしてポーズをとる婦人を写し、あとでパソコン印刷して届けたりした。

絵里はたくさん写した写真の中から、『北星の風と土』と題し、近くの農家の婦人を写したものを数枚学校に出した。畑仕事に汗を流す婦人の顔のアップや、草取りをする婦人とバックの風景。牛の身体を干草でマッサージする姿。乳搾りをする姿など、絵里にとっては新鮮に感じるそのままを写したものだった。

「ジャーン！。板倉さーん、おやつの時間よ。ケーキ食べたかったら出てらっしゃーい！」

月丘恵子や水島夫婦が、絵里が淋しがっていないかと毎日のようにお菓子や果物を持って寮をたずねてくる。そんなときは楽しく会話がはずみ、めぐみがいない淋しさも忘れて絵里の表情はひまわりのように明るくなるのだった。

夏休みの十日目、絵里はTシャツとジーンズ姿で寮を出た。水色の帽子をかぶり、肩からメモ用紙、デジカメ、お菓子などを入れた小さなポーチを下げている。どこにでも見られる女子高生の姿だった。小さな集落だからどこの家でも顔見知りになっている。道ゆく人たちに笑顔であいさつしながら、そして行き交う友達と雑談をしながら、絵里はひとりで北星駅のほうに足を向けた。

近くの牧場で牛が鳴いている。金山湖から吹く風にススキの穂がキラキラと光りながらなびいていた。明日は金山湖へ行ってみるつもりだった。

金山湖にはキャンプ場やボート乗り場があり、夏は道内各地からキャンプや釣りに大勢の人たちがやってくる。絵里もめぐみに連れられて水辺で遊んだりボートで釣りに行ったことがあった。

ある日曜日、めぐみが漕ぐ貸しボートに乗って釣りに行ったときのことだった。めぐみは二十センチほどのニジマスを二匹釣り上げたが、絵里はめぐみと同じくらいのニジマスをたてつづけに七匹も釣った。

「先輩、また釣れました！」

大はしゃぎで自慢する絵里に、めぐみは悔しそうに横目でにらみ「ふん。ビギナーズラック（初心者のまぐれ）ってやつさ！」と苦笑いした。
ボートをあがったふたりは、水島商店の店先でアキヨに炭火で焼いてもらったニジマスを食べた。あっさりとしたその味はいまだに忘れられない。
「おじさん、この大きいのはわたしが釣ったんですよ！。七匹も釣りました！」と得意げに言う絵里に、「なに言ってんだい。あたしがボートを漕いで、えさのイクラを付けてやったから魚釣りできたんじゃないか。釣った魚だってあたしが針をはずしてやったんだ。生意気言ってると、オモリといっしょに、えさにして湖に沈めちまうよ！」とめぐみは笑った。
「うーん。どっちも甲乙つけがたい美人の女子高生じゃが、釣られる魚にも好みがあるようだぞ。わしは五分と五分じゃと思うんじゃが…」
玄作は、アキヨが焼いたニジマスを食べながらめぐみと絵里を見比べた。
「ふん、かず釣れりゃいいってもんじゃないよ。あたしが釣った二匹のオスは、心底からあたしの魅力にまいって釣られてきたんだ。味だって、ネンネの絵里が釣った魚よりは数段上さ！」
めぐみは笑っている絵里をにらんでプイと横を向いた。
「でも先輩、二人の男性にモテるより、七人の男性にモテたほうがいいですよ」
絵里はめぐみの顔を覗き込んで言った。
「ちょっと絵里。あんた、あたしにケンカ売る気かい！」
「いえ、とんでもないです！。ただ、わたしは二人より七人のほうが…」
「うるさいね！。いずれはっきり白黒つけようじゃないか。勝負してやるよ！」
めぐみは絵里をにらんで言った。

「はい、勝負しましょう！。また勝ったら二連勝ですよ。キャッ！」
絵里はアキヨと玄作を見つめて満面の笑顔を浮かべた。
「ふたりとも、姉妹みたいなんだから…」
アキヨと玄作は顔を見合わせて笑った。
絵里の心を楽しくさせてくれる太田めぐみは滝川の実家に帰省している。
早く夏休みが終わればいいのに、そうすれば、またいっしょに勉強したり、おしゃべりをしたり、どこかへ出かけたりできるのに…。しかし夏休みはまだ半分が過ぎただけで十五日以上残っている。盆踊りには一度帰ってくると言っていたが、北星の盆踊りは夏休みの終わりに近い八月十六日だ。
「先輩、どうしてるかなー…」
絵里はめぐみの顔を思い浮かべながら、ススキがなびく小道を歩いていた。稲の穂も黄色く色付きはじめている。
絵里は北星スキー場へ通じる小さな踏切から根室線の線路に入った。絵里が時々気分晴らしに歩くお気に入りの散歩コースだ。
根室線は一日に急行が一往復、普通列車が八往復するだけだ。線路のレールは車輪と当たる半分ほどが光っている。その向こうにゆらゆらと陽炎が立ち、線路が溶けるように吸い込まれていた。
絵里は太陽に熱く照らされたレールの上に折りたたんだハンカチをおき、耳を付けてみた。列車が来るときは車輪とレールのあたる音が、はるか遠くからでもレールを伝って聞こえてくる。しかしいまはセミとキリギリスの鳴き声以外には何も聞こえなかった。
時々上りや下りの列車と遭遇することがある。絵里は、歩いている線路の横や駅のホームから列車の運転手や乗客に笑顔で手を振る。乗客もまばらな根室線だが、絵里が手を振ると運転手はいつも軽く手を上げて応えてくれるのだ。
絵里は立ち上がって、かかしのように両手を広げてレールの上を歩いてみた。それだけでなんだか楽しい気分になってくる。レールの上を鼻歌を歌いながら北星駅に着くと、ホームから足を投げ出し

て座った。まだ秋には早かったが、セミとキリギリスが鳴き、産卵色に染まっていない大量のトンボが飛び回っている。電線にも規則正しくトンボが止まって羽根を休めていた。絵里の肩と帽子にもトンボがとまっていた。

絵里は日差しの中でじっと線路を眺めていた。

こんな小さな田舎の駅でも、線路だけは札幌に続いているからね、と月丘は言った。

どこまでも続いている二本のレールから、天国の祖父母、札幌の父と母、兄の笑顔とトムのはしゃぐ姿が見えてくるようだった。線路のむこうには北星神社とスキー場、中学校が見えている。

夏休みも帰省せず、携帯電話も持たず、公衆電話で一ヶ月に一度くらいしか電話をしない娘。両親はそんな自分をどう思っているだろう。そして大好きな兄とトムは…。

自分の翼で飛び立ちたいなどと生意気なことを言って家を出てきたものの、その翼は、まだ風を受けて飛べるほどには生えそろっていない。絵里は多少弱気になりながら札幌へ続く二本のレールを眺めていた。

突然誰かが目隠しをした。

「だーれだ」

目隠しをした後ろから声が聞こえた。

「先輩！」

絵里は勢いよく振りむいた。逆光の中でにこやかに笑う太田めぐみが立っていた。淡い緑色のTシャツと明るいチェックのミニスカート姿のめぐみを、絵里はまぶしそうに見上げた。めぐみの後ろには水島夫婦と月丘恵子が笑顔で立っている。

「先輩！」

絵里は立ち上がって、勢いよくめぐみに抱きついて頬にキスした。

「ちょっと、絵里ったら！」

めぐみは抱きつく絵里に困惑しながらも、しばらくは絵里の好きなようにさせていた。

「みんな、どうしたんですか？…」
絵里はめぐみに抱きついたまま、月丘と水島夫婦を見つめた。
「絵里がひとりで淋しそうだから激励にきたんじゃないか。どう、あたしが恋しくて毎晩ベッドの中で泣いてたんじゃないの？」
めぐみは笑いながら絵里の頭をなでた。そして絵里のジーンズについた土を払い落とした。水島夫婦と月丘が笑っている。
「太田さんね、わざわざ滝川からあなたに逢いにきたのよ。みんなでご飯でも食べようってね…。太田さん、あさってまで一緒にいてあげるって。きょうは水島さんのところに泊まるから、あなたもそうしなさい。わたしも付き合うから、みんなでご馳走になって、あしたはお弁当作って、金山湖にさかな釣りにでも行きましょう」
月丘はそう言って水島夫婦を見た。
「このあいだの勝負を、はっきりさせなくっちゃね！」
めぐみはそう言って笑った。
「絵里ちゃん、なかなか来てくれないから、だんなが淋しがってるんだよ。めぐみちゃんと月丘先生が音頭とってくれたから、きょうは嬉しくて…」
アキヨは絵里の手を握って何度も振った。
「めぐみちゃんと絵里ちゃんの酌で、きょうはうまい酒が飲めるわい」
玄作も顔をしわくちゃにして笑っていた。
「あら玄さん。わたしもいますよ！」
月丘がそう言って玄作をにらんだ。
「北星高校きっての、独身の美人教師を忘れるなんて、ひどいよおじさん！」
めぐみの言葉に月丘と水島夫婦が大声で笑った。
「……」
絵里はみんなの顔を無言で見つめていたが、やがてその表情がくずれた。口をへの字に結んでいる。
「おっ、絵里が泣くよ。さあ見ものだ。はやく泣いてみせな！」

めぐみはそう言って手をたたいた。
「しりません！」
絵里は口をとがらせてそっぽを向いた。そして顔を伏せたまま駅舎の中に走っていった。ひとりで淋しいだろうと気を使ってくれるみんなの心が嬉しかった。もう少しで泣き出しそうだったが、めぐみにからかわれてなんとか我慢した。
ありがとう、ありがとう…。絵里は心の中で何度も感謝した。
「おばさん、今晩のご馳走はなんですか？」
絵里は駅舎から顔を半分出してアキヨに聞いた。満面に笑顔を浮かべている。それを見た四人は大声で笑った。

第7話　和尚さま

北星高校の夏休みも、あと六日で終わろうとしていた。
絵里は学校の寮から歩いて五分ほどのところにある妙現寺の境内を散歩していた。
北星は盆地のせいもあり、真夏になると連日三十度を越すまでに気温が上がるが、木陰になっている境内は少し涼しい風が流れている。木々の間から差す木漏れ日が境内にさまざまな陰影を作っていた。
夏休みが終われば滝川から太田めぐみも帰ってくる。めぐみが帰ってくるのだけが絵里の楽しみだった。
絵里は境内の真ん中にある鐘つき堂を眺めていた。
寺には何度も足を運んでいた。かわらを使った重厚な建物と、朝の六時、昼の十二時、夕方の六時につかれる一日三回の鐘の音。その音は学校の寮まで聞こえてくる。
北星の人たちは、何十年も前からこの鐘を聞きながら仕事をしたり、お昼ごはんを食べたり、夕ご飯の準備をしたりしているのだろう。そう思うと、北星の人たちの質素だが幸せな生活の様子が浮かんでくるようだ。
絵里は神社やお寺が好きだった。なんとなく気持ちが落ち着くし、静かな場所でもある。お寺や神社には、学校や家並みとは違う空気がある。緑色の空気が止まっているような、とでも表現するのか。その空気が絵里は好きだった。
墓地もそうだ。妙現寺の裏山の斜面には北星墓地がある。絵里は時間を見つけては墓地に出かけ、墓標に刻まれている名前や、その人が亡くなった日付などを見て歩いた。そこには絵里の知らないはるか昔の北星の歴史があった。
絵里は夏休みの自由課題の総仕上げにかかっていた。神社やお寺、墓地などを見てあるき、北星の歴史を綴った史料を作っていたのだ。

すでに農家の働く婦人の姿を写した、『北星の風と土』という組写真は提出していたが、自由課題に提出数の制限は無い。
「涼みかな…」
本堂の縁側に座っている絵里に、住職の松海千弦が声をかけた。
「あ、和尚さま」
絵里は振り向いて立ち上がると笑顔で千弦を見上げた。
「こんにちわ。おじゃましてます」
合掌して頭を下げる絵里に、千弦も笑顔で合掌した。
「まだまだ暑い日が続く…」
千弦がそう言って太陽にきらめく木々を見上げた。
この妙現寺は、百年以上も前に北星が開拓されたときからあるお寺だという。千弦は父親である先代の松海道元から寺を引き継いだ二代目で、ことし七十四歳だと聞いていた。
「和尚さまのお寺、北星ができたころからあるんですか?」
絵里は千弦和尚を見上げた。
「そうだな…。ことしで百十八年になるな…」
千弦は絵里の横に腰をおろした。
「百十八年…」
絵里は千弦和尚を見つめた。
「うむ…。少なくとも、絵里ちゃんの学校よりも早くできている…」
千弦は笑った。
「今でこそ北星も五百人の人が住んでいるが、わしが子供のころは、七軒ほどの家しかなくてな。となりの家などと簡単に言うが、この寺から一番近い家というと、一緒に入植した山路さんを別とすれば、ほれ、金山湖のところにある北村さんが、それこそとなりの家だった…」
和尚は懐かしそうな目で言った。
「へえー。けっこう遠かったんですね」
絵里は感心した表情で千弦を見た。
「絵里ちゃん、いらっしゃい。冷たいお茶でもどうぞ」

千弦和尚の奥さんが絵里と千弦にお茶と切った羊羹がのった皿を差し出した。名前は松海富士子という。北星のＰＴＡの役員もしている。
「ありがとうございます。いただきます」
絵里は頭を下げて茶碗を持ち上げ、ひとくち飲んだ。
「おいしい…」
絵里は笑顔で富士子に言った。
「そう…」
富士子は目を細めてうなずいた。絵里はお茶の茶碗を置くと、爪楊枝が刺さっている羊羹を口に運んだ。
「おばさんの羊羹、すべすべしておいしい…」
絵里はそう言って富士子を見た。
「でしょう。羊羹とか…。羊羹だけじゃないけど、きれいに切れる包丁でね。スッと切ると、中の繊維や組織がきれいに切れて表面がすべすべになるの」
富士子はしぐさを交えながら絵里に言った。
「へエー…」
絵里は感心した表情で羊羹を見つめた。
「絵里ちゃんは、包丁なんて使ったことあるの？」
「はい」
絵里は顔を上げた。
「中学のときから、お母さんの手伝いで、キャベツとか大根とかピーマンなんかは切ったことがあります」
「あらま。一応は使えるんだね」
富士子は感心したように言った。
「お母さんが言ってました。玉ねぎは、切れない包丁で切るから涙が出るんだって…。切れる包丁で切ったら涙は出ないんです。わたしも切らせられたことがあるんですけど、ほんとに目にしみないんです。お母さんに教えられて、包丁や小刀で鉛筆だってちゃんと削れますし、りんごの皮むきだってできますよ。包丁はいつもお父さ

んが研ぐんです」
絵里はうれしそうに言った。
「何回も手を切ったりしたこともありますけど、使い方さえ間違わなければ怪我もしないし」
絵里は言った。
「わたし、お父さんからこれをもらったんですよ」
絵里はポシェットから小さなポケットナイフを取り出した。中学生になったとき父の優一からもらったものだ。ナイフとハサミが付いている。シャープペンシルを使わない絵里が鉛筆を削ったり、紙や紐を切ったりするときに使っている。使い方も父や兄から教えてもらった。
「鉛筆を削ったり、リンゴや梨の皮をむくのに便利なんです」
そう言う絵里を、富士子は目を細めて見つめた。
「鉛筆削りは使わないの？」
富士子は聞いた。
「機械で削っても、先がすぐに折れちゃうし、なんとなく暖かさがないんです。自分で鉛筆を削ると、自分が一番使いやすいように削れるんです。だから、このナイフとっても大事にしてます。いまは、切れなくなったら水島のおじさんに砥いでもらうんですよ」
絵里はそう言ってナイフをポシェットに入れた。
絵里という子を育てた母親は、いまどき珍しいほど真剣に娘を育て上げている。
包丁で肉や野菜を切ることはもちろん、危ないからと刃物を使わせず鉛筆も満足に削れない子供たちが多い現代で、絵里の親は生活のために必要なことをキチンと教えているのだ。札幌で育ったと聞いているが、学校で教えないようなこともチャレンジする精神を植えつけられているのだと富士子は感じた。
絵里は、そんな富士子の心を知ってか知らずか、笑顔を浮かべて羊羹をおいしそうに食べている。
「……」

千弦和尚は何度もうなずきながら、目を細めて絵里を見つめていた。

「…。明治十九年だったか…。この北星に、最初に開拓の鍬を入れたのが、わしの親父の道元和尚と、神社を建てた山路さん…。いまの神主のおやじさんでな。それからしばらくして、山地の親父さんは、いまの神社のところに移り住んだ…」

絵里と富士子の会話を聞いていた千弦が、太陽に揺れる木々を見上げてゆっくりとした口調で言った。

「おとうさん。高校生の絵里ちゃんにそんな昔話をしたってしょうがないでしょう」

妻の富士子は、懐かしそうに言う千弦を見て笑った。

「いいんです、おばさん。わたしが和尚さまに聞いたんです。わたしそういうお話大好きなんです。だって、わたしが住んでいる北星の歴史ですもの」

絵里はふたりに言った。

「うむ。そうだろうとも…。歴史というのは語り継いで大事にせにゃあいかん。いまどきの高校生で、地元の歴史を知ろうという気概はたいしたものだ！」

千弦は満足そうにうなずいた。

「まあまあ…」

富士子はふたりを見て笑った。

「それで…」

千弦はうなずいてお茶を飲んだ。

「屯田兵というのを知っておるか？」

千弦が聞いた。

「はい、中学の社会科で名前だけは…」

絵里は答えた。

「ははは…。まずは屯田兵の勉強からはじめなきゃならんな…」

千弦はうれしそうに笑った。

「江戸幕府…。つまり徳川幕府が終わると、明治時代となった。明治になると、もうちょんまげをゆって刀を差していた武士の時代も終わった。それまで殿様を主君と仰いでいた侍たちは、家臣としての仕事がなくなった。なんせ仕える殿様がいなくなってしまったんだからな。今で言うと会社が倒産して社員が解雇されたのと同じだ」

千弦がお茶を口に運んだ。

絵里は千弦の言葉のはしはしをノートにメモしている。富士子は目を細めて絵里を見ている。

「主君をうしなった侍たちは路頭に迷った。失業した侍の数は、日本全国で四十万人とも五十万人ともいわれている。その侍には家族もおっただろう。それを合わせると百万人以上にもなったはずだ。その侍と家族たちをどうしようかと、明治政府は悩みに悩んだことはいうまでもない。三百年も続いた時代が大きく変わるというのは大変なことだった…」

千弦が遠くを見ながら言った。

「その人たちが、屯田兵に…」

絵里は千弦の横顔を見ながら聞いた。

「さすが絵里ちゃんだ。飲み込みが早い」

千弦がうれしそうに言った。

「まさに絵里ちゃんが思っているとおり、四十万人以上に膨れ上がった失業者に仕事を与えようと、北海道開拓の力として屯田兵制度を作った…。屯田兵の屯とは、その地に根付く。田は、その地を耕すという意味がある。半分は当時のロシアの南下政策、つまり北海道を我が物にしようとするロシアから北海道を守るための兵隊として。半分は北海道を開拓するという仕事だった。だから、各家庭には家財道具のほかに兵隊の服と鉄砲が支給されていたんだ。その制度を作った中には、絵里ちゃんも名前くらいは知っとると思うが、薩摩藩、今の鹿児島の西郷隆盛もいたと聞く。そして明治八年、絵里ちゃんが育った札幌の琴似というところに、失業した侍とその家族を合わせて二千人ほどが入植した…」

「琴似に…」
絵里は驚いた表情で言った。
「うむ…。次の年には山鼻に千八百人…。次の年も、また次の年もと、日本全国から屯田兵が入植した。その屯田兵は北海道の端々にまで入植して開拓を始めた。今でこそたくさんの人が住む札幌だが、屯田兵が入植したころは、それこそ原始の森が広がり、熊や狐が我が物顔で歩いていた未開の地だった…」
千弦はそういって絵里を見た。
絵里は、今でも札幌市中央区の山鼻には屯田通りというところがあり、北区の琴似には屯田という地名が残っているのを思い出した。西区の八軒や二十四軒という街の名前も、当時、開拓のために入植した人たちが建てた、八軒あるいは二十四軒の家が立ち並んでいた名残なのかと絵里は思った。
「明治十九年に、ここに入植したわしの父親と山路さん親父さんも屯田兵だ。わしの親父は会津藩、今で言う福島県の侍で、山路さんのおやじさんは今の滋賀県。昔でいう近江の侍でな。この北星もまさに未開の地。粗末なわらぶきの小屋を建てて毎日毎日開拓に励んだが、それはもう、言葉では言い表せんほどの苦労をしたと聞く…」
千弦はそう言ってお茶を飲んだ。
「食べ物にも不自由しただろう。開墾しながら野菜や米を作ったんだろうが、野菜はともかく、北海道と本州の米は根本的に性質が違う。気候や土壌が違う北海道に本州の種もみを植えても、ここらあたりでは育たんのだ」
千弦は境内を見たまま言った。
「わしの親父や山路の親父さんは、当時札幌にあった農業試験場から改良した米をわけてもらっては水田に蒔いたらしい」
千弦は言った。
「ただ、魚は抱負だったらしい。金山湖がせき止められる前の北星川には大量のシャケが遡上していたし、ヤマメやニジマスはもちろん、今では幻の淡水魚といわれるイトウもたくさんおった。屯田兵

には明治政府から鉄砲が支給されとったから、熊や鹿を獲って動物性たんぱく質もそれなりに摂取できたという」
千弦は、メモをとる絵里を見つめて目を細めた。
「これは、ここだけの話だが…」
千弦はそう言って口に人差し指を当てた。絵里は目を丸くしながら千弦と富士子を交互に見た。
「かあさん、冷えたやつでいい。ご飯を少し持ってきてくれ」
千弦の言葉に、富士子は笑って立ち上がった。
「ここだけの話…。とりあえずは来年の秋までは北星の門外不出の秘密だが…」
千弦は大真面目な顔になって絵里を見つめた。
「四・五年前から、北海道にはもちろん、日本全国に秘密で、北星独自の新種の米を作っているんだ」
「新種のお米？…」
絵里は千弦の顔を見つめた。
「絵里ちゃん、このご飯を食べてみて」
千弦の妻の富士子が、小さな茶碗によそったご飯と箸を盆にのせてきた。
絵里は、ふたりの顔を見ながら、よそられた茶碗のご飯をひと口食べた。
「おいしい…」
絵里は目を丸くしてふたりを見つめた。
富士子が持ってきたご飯は、すでに冷えていたが、噛んだときに広がる甘さと粘りは、今までに食べたことが無いほどに芳醇だった。茶碗に残っているご飯も、箸でつかんだときの粘りと、冷えているにもかかわらず、一粒一粒の米がキラキラと光っている。
「こんなおいしいお米、初めてです」
絵里はふた口ほど食べて、ふたりを見上げた。
「このご飯は、きのうの朝に炊いたんだよ。おいしいでしょう」
富士子は笑いながら言った。

「今年の秋には初の収穫だ。北星にだけは出回ることになっている」
千弦は嬉しそうに言った。
「名前は、とりあえず〈月光（つきひかり）〉として、来年の秋には富良野あたりから出回ることになろう。味は、いま絵里ちゃんが食べてわかるとおり、まさに超一級品であることは間違いない。内地のコシヒカリなどは足元にも及ばん」
千弦は富士子と顔を見合わせた。
「種もみは、苗として育てるまで役所が厳重に管理して、他方には出回らないようにするそうだ。もっとも、出回ったとしても、北星の土壌がほかの土地とは違うし、同じ〈月光〉を植えても、味は極端に落ちる。まさに北星の土壌が生み出した傑作。日本最高の米だということだな」
千弦の言葉に、絵里は小さな茶碗のご飯をしみじみと見つめた。
北星産の野菜や牛肉・豚肉は、全道的にも有名なブランドで、いまや全国区になりつつある。
十六年前に北星高校の農学科が地元の農家と開発した〈風土〉という肥料は、化学肥料や有機肥料が持つ肥害が無く、秋の収穫後に水田や畑に蒔いておくと一冬で土壌が回復するため日本中の農家から引っ張りだこで、生産が間に合わないほどだ。
北星の各家庭には浄化槽が設置され、生活用排水、つまり洗剤などを使う台所や風呂などの排水は別の処理場で処理されるが、人間や家畜の排泄物は各家庭の浄化槽の微生物によって分解され、分解されたものは区によって回収される。
回収された分解排泄物は処理場の高音焼却炉で焼かれると排泄物としての臭いも無い粉末になる。その粉末に木灰やわら灰、堆肥、貝殻を主成分とするカルシウム、アミノ酸、燐酸、窒素などを北星高校の農学部が研究した微妙な割合で配合する。配合の割合は育てる野菜などにより異なるが、その配合率は北星の門外不出の秘密である。それが〈風土〉という肥料だ。その〈風土〉を各農家が畑や水田に蒔く。それにより土壌が改善され、強い化学肥料などを使わ

なくても安全で質のよい米や野菜ができるし、消毒薬もほとんど必要としない。それを飼料とする牛や豚も安全なものが生産される。
その〈風土〉を生産するため、北星の各家庭や学校の水洗トイレは、化学薬品が配合された便器洗浄剤などはいっさい使わないし、トイレットペーパーも蛍光剤などを使わない北星独自のものを富良野の製紙工場に作らせている。
そうして生産された野菜や豚肉、牛肉も、北星産ということだけで、富良野牛や十勝牛の二倍ほどの価格で取り引きされていて、庭先や畑の中をほかの家畜と一緒に放し飼いにして育てている鶏の肉や、その鶏が産む有精卵の玉子なども北星産は別格の扱いを受けている。雑菌が無いため北星産の豚肉は生でタタキにして食べられるほどだ。
それは、二十四年前から六期にわたって区長を勤める江島正三郎が、就任したときから化学肥料を徹底して排除し、無農薬栽培に力をいれ、家畜の飼料も抗生物質などを混入せずに、自然に任せた飼育に徹してきた成果が身を結んだものだと聞いている。
その野菜や肉に加えて、今度はこの〈月光〉という米が、北星産の米として北海道や日本全国に出回る。
「このお米が日本のトップブランドになったら、農業の歴史を塗り替えますね」
絵里はそう言って千弦と富士子を見つめた。
「そのとおり。だから今は秘密の米なんだ」
千弦は、また人差し指を口に当てて笑った。
「絶対わたしだけのナイショにします。区長さんや月丘先生にも！」
絵里は得意そうに言った。
「く、区長にもか？…」
千弦は目を丸くして絵里を見た。
「あ、区長さんは知ってらっしゃるんでしたっけ」
そう言った絵里に、千弦と富士子は腹を抱えて笑い出した。

「和尚さま。北星っていう名前は、どこからきたんですか？」
しばらくして絵里が聞いた。
「うむ…」
千弦は遠くを見るように目を細めた。
「わしの父親と山路さんのおやじさんが入植したとき、何もないこの地に名前を付けようとしたが、なかなかいい名前が浮かばなかった…。ある日の夜のこと、わしの親父と山路のおやじさんが川に水を汲みに行ったとき、まん丸なお月さんと、まさに降ってくるような星空を見あげて、広大な北海道の大地に降ってくるようなたくさんの星…。星が降る里、北星と名付けたんだ」
千弦はそう言って笑った。
絵里は感動に胸を震わせながらも、神妙な気持ちで千弦の話を聞いていた。
あの札幌が、江戸幕府の崩壊で失業した日本全国の侍やその家族が切り開いたのだ。そんなことは中学の社会科の歴史の中でも教えてくれなかったことだ。そしてこの北星にも屯田兵が入植していた。北星の名付け親は千弦和尚の父、松海道元と、北星神社の神主の父、山路平次郎だったという。
絵里は、感動にあふれてくる涙をふきながら、千弦の話の要所要所を懸命にメモした。
何もない原始の森の川辺にたたずみ、ふたりの入植者が降るような星空を見上げ、自分たちが開拓しようとしているこの土地に北星という名前を付けた。この先の開拓の苦労を知りつつ、そして自分たちが開拓して豊かに稲穂がなびく北星の地を想像しながら、その心の中にはどんな思いが錯綜していたのだろうか。
絵里は北星の百十八年という歴史の重みを知った思いだった。
千弦と富士子は、涙を流す絵里を見つめながら顔を見合わせた。
「わしの父親と山路さんのおやじさんたちが入植して十年も過ぎるとなあ…。開拓民も増えて、このあたりに住み着いた家の子供も大

きくなったり、新しく子供が生まれたりしてくる。そうなると、親としては子供の教育が気になってな…。北星に学校を作ろうという話が持ち上がった」
千弦は言った。
「先生たちの…。いまの社宅があるあたりに、むかし岩村さんの納屋があった。岩村さんはその納屋を使ってもいいと部落に申し出た。その納屋を部落のみんなで改築して、手書きの教科書を部落の大人たちが作った。それこそ木で作った机と椅子で、五人の子供たちが勉強を始めたんだが、さてさて…」
千弦はそこまで言うと、笑い出したいのをこらえて絵里を見た。
「さて、困ったことに、生徒はいるが、先生がおらんのだよ」
千弦はそう言ってとうとう笑い出した。
「えーっ？。先生がいなかったんですか？」
絵里も笑った。
「そういうことだ」
千弦は笑いながら絵里を見た。
「そこで、だれか勉強を教えてくれる人はおらんものかとさがした…」
千弦はお茶をひと口飲んだ。
「間が良かったというのか…。六年ほど前に死んでしもうたが、スキー場のふもとにいる瀬川のじいさんが、あの当時では珍しく函館の尋常高等学校を卒業していてな。畑仕事の合間に子供たちに勉強を教えることになった。それが北星の学校の始まりだ」
千弦は遠くを見る目で言った。
「瀬川さんのおじいちゃんが…」
絵里は感心したように千弦を見つめた。
「たしか、初代の校長先生…」
絵里は、校長室の壁に飾られている歴代校長の写真を思い出した。
「うむ…」
千弦はうなずいた。

「いまは、小学校も中学校も、北海道で一番といわれるほどに高い学力をもっている。高校もしかり…。北海道のあちこちから、北星の学校に入学を希望する生徒が集まってきよる…」
千弦はまたお茶を飲んだ。
「瀬川のじいさんの教え方が良かったということもある。だから、のちになって小中学校合同の校舎ができたとき、絵里ちゃんが言ったとおり、初代校長にも選ばれた」
そう言っているところに、富士子が古いアルバムを持ってきた。
「これができたばかりの学校で、これが瀬川さんのおじいちゃん」
富士子は、色あせてセピア色になった写真の一枚を指さして絵里に見せた。
絵里は、口ひげを生やし、五人の生徒たちの真ん中に座っている人物を見つめた。古い納屋の入口に、〈北星学校〉と墨で大きく書かれた看板が下がっている。子供たちはみんな着物姿だ。そのほか、アルバムに貼ってある写真には、一枚一枚の説明と写した日付がインクで書かれていた。
「北星の、初めての先生と生徒たちなんですね…」
絵里は感慨ぶかげに言った。
「あの…」
絵里は千弦と富士子を見た。
「このアルバム、二、三日お借りできないでしょうか。コピーして自由課題の参考にしたいんです。大切にしますから…」
絵里はそう言ってふたりを見つめた。
「どうぞ…。絵里ちゃんの勉強に役立つんだったら、喜んで」
富士子は笑ってアルバムを絵里に渡した。
「ありがとうございます！」
絵里はふたりに頭を下げた。
「瀬川さんとこのおじいちゃんが、北星で最初の先生だったなんて…。和尚さまのお話もそうですけど、なんだか新しい発見ばかりです。瀬川さんのおじいちゃんってすごい人ですね」

絵里は満面の笑顔でアルバムを見つめた。
「うむ…」
千弦は大きくうなずいた。
「人と育ち、土と育ち、山と育て…。それが瀬川のじいさんの教育方針だった。その意志は、小学校、中学校、高校の校歌の中に今でも生き続けておる。だから、北星の生徒たちは、勉強ができるのも北海道で一番だが、先生や家庭のしつけも北海道で一番しっかりしとる。子供同士のけんかや争いなどは、学校ができていらい聞いたことがなかった。ただ、数年前にたった一度だけあったがな…」
千弦は境内の木々を見つめながら言った。
「ま、しかし。北星には、多少すっとぼけてはいるが、なかなか切れ者の区長もいるし、しっかりした番長もおる。あのめぐみちゃんがいるかぎりは、北星の学校も安泰というところか…」
千弦はそう言って笑った。
「はい。すばらしい先輩です。わたしも、めぐみ先輩にはたくさんのことを教えられています」
絵里はそう言いながら、帰省している太田めぐみを思い出した。
「そういえば、せんだってのお盆のことだが…」
千弦は、そう言って鐘つき堂に目をやった。
「墓参りに行って、部落のみんなが驚いたそうな…。どの墓もきれいに草がむしられて、野に咲いている花だろうが、それを供えて、線香まで焚いたあとがあったという…」
和尚は笑った。
「聞けば、水島さんとこの店で、線香を三箱も買っていった女の子がいたそうだが、いったいどこの誰が、野花と香をたむけたのか…。今までにはなかったことだと、みんな首を傾げるや、その優しい心に感心するやら…」
「……」
千弦は目を細めて、だまって下をうつむいている絵里の横顔を見た。富士子も座っている絵里にほほえんだ。

「昔は、今のように火葬ではなく、みんな土葬だったことを知っとるか？」
千弦が言った。
「土葬？…」
絵里は千弦の顔を見た。
「そうとも。昔は火葬場がなかったからのう。白い死に装束を着せた遺体を、ほれ、いま絵里ちゃんがしているような、ひざを曲げた格好で、丸い棺おけに入れたまま土に埋めるんだ。だから、そうやって座ったまま骨になっとる。今でも墓地の半分近くは土葬のままだ」
千弦はうれしそうな表情で言った。
「……」
絵里は目を丸くして千弦と富士子を見比べた。富士子は口に手をあてて笑っている。
「大事な家族を失って悲しみに暮れている人は、時にはその墓を掘り返して棺おけを開け、腐敗したり、白骨となって変わり果てた姿の肉親と対面したこともあるという。ま、気持ちはわかる…」
千弦は遠くを見るような表情で言った。
「ははは…」
千弦は笑った。
「墓地に行くのが気味悪くなったかな」
千弦が言った。
「いいえ、そんなことはありません」
絵里はお茶をひと口飲んで答えた。
「お墓や、お寺や神社には、その土地の歴史が刻まれているとわたしは思うんです。お墓に刻まれている名前や日付を見ると、その一軒一軒に、それぞれの家の歴史があって…。わたし、そういうのを見たり聞いたりするのが好きなんです」
絵里は言った。
「はは…。こんな話を聞くと、たいていの女の子は墓地なんてとこ

ろは気味悪がって行こうとしないものだが、絵里ちゃんは変わっとる…」
千弦の言葉に、富士子と絵里は声を出して笑った。
絵里が時々寺や墓地の中を歩いていたのは千弦は知っていた。はじめのうちはただの散歩だろうと思っていたが、そのうちに手帳を取り出して、墓石や合同慰霊碑に刻まれている字を書き写したり、カメラで撮影したりしていた。
「両親や兄にもそう言われます。ドライブに行ったとき、知らない土地の神社やお寺があると、ついつい寄り道しちゃうんです。両親や兄も、おまえは変わったやつだって…。寄る神社やお寺でお賽銭を入れるものですから、おまえとどこかへ行くと、小銭がいくらあっても足りないって言われます」
絵里は笑った。
「きょうはすごい一日でした。和尚さまとおばさんのおかげで、すごいお米のことや、わたしの大好きな北星の歴史を知ることができました」
絵里は鐘つき堂を見ながら言った。
「和尚さま、おばさん。またおじゃまします」
絵里はそう言うと、茶碗をおいて立ち上がった。
「うむ、またおいで…」
千弦は絵里に言った。
「ごちそうさまでした。アルバムお借りします」
絵里は、アルバムを胸に抱いてふたりに頭を下げると、寺の門に向かって歩き出した。
「花と線香の礼を言うのを忘れとった！」
千弦が大声で後ろ姿の絵里に言った。
その声に絵里は笑顔で振り向き、また千弦と富士子に頭を下げた。
「板倉さん。あなた、歴史学者にでもなるつもりなの？」

夏休みが終わったある日、月丘から教員室へ呼び出しがあった。月丘は絵里が自由課題として提出した史料を手に大きなため息をついた。

絵里が提出した史料には、札幌を開拓した屯田兵のことと、百十八年前に初めて北星の地に入植した松海道元と山路平次郎。そのふたりが北星の名付け親となったことからはじまり、北星で最初に死亡した大沢伊左衛門という人物。その大沢伊左衛門が北星のどのあたりに入植して、作付面積はどのくらい持っていたのか。牛や馬などの家畜は何頭いたのか。また、その大沢家のほか、千弦和尚から聞いたいろいろな話。そして北星で最初の先生となった瀬川藤次郎のことはもちろん、初めてできた北星学校の写真などがメインだ。

次には、いまや全国ブランドになりつつある北星産の土壌回復肥料〈風土〉を開発した北星高校農学科と農家の歴史。野菜や、豚肉や牛肉、鶏肉の安全性やその歴史など。

絵里は北星地区の百二十八軒の家を回って、残っている子孫から話を聞き、どこから北星に入植したのか。それはいつごろなのかなど、言い伝えられているその頃の苦労話や古い写真などを、各家ごとに分けてまとめた。

それぞれの家では、地元の女子高生の訪問に、自分たちの家族のことや祖先の話を進んで聞かせてくれたり、思い出が詰まっている写真なども快く貸してくれた。

そして、畑の隅に捨てられている当時使われていた古い農機具や、朽ち果てそうな物置や納屋。当時の着物、食器や鍋、履いていた靴などを見せてもらい、それをデジカメで撮影し、説明付で史料の中に取り込んでいる。パソコンで編集した八十ページもの史料だ。

ただ、秋に収穫される北星特産の新種米〈月光〉のことには触れずにおいた。

「北星の昔を知る上でも、これはかなり貴重な史料になりそうよ」

月丘はそう言って絵里を見つめた。

「いいお点をいただけそうですか？」

絵里は得意そうに月丘に聞いた。
「これねえ…」
月丘は絵里の自由課題から目を上げた。
「これは、点数を付けるようなものじゃないわ。今まで誰も書かなかった北星の埋もれていた歴史を、あなたが掘り起こしたんだもの」
月丘はそう言ってめがねをはずした。
「学校でキチンと編集して、高校と役場の資料室に保管することにするわ。あなたも協力してね。時間があったらもっと詳しく調べてちょうだい。北星には、まだまだ埋もれている歴史がたくさんあるはずよ」
月丘はそう言って絵里を見つめた。
「先生、お点は…」
絵里は不満そうに月丘を見た。
「もう…。そんな顔しないの！」
月丘は笑った。
「提出したことには違いないもの。ちゃんと点数はあげるから…」
絵里の表情に月丘は吹き出しそうになった。

第8話　学校祭

「八月三十一日の土曜日、毎年恒例の学校祭と北星神社祭りがあります。祭りの前の、学校祭での出し物をそろそろ決めなければなりません。何か案がある人は手を上げてください」

夏休みが終わり、二学期初日の八月十九日、クラス委員長の中山君子が言った。学校祭の出し物はそれぞれの学年で決めて学校側に提出し、指導を受ける手順になっている。団体でも個人でも参加は自由だ。

「昨年は、いまの二年生の先輩方が、男子が主体で楽器演奏をしています。優秀賞でした。最優秀賞は、太田先輩がベルサイユの薔薇でオスカルを演じた、いまの三年生です。今年は一年生が最優秀賞をとれたらいいなと思います。個人芸でもかまいません。だれか自信があるひとはいませんか？」

中山はクラスの中を見渡した。

「板倉、おまえ何か得意なことはないのかよ」

男子の北村が言った。その声に教室はざわめいた。

「そうよ、絵里。何かないの？」

北村の声でみんなが絵里を注目した。絵里はポカンと口を開けたまま目を丸めていた。何か芸はできないかと急に言われても、と絵里は戸惑った。

「あの…」

絵里は手をあげた。その絵里を委員長の中山が指名した。

「特にはできませんが、三年前から札幌のＹＯＳＡＫＯＩ・ソーランチームに所属していましたので、ＹＯＳＡＫＯＩ踊りなら…。でも、ひとりで踊っても…」

絵里は申し訳なさそうにみんなを見渡した。

「板倉さん」

クラスの話あいを聞いていた担任の月丘が立ち上がった。

「ひとりでは見栄えしないのなら、思い切ってチームの人たちに学校に来ていただいたらどうかしら。特別ゲストとして踊っていただくのも楽しいと思わない。そしたら板倉さんも一緒に踊れるでしょう。チームの人たちの移動費やお礼などの必要な費用は、先生が区長さんや校長先生と交渉するから、板倉さんはチームと交渉をしてちょうだい。どうみんな？」

月丘の提言にクラスは大拍手となった。

クラスの話し合いの結果、一年生は全員での十曲コーラスメドレー。そして絵里の電話での交渉が成立し、特別参加として絵里が所属する札幌のＹＯＳＡＫＯＩ・ソーランチーム〈レディース・バイオ〉の出演が決まった。

レディース・バイオは女性だけの学生と社会人チームで、総メンバー百三十人の平均年齢は二十二歳。２００３から２００５年には、参加三〇〇チームの中で三年連続の大賞に輝いた実力チームで、その後のＹＯＳＡＫＯＩ・ソーラン祭りでも、必ずと言っていいほどファイナルに残って準大賞や優秀賞などを獲得している。

絵里の電話を受けたチーム代表の新山亜希子は絵里の願いを快く引き受け、学校祭と北星神社の例大祭に参加することを承知した。仕事の関係でチーム全員は無理だが、土曜日と言うこともあり、百人くらいは集めて行くと言ってくれた。

チームは祭りの前日に区がチャーターした二台の大型バスで到着、女子寮に入っている生徒たちは、北星地区の家にそれぞれ一晩泊まることになり、レディース・バイオの踊り子たちは女子寮に宿泊することに決まった。食事や必要なことについては区が全面的に後押しすることになっている。

そして八月三十日の午後、人口五百人にも満たない北星住民たちの大歓迎の中、二台の貸切バスから、レディース・バイオの踊り子たち百人が道の駅〈星の降る里・北星〉の駐車場に降り立った。迎えに出た板倉絵里はバスから降りたメンバーたちにかけより、ひとりひとりに抱きついて迎えた。

その夜は、チームリーダーの新山亜希子をはじめとする百人の踊り子、北星区長、区議会議員、小・中学校、高校の校長、教頭、各担任の教諭、住民などを交え、道の駅の駐車場で歓迎パーティーが行われた。

ＹＯＳＡＫＯＩ・ソーランの踊り子たちは、もともと人前で目立ちたいという願望がある。華やかな衣装に身を包み、独特の化粧をすることで、踊り子たちはまったく違う人間に生まれ変わるのだ。

集まった踊り子たちは、住民が用意してくれた酒と焼肉で盛り上がった。そうなれば当然あちこちで踊りだす。しまいには江島区長をも引っ張り出し、鳴子を握らせて一緒に騒ぎ出した。もちろん絵里も嫌がる月丘恵子と太田めぐみを引きずり出し、懐かしい仲間たちと鳴子を手に踊りだしていた。

「絵里…。あんた、なにやってんのよ！」

次の日の朝、鏡に向かっていた絵里を見てめぐみは大声をあげた。振り向いた絵里はどぎつい化粧をしてめぐみを見つめていた。

「本番のときの化粧を練習していたんです。変ですか？」

絵里は笑ってめぐみを見た。振り向いた絵里の顔は、まるで歌舞伎役者のようだった。

「それって、ＹＯＳＡＫＯＩの化粧なの…」

めぐみはそう言って絵里を見つめた。

「はい。いつもはもう少し控えめなんですけど、リーダーから、今回はこうしなさいって言われたんです…」

口を開けて見つめるめぐみに絵里は言った。

めぐみは大きなため息をついて椅子に座った。めぐみの脳裏にある思い出が…。それも、決して思い出したくない忌まわしい悪夢がよみがえっていた。

八月三十一日、午前中の三時間、体育館を借り切ってチームのメ

ンバーに囲まれ、絵里は半年間のブランクを取り戻すための練習をした。
「絵里、２００３年の踊りは少しアレンジするから、しっかり覚えてね」
チームリーダーの新山亜希子は汗の光る笑顔で言った。
「最後の三振りめは絵里のひとり舞いでいくからそのつもりでね。きょうはあなたがスターよ！」
新山は絵里の肩をたたいた。
「はい！。ありがとうございます！」
絵里はペコリと頭を下げた。
八月三十一日午前十時、北星高校の学校祭が開催された。小さな村の北星は、高校の学校祭や体育祭には各家の人たちはもちろん区長も参加し、地区をあげてのお祭りとなる。
その日、会場となった北海道随一の大きさを誇る北星高校体育館は早朝から超満員となった。プログラムでは一年生の十曲コーラスメドレー、二年生のエレキギター演奏、三年生の演劇に続き、特別ゲストとして絵里が参加するＹＯＳＡＫＯＩ・ソーラン踊りとなっている。
午前十一時三十分、各学年の出し物が終わった。最優秀賞は、ドラマ〈北の国から〉をパロディ風に演じて会場を爆笑のうずに巻き込んだ三年生の〈北星の村から〉が受賞した。主演の黒髭八郎を演じた南野良和は最優秀個人演技賞に輝き、地元産の米六十キロが賞品として贈られた。優秀賞は二年生のエレキギター演奏の〈ベンチャーズ・メドレー〉。準優秀賞は一年生の〈十曲コーラス・メドレー〉と、順当な成績に終わった。
そして学校も住民も心待ちにしていた、ＹＯＳＡＫＯＩ・ソーラン踊りの時間がきた。
体育館の照明が一斉に消され、スポットライトが体育館の両サイドのドアに当てられた。体育館のドアが開き、蝶のようなあでやかな衣装に身を包んで、それぞれ思い思いに化粧をしたレディース・

バイオの踊り子たちが、開け放たれた左右のドアからスポットライトのなかを両手を広げ、衣装の袖をなびかせながら駆け足で入場すると、会場から大きな拍手と歓声がわきあがった。
踊り子たちが体育館の壇上に勢ぞろいした。大きな拍手と歓声のなか、代表の新山亜希子がスタンドマイクの前に立った。
「北星の皆さん、こんにちわ！。札幌のＹＯＳＡＫＯＩ・ソーランチーム、レディース・バイオです。昨夜はたくさんのご馳走をありがとうございました。きのうのご馳走で、踊り子たちも太りぎみですので、少しダイエットが必要です。一生懸命踊りますので、どうぞよろしくお願いいたしまーす！」
新山亜希子の声が体育館に響いた。会場からまた大きな拍手が沸いた。
「わたしたちのメンバーの板倉絵里が、ここ〈星の降る里〉北星高校でお世話になっています。板倉絵里はチームの最年少で、我がチームのアイドルです。そのアイドルも、きょうはチームの一員となり、みなさんに踊りを披露いたします。どうぞ大きなご声援をよろしくお願いいたします！」
新山亜希子のあいさつにまた大きな拍手が起きた。
拍手が鳴り止み、新山亜希子はステージ横のマイクに移動した。メンバーたちは両手に真紅の鳴子を持ち、足を半歩開いて身構えている。
「レディース・バイオ、準備はいいかーっ！」
新山亜希子がマイクに叫んだ。
「ヨィヤサーッ！」
壇上に並んだ踊り子たちが叫んだ。
「北星で、ぶっこわれる覚悟はあるかーっ！」
「セイヤーッ！」
「きのうの焼肉で、太ったかーっ！」
「ヨィヤサーッ！」
「思いっきり踊って、ダイエットするぞーっ！」

「セイヤーッ！」
北星高校の体育館に百人の踊り子たちの威勢のいいかけ声が響いた。
「レディース・バイオ、まいります！」
新山亜希子がマイクを握った。そして音楽が体育館に流れた。華やかな衣装の踊り子たちがステージせましと華麗な舞をくりひろげた。
「エンヤサ、ドッコイショ！」
「ソーラン、ソーラン！」
初めて見る生のＹＯＳＡＫＯＩ・ソーラン踊りと、あでやかな衣装の踊り子たちの熱気に圧倒され、体育館の住民と学生たちの目はくぎ付けとなった。新山亜希子の威勢のいいかけ声と一糸乱れぬ鳴子の音、大音響の音楽が響きわたっている。
ＹＯＳＡＫＯＩ踊りは四国の高知県が発祥で、その踊りと北海道のソーラン節を合わせたのがＹＯＳＡＫＯＩ・ソーランだ。一曲の踊りが五分以内。曲や衣装は自由だか、必ず北海道のソーラン節の一節を入れると決められている。その五分の間に入場から終わりまでをまとめるのだ。
レディース・バイオはたて続けて二曲の踊りを披露した。そのたびに体育館は大歓声と拍手に包まれた。そして三曲目の２００３年の踊りを迎えた。
踊りは前半の静かな舞から始まり、堰を切ったような中半の激しい舞へと移っていった。そして後半に入ると、メンバーたちがいっせいに左右に分かれた。前列はしゃがみ、後列になるにしたがい姿勢を高くして半円を描くような形になった。リズムをとる踊り子たちの規則正しい鳴子の音だけが、カチャッ、カチャッと体育館に響いている。チームリーダーの新山亜希子が絵里のために演出した踊りの始まりだった。
列の中からひとりの踊り子が半円の中央に進み出た。目を切れ長に化粧した板倉絵里だった。

半円の真ん中で絵里が踊り始めた。両手に鳴子を持った絵里は、静かな音楽に鳴子の音を響かせ、歌舞伎役者のように口元を引き締め、一点を見つめたまま踊っている。そして音楽が速いテンポに変わると、それまでの表情は一変し、絵里の表情に笑顔が浮かんだ。

メンバーが作った半円の中心で、絵里は衣装をひるがえして舞った。体育館の住民と学生たちの目は、水を得た魚のようにはじける笑顔と汗が光る板倉絵里の踊りにくぎ付けとなった。そしてフィナーレ。ステージの真ん中で見栄をきった絵里に、半円になっていたメンバーがいっせいにその輪を縮め、その中心から仲間の肩に担ぎ上げられ、鳴子を口にくわえた絵里がポーズをとって浮き上がった。

「ヨーーーッ！」

「ヨィヤサーッ！」

新山のかけ声で全員が最後の見栄を決めると、会場となった体育館の全員が立ち上がり割れんばかりの大声援と拍手が沸きあがった。

「やったね、絵里！」

「最高だったよ！」

「よかったね、絵里！」

絵里はメンバーの全員の祝福を受け、涙を流しながらひとりひとりに抱きついた。会場の拍手と歓声は、踊り子たちが体育館から消えるまで鳴りやまなかった。

その日の午後からは北星神社の例大祭が行われ、レディース・バイオはそこでも三曲のよさこいソーラン踊りを披露した。

そのレディース・バイオと、半円の中でひとり舞いをする化粧した板倉絵里のアップの写真が合成され、〈星が降る里・北星〉の広報ポスターとして大量に印刷されて区のあちこちに掲示されることになった。

レディース・バイオのメンバー百三十人全員は、北星の名誉区民として登録され、北星を札幌に次ぐ第二のホームグランドとして、区長の要請があれば最優先で訪れることを約束したのだった。さらに江島区長の申し出で、北星はレディース・バイオの準スポンサー

となることになり、活動に必要な資金面でも、区の予算に年間三百万円を計上することになった。

第9話　門　限

北星駅のベンチにひとりの女性が座っていた。
五日前から毎日、朝の九時ころになると駅に来て、天気の良い日はホームのベンチで物思いにふけり、天気の悪い日は駅舎の中で過ごしている。そして日が落ちると投宿している駅前の辻村旅館へと帰ってゆく。
「なんか気になってねー…」
日曜日の午後、ひとりで駅にきた絵里に、水島アキヨはそう言いながらホームのベンチに座っている女性の後ろ姿を見た。
「辻村の女将も、なんか心配でって…。宿賃は十日分前払いしているらしいんだけど、女がひとりで五日間もっていうのは、わけありとしか思えないってね…」
アキヨはまた駅のベンチに座っている女性を見た。
「駅に、何か思い出があるのかもしれませんね」
絵里はそう言ってホームを見た。
「わたし、いろいろお話をお聞きしてきます」
絵里は笑ってアキヨに言った。
「でもさー。なんかねー…」
アキヨは心配そうに絵里を見た。
「アハハ…。駅でいろいろ考えるのは、わたしだけだと思っていたのに…」
絵里はそう言いながら駅舎の横からホームの階段を上った。
絵里はホームの一番前にしばらく立っていたが、やがて女性が腰をおろしているベンチのほうに歩を進めた。
「こんにちは…」
Tシャツとジーンズ姿の絵里は、座っている女性に頭を下げた。
「こんにちは…」
笹野美佐子はベンチに座ったまま、声をかけてきた少女に小さく

頭を下げた。
「きょうはいいお天気です」
絵里は、飛び回るトンボを目で追いながら言った。
「おばさま、ご旅行ですか？」
絵里は笑顔で聞いた。
女性は四十歳くらいか。涼しげな顔立ちの美人だった。このあたりでは見ない上品なスーツに身を包んでいる。座っている横には赤いショルダーバックが置かれている。
「そう…。ここへ来てから五日になるの。静かでいいところ…」
美佐子は線路の向こうに見える北星神社と、その右手に見えるスキー場を眺めながら言った。
「わたし、板倉絵里といいます。ここの北星高校の一年生です」
絵里は自己紹介をしてまた頭を下げた。
「そう…。絵里ちゃんか…」
美佐子は目を細めて絵里を見上げた。
「こんなきれいなところが故郷だなんて、うらやましいわね」
美佐子はそう言ってまた線路の向こうに視線を移した。
「あ、いいえ。わたしの故郷は札幌なんです。ここの学校に入学しただけで、故郷というわけでは…」
絵里も線路の向こうを見つめた。
「でも、やっぱり故郷でしょうか…。わたし、この北星が大好きで、きょうのようにお天気のいい日には、いつもここにくるんですよ」
絵里は笑った。
「札幌には、大好きな両親と兄…。犬のトムもいて…。でも入学してから今まで一度も札幌に帰っていないんです」
絵里は北星神社を見つめたまま言った。
「一度も…」
美佐子は驚いた表情で絵里の後ろ姿を見た。
「はい…」
「……」

高校一年生の女の子が、入学以来一度も故郷の札幌に帰っていないとは…。なにかの事情があってのことなのか。
美佐子は無言で板倉絵里という少女の横顔を見つめた。札幌が故郷だという。
高校一年生にしては背が高くてスタイルもいい。たしかにこのあたりには似つかわないような美少女だ。こんなに素直そうな少女が、ここの高校に入学していらい一度も帰省していないとは、何か訳があるのだろうか。
少女は無言で線路の向こうを眺めている。その横顔には少しの寂しさが浮かんでいるように思えた。
「わたしは笹野美佐子。よろしく…」
美佐子は絵里に名乗った。
「はい。よろしくお願いします」
絵里は笑顔で振り向いた。
「よかったら座らない？」
美佐子が言った。
「はい。失礼します」
絵里は笹野美佐子と名乗った女性の横に腰を下ろした。
「……」
「……」
ベンチのふたりはしばらく黙ったまま線路の向こうを眺めていた。
「あなた…」
美佐子は前を見たまま口を開いた。
「一度も札幌へ帰っていないって言ったけど、なにか帰れない事情でもあるの？」
美佐子は絵里の横顔を見た。
「いいえ。特に事情はないんですよ」
絵里は笑った。
「だって、夏休みもあったでしょうに、一度も帰らないなんて…。ご両親とけんかでもしたんじゃないの？」

美佐子は絵里の顔をのぞきこんだ。
「いいえ」
心配そうに聞く美佐子の言葉に絵里は笑った。
「わたし獣医になりたくて北星高校を選んだんです。はじめはここの高校に入学するって知ったとき、あまりの田舎に両親も少しびっくりしてましたけど、今は反対はしていませんし、自分で選んだ学校だからしっかりやれって…」
絵里はそう言った。
「寂しくないって言えば嘘になります。札幌の町並みや、わたしの両親や兄がいる家のことを思えば、すぐにでも帰りたいって思います」
「だったら…」
「だめなんです…」
絵里はうつむいて首を振った。
「わたし弱虫で泣き虫だから、一度でも札幌に帰ってしまったら…。札幌の家で何日か過ごしてしまったら、北星に戻ってくるのが嫌になってしまいそうで…」
絵里はつぶやくように言った。
「そんなふうに、寂しくなったり悲しいことがあったりしたときは、わたし、この駅のホームに来て線路を見ているんです」
絵里はそう言って顔を上げた。
「駅って不思議ですよね。頭の中で行きたいところを思い浮かべると、たいていは行けるんですよ」
絵里は笑った。
「わたしの担任の月丘先生が、もしも札幌が恋しくなったら、駅のホームで線路を見なさい。こんな小さな田舎の駅でも、線路だけは札幌に続いているからね、って…。そう言ってくれたんです。だからわたし、寂しいときや札幌が恋しくなったとき、いつもここで線路を見るんです。この線路は大好きな家族がいる札幌に続いているから…」

絵里はそう言って滝川方面へ続く線路を見つめた。
美佐子は無言で絵里の顔を見ている。
水島夫婦が駅舎の影からその二人を見ていた。
「あの女性にどんな思惑があるのかは知らんが…。おそらくは明るいものではのうて、察するところ暗いものじゃろう。じゃが、人それぞれに事情があるというものだ。絵里ちゃんに任せておけばいい。絵里ちゃんならば、夜だけにしか生きられない暗い心をきっと明るくしてくれるじゃろう」
水島玄作はそう言ってアキヨの肩をたたいた。
「そうだね…」
アキヨは、ホームの二人を見たまま何度もうなずいた。

「あなたは心が強いのね…」
美佐子は前を見たまま言った。
「……」
「わたしはだめ…。何でも一番楽なほうを選んでしまって、そんな自分が時々いやになってしまうの」
無言の絵里に美佐子は言った。
「つらいことや悲しいことを、いつまでもずるずると引きずって生きてきたような気がする…。自分だけが悲劇のヒロインみたいな気になってね」
美佐子は線路の向こうから足元に視線を落とし、ふと笑った。
「…。おばさま、一緒に食べましょう」
絵里はポシェットの中からお菓子を取り出して美佐子に笑いかけた。美佐子も笑ってそのお菓子を受け取った。
「おいしい…」
美佐子はお菓子を食べながら、目を見開いて絵里を見つめた。
「……」
「……」
ふたりはしばし無言で線路の向こうに見える北星の景色を見つめ

ていた。
「本当に静かで小さな田舎ね…」
キリギリスが鳴き、時折牛が鳴くのを美佐子は目を細めて聞いていた。そしてひとつため息をついた。
「でも、ちゃんと学校もありますし、旅館や雑貨屋さんだってあるんですよ」
絵里は笑って言った。
「この北星は百十八年の歴史があって、明治十九年、この土地にはじめて入植した人は、屯田兵として北海道に渡ってきたお寺の松海道元さんと、神社の山路平次郎という人で、そのふたりが川に水を汲みに行ったとき、降るような星空を見上げながら、星の降る里〈北星〉って名前を付けたんです」
絵里は、夏休みに松海和尚や北星の各家庭で教えてもらった北星の歴史の中で、一番記憶に残っているところをかいつまんで話をした。
「アハハ…」
美佐子が笑った。
「へえー、絵里ちゃんは歴史が得意なのね」
「はい、大好きです！」
絵里は満面の笑顔で言った。
「ねえ…」
「はい？」
「ここにはお巡りさんって、いるの？」
美佐子が聞いた。
「はい。七瀬さんっていう駐在さんがいます」
絵里は答えた。
「どんなお巡りさん？。いい男？」
美佐子は笑って聞いた。
「年は二十七歳か二十八歳くらいで、とっても思いやりがあって親切なお巡りさんです。わたしはハンサムだと思うんですけど、まだ

お嫁さんがいないんですよ」
絵里は駐在の七瀬の顔を思い出して笑った。
「わたしね…」
美佐子は笑う絵里から線路の向こうに視線を移した。
「死のうと思って…」
美佐子は下をうつむいた。
「え？…」
絵里は驚きの表情で美佐子を見た。
「死のうと思って、いろいろな町を旅して歩いているの…」
美佐子は顔を上げて線路の向こうを見た。
「……」
絵里は線路の向こうを見つめている美佐子の横顔を見つめた。
「男に…。妻子のある男の人を好きになって、同棲までしたんだけど、結局その男の人は奥さんのところに帰っていった…」
美佐子はそう言ってまた下を向いて笑った。

八年前。
笹野美佐子は東京の港区にあるアピカという大手広告代理店で働いていた。三十歳のときだった。
得意なパソコンのグラフィックソフトを駆使して、注文が入った広告のレイアウトからコマーシャルビデオまで、まわりが舌を巻くほどの斬新な作品を次々と作り出し、関東一円でもアピカの笹野といえば業界の誰もが知る存在となった。月収もそれまでの二十万円から一気に七十万円までなり、都内の高級マンションに住めるようになった。
一流会社のコマーシャルともなれば、その作品が売れれば三百万から五百万円の報酬が入ってくる。〈切れ味一番！〉というううたい文句で売り上げを大きく伸ばした某ビール会社のテレビコマーシャルも、六年前に美佐子が作ったものだ。

美佐子の評判を聞きつけた大手の会社からは次々と仕事の依頼が入るようになり、眠る時間も惜しむように美佐子は仕事をこなしていった。気が付いてみると、銀行の預金も二億円を超えていた。

たまたま担当した大手電気会社の製品開発をしていた二歳年下の男と知り合ったのはその頃だった。製品の特徴や売り出し文句などで打ち合わせをするうち、美佐子は少しずつその男に惹かれていった。

どことといって特徴のある男ではなかったが、三十歳まで独身だった美佐子には、物静かで礼儀正しいその男が新鮮に見えた。その男には妻子があることを承知で、美佐子は男を自分のマンションに招き入れたのだった。

「でも、そんな関係はいつまでも続かなかったわ…」

美佐子はそう言ってため息をついた。

付き合うようになってから一年が過ぎた。その頃になると、毎日のように美佐子のマンションを訪れていた男は、三日に一度、一週間に一度と、少しずつマンションにくる間隔が空いていった。

「もう来れない。これっきりにしたい」

ある日のこと、男は美佐子にそう言ってマンションを出て行った。美佐子は唇をかみ締めて男の後ろ姿を見つめていた。

それから何度か男の会社や携帯に電話をかけたが、電話に出た男は美佐子に業務的な返事をするだけで、男の心がすっかり冷め切っていることを思い知らされるだけだった。

三十歳で初めて心から好きになった男は、その美佐子から離れて家族の元へと帰っていったのだ。しかしそれも仕方が無いことだと美佐子はあきらめた。しょせんは妻子ある男に惚れた自分が悪いのだと。

男と別れて二ヶ月が過ぎた頃、美佐子が創作した大手旅行会社の広告ポスターの原版がアピカに対抗する広告会社に流れ、美佐子が創作したものに少し手を加えた形で発表されるという事態が起きた。その原版は二ヶ月前にほぼ完成し、マンションの仕事部屋に保管し

てあった。会社の依頼で、行楽シーズンに入る一ヶ月前に大々的に発表し、全国の旅行会社や空港などに張り出す手はずになっていた。
代理店からは企業秘密を漏らした裏切り者のレッテルを貼られ、背任罪で告訴される寸前にまで事態は発展した。代理店への損害賠償金として四千万円を美佐子は支払い、退職した。
美佐子は東京でも評判の高い探偵を雇い、その原版がどんなルートで対抗馬の会社に流れたのかを調べさせた。
そして、アピカに対抗する広告代理店に原版を流したのが、美佐子と別れた男だったと知ったとき、全身から力が抜けるような虚脱感に襲われた。男は美佐子と別れる少し前に原版をカメラで撮影し、七百万円でアピカの対抗代理店に売り渡したのだった。
美佐子はうつろな目で探偵社からの報告書を見つめた。
許せなかった。
妻子がいるのを承知で自分が勝手に好きになった男だ。浮気相手の女に飽きれば自分のもとを去るのは仕方の無いことだ。しかし、美佐子が精魂込めて創作した作品を、こともあろうに対抗する代理店に売り飛ばしたのは絶対に許せなかった。七百万円というお金と引き換えに笹野美佐子という人間を侮辱し、それまで築き上げた信用や実績までをも失墜させたのだ。
「話があるの。来なかったら、わたしとの関係を奥さんや会社に言いふらすわ」
ある夜、美佐子は男の会社に電話をして、築地の港に呼び出した。
「わたしの名誉は、たった七百万円なの？」
時おり岸壁に打ち寄せる波の音の中で、美佐子は男を見据えて言った。
「あなたは、たった七百万円でわたしの人生をメチャメチャにしたのよ！」
そう言った美佐子の声は、やり場のない怒りで震えていた。
「ふん。あんな作品だったらいくらでも作れるじゃないか。ひとつくらい売り飛ばしたっていいだろう。俺のおかげで、その年まで男

に縁がなかったおまえだって、それなりにいい思いもしただろう。七百万じゃ安いくらいだ」
男はそう言うと、美佐子に背中を向けてタバコに火を付けた。
「……」
美佐子は男の後ろ姿を見つめたまま、バックの中から刃渡り二十センチほどの文化包丁を取り出した。
美佐子の足元に、背中に深々と文化包丁が刺さったままの、命の無くなった男の死体が横たわっていた。
わたしの人生は終わった。
足元の死体を見ながら美佐子はそう思った。
人気のない築地の岸壁で、近くにあったロープで数個のコンクリートブロックを男の死体に縛り付けた美佐子は、背中に包丁が刺さったままの死体を海に投げ込んだ。
マンションに戻った美佐子は、自分のしたことに全身が震えた。まんじりともせすに朝を迎えた美佐子は、午前四時ころにテレビのスイッチを入れたが、朝のニュースに事件の報道がされていないのを知った。まだ死体が発見されていないのだった。
美佐子は午前九時になるのを待って取引銀行に電話をし、事業の資金に必要だから、急きょ一億五千万の預金を引き出すことを告げた。
銀行の支店長は、いくらお得意さまでも、他行への振込みであればともかく、一千万円を超える現金の引き出しは次の日になると言ったが、事業が成功してもあなたの銀行とは二度と取り引きはしない。口座も即座に解約する。それでもいいのかと言う美佐子に、慌てた支店長は午後一時までに準備すると美佐子にわびを入れた。そしてその日の午後、美佐子は何事もなく一億五千万円の現金を手にした。
そしてその日の夕方、警察の手がまだ自分に向いていないことを確認し、美佐子は北へ向かう夜行列車の座席に身体を沈めていた。列車の窓に映る自分の暗い顔を美佐子はうつろに見つめていた。

心と身体が傷ついた女は、なぜかみな北へと向かうという。コートの襟をすぼめて夜行列車の座席に身を沈める自分も、やはり北へと向かっていた。

「勤めていた代理店に四千万円の損害金は取られたけど、それでも預金が一億五千万円以上あったから、警察の目がわたしに向く前の、事件の次の日の午前中に取引銀行に電話して、預金を引き出したの」

美佐子はそう言って神社のほうに視線を移した。

「今の制度で…。ほら、最近振り込め詐欺がはやってるから、一般の人でも百万円以上の引き出しは、前の日に連絡しておいて、窓口へ行って通帳と印鑑を使わなきゃおろせないでしょう。わたしの場合は、一応大口預金者だから強気に出れたのね…」

美佐子は笑った。

「気が付いたら津金海峡を渡っていたの。逃げられるだけ逃げてみようって決めてね…。口座が凍結される前だったから助かった…。旅館においてあるカバンの中は、まだ現金がいっぱい」

美佐子はそう言ってふと笑った。

「あれから八年。殺人者のわたしは逃げ続けたわ。殺した男が夢に出てきて、警察に捕まって牢屋の中にいる夢に毎日うなされながら…。隠れるようにして、泊まっているホテルからは、昼間は出ないで夜だけ出歩いて。それでも町で目に付く警察官やパトカーに怯えながら、まわりから顔を伏せるように、その日その日を生きて…」

美佐子は前を見たまま言った。

「……」

絵里は黙って美佐子の話を聞いていた。

「でも女なんて、髪形を変えたり、めがねをかけたり、服装や化粧を変えたりすれば、よほど親しい友達でもわからないくらいに化けられるわ」

美佐子は笑った。

「お金はあったから毎日がリッチだった。美味しいものを食べて、素敵な服を買って…。北海道の街から街を渡り歩いたの。一時は本州の東北や九州の田舎町に行ったこともあったけど、やっぱり北海道って最高！」

美佐子は空を見上げて言った。

「殺した男のことなんか、さっさと忘れてやろうって思った。でもだめだったわ。夢の中に出てこられたんじゃ、忘れようにも忘れられないもの…」

美佐子はそう言うと、立ち上がって大きく伸びをした。

「もう疲れた…。どんなに逃げ回っても、しょせんは狭い日本だし、理由はどうあれ、人を殺したことの罪からは逃げられない…。わたしの手は、落とすことの出来ない血で汚れているわ」

美佐子はベンチに座っている絵里を見た。

「何度も死ぬつもりで北海道の田舎をまわったわ。死ぬのなら北海道でって決めたのよ。線路があるところを選んで、いつ列車に飛び込もうかって思いながら…」

美佐子は滝川に続く線路を見つめた。

「おばさまのお話、わたしには難しくてよく理解できませんけど。でも、わたし思うんですけど。死んでしまうよりも、生きていたほうが、きっと…。生きていれば、きっと、またちがう生き方もあるような気がしますし、一生懸命に洗って落ちない汚れって無いと思います」

絵里も立ち上がって伸びをした。

「月丘先生の受け売りですけど、寂しくなったら線路を見るといいですよ。どんなに田舎の線路でも、きっと楽しい思い出や、生まれ故郷のある場所に続いていますから…」

絵里は笑顔で美佐子に言った。

「うん…」

美佐子は線路を見たままうなずいた。

「ねえ…」

美佐子は絵里を振り向いた。
「はい」
「わたし、ハンサムな七瀬巡査に会いたいわ。案内してくれるかしら」
美佐子はそう言うと、ショルダーバックを肩にかけた。
「……」
絵里は驚いた表情で美佐子を見つめた。
「そんな顔しないで」
美佐子は笑った。
「絵里ちゃん。あなたに会えてよかったわ。暗い闇の中をさまよっていたわたしの心が、あなたとお話して救われた思いよ」
美佐子はそう言うとホームの階段を一歩降りた。そして立ち止まると、滝川へと続く線路をじっと見つめた。
「ねえ、案内してくれないの？」
悲しそうな顔でホームに立っている絵里を見上げ、美佐子は微笑んだ。
絵里は無言で階段を降りると美佐子の前に出て歩き出した。その目から涙があふれた。
悲しい人生を送って、八年間の逃避行にみずから終止符を打とうとしている女性が自分の後ろから歩いてくる。その終止符を打つ場所に自分が案内しようとしているのだ。
絵里と美佐子の後方に太陽が沈みかけている。ゆっくりと歩くふたりの前に長い影が伸びていた。
「八年前の九月八日に、東京の築地で、塚田信明という男性を殺した笹野美佐子です」
絵里に案内されて北星駐在所についた美佐子は、七瀬巡査長に頭を下げて言った。
「どうぞ…。お座りください」
七瀬は戸惑いながら、美佐子と絵里を交互に見つめて椅子を差し出した。

美佐子からだいたいの事情を聞いた七瀬は、年に一度富良野警察署から回ってくる全国で起きた未解決事件の簿冊を調べたが、八年前に東京で起きたという塚田信明にまつわる殺人事件は載っていたなった。もちろん笹野美佐子という名前での指名手配もない。
「あなたがおっしゃる事件は、全国の未解決事件にも、塚田信明さんという行方不明捜索願いも出ていないようです」
七瀬は簿冊を閉じて美佐子に言った。
「では、まだ塚田の遺体が見つかっていないんですね」
美佐子はそう言ってうつむいた。
「でも、わたしは確かに塚田信明を包丁で刺して殺しました。死体は築地の岸壁からコンクリートブロックを縛り付けて沈めたんです」
美佐子は言った。
「東京ですと、警視庁管内ですから電話をして確認してみます。とりあえずは、詳しい事情を…」
七瀬はそう言って調書を取る準備をした。
「もしもあなたの言うとおりですと、死体を捜索して発見されて、あなたが言う包丁や、それによる刺し傷があった場合、緊急逮捕されて東京へ護送されることになります」
七瀬は言った。
「よろしくお願いいたします」
美佐子はそう言って頭を下げた。
「参考人として富良野警察署へ行っていただくことになりますが、持ち物はそのバックだけですか？」
七瀬が聞いた。
「いえ。辻村旅館さんに、着替えと預金を引き出した現金が入っている旅行バックを…」
美佐子が答えた。
「辻村さんに届けてもらいましょう。預り証を作るためにいちおう確認しておきますが、現金はいくら入っていますか？」
「八年間でずいぶん使いましたけど、まだ一億円ほどは…」

美佐子の言葉を聞いた七瀬は目を丸くした。そして椅子に背を預けてため息をついた。

「絵里ちゃん。もう門限の時間だから帰りなさい」

美佐子の調書をとっていた七瀬は、寮の門限時間に気づいて絵里に言った。

「もういいのよ…。わたしはひとりでも大丈夫だから。あなたは帰ってちょうだい」

美佐子は微笑んで絵里に言った。絵里はその言葉に何度も首を振った。その目には大粒の涙があふれている。

「……」

七瀬はため息をついて電話の受話器を持ち上げた。

やがて月丘恵子と太田めぐみが駐在所にやってきた。

「絵里…」

「板倉さん…」

七瀬からだいたいの事情を聞いた月丘とめぐみは、座っている絵里の肩に手を乗せた。

「絵里ちゃんにはすっかり面倒をかけてしまって…。叱らないでくださいね」

美佐子は月丘に言った。

「ええ、わかっています。どうぞご心配なさらないで…」

月丘は美佐子に言った。

「ここにいたいの？」

月丘はうつむいている絵里に聞いた。

「はい…」

「そう…」

月丘は絵里の肩を抱いた。

午後八時三十五分。七瀬から連絡を受けた富良野警察署からパトカーが到着した。

パトカーの警察官が、絵里たちの目の前で美佐子の手に手錠をかけようとしたのを七瀬がとめた。
「この人の言うことが真実とわかるまでは、容疑者ではなく、たんなる参考人です」
七瀬は、笹野美佐子は富良野警察署に重要参考人としてみずから出頭することをパトカーの警察官に告げた。
「この北星で、あなたは板倉絵里という女子高生と知り合って本当に良かった。これからの心の支えにしてください」
七瀬はそう言いながら美佐子と絵里を交互に見た。
「……」
美佐子は顔を上げた。その目にも涙があふれている。
「おばさま…」
絵里は美佐子に近づくと、美佐子に抱きついた。そしてその頬に唇をつけた。
「お体にお気をつけて…」
絵里は美佐子に言った。
「ありがとう。あなたとお話ができてよかったわ。あなたのこと、忘れない…」
美佐子も絵里を抱きしめた。そのふたりを月丘とめぐみ、七瀬が見つめている。
絵里はポシェットからひと握りのお菓子と缶ジュースを出して美佐子に手渡した。美佐子は微笑を浮かべてそれを受け取った。
「さあ…」
七瀬は美佐子をパトカーの後部座席に乗せると、そのドアを閉めた。パトカーはゆっくりと駐在所の前を発車した。後部座席の美佐子が絵里を見つめている。絵里は涙にぬれた顔に笑顔を浮かべて、パトカーが見えなくなるまで懸命に手を振った。パトカーが見えなくなっても、絵里はパトカーが走り去った暗い道を見つめていた。
めぐみが絵里の肩を抱いた。
「この、門限破りめ！」

めぐみはそう言って絵里の頭をたたいた。
「先輩…」
「いいんだよ。こんな事情じゃしかたないさ。みんなには黙っててやるよ」
めぐみは笑って言うと、また絵里の肩を強く抱いた。

第１０話　授業参観

相変わらずあわただしい毎日が過ぎ、いつしか北星にも師走が訪れた。北星地区は一面の銀世界に変わっている。学校は十二月十八日から冬休みに入る。その前の期末試験でも絵里は学年トップの成績を維持した。二年生のトップは淺川美江、三年生のトップは同室の太田めぐみだった。

絵里は一年生の夏休みも札幌に戻らなかった。パソコンがあったがメールも一切送っていない。一ヶ月に一度だけ家に電話をかけて近況だけは知らせていた。そして今年の冬休みも札幌には帰らないと電話で伝えた。その絵里を教師や水島夫婦も心配して、なぜ帰省しないのかと聞いたが、絵里は「ここにいたいんです」とだけ答えた。

担任の月丘恵子は絵里に内緒で札幌へ電話をかけた。冬休みこそはお嬢さまを迎えにきてください。お正月を一緒に過ごしてあげてくださいと…。

電話に出た母の小枝子は、絵里の気持ちのままにしてほしいと月丘に告げた。本当は絵里に会いたくて会いたくて、この八ヶ月で娘がどんなに成長したか。それをしないのは絵里の心を乱すからだと、小枝子は涙声で月丘に言った。

「おかあさま…」

月丘はあることを思い出した。

「今月の十二日に、今年最後の授業参観があるんです。ぜひいらしてください。授業参観なら来られないという理由はないはずです。お嬢さまと一日くらい過ごしたっていいじゃありませんか。わたくしが知っている板倉絵里さんの意志は、それくらいで曲がるほど弱いものじゃありません。ぜひ、ご家族みなさまでご参観に…」

月丘は懸命に小枝子を説得した。

十二月十二日、北星高校ではことし最後の授業参観が行われた。一年生の参観は四時間目の地理の授業だった。参観が終わると、家族と一緒に給食を食べることになっている。二年生や三年生の参観もあると聞いていたが、太田めぐみの両親が来るかどうか、絵里はあえてめぐみに聞かなかった。

冗談好きで外科医師の資格もあり、生徒たちから人気がある地理担当のマップ北川こと北川教諭が教室に入ってきた。教室のうしろには数十人の父兄が立っている。絵里の親代わりと自分たちで勝手に決め付けているのか、水島夫婦が教室の後ろで授業を見守っている。絵里は振り返って水島夫婦に笑顔で手を振って見せた。

「こら、板倉。よそ見をしてると、両手にバケツ持たせて廊下に立たせるぞ！」

担当の北川教諭が笑った。

「はい！」

絵里は元気よく返事をして、ペロッと舌を出して肩をすくめた。クラスと父兄の中からクスクスと笑い声が聞こえた。

出席簿の確認のあと授業が始まり、北川教諭が教科書と北海道地図の説明をしながらホワイトボードにカラーペンを走らせていた。絵里は参観ということも忘れ、北川の説明とボードの字をノートにとっていた。

「板倉、さっきよそみをしたバツだ。北海道の有名な湖の名前を、五つ答えろ」

地理担当の北川教諭が絵里に指名した。

「はい！」

絵里は立ち上がった。

「サロマ湖、屈斜路湖、洞爺湖、支笏湖、そして、わたしの大好きな金山湖です！」

絵里は満面の笑顔で元気よく答えて座った。最後の金山湖という答えに教室は笑い声で盛り上がった。

「うーん…。金山湖は人造湖で、北海道ではそれほど有名な湖じゃないが、地元の湖を忘れなかったのを考慮して、まあ、八十五点くらいだな」
北川はそう言って笑った。
「はい！。おいしいニジマスがたくさん釣れます！」
絵里は笑顔で言った。その絵里の言葉にクラスの中が笑い声につつまれた。
そのとき「絵里のやつ、なかなかやるじゃないか」という声が聞こえた。その聞き覚えのある声に、絵里ははっとして後ろを振り返った。その絵里の目に、片手をあげて笑いかける兄と、笑顔の父と和服姿の母の姿が映った。母は祖父母の写真を持っている。絵里はここにいるはずのない両親と兄の姿に頭の中が真っ白になった。
うそ…。どうしてここにいるの…。
しばし後ろを振り返っていた絵里の表情がしだいに崩れた。そして絵里は夢遊病者のように立ち上がった。クラスメートと参観していた父兄が、立ち上がった絵里に注目した。
「おにいちゃん、なの？…」
絵里は笑顔で立っている旭を見つめた。
「よう、絵里」
そう答えた旭に向かって絵里は走り出していた。そして両手を差し出した旭の腕の中に思い切り飛び込んだ。
「お兄ちゃん！、お兄ちゃん！」
絵里は大声で叫びながら兄と両親に抱きついた。兄と、そして両親の身体から発する懐かしい臭いが絵里の鼻腔をくすぐっていた。
「板倉。授業を中断させたバツだ！」
教室のざわめきが静まったころ、北川教諭が大声で言った。その顔は笑っている。
「水を入れたバケツを持って、授業が終わるまで廊下に立ってろ！」
「はい！」
涙をふきながら絵里は元気よく返事をした。クラスの生徒と父兄

から大きな笑い声が沸きあがった。
絵里が洗面所でふたつのバケツに水を入れ、クラスメートや父兄の笑い声の中で廊下に立ったと同時くらいに、四時間目の終了を知らせるチャイムが鳴った。

「娘がいつもお世話になりまして…。電話では水島様のことはうかがっておりました。わがままなおてんば娘ですが、どうぞお見捨てにならないでください。水島様ご夫妻がいらっしゃるのなら安心していられます」
授業参観が終わり、父兄との昼食の場で、優一と小枝子は絵里に紹介された水島夫婦に何度も頭を下げた。
「何をおっしゃいますやら。私どもこそ絵里ちゃんがかわいくて。いつも無理を言って家にきてもらってんですよ。なんせ、だんなが絵里ちゃん絵里ちゃんって…」
水島アキヨは口を押さえながら笑った。
絵里は八ヶ月ぶりに両親と兄に再会した。家族と水島夫婦に囲まれて昼食を食べながら、絵里はいままで受けてきた授業や実習のことを夢中で話をした。両親と兄は黙って絵里の話を聞いていた。水島夫婦も目を細めて絵里を見つめている。
大きくなった…。優一も小枝子も旭も、ひとまわり大きく成長した絵里を見つめてほほえんだ。たった八ヶ月見なかった絵里は、身体だけではなく心も大きくなったように感じた。少し陽に焼けている。
「身長も少しは伸びたでしょ？」
絵里は三人を見つめて自慢げに言った。
「ああ、ついでに胸と尻もな…」
そう言って旭は成長した妹を見つめた。
「おにいちゃんって、ほんとに変態なんだから…」
絵里は旭を右手のハシで突付くしぐさをしてにらんだ。

その兄もしばらく会わないうちに大きくなり、たくましくなったようだった。両親と水島夫婦が声を出して笑った。絵里を見つめる五人の目は、夢中でおしゃべりをする絵里を包み込むような温かさにあふれている。

わたし飛ぶから。自分の翼で飛ぶから！。

三月の末、ひとりでバスに乗った絵里がそう叫んだのを三人は思い出した。そのときの絵里は南部中学校の制服を着ていた。そしていまは北星高校の制服に身を包んでいる。

八ヶ月見ない間に絵里は大きくなっていた。自分たちの元からはなれ、他人の中にもまれてひと回り大きくなった娘。少し早すぎる旅立ちだったが、娘にとって決して無駄ではなかったことを小枝子は感じた。一番大切な思春期を絵里はこの地で暮らし、大きな自然とやさしい人たちに見守られ、天に飛び出しそうな勢いでそれをはぐくんでいる。次々と話をする絵里を、三人はまぶしそうに見つめた。

「トムは元気？」

絵里は旭に聞いた。

「元気だ」

旭が言った。

「ほら…。六月に、みんなで公園に行ったときの写真だ」

旭はそう言って数枚の写真を絵里に渡した。

「へえー…。焼肉やったんだ…」

絵里は写真を見つめて笑った。

いつも行く近くの公園で、家族とトムが焼肉をしている写真だった。

トムが焼肉のテーブルの下に座っている。トムがアップで写っている写真もあった。

「トムは元気だ。トムをおまえだと思って、いじめたりかわいがったりしてるから安心しろ」

旭がそう言って絵里を見つめた。

「うん…」
絵里はトムの写真にこみ上げてくる涙をこらえて答えた。

「あら、めぐみちゃん」
アキヨは、食べ終わった食器を持って歩いていたセーラー服姿の太田めぐみを見つけて声をかけた。
絵里が立ち上がってめぐみに走りよった。そしてめぐみの食べ終わった食器がのっている盆を、わたしが、と受け取り、食器洗いのアルバイトをしている地元の主婦に、お願いします、と言って返却口に戻すと、そのままめぐみの手を引いて家族のいるテーブルに連れてきた。
「先輩、紹介します。わたしの両親と兄です。みんな、私の先輩で同室の三年生の太田めぐみさん。すっごい美人でしょ！」
「は、はじめまして。太田めぐみです」
めぐみは立ち上がった絵里の両親と旭に頭を下げた。
「まあ、ほんと。おきれいなお嬢さん…」
小枝子は目を丸くして太田めぐみを見つめた。
「絵里が、大変お世話になります」
小枝子がそう言ってめぐみに近づき、めぐみを引き寄せてその頬に唇をつけた。
めぐみは一瞬身体を固くした。絵里から家ではいつもこういうあいさつをしていると聞いてはいたが、まさか自分がその体験をするとは思わなかった。目を丸くしているところに、こんどは絵里の父親に抱き寄せられ、「今後とも絵里をよろしくお願いします」と、また頬に唇をつけられた。
「兄の旭です。こんなに美しい人に会えて光栄です。絵里をよろしく」
旭はめぐみに右手を差し出して握手した。そしてそのままめぐみを抱き寄せて抱擁し、父や母と同じようにめぐみの頬に唇をつけた。

そのとたんめぐみの顔がこれ以上ならないというほど真っ赤になった。
「太田さん。どうぞ、よろしければお話を…」
優一は絵里の隣の椅子をめぐみに勧めた。めぐみは顔を真っ赤にしたまま立っていたが、「どうぞ」と椅子を引いた旭に、下を向いたままお辞儀してその椅子に腰をおろした。めぐみの心臓は爆発しそうなほどに高鳴っている。
絵里が立ち上がって冷たい水をくみ、めぐみの前においた。その絵里をめぐみが見上げた。真っ赤になった顔が困惑している。
「めぐみ先輩は、この学校きっての秀才なの。わたし入学したときからお世話になりっぱなしで…」
「ち、ちょっと絵里…」
めぐみが隣に座っている絵里の服を引っ張った。
「そうなんですよ。めぐみちゃんは、絵里ちゃんのこと、妹みたいにかわいがって…」
アキヨがめぐみと絵里を交互に見つめて言った。
「もう、おばさん…」
めぐみは困惑した表情でうつむいた。
「太田さんは、どちらから?」
小枝子がうつむいているめぐみに聞いた。
「はい、滝川市です…」
めぐみが小さな声で答えた。
めぐみは顔をあげられないほど緊張していた。今までこんなに緊張したことはなかった。試験だって生徒会の発表だって、どんな場面でもめぐみは緊張はしなかったが、この緊張感は初めて味わう異常なものだった。
小枝子はうつむいている太田めぐみを見つめながら、なぜこの子がひとりで食事をしていたのかを考えた。こんなに清楚で素直そうな子が、授業参観の日にひとりで食事をしていた。しかしその理由を聞いてはいけない。ふっと感じた太田めぐみの陰のある表情に、

小枝子はそう思った。
「あの、太田さん。この席はお嫌だったかしら。もしも迷惑だったらごめんなさい」
小枝子は、うつむいているめぐみの顔を覗き込みながら言った。
「いいえ、そんなことは…」
めぐみはようやく顔をあげて答えた。
「絵里のご家族にお会いできて、とっても嬉しいです。ただ、ちょっと緊張して…」
そう言って絵里の両親と兄を見た。
「そうですか。絵里のやつが、突然あなたを無理やりに引っ張ってきたせいでしょう。緊張は解けましたか？」
優一が笑顔でめぐみに聞いた。
「はい、もうだいじょうぶです」
めぐみは笑顔で答えた。いつものめぐみに戻ったと絵里は感じた。まだ少し顔は赤いが、自分の家族の流儀であいさつされたら、たいていの人は驚く。めぐみが驚いたのも無理はない。
先輩、ごめんね。と小さな声で絵里はめぐみに耳打ちした。その絵里に、めぐみは右手でピストルの形を作り、絵里を撃つしぐさをした。その表情はいつもの笑顔が似合うめぐみに戻っていた。そのやりとりを見ていた優一は、太田めぐみの絵里に向けた笑顔と、ため息が出るほどにきれいな横顔に、息子の旭と顔を見合わせた。
「父さん、俺、惚れた…」
旭は小声で父の優一に言った。
「あたりまえだ。こんな美人を逃すな！」
優一が旭に耳打ちした。

「それじゃ太田さん。生意気な娘ですが、今後とも絵里をよろしくお願いします。できれば夕食もご一緒いただけると嬉しいですね。水島様たちもぜひ！」

にぎやかな雑談と昼食の時間が終わると、優一が立ち上がって握手しながらめぐみと水島夫婦に言った。水島玄作とアキヨは快く承知した。
「こちらこそ、よろしくお願いいたします」と、めぐみは優一に手を握られたまま頭を下げた。そして絵里の家族をまっすぐに見つめた。
「さしつかえなければ…」
旭がポケットから手帳を取り出した。
「太田さん、手紙を出してもかまいませんか?。できれば携帯の番号も…」と切り出した。その言葉を聞いたとたん、まためぐみの顔は真っ赤になった。板倉旭は絵里の両親と水島夫婦の前で自分に交際を申し込んでいるのだ。
「あ、いえ、あの…。はい…」
めぐみは下を向いて小さく答えた。絵里の両親はめぐみと息子の旭を交互に見つめて笑っている。水島夫婦も目を丸くして旭とめぐみを見つめていた。その横を月丘恵子が肩をすくめて笑いながら通り過ぎていった。
「おにいちゃん、めぐみ先輩は携帯は持ってないのよ」
絵里は旭にそう言った。
その日の午後、北星高校は課外授業となり、寮に入っている生徒たちは参観にきた両親や兄弟を連れて北星の中を案内した。絵里はめぐみに一緒に来てくれるように頼み込み、雪が積もった北星地区を案内した。最後に駅前の水島商店に立ち寄り、お茶をご馳走になりながら、水島夫婦が話す北星の土地柄や、絵里やめぐみの話に花が咲いた。
そして午後五時、水島夫婦と太田めぐみは、夕食のときにも板倉一家のテーブルに招かれた。大勢の前で自分に交際を申し込んだ絵里の兄の板倉旭が真正面に座っていた。
絵里の両親や兄の旭にいろいろと話しかけられた記憶もあるが、何を言われてなにを答え、どんなものを食べたのかも覚えていない

ほど、めぐみはひどく緊張した。ただ、板倉旭の笑顔だけが心の中に残っていた。

「絵里！。ちょっときなさいよ！」

家族が帰った夕方、めぐみは絵里の服を引っ張って部屋にはいり、乱暴にドアを閉めた。

「あんたの家族って、いったいどうなってんのよ！」

めぐみは部屋に入るなりそう言った。

「はい？」

絵里はめぐみを見つめた。

「いきなり抱きついたり、顔にキスしたり、おまけに手紙書いてもいいかなんて。もう、信じられない！」

めぐみは腕を組んで絵里をにらんだ。

「すみません。両親と兄の無礼はお詫びします。でも先輩、いつもああなんです。あれがわたしの家では普通なんです。やっぱり驚きました？」

絵里は笑顔でめぐみを見つめた。

「あたりまえじゃない！。あたしは滝川の田舎で育ったのよ。あんなストレートなあいさつなんて経験したことないし、だいいち、初めて会ったばかりのあんな場所で、手紙書いていいかなんて、ふつう言う？」

めぐみはまだ信じられないような表情で絵里に言った。

「すみません」

絵里はまた頭を下げた。

「あ、でも先輩。嫌なら嫌だって、はっきり言ったほうがいいです。そのほうが兄も納得しますので…」

絵里は真剣な表情でめぐみに言った。

「だって…。なんとなく、はいって言っちゃったもの。断れるわけないよ！」

めぐみはベッドに反動をつけて座りながら口をとがらせた。
「きっとすごく大事にされますよ。兄はわりと紳士だし、両親も兄も先輩にひとめ惚れしたんです。決して悪気はないんです。その…、アメリカ式っていうか、好きなものは好きって、自分の気持ちに正直なだけなんです」
絵里は困惑しているめぐみに懸命に説明した。
「それに先輩。父と兄は、先輩をハグ（抱きしめた）したとき、しっかり先輩の成長ぶりを確認しましたよ。母が先輩を抱きしめる時間より、父と兄のほうが長かったでしょう？」
絵里はめぐみの顔をのぞきこんで笑った。
「確認って…」
「胸ですよ！。先輩の、形のいい胸の、か、く、に、ん！」
絵里は手をたたきながら満面に笑みを浮かべた。
「……」
その言葉に、めぐみの顔はまた真っ赤になった。
「きっと、すぐに手紙がくると思いますよ」
絵里はそう言ってめぐみを見た。
兄が好きになるのも無理はない。めぐみは絵里から見ても魅力的だった。美人だし、自分にはない大人の香りがする。
めぐみは北星高校を牛耳る女番長だが、きめこまやかな心配りと、下級生たちを思うやさしさは群を抜いている。学校内で何か問題が起きると、教師や生徒たちが太田めぐみを頼る理由が絵里には理解できるような気がした。そのめぐみに会った兄が、めぐみを好きにならないわけがなかった。
「……」
「先輩、兄のこと嫌いですか？」
絵里はベッドでひざを抱えて考えこんでいるめぐみに聞いた。まだ顔が赤い。
「わかんないよ、そんなこと…」
そう言ってめぐみは立ち上がった。

「……」
めぐみは自分を見つめている絵里に、風呂に行くと言って部屋を出た。
「あ、先輩、わたしも行きます！」
絵里は入浴道具を持つと、急いでめぐみの後を追った。
「ひとりで行くんだから、ほっといてよ！」
追いかけてきた絵里に、めぐみは突っぱねるように大声で言った。廊下を行き交う寮の女生徒たちが、いつもとちがう雰囲気のめぐみと絵里を見て通路を開けた。
「いいじゃないですか。背中を流させてください。いつも一緒じゃないですか。それとも、きょうだけは、わたしと一緒じゃ恥ずかしいんですか？」
絵里は急ぎ足で歩くめぐみの前に出て笑った。
「バーカ…」
めぐみは絵里の頭をたたいて笑い、絵里の肩を引き寄せた。
「あんたなんか、風呂に沈めて土左衛門にしてやるから、覚悟しな！」
めぐみは大声でそう言うと、絵里の頭をつかんで風呂の中に押しこむまねをした。
「許してください！。もうあんなこと言いませんから！」
絵里は大げさな声をあげた。
「許すもんか！。ついでに、あんたの小さいオッパイ、あたしがマッサージして大きくしてやるよ！」
「キャーッ！」
ふたりは廊下を大声で騒ぎながら浴室へ向かった。

そして三日後、絵里は昼休みに部屋に飛んできた。
「先輩！。きましたきました！。兄からの手紙です！」
絵里は手にもった白い封筒を振り回しながら叫んだ。

「絵里ったら！。そんなに大声で騒がないでよ！」
めぐみは立ち上がって絵里をにらんだ。
「はい、先輩！」
絵里は笑顔で手紙を両手でめぐみに渡した。めぐみは絵里をにらみながら手紙を受け取った。その顔は心なしか赤くなっている。
「わたし、教室にいってますね。差し支えない程度で、あとで教えてください」
絵里はそう言うと、にらむめぐみにウィンクした。
「バカ…」
めぐみは絵里をにらんで大きくため息をついた。絵里がドアを閉めたあと、机の引出しからはさみを出し、もう一度ため息をついて封を切った。心臓がドキドキしていた。なぜかはやる気持ちをおさえながら白い便箋を開いた。
〔太田めぐみ様。先日はいきなりで、大変失礼しました。〕
便箋には整った字でそう書かれていた。
〔生意気な妹がお世話になっております。太田さんのことは、ひと月に一度くらいの割合でかかってくる絵里の電話で聞いておりました。そして妹から聞いていた美しい太田さんに直接お会いできて光栄でした。くどくどとは書きません。僕は太田さんが好きになりました。もしも今、お付き合いしている人がいないのでしたら、僕とお付き合いしてください。お返事はいつでも結構です。僕の一方的な手紙ですみません。お待ちしております。板倉　旭〕
めぐみはその手紙を何度か読み返して封筒に入れた。心臓が高鳴っている。
めぐみにとってはストレートすぎる交際の申し込みだった。数日前、手紙を出してもかまいませんか、と言った板倉旭の顔が脳裏に浮かんだ。絵里には悟られまいとしていたが、板倉旭の笑顔を思い出すと正直なところ胸が熱くなった。
どうしたらいいの…。
めぐみは何度もそう自分に問いかけた。めぐみは板倉旭からの手

紙を机の引出しに入れて、また大きなため息をついた。

第11話　けんか

「あんたなんか顔も見たくないよ。どっか行っちゃいな！」
めぐみはそう言ってプイと横を向いた。
「先輩…」
絵里はうつむきながら上目でめぐみを見た。
原因は、絵里が札幌の兄に電話でめぐみの事を色々と話して聞かせたせいだった。といっても絵里の知らないことや嘘を話したわけではない。めぐみの成績が抜群なこと、超美人で身長が高くてスタイルがいいこと、いつもやさしくしてくれること、家でいつもやっている抱擁してのあいさつのこと。そのあいさつを初めて体験したときのめぐみの動揺のことなどだ。
めぐみが兄の旭と交際するようになれば、いやでも旭の耳に入るようなことばかりだったが、めぐみにしてみれば、まだ返事を出すかどうかも決めていないときに、そんな電話をしたことを怒ったのだった。
「あたしがいつ、あたしのことをあんたの兄貴にしゃべってくれって頼んだのよ！。よけいなことしないでよ！。顔も見たくないって言ってるだろ。さっさと、どっかへ行っちゃいな！」
めぐみはそう言うと、また横を向いた。
「ごめんなさい…」
絵里はめぐみに頭を下げた。そしてまためぐみを見た。
「先輩…」
絵里はそっとめぐみに近づいて、めぐみの表情を覗き込もうとした。
「うるさいってば！」
めぐみは怒鳴った。その声とめぐみの険しい表情に、絵里は飛び上がって驚いた。
「ほんとうに、ごめんなさい…」

絵里はしかたなく物入れからバッグを出し、日用品、着替えや制服を出して詰め込んだ。めぐみは相変わらず横を向いたままだった。
「どうしたの、ふたりとも…」
消灯前の寮の点検に来た月丘恵子が、いつもとちがう太田めぐみと板倉絵里の様子を見て聞いた。
「……」
「……」
無言のふたりに月丘は首をかしげて出て行った。しばらくして月丘が社宅に戻ったのを確認した絵里はバッグを持って立ち上がり、めぐみに頭を下げて部屋を出た。めぐみは知らん顔をして横を向いたままだった。
「絵里、こんな時間にどこへ行くの？」
外套とマフラー姿で玄関に向かう絵里に、廊下にいた寮の女生徒が口々に聞いたが、絵里は黙ったまま寮の玄関を出た。

絵里が部屋を出て行ってから二時間あまりが過ぎていた。ベッドに入ったものの、めぐみはなかなか眠つかれなかった。
〈絵里ったら、どこ行ったんだろ…〉
めぐみは、電気が消えた中で暗い天井をじっと見つめていた。しょんぼりと部屋を出て行った絵里の顔が浮かんでは消える。
〈あたしのことを、調子にのってペラペラと旭さんにしゃべるから悪いんだ！〉と、めぐみはベッドの中で思った。どうでもいいわ。そのうちに帰ってくるわよ。と思い、そのまま目を閉じた。どうせ、行くところは月丘か水島夫婦の家しかないのだ。
絵里が出て行ってから三時間以上が過ぎていた。時間は深夜の零時をまわっている。
めぐみは眠れないままトイレに起きた。ドアを開けて非常灯で薄暗い廊下を見渡した。しんと静まり返っている廊下に人の姿はない。かなり冷え込んでいるのか、玄関のガラスが花模様の結晶状に凍っていた。トイレを終えためぐみはテレホンカードを持ってホールに

設置してある公衆電話に向かった。そして月丘恵子の社宅の電話番号を押した。
『はい、月丘です…』
五回の呼び出し音で月丘恵子が出た。
「先生。絵里のやつ、先生のところに行ってるんでしょう。さっさと帰ってくるように言ってよ！」
めぐみは電話に出た月丘恵子に強い口調で言った。
『板倉さん？。来てないわよ。いったいどういうこと？』
月丘はめぐみの言葉に驚いた様子だった。めぐみの顔が青ざめた。
「ちょっとあってさ…。どっかへ行っちゃいな、って言ったら、絵里のやつ、バッグ持って…」
めぐみは小さい声で月丘に言った。
『それで出て行っちゃったの？。こんなに冷え込んでいるのに、いったいどこへ…。水島さんには？』
月丘がめぐみに聞いた。
「まだ…。すぐに電話してみる！」
めぐみはそう言って電話を切り、水島商店に電話をかけた。しかし水島夫婦も知らないと答えた。まもなく月丘恵子と水島夫婦が寮にやってきた。
「理由を聞いてるひまはないわ。手分けして探しましょう。どこか知り合いのお宅にでもお邪魔しているのならいいけど、外で倒れてたりしたら…」
「やめてよ！」
月丘の言葉をめぐみは大声で打ち消した。
「バカ絵里！。見つけたらただじゃおかないから！」
めぐみは急いで外套を着た。その騒ぎに寮生たちが次々と出てきた。
「誰かの部屋に、絵里がもぐりこんでないかい！」
めぐみは出てきた寮生たちに聞いた。みんな首を振っている。
「みんな、絵里を探して！。あたしの一生の頼みだ！」

めぐみは寮生たちに頭を下げ、心あたりを探してくる、と言って玄関を飛び出した。
月丘や水島夫婦のところにもいないとしたら。ほかの部屋にももぐりこんでいないとしたら、いったい絵里はどこへ…。ほかに思い当たる場所がない。めぐみの頭に、部屋を追い出されてどこにも行くあてがなく、雪の中でうずくまったまま凍死している絵里の姿が浮かんだ。
「いやだ！。いやだよそんなこと…。絵里のバカ、どこにいるのよ！」
めぐみは必死にその思いを打ち消した。
「絵里ーっ！。絵里ーっ！」
めぐみは校門の通りに出て金山湖に通じる道を走りながら大声で絵里の名前を叫んだ。パジャマの上に外套を着ただけのめぐみに、氷点下二十度近く下がった冷たい風が身を切るように襲ってきた。
「絵里ーっ！。絵里ーっ！」
めぐみの叫び声が深夜の北星に何度も聞こえた。そのうちにあちこちから絵里の名前を呼ぶ寮生の声が聞こえ始めた。金山湖に落ちてでもいたら…。そう思うとめぐみの心は張り裂けそうだった。
金山湖に向かって走っていためぐみは足を滑らせて雪道に激しく転倒した。わき腹を打って呼吸がつまった。それでもめぐみは立ち上がり、また走り続けた。
「絵里ーーっ！」
目の前に金山湖が見えた。凍った湖面の上を冷たい風が渡り、粉雪を激しく舞い上げていた。湖には絵里の姿はなかった。
「絵里…」
めぐみは両手をついてその場に座り込んだ。手袋をはいていない両手は感覚がなくなるほどに冷え切っている。
「めぐみー！」
同級生の千葉祥子が叫びながら走ってきた。
「めぐみ、絵里がいたよ！」

祥子は息を整える余裕もなくめぐみに言った。
「どこ。どこにいたの！」
めぐみは恐ろしい表情で祥子に聞いた。
「駅で寝てたの…。月丘があんたを呼んでこいって…」
その言葉を全部聞かないうちにめぐみは走り出していた。
「バカ！、絵里のバカ！。ひっぱたいてやるから！」
めぐみは走りながらそう叫んだ。
「こんなに心配かけやがって！。この真冬に、ほんとに出て行くバカがいるかよ！」
「あのバカ、ぜったいに許さないからね！。ぶっとばしてやる！」
めぐみはそうつぶやきながら北星駅に向かって走った。
駅の前には寮生たちが集まっている。水島夫婦と月丘もいた。走ってくるめぐみを認めて月丘恵子が走り寄ってきた。
「絵里はどこ！。ぶじなのかい？」
めぐみは月丘をにらみつけて聞いた。
「無事よ。駅の中で眠ってるわ」
月丘は駅の中に入ろうとするめぐみを押さえた。
「太田さん、あとは任せるわ。なにがあったか知らないけど…」
月丘はめぐみをじっと見つめた。
「くれぐれも…。いいわね、太田さん…」
月丘は冷え切っためぐみの手を握り、その目をじっと見つめた。
「うん…」
めぐみはうなずいた。その目が少しうるんでいる。
月丘は、駅の中をのぞいている寮生や水島夫婦に、帰るように手で合図した。
「よかったね、めぐみ」
「先輩、絵里を叱らないでくださいね」
「太田、よかったな！。板倉のやつ、めんこい寝顔してるぜ」
同級生や下級生が口々に言いながら引き上げていった。
「めぐみちゃん、よかったね。絵里ちゃん、ぐっすり寝てるよ」

水島アキヨが笑って言いながらめぐみの肩を叩いた。月丘と水島夫婦は、めぐみを残して水島商店へと入っていった。
めぐみは北星駅の窓から中をのぞいてみた。
マキストーブが燃えている。そのそばに木のベンチをふたつ並べ、その上に外套をかぶり、バッグを枕にして絵里が眠っていた。マキストーブの火の見口から漏れる炎の明かりに、眠っている絵里の顔が浮かんでいる。
めぐみは音を立てないように戸を開けて中へ入った。そして眠っている絵里のベンチの頭の方に座って、冷え切った手をストーブで温めながら、眠っている絵里の顔をじっと見つめてため息をついた。
ストーブに火をつけるための大きなマッチ箱と、焚き付けに使う白樺の表皮がはいっている箱があった。絵里は水島玄作がいつもストーブに火を付けるのを見ていて、自分でストーブを焚いたのだろう。
絵里…。
めぐみの頬を涙がひとすじ伝った。
無事でよかった。
絵里にもしものことがあったら…。そう考えただけで鳥肌が立つ。あのとき、顔も見たくないとか、どっかへ行っちゃいなとか言ってはみたものの、本当に絵里が出て行ったときは後悔した。絵里が行くところといえば、せいぜい月丘か水島夫婦のところ、あるいは絵里の同級生の所だろうと見当はつけていたが、まさか駅の中で寝ているとは夢にも思わなかった。
「絵里…」
めぐみは、ストーブに暖められて軽い痺れが来ている手で、眠っている絵里の肩をゆすった。絵里はかすかに目を開けた。そしてめぐみに気が付くと驚いたように飛び起きた。
「先輩！…」
絵里は目を見開いてめぐみを見つめた。
「ごめんなさい。よけいな事をして、ほんとうにごめんなさい」

絵里は立ち上がってめぐみに頭を下げた。
「もういいんだ。座りな…」
めぐみはストーブを見つめたまま絵里に言った。暗い駅舎の中にストーブのかすかな明かりだけがゆれていた。
「どうして、駅なんかにいたの？…」
めぐみは絵里の顔を見ずに、ストーブの前を開いて新しいマキを入れた。
「……」
絵里はめぐみの隣に座り、うつむいたまま黙っていた。
「あたしが、顔も見たくないとか、どっかへ行っちゃいなとか言ったからなの？」
めぐみはストーブを見つめたままで聞いた。めぐみの手はまだ冷え切っていた。
「……」
「あたしのせいならせいだって、なんとか言ったらどうなのよ…」
めぐみは何も言わずうつむいている絵里に言った。
「先輩、手が冷たいんですか？」
絵里はそう言うと、ストーブにかざしているめぐみの手をとり、しっかりと両手で包み込んだ。めぐみの手は氷のように冷え切っていた。
「線路を見ていたんです…」
絵里は笑顔で言った。
「線路？…」
めぐみは顔を上げて絵里を見た。
「淋しくなったら線路を見なさいって…。こんな小さな田舎の駅でも、線路だけは札幌に続いているからねって…。入学試験の次の日、月丘先生がそう言ったんです。だから、何か辛いことがあったり、淋しくなって札幌が恋しくなったとき、わたしは、いつもひとりでこの駅に線路を見にくるんです」
絵里はめぐみの手を両手で包んだまま言った。

「生まれて初めて、家族から離れて、たったひとりでこの駅に降りたんです。この駅はわたしと家族をつないでいる糸なんです。いろいろわたしの話しも聞いてくれますし…」
絵里はうつむいた。
「……。その淋しい思いを、あたしがさせたんだね…」
めぐみは自分の手を両手で包んでいる絵里に言った。絵里は自分の手と、その手に包んでいるめぐみの手を見つめたままだった。
〈あんたを追い出したあたしを、どうして責めないのよ。絵里のバカ！〉
めぐみはそう怒鳴りたくなった。
「絵里…」
めぐみは自分の手を包んでいる絵里の手をほどき、絵里を引き寄せてしっかりと抱きしめた。絵里は我慢していたのが切れたのか、めぐみに抱きついて声を出して泣き出した。
「バカ、絵里の大バカ…。あたしがどんなに心配したか…。今度こんなことしたら承知しないからね！」
めぐみは泣いている絵里に大声で言った。
地吹雪が荒れ狂う北星駅の中は、マキストーブが赤々と燃えていた。

第１２話　除夜の鐘

十二月十八日、北星高校は一ヶ月間の冬休みに入った。寮に入っている学生たちもそれぞれのふるさとに帰省し、札幌に戻らなかった絵里は、また一人での寮生活が始まった。休み期間中の課題はあるものの、自分の時間もじゅうぶんにある。

絵里は近くの金山湖で友達とスケートに明け暮れた。スケートの経験がなかった絵里は、最初は立つことさえできずに転んでばかりいたが、教えてくれる月丘恵子と地元のクラスメートや子供たちのまねをしているうち、一時間ほどで危なっかしいながらも何とか氷の上を滑走できるまでになった。

「冬休みも帰らないの？」

寮を訪ねた担任の月丘は絵里に聞いた。

「はい、北星にいます」

絵里は答えた。

「そう…」

絵里の返事はわかっていたものの、月丘はため息をついて絵里を見た。意志が堅いといってしまえばそれまでだが、いかに高校生とはいえ絵里はまだ十五歳の少女だ。札幌にはあんなにしっかりした両親とやさしい兄がいる。家が恋しくないはずはない。

「ねえ、卒業するまで本当に一度も帰らないつもりなの？」

月丘が言った。

「はい、そのつもりです」

絵里はきっぱりと答えた。

「あの、先生。いてもいいんですよね…」

絵里は心配そうに自分を見つめている月丘に聞いた。

「それはかまわないけど…」

月丘は少しあきれて絵里を見つめた。

北星高校は、北海道でもナンバー・ワンといわれる進学校だが、

場所が場所だけに時によっては遠くから入学する生徒もいる。連休が続いても事情により寮に残らなければならない生徒もいる。ひとりでも寮生が残っている限り寮は閉鎖しない。電気や給湯の設備は残っている宿直の教師が管理をする。雪が降ったときの除雪などもそうだが、長期間の休みが続くことを考慮し、八年前に学生寮を建てたとき、寮と校門、玄関を結ぶ通路には、幅二メートルにわたって降雪感知式のロードヒーティングの設備を入れている。この設備は区の予算で設置されたものだ。

残っている寮生の一番の問題は食事だが、絵里の両親が道の駅〈星の降る里・北星〉の管理者に、朝食はパンと牛乳の配達、昼食と夕食は道の駅のレストランで食べさせてもらうことで契約を交わしていた。道の駅の管理者は、絵里が北星の広報ポスターの女の子だと知っていたため、こころよく契約を承知した。

「寮の管理が面倒だから言うんじゃないのよ」

月丘はそう前置きして絵里を見つめた。

「何度も言うようだけど、この際、思い切って水島さんのところに下宿したらどう?。以前は本当の息子さんのように面倒を見ていた男の子がいたらしいけど、今はその子も大人になって独立していて、もともとご夫婦にはお子さんがいないのよ。あなたが下宿したら、水島さんもどんなに喜ぶか…」

月丘はそう言った。この話は今まで絵里に何度言ったかわからない。寮の管理のことで言っているのではなく、事あるごとに水島夫婦から持ちかけられていた話だった。もしも絵里が承知したなら、絵里を我が子のようにかわいがっている水島夫婦も大歓迎の話だった。そのことは絵里も知っていた。しかし絵里は首を縦に振らなかった。

「ありがとうございます。でも、やっぱりわたしは寮で暮らします。この寮はわたしの家と同じですから。それに…」

絵里は目を輝かせて月丘を見た。

「両親や兄の写真もありますし、ひとりで大声で歌も唄えます」

そう言った絵里に、淋しいとき、ひとりで大声で泣けるからなの？、と言い出しそうなのを月丘は押さえた。
「淋しくないの？」
月丘は絵里に聞いた。
「……」
絵里は黙ってうつむいた。そして顔をあげた。
「みんな、やさしくていい人たちばかりです。水島さんも…」
「だったら…」
「先生…」
絵里は、月丘の言葉をさえぎるように頭を何度も横に振った。
「つらくなるんです。みんなやさしくていい人たちばかりだから、いずれわたしも卒業してこの北星を出るとき、きっとお別れするのがつらくなります。だから…」
絵里はそう言ってまたうつむいた。
「先生も水島さんも大好きです。でも、年が明けて三年生の人たちが卒業して、大好きなめぐみ先輩もいなくなります。先輩たちとも別れ別れになります。そのときのことを思うと、わたしつらくて…」
絵里はうつむいたまま言った。目から涙があふれそうになっている。
月丘はその絵里に何も言うことができなかった。この少女は大人の自分たちが思っているほど強いわけではない。少しでも扱い方を間違えば、粉々に砕けてしまうガラスような繊細な心で、淋しさや辛さから必死に耐えているのだ。
「わかったわ、ごめんね。このことは、もう言わないわ…」
月丘はそう言って椅子から立ち上がり、絵里の肩に手を置いた。絵里はそのまま月丘に抱きついて肩に顔をうずめた。絵里は月丘に涙を見られたくなかったのだった。
「板倉さん…」
月丘は、自分とおなじほど身長が伸びた絵里に抱きつかれて戸惑いつつも、絵里の頭をゆっくりとなでた。

「もう年末ね…」
絵里を抱きとめたまま、月丘は静かに雪が降る部屋の窓から、十二月二十三日の白い世界を見つめていた。
「そうだ！」
月丘は何かを思いついたように言った。
「ねえ、あしたの夕方、わたしの社宅で水島さんもお呼びして、クリスマスパーティーをやらない？」
月丘は笑顔で言った。
「はい、でも…」
絵里は戸惑った表情で答えた。
「どうせ先生もひとりなんだし、遠慮することないわ。にぎやかでいいじゃない。北星にいるクラスの五人の女子も呼んで。決まりよ！。いいわね！」
月丘は笑顔で絵里の手を握り締めた。
「はい！」
絵里も満面の笑顔で答えた。
「水島さんとご馳走の準備をしなくちゃ。じゃ、あしたの夕方五時に、みんなときてちょうだい。宿題、ちゃんと済ませてね！」
月丘はそう言うと寮の部屋を出て行った。

♪「きーよしー、こーのよるー、ほーしはー、ひーかりー、すーくいーいのみーこはー、みーははーのむーねにー、ねーむりーたもーーう、すーこやーかーにー…」♪
次の日の十二月二十四日、すっかり日が暮れた北星高校の前にある月丘恵子の社宅から明るい歌声が聞こえていた。一本のろうそくの中で、板倉絵里とその同級生の地元の女子が五人、そして月丘恵子と水島夫婦が歌う声だった。
「メリー、クリスマース！」
月丘恵子の発声で勢いよくクラッカーが鳴り響いた。

「電灯のスイッチを入れてちょうだい！」
月丘の声で誰かが部屋の電灯のスイッチを入れた。それを合図のように月丘と水島アキヨが大きなテーブルクロスを一気に取った。
「わぁー、すごいご馳走！」
その上に並んだ料理を見て絵里たちは歓声をあげた。サラダ、おにぎり、フライドチキン、いちごのショーケーキ、ジュースやビールなどがところ狭しと並んでいる。料理はすべて月丘恵子と水島アキヨが作ったものだった。
「先生、いつでもお嫁に行けますね」と言った生徒に、全員がまた歓声を上げた。
「メリークリスマース！。かんぱーい！」
明るい声が月丘恵子の社宅に響いた。

「さあ、みんな。寒くない格好で外に出なさい。サンタクロースが来たわよ！」
にぎやかなパーティーが少し落ち着いたころ、月丘がパンパンと手をたたいてみんなに言った。
「サンタクロース？…」
絵里たちは顔を見合わせながらも、月丘に言われるとおりに外套やスキーウェアーを着て玄関の戸を開けて外に出た。耳を澄ますと遠くから鈴の音が聞こえる。やがて数十個の電球を飾った馬ソリかやってきた。
「わぁー、きれい！」
みんなが歓声をあげて拍手をした。その馬ソリは月丘の社宅の前に止まった。
「しょくん、メリークリスマス！。サンタクチョーがプレゼントを持って来たぞ！」
大声でダジャレを言いながら、馬ソリから白い帽子をかぶった北星区長の江島正三郎が降り立ち、ソリに積んであった袋をひとりひとりに手渡した。月丘恵子と江島区長の演出だった。

「サンタさん、ありがとうございます！」
絵里たちは歓声を上げながらプレゼントを受け取った。
「さあさあ、袋の中を見て喜んだところで、いまからこのサンタクチョーが、〈星が降る里〉北星一周の旅をプレゼントだ。みんなのったのった！」
サンタクロースに扮した江島区長は大声で叫んだ。絵里たちはプレゼントの袋を抱えて馬ソリに乗った。
「よーし、出発だ！」
区長の掛け声で馬ソリはゆっくりと滑り出した。
「いってらっしゃーい！」
月丘と水島夫婦が馬ソリに手を振っている。
「いってきまーす！」
馬ソリに乗った絵里たちは、月丘と水島夫婦に応えるように大声で手を振った。すっかり夜がふけたクリスマスイブの北星に、豆電球で飾られた馬ソリに乗った少女たちの楽しそうな声がいつまでも聞こえていた。

十二月三十一日、いろいろなことがあった年もあと数時間で終わろうとしていた。
北星神社には地元の人たちが次々と集まってきていた。近くにある妙現寺の除夜の鐘を聞きながら毎年ここで新年を迎えるのだ。
少し粉雪が降る中、神社の境内は電球が数百個も付いていて真昼のように明るかった。
農家の人たちが大きな鍋で、参拝に来る人たちに出来たてのおしること豚汁をふるまっている。来る人みんなが顔見知りだ。
絵里はその人たちにおしるこや豚汁を配る役を買って出た。みんな笑顔で絵里からおしるこや豚汁が入った発泡スチロールの器と割り箸を受け取ってゆく。そのうち、絵里の同級生の地元の五人の女子が手伝い始め、鍋の周りは歓声と人だかりで行列が出来るほどだ

った。
午後十一時から妙現寺の除夜の鐘が鳴りはじめている。
「ハーイ、絵里！。元気そうじゃない！」
どこからか絵里を呼ぶ声がした。声のほうを見ると、滝川に帰省しているはずの太田めぐみが、赤と白のスキーウェアー姿で人ごみの中から手を振っている。
「先輩！」
絵里は同級生に断って鍋から離れ、人ごみの中のめぐみに力いっぱい抱きついた。そしてひんやりとしためぐみの頬に何度も唇をつけた。
「ちょっと。絵里、やめなってば！」
めぐみは笑いながら抱きついている絵里の頭をたたいた。周りの人たちがふたりの様子にあきれ顔をして笑っている。
「先輩、あいたかったです！。でも、どうしてここにいるんですか？」
絵里はめぐみの首に両手を回したまま、顔を覗き込んで聞いた。
「絵里が淋しがってるから、一緒に正月を過ごしてやってって、月丘から電話がきたから、仕方なく来てあげたのよ」
めぐみはそう言って笑った。
「そういう先輩も、ほんとはわたしに会いたかったんでしょう？」
絵里はいたずらっぽい表情でめぐみを見つめて笑った。
「こいつめ、しょってるわ。まあ、そういうことにしといてやるよ」
めぐみも笑って絵里を抱きしめた。妙現寺の鐘の音が聞こえている。
「太田さん、よく来てくれたわね！」
月丘恵子がめぐみと絵里を見つけて駆け寄ってきた。
「絵里のためだし、先生の頼みなら断れないじゃん」
めぐみは、しっかりと首にしがみついている絵里を笑って見つめた。
「先生、ありがとうございます！」

絵里はそう言うと、今度は月丘に抱きつき頬に唇をつけた。
「ちょっと、板倉さん！。こんなところで…」
月丘は、勢いをつけた絵里に抱きつかれて目を丸くした。
「先生、わかる？。あたしなんか、いつもこんなめにあってんだから…」
めぐみはそう言って月丘に抱きついている絵里の頭をたたいた。いつまでも抱きついている絵里に、月丘は困惑した表情でめぐみを見つめた。めぐみは首をかしげ、両手を広げて笑った。
「さあ、もうすぐ新しい年が明けるわ。今年の反省と来年の夢をお願いしましょう」
月丘が腕時計を見て言った。
「先生、来年こそはお嫁にいかなくちゃね」
めぐみは絵里と顔を見合わせ、舌を出して笑った。
「なま言うんじゃないの！。わたしだって、好きでお嫁に行かないんじゃないんだからね！」
月丘は笑って太田めぐみの尻をたたいた。新しい年が明けるまで二十分に迫っていた。
神社と根室線をはさんでいる妙現寺の鐘の音が聞こえた。松海和尚がつく心の中に染みわたるような低く重厚な音だった。
三人は絵里を真ん中にして神社の神殿の前に立った。それぞれに賽銭を投げ入れ、しめ縄を振って手を合わせた。煩悩を捨て去る妙現寺の鐘が鳴りつづけている。
月丘恵子は絵里とめぐみのため、水島夫婦と生徒たちのために祈った。来年もみんなが健康でありますように。板倉絵里の背中に早く翼が生えますように。太田めぐみは、自分が背負った過去を一日も早く払拭して、明るい子に戻りますように、と…。
太田めぐみは、自分の両親と小学校四年生の弟の憲弘。妹のような板倉絵里。悪夢の中に沈んでいた自分を、身体を張って救い出してくれた月丘恵子。いつも自分を見守っていてくれる水島夫婦のために祈っていた。心配をかけてばかりいる両親と弟の憲弘に、素直

になれない自分自身のことをわびた。板倉絵里が一日も早く自分の翼で羽ばたくように。月丘が早く嫁に行けるように。そして…。合掌するめぐみの脳裏に、さわやかな笑顔の板倉旭の顔が浮かんだ。

神様、あたしはどうしたらいいの…。

板倉絵里は両親と兄にわびていた。そして月丘先生と、水島夫婦の健康。自分を愛してくれる同級生や上級生。大好きな太田めぐみの幸せ。自分も北星高校を無事に卒業できますようにと祈った。

お父さん、おかあさん、お兄ちゃん。自分の翼で羽ばたくなどと生意気なことを言ってごめんね。わたしも来年の二月で十六歳になるの。約束どおり、少しは羽ばたけるようにがんばるからね。水島のおじさんとおばさん、いつまでも健康でいてね。いつもおいしいご馳走をありがとう。

月丘先生、いつも気を使ってくださってありがとうございます。先生も早くいい人とめぐり会えますように。めぐみ先輩。大好きな先輩。私が困って淋しいときに、いつもそばにいてくれてありがとう。お兄ちゃんは先輩のことが好きになっているの。お兄ちゃんのことお願いね。

並んで合掌している三人のそれぞれの心が、どこかで一本につながっていた。

ゴーーーン、といくつめかの鐘が鳴った。

「先生、みんな。もうお参りしちゃったのかい？」

神殿の階段を降りていた三人に水島アキヨが声をかけた。白い息を吐きながら三人に近づいてくる。

「水島さん。いまいらっしゃったんですか？」

「そうなのよ。だんなったら、すっかり酔っぱらっちゃってさ。たたき起こしてきたとこだよ」

アキヨは玄作の腕を叩きながら笑った。

「三人で、今年の反省と、来年のお願いをしてきたところです。もちろん水島さんたちのご健康も…」

月丘は絵里とめぐみの顔を見ながら言った。

「あらまあ、そうかい。そんじゃ、あたしたちもみんなの健康をお願いしてこようかね」
アキヨはそう言って玄作の顔を見て笑った。
「おう、月丘先生の結婚もな！」
玄作はそう言って豪快に笑った。
「先生よ。牛や馬だったら、北星にも立派なオスがいっぱいおるんじゃけどな！」
玄作は酔った勢いで大声で言った。
「もう、玄さんったら！」
こぶしを握ってたたくまねをする月丘に、めぐみと絵里は大声で笑った。

「みなさん、年が明けるまであと一分です！」
ハンドスピーカーを持った神主の山路が叫んだ。その声に神社の参拝者たちは神殿に向かって合掌した。
「十、九、八、七…」
山路がカウントダウンをはじめた。そのとき、妙現寺の一〇八番目の鐘が鳴った。
「三、二、一。明けましておめでとうございまーす！。今年も良い年でありますように！」
「新年おめでとうございまーす！」
山路の声に境内の全員が叫んだ。誰ともなく叫んだバンザイに、あちこちで同調したバンザイがはじまった。絵里も両手を上げてバンザイをしていた。何がバンザイなのかよく理解できなかったが、みんなの大声を聞いているうちに身体の中から何かが湧き上がってきていた。頬をとめどなく涙が伝っていた。月丘が、水島夫婦が、太田めぐみが大声でバンザイをしている。
どうして？…。どうしてみんな、こんなにいい人たちばかりなの？…。

絵里はバンザイをしながら思った。

わたしはこんな人たちに囲まれて本当に幸せ。そう思うとまた涙があふれた。その絵里をめぐみが抱き寄せ、頭を何度もなでた。

第１３話　めぐみと月丘

年が明けて一週間が過ぎた。滝川からきて絵里と正月を一緒に過ごしていた太田めぐみは一月四日に滝川に帰っていった。絵里はまたひとりで寮で過ごしていた。

正月に水島夫婦の家で、みんなで一緒に写した写真だけが絵里の机に飾られている。

絵里はその写真を見るたびに、めぐみの表情に出ている陰のある表情が気になっていた。

めぐみが絵里と一緒に写真を写したのはこれが初めてだった。写真の中のめぐみは笑顔を浮かべているものの、決して嬉しいという表情ではなく、むしろ写りたくないという拒絶を思わせる陰があった。

ドアがノックされた。

「はい…」

絵里は返事をしてドアスコープを覗いた。誰かがドアをノックしてもドアスコープで確認するまでは絶対に開けてはいけないと月丘に言われていた。ドアスコープに笑顔の月丘が手を振っているのが見えた。絵里はすぐにドアを開けた。

「先生！。こんにちわ、どうぞ！」

絵里は月丘に椅子をすすめた。

「三時のおやつよ。シュークリームを持ったきたわ。いっしょに食べましょう」

「ワァー、いただきまーす。コーヒー入れますね！」

絵里は満面の笑顔ではしゃぎながら、コーヒーメーカーに新しい粉を準備した。

「先生…」

「なあに？」
シュークリームを食べ、コーヒーを飲んだところで、絵里は正月に水島宅で写した写真を月丘に見せた。
「この写真…。めぐみ先輩、なんだか本心からの笑顔じゃないみたいで…」
絵里は月丘に言った。
「……」
月丘は無言でその写真を見つめた。
「でも、たんなる、わたしの思い過ごしですよね。みんなと一緒で楽しくないはずはありませんもの…」
絵里はそう言って月丘のカップにコーヒーを注いだ。
「そうよ、楽しくないはずがないじゃない。太田さん、あなたと一緒にいると生き生きして、明るくて…。あなたのおかげよ…」
月丘はそう言って絵里を見つめた。
「わたしの、おかげ？…。なにがですか？…」
絵里は月丘を見た。
「そう、あなたのおかげで、太田さんの心が救われたのかも…」
月丘はそう言って視線をテーブルに落とした。
「……」
絵里はじっとテーブルを見つめている月丘を見つめた。
「あなたは人の心の痛みがわかる。その痛みをいっしょに分かち合ってくれる心を持っている…」
月丘はそう言った。そして顔をあげた。
「ねえ、わたしと太田さんの心の痛みと秘密、聞いてくれる？…」
月丘はそう言って、かけている眼鏡をはずしてテーブルに置いた。その目には今までの月丘にはなかった憂いのような光が宿っていた。
北星高校の女番長、あるいは陰の生徒会長として北星高校を陰から支えている太田めぐみ。教師として、生活指導として生徒たちの信頼を集めている月丘恵子。そのふたりのどこに心の痛みがあるのだろうか。わたしと太田さんの、という月丘恵子と太田めぐみのつ

ながりは…。
「わたし、お聞きしないほうがいいような気がします。なんだか怖いです…」
絵里は首を振って月丘を見つめた。
聞かないほうがいいと思った。聞けば大好きな太田めぐみと月丘恵子に対する自分の思いが変わってしまうかもしれない。そんなことは嫌だ。今までどおりの月丘先生とめぐみ先輩の姿が一番好きだ。一番好きなふたりの姿でいて欲しい。それが絵里の本心だった。
月丘は絵里をじっと見つめた。
この子は、自分と太田めぐみの人知れない過去とつながりを知ったら、果たしてどう思うだろうか。
板倉絵里の兄の旭は太田めぐみにひと目ぼれしたという。交際申し込みの手紙を受け取った太田めぐみは、いまだにその返事をしていないと聞く。板倉旭という絵里の兄とは、昨年の授業参観のときに担任として話をしている。絵里の両親もその兄も人間として心から尊敬できる人たちだと確信した。
あの板倉旭ならば、太田めぐみにとっては申し分のないボーイフレンドになろう。その申し分のない相手から交際を申し込まれて太田めぐみが返事をしないでいるのは、おそらく二年前のことがあるからだろうと月丘は思っていた。
「わたしがこの学校に赴任したのは、二年前の四月だった…」
月丘恵子が両手に持ったコーヒーカップを見つめながら話し始めた。絵里は大きく目を見開いて月丘を凝視していた。

月丘恵子が旭川教育大学を卒業後、教員免許を取得して北海道教育委員会から赴任を命じられたのがこの北星高校だった。担任は最初から一年生と決まっていた。その年の新入生五十人の中に太田めぐみがいた。入学試験は満点に近い成績をとり、トップで合格したが、太田めぐみは獣医学科を専攻せず、普通学科に入学した。

太田めぐみは、スタイルもよく身長もある飛びぬけた美少女だった。しかし最初から太田めぐみの表情に、ある種の暗い陰を月丘は感じていた。

入学式が終わったあと、月丘恵子は担任として太田めぐみの両親と面談した。

「あの子は少し変わっています。先生にご面倒をおかけするかも…」

母親の憲子がうつむいて言った。

「わたしが悪いんです。わたしが…」

母親の憲子はそう言って涙をふいた。父親の恵一は妻の肩に手をおいて黙ってうつむいていた。

「その日は、生徒全員の親御さんたちと面談しなければならなかったから、太田さんのお母さまのお話を全部聞いてあげられなかったの。だから、新学期最初の日曜日、わたしは滝川の太田さんのおうちを訪ねたの。太田さんは寮に入っていたから…」

月丘はコーヒーカップをテーブルにおいて立ち上がった。

「あの子は、中学三年の秋までは…。あんなことが起きるまでは、本当に明るくて茶目っ気たっぷりの娘だったんです」

実家を訪ねた月丘恵子に、太田めぐみの母親の憲子は涙ながらに話し始めた。

太田めぐみは、両親と八才下の憲弘と暮らしていた。めぐみは勉強も出来たし弟の憲弘の面倒もよく見る、親としてはどこに出しても恥ずかしくない自慢の娘だった。

あるとき、両親が弟の憲弘を連れてスーパーに買い物に行った。めぐみはひとりで勉強していた。両親がまだ小さい弟を連れて買い物にゆくのはよくあることで、めぐみの勉強の邪魔をしてはいけないとの配慮もあったのだろう。

両親と弟が買い物に出かけて数分が過ぎたころ、玄関のチャイムがなった。めぐみは階段を降りてインターホンでどなたですか、と

訊ねると、来たのは三歳年上で従兄弟の柴田良介だった。父の姉の息子で時々遊びにきていた。
「良ちゃん、いらっしゃい。みんな買い物に出かけてわたししかいないけど、コーヒーでも飲む？」
めぐみはそう言って良介を家に入れた。もともと無口の良介は、めぐみが差し出した食堂椅子に座り、コーヒーを黙って飲んだ。
「ごめん、わたし勉強があるから部屋に行くね。ゆっくりしてて。そのうちにみんな帰ってくるから…」
めぐみは良介にお菓子を出して二階の自分の部屋に戻り、また机に向かった。
しばらくして、めぐみは背後から誰かに見つめられているような気がして振り返った。従兄弟の良介が部屋の入り口に立っていた。
「良ちゃん…。どうしたの？」
めぐみは良介に声をかけた。良介はじっとめぐみを見つめている。その目にめぐみは暗いものを感じた。
「めぐみ、写真とらせろよ…」
良介はそう言って手にもった小型のカメラをめぐみに見せた。
「写真？…。いいけど…」
めぐみは笑って立ち上がった。
「……」
良介は立ち上がっためぐみを暗い目で見つめていた。
「どこがいい？。明るいほうがいいんなら、外でいっしょに写す？」
めぐみは良介に聞いた。
「服、脱げよ…」
「え？…」
めぐみは聞き違いかと思って良介の顔を見た。
「服を脱げって言ってんだよ！」
良介が大声を出した。
「おまえの裸を撮らせろって言ってんじゃねえか！。さっさと裸になれよ！」

良介はそう言いながらめぐみに歩み寄った。
「良ちゃん…」
めぐみは釣りあがった目で近づく良介を、驚きのまなざしで見つめた。
「いや、やめて。お願いだから変なことしないで…」
めぐみは後ろに下がりながら良介に言った。良介はめぐみを睨んだまま近づいた。ベッドに足があたってめぐみは倒れた。そのめぐみに良介が馬乗りになって、めぐみの頬をにぎりこぶしで力任せに数回叩いた。
「いやーっ！」
めぐみは大声で叫んだ。その顔に良介のようしゃないこぶしがあたった。めぐみはそのまま気を失った。
遠くで何かの音が聞こえた。それがカメラのシャッターの音だと気が付くまでしばらくかかった。顔がひどく痛んだ。左目が腫れているらしく開くことが出来なかった。
めぐみは自分が服を着ていないことに気が付いた。下着も脱がされている。何とか見える右目でシャッターの音のほうを見ると、何も着ていないめぐみに向けて良介がカメラのシャッターを押していた。まぶしいフラッシュの光がめぐみの右目にようしゃなく飛び込んでくる。カメラから顔を隠すのが精一杯で、起き上がる力も残っていなかった。
やがてカメラをベッドに投げ出した良介は、裸のめぐみを見下ろしながらあわただしくズボンを脱ぎ始めた。それを見ためぐみは気力を振り絞って身体を起こした。男と女のことをほとんど知らない中学生のめぐみだったが、男の良介がズボンを脱ぐということがどういうことなのか、めぐみは反射的にその意味が飲み込めた。
「助けてーっ！。誰か来てーっ！」
裸のまま立ち上がっためぐみはベッドの向こうにある窓にたどり着くと、いっぱいに開け放って大声で叫んだ。何度も大声で叫ぶめぐみに、良介はあわててズボンをはくと、ベッドの上のカメラを持

って転がるような勢いで階段を降りていった。それを見とどけためぐみは、体から力がぬけて床に座り込んだ。

「……」

絵里は月丘が話す衝撃的な話を言葉も出せないで聞いていた。

あの太田めぐみが、いつもやさしく勉強を教えてくれるめぐみが…。絵里が淋しいときに、いつもいてくれる太田めぐみが、中学三年生のときに、そんなに辛くて悲しい悪夢のような経験をしていた。絵里といるときには、少しもそんなそぶりは見せない。

〈人間って色々な人生を歩むものなの。絵里とわたしの顔が違うように、育った環境が違うように、それぞれが、みんな違う人生があるの。事情もね…〉

寮に入ったとき、太田めぐみは絵里にそう言ったことを思い出した。あのときに見せた太田めぐみの淋しそうな表情は、そのときの辛い体験のせいだったのかもしれない。

「めぐみ先輩…。かわいそう…」

絵里はあふれる涙をハンカチでふきながら小さな声でつぶやいた。その絵里を月丘はじっと見つめている。

「さいわい、レイプはされなかったの。でも、太田さんが味わう本当の悪夢は、まだ始まったばかりだった…」

月丘は天井を見上げて言った。

良介が飛び出してまもなく、悲鳴を聞いたとなりに住んでいる夫婦が飛び込んできて、人形のように座り込んでいる裸のめぐみを見つけた。すぐに救急車が呼ばれ、めぐみは滝川市立病院に運び込まれた。さいわい顔の打撲だけで、腫れは一週間程度で引くと診断された。身体を調べてみたがレイプされた痕跡はなかった。

医師は、めぐみに精神的な障害がないかも検査したが、めぐみの気丈さは医師も驚くほどだった。その裏には、たとえ自分に暴力をはたらき、裸にして写真を撮ったといえども、良介は血のつながっ

た従兄弟だ。良介の名前を出せば、自分の両親ばかりではなく、叔父、叔母にあたる良介の両親に申し訳ない。自分さえ口をつぐんでいればと思う気持ちが、めぐみを気丈にしていたのだった。
入院しているとき、何度も警察が事情聴取に来たが、めぐみは従兄弟の柴田良介のことは口に出さず、家に入ってきたのは知らない男の人だったと証言した。

めぐみは十二日目に退院し、ひさしぶりに登校した。
教室にはいると、大勢のクラスメートがひとかたまりになって何かを見ていたが、めぐみの姿を見ると蜘蛛の子を散らすように自分の席に戻った。めぐみは首をかしげながらも自分の椅子に座った。
「太田が無事退院して、きょうからまた一緒に勉強する。太田、がんばれよ」
担任の鈴木が笑顔で言った。
「はい！」
めぐみは、いまだに残っているショックを隠し、明るい声で返事をした。
そのとき、後ろのほうで「やった！。スゲーな！」という男子の声と、「いやだー！」と言いながらクスクスと笑う数人の女子の声がした。振り返ると、一番後ろの机にいる男子の坂上と草野が、手に持った物とめぐみを交互に見ながら笑っていた。
「坂上、草野。なにを笑ってる！」
担任の鈴木がツカツカと坂上の机まで行き、持っていたものを取り上げた。坂上から取り上げたものを見た鈴木は、めぐみとそれを見比べてあぜんとしている。
「こんなものをどこから持ってきた！。草野、おまえが持ってきたのか！」
鈴木の声が教室に響いた。
「中央高校の先輩からもらったんだよ。まだたくさんあるって言ってたぜ…」

草野が鈴木を見上げながら言った。鈴木は大きなため息をついた。そしてＰＴＡからの抗議を覚悟で、持っていた差し棒を振り上げると草野と坂上の頭を激しく叩いた。教室の中がしーんとなった。草野と坂上は叩かれた頭を押さえて鈴木をにらんでいる。

「太田がかわいそうだと思わないのか！」

鈴木は怒りで身体をふるわせながら怒鳴った。

「みんな、しばらく自習してろ！。太田、先生といっしょにこい…」

鈴木に言われて、めぐみはなにがなんだか理解できないまま、鈴木について教室から出た。鈴木は使われていないことを確かめ、めぐみを保健室に入れた。

「ここに座れ…」

鈴木はめぐみを椅子に座らせた。

「太田…」

鈴木はめぐみの向かいの椅子に腰をおろし、じっとめぐみを見つめた。

「かわいそうに…。太田、気をしっかり持つんだぞ」

鈴木は坂上から取り上げたものをめぐみに渡した。それを見ためぐみの顔から血の気が引いた。鈴木が手渡したのは一枚の写真だった。それは、気を失っている間に従兄弟の柴田良介に写されたためぐみの裸の写真だった。その写真には、ようやくふくらみかけた胸も、大人になりきらない下半身までもがはっきりと写っていた。

「太田…」

ぼう然と写真を見つめるめぐみの肩に、鈴木はそっと手をおいた。

めぐみに見せることなく写真を破り捨てようとも思ったが、同じような写真が滝川じゅうの学校にバラまかれているとしたら、いずれはいやおうなしにめぐみの目にもはいる。それが早いか遅いかだけのちがいだ。どんなに慰めようとも、心に傷を負うのはめぐみ本人だ。教師といえども、めぐみが負った心の傷はどうにもしてやれない。

めぐみを見つめる鈴木は、痛いほど唇をかみ締めた。

「気を失っている間に写された太田さんのあられもない写真が、パソコンで印刷されて滝川の男子高校生の間で大量に出回っていたの…。従兄弟の人がやったのね…」
月丘は立ち上がって窓の外を見ながら言った。外はすでに暗くなっていた。絵里はうつむいたまま何度も首を振った。涙と鼻水が次々と床に落ちた。それを見た月丘がティッシュペーパーを数枚とって絵里の手に握らせた。
「それからの太田さんの地獄の苦しみは…。言わなくてもわかるでしょう?。一時は学校にも行かなくなって、ご両親とも何度もけんかしたそうよ。それでも、とにかく中学だけは卒業するように、お母さまが泣いて太田さんを説得して、やっと卒業だけはしたわ。そして太田さんは、家族や親戚からも、生まれ育った滝川からも逃げるように、この北星高校に入学したの…」
月丘は窓から振り返って絵里を見つめた。絵里は涙が乾燥して突っ張る顔で下をうつむいていた。
「あんなことがあった後も、太田さんは卒業するまで学校には通い続けたのね。周りからは変な目で見られたでしょうに。毎日がどんなに辛かったか…」
月丘はそうつぶやきながら暗い窓の外を見ていた。

第１４話　そして月丘は

「入学したころの太田さん、手が付けられない不良だったわ。いつも伸び縮みする特殊警棒とかいう鉄の棒を持っていて、服装が自由なのをいいことに、髪の毛は金髪に染めて、どぎつい化粧はしてくるし、下着が見える派手なミニスカートをはいてくるし。入学して間もないのに、二年生や三年生を相手にけんかはするし…。でも、学校を休んだことは一度もなかったわ。とんでもない不良だったけど、成績だけはいつもトップだった…」

そう言って月丘はふと笑った。

そのとんでもない不良が、今では月丘や教師たちから陰の生徒会長として絶対の信頼を受け、北星高校にはなくてはならない存在となっている。

絵里は、学校祭のＹＯＳＡＫＯＩ・ソーランの踊りのため、リーダーの新山亜希子から言われたとおりの化粧をしていたのを、めぐみが見て驚きの表情をしていたのを思い出した。その理由がいまわかった。めぐみは絵里の化粧を見て、手のつけられない不良だった頃の自分を思い出したのだろう。

太田めぐみは手のつけられない不良少女だった。担任の月丘の言うことなどまったく聞かず、何度となく注意する月丘を、どぎつい化粧をした目で睨みつけた。

「月丘。てめえ、あたしのすることに、いちいちグダグダぬかすんじゃねえよ！。みっつにたたんで金山湖に沈めちまうよ！」と、食ってかかるしまつだった。

太田めぐみは百六十センチを超える身長がある。その太田めぐみに睨まれたら、三年生の男子でも、ひとりでは太刀打ちできない迫力があった。ましてや月丘は北星高校に赴任したばかりの新任教師で、一方の太田めぐみは、男子の三年生を相手にタイマン（一対一

の喧嘩）を張っても相手をたたき伸ばしてしまう百戦錬磨の不良だ。月丘が力ずくで何とかできるような相手ではなかった。
校長や教頭、ほかの教師からも太田めぐみの処分について、何度も月丘に打診があったが、月丘は、もう少しだけ時間を…。何かあったときの責任はわたしが、と、校長と教頭に頭を下げ続けた。
その太田めぐみは、時々ひとりで金山湖の湖畔にたたずんでいた。じっと湖を見つめている太田めぐみの後ろ姿に、月丘恵子は一抹の不安を感じていた。
太田めぐみのことが気になっていた月丘は、常にめぐみから目を離さなかった。心の中で自分自身と葛藤している別の太田めぐみがいることを月丘は察していたからだ。まかり間違えば、太田めぐみは自分の手で自身を滅ぼすかもしれなかった。
月丘は、自分が高校生だった頃を頭に思い浮かべた。自分とて、中学校のときはともかく、高校生活は決して平坦なものではなかった。手の付けられない不良と化している太田めぐみが、自分の高校生の頃とオーバーラップして、それがとても辛かった。
ひとりの男が月丘を訪ねてきた。
「太田は心に傷を負っています。いきがってはいますが、あれは本当の太田の姿じゃないんです。あいつは弟おもいで、家族おもいのいいやつです…」
月丘を訪ねてきたのは、中学の担任だった鈴木真一だった。
鈴木は、家族と喧嘩したまま滝川から南富良野の北星高校に入学しためぐみを心配して月丘を訪ねてきたのだった。
「太田の潜在能力は、計り知れないものがあるとぼくはみています。その能力を、ぼくは育ててやることができなかった。それが一番の悔いです…。どうか太田を…」
鈴木はそう言って月丘に頭を下げた。
「先生…」
月丘は頭を下げる鈴木を見つめた。
「わたくしは、ことし赴任したばかりの新米です。でも、太田さん

を受け持ったのも何かの縁でしょう。なにができるか、わたくし自身にもわかりません」
月丘は言った。
「教師という仕事が、わたくしにとって向いているのか、そうじゃないのか…。わたくしにとっても試練になりそうです」
月丘はそう言って鈴木に右手を差し出した。鈴木は無言で月丘の手を握り返した。
見れば、自分とさほど年齢が変わらないであろう鈴木という教師だった。
手を離れた生徒をもこれほど心配する鈴木という教師。自分もこれほどまでに生徒の心に入り込めるだろうか。
思い起こせば、自分が恩師と仰ぐ高校のときの担任は女性教諭だったが、この鈴木教諭と同じようなタイプだった。いつもは沈着冷静を絵に描いたような女性だったが、いざ問題を抱える生徒のためなら、毎日でも家庭を訪問するような熱血教師だった。
やってみる。
鈴木と握手をしながら、月丘はそう決心した。

ある日のこと、消灯準備のために宿直の月丘が寮に入ると、太田めぐみの部屋から大声で騒ぐ声が聞こえてきた。太田めぐみは手のつけられない不良だ。ほかの女生徒が恐ろしがって同室を拒んだため、ひとりで部屋を使っていた。
月丘はいったい何事かと部屋をノックした。ノブを回しそうとしたが中から鍵がかかっている。数人がもみ合うような声がする。男の声も聞こえる。月丘は急いで予備鍵の輪からめぐみの部屋の鍵を出してドアを開けた。
中では三人の男子生徒が太田めぐみを床に押さえつけていた。服を全部脱がされて素っ裸にされた太田めぐみに、下半身裸になった男子生徒が、両手でめぐみの胸をわしづかみにしながら覆い被さろうとしていた。大きく広げられためぐみの両足は二人の男子生徒に

しっかり押さえられている。太田めぐみは全身でもがきながらも両目をカッと見開いて、いまにも自分をレイプしようとしている男子生徒を睨んでいた。
「やめなさい！」
月丘恵子は大声で叫んだ。
「うるせえ！。先公なんか引っ込んでろ！。このやろう、ずっと前からやってやろうと思ってたんだ！」
めぐみをレイプしようとしているのは、素行不良として教師からマークされていた三年生の五十嵐浩太。広げた太田めぐみの足を押さえているのは、五十嵐浩太といつも行動を共にしている吉田太一と岩本和也のふたりだった。その騒ぎに寮の女生徒たちが集まってきた。
「キャーッ！」
中の様子を見て女生徒たちが悲鳴をあげた。
月丘は壁に立てかけてあった折り畳みのパイプ椅子を持ちあげ、めぐみに覆い被さっている五十嵐浩太の背中に力いっぱい打ち下ろした。五十嵐浩太の背中でバウンドした椅子は、激しい音とともに壁にあたって床に落ちた。五十嵐浩太はうめき声をあげてうずくまった。
「やめなさいと言っているのがわからないの！」
月丘は、椅子があたってうずくまった五十嵐浩太と、めぐみの足を押さえているふたりを押しのけて太田めぐみに駆け寄った。めぐみは噛み付きそうな目で三人を睨んでいる。月丘はベッドの毛布で、めぐみの体をすばやく覆った。
「このクソ先公！。もう少しのところを邪魔しやがって、ただじゃおかねえぞ！」
五十嵐浩太は、月丘が打ち下ろした椅子でいためた背中を伸ばしながら、立ち上がって月丘を睨んだ。
月丘はスッと立ち上がると、いきなり五十嵐浩太の頬を平手で思い切り叩いた。パーンという音が部屋に響いた。同時に、パンツを

はいていない五十嵐浩太の急所を膝で力いっぱい蹴りあげた。五十嵐浩太がギャッと悲鳴を上げ、蹴られた急所を両手で押さえて前のめりに倒れた。あぶら汗を出してうずくまりながら月丘を睨んでいる。

「わかったわ！。そんなに女とやりたいなら、先生がやらせてあげる。十五や十六の小娘より、大人の女のほうが、ずーっとやりがいがあるわよ！。ただし、覚悟はできているんでしょうね！」

月丘は五十嵐浩太とほかの二人を睨みながら、かけていた眼鏡をはずし、鮮やかに刺繍されている花模様のブラウスと紺のスカートを一気に脱いだ。そして迷うことなくブラジャーをはずすと、うずくまっている五十嵐浩太の顔に投げつけた。ストッキングとパンツもいっしょに脱ぎ、それも力いっぱい投げつけた。

「さあ、これが大人の女よ。やれるものならやってごらんなさい！。親に扶養してもらっているションベンくさい高校生なんかに興味はないけど、このさい、あんたたちに、しっかりと実地の性教育をしてあげるわ！」

月丘は全裸のままで前を隠そうともせず、仁王立ちで両手を腰に当てたまま三人を睨みすえた。その月丘の迫力に三人の男子生徒は顔色を失った。

「ここです！」

誰かの声とともに北星駐在所の七瀬巡査長が飛び込んできた。

「先生、だいじょうぶですか！」

七瀬が月丘とめぐみに聞いた。

「だいじょうぶです。ありがとうございます…」

月丘は、めぐみを抱きしめたまま七瀬に答えた。

ほかの女生徒が、抱き合っている月丘とめぐみの身体にシーツをかけた。月丘恵子は、五十嵐浩太たちが七瀬に両手を縛られて連れてゆかれるのを見て、身体の力が一気に抜けて気を失い、その場に崩れ落ちた。

気が付くと、月丘はめぐみのベッドに寝かされていた。身体にシ

ーツがかけられ、額には冷たいタオルがのせられている。
「月丘、気が付いたかい？」
太田めぐみが心配そうに月丘の顔を見ている。太田めぐみも裸の身体を毛布で覆ったままだった。
「太田さん…。なんともなかったの？」
月丘はめぐみを見上げて聞いた。
「うん。いろいろ触られちゃったけど、やられちゃいない。間一髪のところだった。月丘のおかげで助かったよ…」
そう言った太田めぐみに、月丘は安心したようにため息をついた。そしてシーツがずり落ちて露わになった胸も気にせず、月丘はゆっくりと身体を起こすと、両手で太田めぐみの頬を包んでその目をじっと見つめた。
「どう？。わたしだって、ちょっとしたもんでしょう？」
月丘はめぐみを見つめてそう言った。その月丘をめぐみがじっと見つめた。
「みんな、ありがとう。面倒かけたね。もういいよ。部屋に戻りな…」
太田めぐみは、心配そうに部屋に残っていた女生徒たちに言った。女生徒たちは黙って部屋を出て行った。そのとたん、めぐみはあらわになったままの月丘恵子の胸に顔を伏せて大声で泣き出した。今まで強気なところばかりを見せていた、手が付けられない不良の太田めぐみが大声で泣いていた。月丘の目にも涙があふれていた。自分の胸にしがみついて泣く太田めぐみの頭をなでながら、その月丘も声をあげて泣いた。
服を着た月丘と太田めぐみがベッドに座っていた。太田めぐみはまだ泣いている。
「みんなね…」
月丘は、めぐみの肩を抱いて前を見たまま言った。
「みんな、悲しいことや、人に知られたくないようなことに、たくさん包まれて生きていると思うの…」

月丘はそう言ってめぐみの横顔を見つめた。
「悲しくて悲しくて、泣き出したくて…。それを必死で我慢して…」
「……」
「感受性が強い中学生や高校生のころって、毎日が泣き出したいことばっかりで…。青春って言えば聞こえはいいけど、まさに字のごとく、青い春。雨が降ったり雪が降ったり、すごく暖かいって日があると思うと、次の日は極端に寒くなったり。まだまだ夏にはなり切れない、とても不安定な季節。それが青春…」
月丘は笑顔で言った。
「太田さんも、その不安定な季節の中にいるのよね…」
月丘はそう言うと、めぐみの頭を抱いた。
「あなたが今までしてきた事を、わたしは否定はしないわ。でも、たとえ自分の意思でこの世に生まれたんじゃないにしても、やっぱり、太田めぐみという、ひとりの人間の人生なんだもの」
月丘は、自分をじっと見つめるめぐみから、窓の外に視線を移した。
「ただ、あなたのご両親もそうだけど、わたしも担任の教師として、自分の娘や教え子を、少しでもその子の将来の人生を、いい方向に持っていけるようにアドバイスするだけなのよ。そうでしょう？。先生って、先に生まれたって書くでしょ。別に偉くもなんともないの。ただ、あなたたちより少し早く生まれて、たった九年か十年だけど、わたしなりに、喜びや悲しみや、いろいろな挫折の中で、世の中で生きてきた経験があるだけ…」
月丘はそう言って窓の外を見つめている。
「……」
その横顔を、めぐみはじっと見つめていた。
「どんな生き方だっていいのよ。ただね。何年か何十年かたって、何かのひょうしに自分が今まで歩いてきた人生を振り返ったとき、後悔だけは絶対にしてほしくない…。自分は一生懸命に生きた。がんばって生きた…。今までの人生は幸せだったって、そう思えるよ

うな人生を歩んでほしいのよ。あなただけじゃないわ。生徒みんなにそう願ってる…」
月丘は言った。
「五十嵐くんたちは、きょうのことで自分たちの人生に汚点を付けてしまって気の毒なことをしたけど、いつか北星高校の卒業生が…。わたしが受け持った生徒たちが、何年か何十年後かに、わたしは最高に幸せ。俺も最高に幸せだよって、いっぱいの笑顔で訪ねて来てくれたら、どんなにわたしも幸せかな、なんて。時々そんな夢を見るわ。それがわたしの願い…」
月丘は、めぐみを見つめた。めぐみの目からは大粒の涙が次々とこぼれ落ちている。月丘は、とうとう声を上げて泣き出しためぐみの肩を抱いた。
「太田さん。あなた、番長になりなさい。番長になって、この北星高校を仕切りなさい。ただし、今までのような、ただの不良じゃだめ。正義の味方になってこの学校を仕切るのよ。ワルの道に走るより、正義の味方のほうが太田さんには似合うわ」
月丘は泣きじゃくる太田めぐみの肩を抱いてそう言った。
「わかったよ月丘。あたし、きょうから正義の味方になる。今までのあたしは捨てる。いままで逆らってばかりでごめん…」
めぐみは、涙でぬれた顔をあげて月丘恵子を見つめた。
太田をお願いします。そう言って頭を下げた鈴木教諭の顔が月丘の頭の中に浮かんだ。
やがて、誰がつけたかは知らないが、月丘恵子は生徒たちから〈花吹雪のお恵〉と呼ばれるようになっていた。
「その日から太田さんは、手のつけられない不良から一変して、正義の味方になったってわけ。北星高校の風紀と治安をおさめる、一年生のスケ番が誕生したの…。わたしたち教師が、ああしろとかこうしろとか太田さんに言っているわけじゃないのよ。彼女が自分の判断で、必要だと思ったら行動するだけ…」

月丘は自分を見つめている絵里を振り向いた。
「アハハ…。そういえば、事件があった次の日にね…」
月丘は手を叩いて、何かを思い出したように笑った。
「寮から出てきた太田さんを見て、学校中が腰を抜かしたわ。金髪をやめて髪型はポニーテール。派手なミニスカートもやめて、北星高校のセーラー服を着ていたの。喧嘩は鉄の棒から素手になったわ。ただし、目に釣り上がり気味の黒のアイシャドーを入れて、その黒いアイシャドーに真っ赤な縁取りを入れてきたのには驚いたけどね…。あの目でにらまれたら、たいていの不良は怖気づくわ。紺のセーラー服を上手に着こなして…。あのころの太田さんは迫力があった…」
月丘は二年前を思い出しながら言った。
「いまでは全校生徒も太田さんのことを知っているから、誰も逆らう人はいないけど…。彼女は、〈アイシャドーのめぐみ〉って呼ばれて、空知管内のワルたちから恐れられている伝説の女番長よ。それに、あの子は身長があってスタイルもいいから、セーラー服がとっても似合うのよね。あなたもだけど…」
月丘は笑顔を浮かべて絵里を見つめた。
「彼女、学校が休みのとき、滝川の実家に帰ることが多いんだけど、そのときには伝説のスケ番〈アイシャドーのめぐみ〉になって空知管内を見回っているらしいの。それが自分の使命だと考えているのね」
月丘は窓の外を見つめて言った。
「太田さんの写真嫌いは、きっと、中学生のときの忌まわしい思い出があるからだと思うわ。でもね。太田さんは、あなたと知り合ってからすっかり変わった。あなたの天真爛漫さが、少しずつ太田さんのかたくなだった心を溶かしているみたい。太田さんは、もともと笑顔のきれいな心のやさしい人なの。わたしも太田さんにはベタ惚れだけど、板倉さんのお兄さん。太田さんに惚れるなんて、さすがに目が高いわね」

「……」
絵里は黙ったまま月丘の話を聞いていた。じっと絵里を見つめていた月丘は、立ち上がって絵里の肩を軽く叩くと、おやすみなさい、と言い、眼鏡を持って部屋を出て行った。
「めぐみ先輩。先生…」
月丘が部屋を出たあと、絵里はテーブルの写真を見つめてつぶやいた。
月丘恵子の話は絵里にとって衝撃だった。二度もレイプされそうになった太田めぐみ。そして手の付けられない不良少女への転落。その太田めぐみを救った月丘恵子。自分には次元の違いすぎる話だった。
人生経験が違いすぎると絵里は思った。生き地獄の底であえいでいた太田めぐみと、そのめぐみの心を地獄の底から救った月丘恵子。そのふたりだからこそ、他人に対する思いやりと心の広さで人に接することができるのだ。
太田めぐみは伝説の女番長として、陰の生徒会長として、全校生徒から信頼され慕われている。月丘恵子も、教師として、また生活指導教諭として、同じ修羅場をくぐりぬけてきたからこそ、学校の風紀と治安をまとめられる度量があるのだ。
〈あなたは人の心の痛みがわかる。その痛みをいっしょに分かち合ってくれる心を持っている〉と月丘は絵里に言ったが、人の心の痛みを理解し、それを分かち合う心をもっているのは自分などではなく、月丘恵子と太田めぐみだ。自分はそのふたりに抱かれながら幸せな高校生活を送っているのだ。
「月丘先生もめぐみ先輩も、とっても素敵。ますます好きになっちゃった！」
絵里はみんなで写っている写真に唇をつけた。
太田めぐみを、こんどこそは本心から笑顔で写真にうつるようにしてみせる。そして、兄の旭とめぐみの愛の掛け橋になる。絵里はそう決心した。

第１５話　１６歳

「月丘先生、二番に電話です」
二月に入ったある日のこと、北星高校の教員室に一本の電話がかかってきた。
「はい、月丘です」
月丘は、マッスル井上こと保健体育の井上教諭から回された電話に出た。
「まあ！、ご無沙汰しています。みなさんお元気ですか？。その節はどうも…」
月丘は笑顔で数分間電話の相手とやり取りしていたが、「ぜひ前向きに検討させていただきます」と言って受話器を置いた。
その日の午後、緊急の職員会議が行われた。
「…という電話がありました。校則では、生徒同士の、となっておりますが、これは外部の。いいえ、北星への全面協力と支援をしてくださる方々からのお申し出です。お断りするのは失礼ですし、生徒たちも喜ぶのではと思います。校長先生、みなさん。ぜひ前向きにご検討をお願いいたします」
月丘恵子は、三宅校長以下の教師に電話の内容を詳しく伝えた。
「私はありがたい申し出だと思う。江島区長も喜んで全面支援をするだろう。みなさん、この申し出は喜んで受け入れようではありませんか！」
三宅校長の言葉に全員が拍手で賛成した。

二月十四日、Ｓｔ・バレンタインデーの日、北星の各家庭では朝から大掃除が始まっていた。理由は、十四日の夕方から北星高校の女子寮に入っている生徒五十八人を、それぞれの家でひと晩あずかることになったからだった。寮の女生徒たちにはひと晩のホームス

ティ体験学習だと伝えている。その一環として十四日の夕方六時から金山湖で花火大会を予定していて、生徒たちは、それぞれホームスティしている家の人たちと一緒に見にゆくことになっていた。

北星高校では、校則によってバレンタインデーやホワイトデーでの生徒同士のチョコやお菓子の交換は禁じている。風紀の乱れを防ぐためだった。プレゼントの交換が許可されているのは生徒の誕生日だけで、そのプレゼントも生活指導教諭である月丘恵子が確認のうえで行われていた。

その前の日の二月十三日は絵里の十六歳の誕生日だった。その晩、生徒たちからの誕生日のプレゼントで、食堂のテーブルが山のようになった。すべて生活指導の月丘の許可を得たものだ。

プレゼントは税込みで千円以下の小物だけと決められ、大きなケーキやお菓子は禁じられている。ただし手作りのものにかぎり、大小には関係なくＯＫがでる。

絵里は入学して以来、全校生徒の誕生日を把握し、「ほんの真心でーす！」と言いながら同級生や上級生に小さな贈り物をしていた。そのお返しが一度にきたのだった。

絵里は月丘やほかの教師を食堂に呼び、寮の女生徒たちとプレゼントされたお菓子をみんなで食べた。半分は男子寮に差し入れした。そうしないと食べきれないほどの量だったのだ。

太田めぐみからは、滝川に帰るたびに少しずつ編んでいたという毛糸のオレンジ色のマフラーを贈られた。

「あんたに風邪ひかれたんじゃ、あたしにもうつっちゃうからね」

絵里の首にマフラーをかけるめぐみに、絵里は満面の笑顔で抱きついた。

二月十四日、授業が終わると、生徒たちによって女子寮が掃除され、五十八人の女生徒たちは北星の各家庭にあずけられた。めぐみと絵里は駅前の水島夫婦の家に世話になることになった。

「なんか変だよね…。今ごろ花火大会だなんて聞いたこともないよ。ましてやホームスティだなんて…。寮の掃除までさせてさ…。先公たち、何たくらんでんだか…」
めぐみは水島宅で晩ご飯を食べながら絵里に言った。
「こんなこと、初めてなんですか？」
絵里はめぐみに聞いた。
「初めてだよ。だから変なんだ…。まあいいさ。どうせ派手好きな区長が考えたんだろうけど、冬の花火もなかなかオツなもんだ。見物しに行こうじゃない」
めぐみは笑って言った。水島夫婦はめぐみと絵里の会話には入らず、つとめて違う方向に話題をもっていこうとしていた。アキヨは、疲れるねー、という表情で玄作を見た。その玄作も酒を飲みながらアキヨに小さくうなづいた。

午後六時、めぐみと絵里は水島夫婦と一緒に花火大会の会場となっている雪の金山湖に向かった。湖畔には、すでに大勢の生徒や北星の住民が集まっていた。空にはキラキラと星がまたたいている。気温が下がって寒いせいか、あちこちでにぎやかな酒盛りが始まっていた。
「これじゃ、まるでお祭りさわぎだわ…」
めぐみはあきれた表情で笑い出した。
「いいじゃないですか。お祭り大好きです！」
絵里がそう言って水島夫婦を見た。首にはめぐみからプレゼントされたオレンジ色の毛糸のマフラーを巻いている。白い息を吐いて笑う絵里に水島夫婦も笑顔を返した。
「ねえ、あのバス、なんだろう？」
めぐみは、会場の入り口から百メートルほど離れた場所に止まっている二台の大型バスを指さした
「みなさん、大変お待たせいたしました。ただいまから北星地区の花火大会を開催いたします」と、会場に据付けられたスピーカーか

ら江島区長の声が流れてきた。
ヒューーーン、と音がして、金山湖の上で一発目の花火が大きく開いた。会場からワーッという歓声がわいた。それを合図のように次々と花火が打ち上げられ、雪の金山湖が真昼のように明るくなった。絵里とめぐみも歓声をあげながら次々と大輪の花開く花火を見ていた。
「先輩！」
絵里はめぐみの前に小さな紙包みをさしだした。きれいにトッピングしてある。
「なによ、これ…」
めぐみは受け取った紙包みと絵里を見比べた。
「ほんとは明日にしようと思ったんですけど、せっかくきれいな花火が上がっていますから、この場で…。めぐみ先輩、一日早いですけど、お誕生日おめでとうございます！。わたしの真心が詰まってます！」
絵里は笑顔でめぐみに頭を下げた。
「こいつめ。場所を選ぶなんて、なかなかやるもんじゃないか」
めぐみはそう言って絵里の頭をなでまわして紙包みを開けた。中から真っ赤な皮手袋が出てきた。

「お願いします！。大好きな先輩のお誕生日のプレゼントなんです。きょう一日、お掃除でも食器洗いでも、おっしゃることは何でもしますから…」
道の駅〈星の降る里・北星〉の支配人に何度も頭を下げて頼みこみ、定価一五〇〇円の皮手袋を、税込みで九九九円におまけしてもらったのだ。頭を下げて両手を合わせて支配人と交渉する絵里の姿を、店員たちは笑って眺めていた。
「店長、区のアイドルに冷たくしたら、もう誰も来てくれなくなりますよ。かわいい女の子を泣かすなんて、最低！」

店員たちは口々に叫んで笑顔の絵里に拍手した。
「そうよそうよ！。絵里ちゃんのポスターのおかげで、お客さんが三倍以上に増えたんですよ。ポスターなんか、貼ったらすぐに持っていかれるくらいの人気で、三百枚も増刷したんですから。ちょっとおまけするくらい、いいじゃないですか！」
女店員のひとりが支配人に言った。
「だれも、おまけしないなんて言ってないじゃないか。そんなに俺を責めるなよ…」
支配人は、店員たちと絵里を交互に見ながらため息をついた。
「ありがとうございます！」
絵里は満面の笑顔で支配人に頭を下げた。
「かわいい子には、やっぱり弱いよ…」
支配人の言葉に、店員たちは歓声を上げながら拍手した。
絵里は、「手伝いなんかしなくてもいいから」と言う支配人に、どうしてもやらせてください、と強引に頼み込み、三時間ほど店の手伝いをした。
絵里がいるだけで、道の駅は花が咲いたように明るくなった。スキー帰りに立ち寄って食事をする客も、セーラー服姿で嬉しそうに注文を受けたり、出来た料理を笑顔で客のテーブルに運ぶ絵里に親しげに声をかけてきた。支配人や店員が、店のあちこちに張られているポスターの少女だと紹介すると、客は絵里と握手したり一緒に写真を撮ったりと、道の駅〈星の降る里・北星〉はいつもとは違うにぎやかさに包まれた。
領収書と品物を差し出し、嬉しそうに事情を話す絵里に、月丘はあきれて笑い出した。たしかに千円以下とは決められているが、千円以上の物を値引きしてもらってはダメという決まりはなかったのだった。
「へエー。あたしの好きな色だ。ありがとう絵里！。さっそく使わせてもらうよ」

めぐみは、それまではいていた毛糸の手袋をはずすと、絵里にプレゼントされた真新しい真っ赤な皮の手袋をはめた。
「どう、あたしにぴったりだ。似合うかい」
めぐみは笑顔で絵里と水島夫婦に両手を見せた。
「絵里ちゃん、とってもセンスがいいじゃないの。女らしくなっためぐみちゃんにピッタリだねー」
アキヨが目を細めてふたりを見つめている。玄作も何度もうなずいている。
「絵里、ありがとう！」
めぐみはそう言って絵里を抱き寄せ、頬に唇をつけた。そのふたりを祝福するように次々と打ち上げられる花火が夜空をあざやかに染めている。
その金山湖の、いつもはスケートリンクになっている場所に、何のためなのか緑色の人工芝が敷き詰められているのが絵里の目に映った。人工芝の真ん中にスタンドマイクが置かれている。
次々と打ち上げられる花火が、北星の夜の空をあでやかに染めていた。十分ほど花火が続いたところで、いったん休止します、との江島区長の声が入り、あたりは真っ暗になった。そしていつ据え付けられたのか、数十基の照明が氷上に敷かれている人工芝に向けて一斉に点けられた。その照明の中に立っている数十人の人影が浮かび上がった。
「北星のみなさーん、こんばんわーっ！。北星名誉区民のレディース・バイオでーす！」
スピーカーから大声で叫ぶ新山亜希子の声が聞こえてきた。
「うそっ！」
絵里は大きな目を見開いて叫んだ。めぐみもあぜんとして、あでやかな衣装に身を包んで氷上に並んでいるレディース・バイオを見つめていた。あまりにも突然のことに会場はあっけにとられていた。
「みなさーん、どうしたんですかーっ！。私たちをお忘れですかーっ！。キツネさんにほっぺをつままれたような顔をしてらっしゃい

ますよーっ！」
会場に新山亜希子の明るい声が響き渡った。その声を合図のように、ウォーッという歓声と大きな拍手がわいた。
「一曲目、踊りまーす！。みんな、用意はいいかーっ！」
「ヨイヤサーッ！」
「花火に、負けないぞーっ！」
「セィヤーッ！」
「みんなの熱気で、氷を溶かすぞーっ！」
「ヨィヤサーッ！」
新山亜希子のかけ声にレディース・バイオの踊り子たちが身構えた。
絵里はまだ口を開けたままぼう然としていた。目の前で確かにレディース・バイオがＹＯＳＡＫＯＩを踊っている。幻ではない。現実にレディース・バイオの仲間たちだった。
「セイヤーッ！」
「ヨーッ、ドッコイショッ！」
「ヨイヤサーッ！」
威勢のいい掛け声が金山湖の氷上に響いている。
「太田さん！」
突然後ろから月丘恵子が声をかけた。
「先生、いったいどうなってんの？」
めぐみは月丘をふりかえった。月丘恵子は満面の笑顔で、いまだにぼう然と仲間たちの踊りを見つめている絵里とめぐみを見ている。
「きょうはバレンタインデーでしょう。きのうは板倉さん、明日は太田さんのお誕生日…。あなたたちふたりのお誕生日と、男子にバレンタインデーのチョコレートを持ってお邪魔したいって、先週、新山さんからお電話を受けたのよ。その結果が、これ…」
月丘は白い息を吐きながら笑顔でふたりを見つめた。
「女子寮を空にして、掃除してもらったわけもこれでわかったでしょう。あの人たちが宿泊するためだったの！」

月丘はあっけにとられている二人に言った。
「……」
「……」
「さあ太田さん、これを履いて…。預かっていたあなたの靴よ！」
月丘恵子は、めぐみに真っ赤なスケート靴を差し出した。
「お願い！。久しぶりに、あなたのスケートを見せてちょうだい」
月丘はめぐみに言った。
「先輩、スケートが得意なんですか？」
絵里はめぐみを見上げて言った。めぐみは月丘から渡された赤いスケート靴を持って大きくため息をついた。
「板倉さんは知らないでしょうけど、太田さんはフィギアスケートの達人なの。わたしも一度しか太田さんのスケートは見たことがないけど、太田さんは足が長くてスタイルがいいでしょう。それはそれは素晴らしくてきれいよ！」
月丘はめぐみを見つめながら言った。
「わかった、やるよ…」
めぐみは笑って月丘を見つめ、絵里をふりむいた。
「絵里、最初で最後のあたしの滑り。絵里へのバースデープレゼントだ。しっかり目を開けて見てなよ！」
めぐみは絵里の肩に手を置いて言った。
「はい！」
絵里は大きくうなずいた。めぐみはその場でスケート靴を履いて身体の屈伸運動と、手前の氷の上で何回かスピンの練習を始めた。めぐみの額にうっすらと汗が光っている。
「太田さん、曲は例のやつよ。準備はいい？」
月丘がめぐみを振り返った。
「いつでもいいよ！」
めぐみはそう言って、絵里からプレゼントされた真っ赤な皮手袋をはめて大きく深呼吸した。月丘は氷上の人工芝の上でマイクを持っているレディース・バイオの新山亜希子に両手で丸を作って合図

を送った。
「会場のみなさーん。ここで、きょうのスペシャルゲストをお呼びいたしまーす！」
二曲目を踊り終わったレディース・バイオの新山亜希子がマイクに叫んだ。
「知る人ぞ知るフィギアスケートの花。北星高校三年生の太田めぐみさんです。太田さーん、お願いいたしまーす！」
新山亜希子の声に、数基の照明がめぐみに集まった。めぐみはまた深呼吸した。そして絵里と月丘を振り返ってほほえみ、両手を広げ、ゆっくりと氷上に滑り出していった。照明にあたるスケートのエッジがキラキラと光っている。背中に白い大きな蝶の模様が入っている真っ赤なスキーウェアーの上着と、白いスキーパンツ、赤いスケート靴をはいた太田めぐみがリンクの真ん中で止まった。照明の中にめぐみの姿が浮き上がっている。
雪明りに包まれた金山湖に、アダモの〈ブルージーンズと皮ジャンパー〉の曲が流れた。その曲に乗ってめぐみが氷上をゆっくりと滑走しはじめた。
めぐみはリンク狭しとスケートを操り、駒のようにスピンし、そして蝶のように舞い、鶴のように片足で回転して着地し、氷上で華麗なスケーティングを披露した。そのたびに大きな拍手と歓声がわいた。数基の照明がめぐみの動きを追い続けている。
絵里はまばたきもせずに氷上で舞うめぐみの姿を見つめていた。絵里がプレゼントした真っ赤な手袋が照明に映えている。アダモの曲にのって照明を浴びながら、たった一人で舞うめぐみの姿に、絵里の胸は熱くなった。
太田めぐみは美しかった。それはまるで、一羽のタンチョウが空から北星に舞い降りたかのように幻想的だった。そのタンチョウが照明の中で優雅に舞っていた。見ている人たちは氷上で華麗に舞う太田めぐみに魅せられていた。
「先輩、すてき…」

絵里は月丘と顔を見あわせた。
そしてめぐみの舞は終わった。ポーズをとってお辞儀をするめぐみに、見ている人たちが惜しみない拍手と歓声を送った。ピーピーと指笛も鳴っている。
「太田めぐみさーん。素晴らしいフィギアスケートの演技をありがとうございました。とってもきれいで優雅で、胸が熱くなるくらい感動しました。そして、あすで十八歳になる太田さん、お誕生日、おめでとうございまーす！」
新山亜希子は照明の中に立っている太田めぐみに言った。めぐみは口に両手を当てて照れていたが、笑顔で両手を上げて振ると、また大きな拍手と歓声がわきあがった。
「みなさーん。実は、わたしたちレディース・バイオのアイドル、板倉絵里も、きのうが十六歳の誕生日でした。わたしたちは、板倉絵里と太田めぐみさんの誕生日を祝うと同時に、大好きな北星のみなさんに、プレゼントを差し上げたくて参上したんでーす！」
その新山の声にまた大きな拍手が沸き起こった。
「いーたくら、めーぐーみ！。いーたくら、めーぐーみ！」
いつしか絵里とめぐみのコールが沸き起こった。めぐみが絵里に手招きしている。月丘に背中を叩かれて絵里は氷上に足を踏み入れ、危なっかしい足取りでめぐみのほうに歩いて行った。その絵里がバランスをくずしてしりもちをついた。その姿に見ていた人たちの中から大きな笑いと拍手がわいた。スケートを履いためぐみがスーッと絵里のところまで滑って止まり、しりもちをついている絵里の手をとって助け起こした。
「太田さーん、絵里ーっ。お誕生日、おめでとーっ！」
その新山亜希子の声にまた大きな拍手が起こった。
「そして、北星小中学校と高校の、男子のみなさーん。きょうは何の日ですかーっ！」
新山亜希子が大声で叫び、片手を耳に当てた。すると見ていた男子の中から「バレンタインデー！」という声が沸きあがった。

「そうでーす。きょうはバレンタインデーでーす！。女の子から男の子に、愛を告白してもいい日なんですよーっ！」
新山の声に大歓声が沸き起こった。
「レディース・バイオは、わたくしを除いて、平均年齢が二十二歳のピチピチギャルばかりなんですよーっ！」
新山の言葉に大きな拍手と歓声がわきあがった。踊り子たちも周りに笑顔で手を振って応えている。
「みなさーん、わたしたちからのプレゼント、受け取っていただけますかーっ！」
新山亜希子が大声で叫んだ。
「ウワーーッ！」という元気のいい叫び声が湧き上がった。
「それでは、レディース・バイオの踊り子たちが、男の子ばかりではなく、きょうこの会場にいらっしゃる男性の方みなさんに、踊り子たちの愛情が、たーくさんつまったプレゼントをお渡しいたしまーす！」
新山亜希子が叫ぶと同時に、レディース・バイオの踊り子たちが大きなかごの中に入れたプレゼントの袋を、子供たちばかりではなく男子生徒や見に来ていた男性全部に手渡していった。
「それからみなさーん。くれぐれも、踊り子には手を触れないようお願いいたしまーす！」と言った新山亜希子の言葉に、また大きな歓声と笑い声がわきあがった。
めぐみと絵里は氷の上で顔を見合わせて手を叩いて笑った。
レディース・バイオの踊り子たちがプレゼントを渡しているとき、また夜空を染めて仕かけ花火が次々と打ち上げられた。氷上で花火を見上げるめぐみと絵里の顔が七色に染まっている。
太田めぐみ、十八歳。板倉絵里、十六歳の誕生日だった。

第１６話　教育実習

「先輩…」
二月に入った最初の土曜日、部屋に戻った絵里は目を丸くした。
「エヘヘー。どう、似合う？」
淡い水色のブラウスに紺系の細い縦縞の上着と、同じ柄のスカートに身を包んだ太田めぐみが鏡の前に立っていた。肌色のストッキングをはいて、ふだんはかけない眼鏡もかけている。
「すごくお似合いですよ。すてき…」
絵里は笑顔でめぐみを見つめた。
「そう？。ところでさ。あたしいくつに見える？」
めぐみは絵里に聞いた。
「……」
「正直に、見たままで言ってみてよ」
めぐみは真顔でそう言った。
「すごくきれいで、とっても大人に見えます…。月丘先生みたい…」
絵里は目を輝かせて言った。
目の前に立っているめぐみは、スリムで百七十三センチの身体に少し地味な服を着ているせいか、絵里の知らない大人の雰囲気を漂わせていた。うっすらと化粧もしている。とても高校生には見えない。これで三センチか四センチの靴を履いたら百七十五センチを越えそうだ。スカートだからわからないが、めぐみの足の長さは身長の半分の八十六センチだ。特にスラックスやジーンズをはくと足の長さが際立つ。
「大学生か社会人…。もっと大人に…」
絵里はしみじみとめぐみを見ながら言った。
「少なくとも、二十歳より上には見えるってこと？」
「はい…」
絵里はめぐみを見つめて答えた。めぐみはこの言葉に笑顔でうな

ずいた。
「でも、そんなにおめかしして、どうしたんですか？…」
絵里は鏡の前に立っているめぐみに聞いた。
「お、み、あ、い！」
めぐみは笑って言った。
「エーーッ！」
絵里は目を丸くしてめぐみを見た。
「と言いたいところだけど、残念でしたー！」
めぐみは満面の笑顔で舌を出した。
「来週から、三週間の教育実習さ」
めぐみは笑いながら言った。
「教育実習？」
絵里は首をかしげた。
「といっても、病気で休んでる先生の交代なんだけどね…」
めぐみは鏡の前で服装をチェックしながら笑った。
「砂川の光陵高校の校長からうちの校長に、とりあえず担任の先生が退院してくるまでの三週間、教育実習を兼ねて誰か出してほしいって電話があったらしいんだ。うちの高校はへたな私立大学よりもはるかにレベルが高いからね。だけど誰も希望者がいなくて…」
めぐみは、突っ立っている絵里に言った。
「あたしは、教師志望の祥子が一番優秀だし適任だと思って推薦したんだけど、祥子は去年、二年生のときに滝川の中学校で実習終わっちゃってるんだよ。そんなこんなで校長のやつ、何をとち狂ったんだかしらないけど、あたしに行けって…」
めぐみは不満そうに言った。
「でも、先輩は教師志望じゃなかったですよね」
絵里はお茶の準備をしながら言った。
「あったりまえじゃん。あたしは教師って柄じゃないよ。だいいち、なんでおんなじ高校生に勉強なんか教えろってのよ。あたしが教えられることっていったら、せいぜい喧嘩のやりかたくらいだ」

めぐみはそう言って笑った。
「でもさ。校長や月丘の頼みだったら断れないし…。それに、校長のやつ、あたしを二十二歳の北日本教育大学の学生だって向こうの校長にふれ込んだらしいんだ。だから、服装は大人らしくしろってぬかしやがった…。この服だって、月丘に連れられて旭川まで行って三着買ってきたんだ。もっとも、お金は校長が払ってくれたんだけど‥」
めぐみはベッドの上のバックを見て言った。
「へエー…」
絵里は感心してめぐみを見つめた。
「まったくもう…」
めぐみはため息をついた。
「でも、ぜんぜんだいじょうぶです！。先輩は勉強もスポーツも、名門北星高校のトップじゃないですか！。高校生なんて簡単ですよ。わたしみたいな生徒ばっかりなんでしょう？」
絵里はいっぱいの笑顔で言った。
「ちょっと絵里。あんたね、笑ってる場合じゃないよ。さ来年はあんたにお鉢が回ってくる可能性だってあるんだから。覚悟してたほうがいいよ」
めぐみはお茶を飲みながら絵里をにらんだ。
「わたしはだめですよ。校長先生からそんなこと言われたら、わたし病気になっちゃいます。教師志望だったら君子や北村くんがいますから…」
絵里はあわてて言った。
「だろうね。あんたみたいなのが先生じゃ、幼稚園や保育園ならともかく、中学生や高校生が相手じゃ、生徒と先生の区別がつかなくなっちゃうか…」
笑って言うめぐみに、絵里は口を尖らせた。
「じゃあーね。ひとりでさびしいだろうけど、三週間いい子にしてな！」

めぐみはそう言って立ち上がると、絵里を抱き寄せて頬に唇をつけた。
「もう行っちゃうんですか？」
絵里は荷物を持っためぐみに聞いた。
「あたぼうじゃん。月曜日から実習だもの。滝川の家から通わなくっちゃ。母さんに手作りのお弁当作ってもらってね。ルンルン！」
めぐみはそう言ってドアを開けた。
「先輩…」
「じゃあーねー！」
めぐみは、あぜんとしている絵里に満面の笑顔でドアを閉めた。

実習初日の午前七時三十分、太田めぐみは教育実習に指定された砂川光陵高等学校の門の前に立っていた。
ここまで来たらしゃあない。いっちょうやるか！。
めぐみはひとつため息をつくと、力強い足取りで生徒専用出入口と書かれている大きなガラスの自動ドアの前に立った。

「入院した石崎先生の交代で、きょうから三週間、実習をかねて担任をしていただく北日本教育大学からいらした太田めぐみ先生だ。太田先生は全教科を得意としている。ちなみに太田先生の趣味は格闘技で、空手二段、合気道二段。柔道初段だそうだ。武道だけではなくどんなスポーツでも万能だ。よく教えをいただくように。そして仲良くな」
めぐみが実習をすることになった三年C組の教室で、校長の財津晴彦が生徒たちにめぐみを紹介した。空手、合気道、柔道の有段者との校長の紹介に生徒たちがざわめいた。
担当科目時間の無い三人の教師が研修という名目で教室の後ろに立ってその様子を見ている。そのことは最初から校長に言われてい

た。実習の様子を判定するということではなく、あくまでも研修であり、授業はめぐみの好きなように進めてかまわないということだった。

「太田めぐみです。よろしく！」

ふちなしの眼鏡をかけためぐみはそう言って小さく頭を下げ、教室の中を見渡した。

生徒たちは無言でめぐみを見つめている。めぐみはごく軽度の近眼だが、ふだんは眼鏡をかけていない。年齢を実際より大人に見せるために髪を明るい色に染め、その髪は後ろでまとめている。月丘からもらった化粧品で少しメイクもしてみた。思い切って別の自分になると決めてのことだった。

めぐみは、興味深げに自分を見る四十あまりの視線を感じた。その視線は、必ずしも良いものではなく、どちらかといえば敵意に満ちているものだとめぐみは感じた。

光陵高校では、生徒は学生服で授業を受けることになっていると聞いている。生徒たちは一応は学生服を着ているものの、男子生徒は長髪で学生服のボタンを全部はずし、ズボンはプレスもかかっていないヨレヨレの状態だ。眉毛を剃っている者もいる。女子は女子で、全員髪を茶色に染めて眉毛は細く剃り、化粧をした顔でガムを噛みながら教壇のめぐみを見つめている。どう見てもまともなクラスとは思えない。

それにしても、一年生ならともかく、よりによって自分と同じ三年生とは…。

校長と月丘め、まんまとはめやがった…。

めぐみは、太田くんならじゅうぶん扱える生徒たちだ、と笑って言った三宅校長と、太田さん、しっかりね。と満面の笑顔で手を握った月丘の顔を思い浮かべた。

つまり、あたし流にやっていいってことだよね。

めぐみは頭の中に浮かんだ校長と月丘にそう問いかけた。頭の中の校長と月丘は笑顔でめぐみを見つめている。

覚えてろよ月丘。腰抜かしても知らないよ！。
めぐみは心の中でつぶやいた。

「出席を取ります」
めぐみは出席簿を開いた。
「赤石洋子さん」
「はい」
一番最初に名前を呼ばれた女生徒が小さく返事をした。
「足立啓太くん」
「はい」
低く投げやりな返事がした。
「安西孝典くん」
返事はなかった。
「あら…。安西くんはいないの？」
めぐみは教室を見渡した。
「いるよ…」
低い声がした。安西孝典は腕を組んだまま上目づかいで教壇のめぐみを見つめている。
めぐみはひとつため息をついて次の生徒の名前を呼んだ。
三年C組の生徒は、男子二十一人と女子十九人の四十人だ。出席を取っていて、安西孝典のように一回目の点呼で返事をしなかった生徒は四人の男子だった。
めぐみはため息をついて出席簿を閉じた。
「みんなの顔と名前は覚えたわ…」
めぐみは笑顔で生徒を見渡した。
「ただ、この次から、名前を呼ばれたら一回目で返事をしてちょうだい。あたしの声は聞こえるはずだから…」
めぐみは教室を見渡して言った。
「じゃ、地理の八十二ページから…」

めぐみはそう言って地理の教科書を開いた。
「常識中の常識だけど、中学の復習よ」
めぐみはボードマーカーを持った。
「像の鼻のような形をしたスカンディナヴィア半島。みんなも知っていると思うけど、この半島はスウェーデンとノルウェーのふたつの国があって、東の対岸にはフィンランド共和国もあるわよね。フィンランドの首都はヘルシンキ…。人口は五百二十三万八千人。スウェーデン王国の首都はストックホルム。人口は九百一万人。ノルウェー王国の人口は四百六十八万二千人で首都はオスロ。年間の平均気温は…」
めぐみは教科書を机において、自分が知っている北欧のデータを次々とボードに書いていった。
「先生ってさ、二十二歳って聞いたけど、けっこうスタイルいいじゃん。スリーサイズと、きょうのパンツの色教えてくれよ」
ボードにマーカーを走らせていためぐみに、安西孝典と同じく、一回目の出席点呼で返事をしなかった片桐智明が言った。
めぐみはため息をついて振り返った。ほかの生徒が声を押し殺して笑っている。片桐智明は腕を組んで得意そうな表情だ。研修の教師。特に女性の平島教諭は不安げな表情で壇上のめぐみと生徒たちを見ている。
「片桐くん。あたしのスタイルの良さをほめてくれてありがとう。あたしもスタイルには自信あるのよ。だけど、そういう質問は休み時間にしてほしいわ。片桐くんだけに、耳元でそっと答えてあげる。でもね、けっこうだけは余計だわ」
めぐみは笑ってまたマーカーを持った。
「なんだよ。恥ずかしくて答えらんないのかよ!」
ボードに向かっているめぐみの背に、片桐智明が大声で言った。
まったくもう…。
めぐみはまたため息をついてマーカーを置き、眼鏡をはずして教壇の横に立つと左手を腰に当てた。眼鏡をはずしためぐみに、生徒

たちから小さくざわめきが起こった。
「身長は百七十三センチ。体重五十一キロ。バストは八十三センチで少し硬め。ウエストは、おなかの減り具合で五十八から六十センチのあいだ。ヒップは八十四センチ…。靴は二十五センチ。足の長さは身体のほぼ半分の八十六センチ。体脂肪率は、趣味の武道で体を鍛えてるから九パーセント。そして、きょうのブラとパンツは、スミレの刺繍入りの薄い水色よ。もしここで、あたしのブラとパンツを脱がす度胸があったら、やってみてもいいわよ。どう？」
めぐみは片桐孝典を見つめて笑った。
「ヤッター。すげえ。興奮しちゃうぜ！」
片桐智明は、となりの北邊昭人と顔を見合わせて叫んだ。ほかの男子もざわめいている。口笛を吹く者もいた。カメラ付き携帯電話で写真を撮る生徒もいる。めぐみは携帯のカメラを向けている生徒に笑顔でポーズをとった。
「みんなには見せてあげられなくて残念だけど。ついでに言うと、あたしは、脱いだらもっとすごいのよ」
めぐみはそう言って教室を見渡した。オーーッという男子の声があがった。
「片桐くんも北邊くんも。ほかの男子もどうぞ興奮してちょうだい。男性を興奮させられれば女も一人前っていうわ。あたしも、あなたたちのようなチョー若い男性に興奮されて嬉しいわ。今度、あたしの自慢のナイスなボディラインが、もっとはっきりするような悩殺ドレスを着てきて、あ、げ、る！」
めぐみは片手を腰に当て、胸元が見える前かがみのポーズで男子たちにウィンクしながら指をさして笑った。そのしぐさに男子からまたオーッという声が湧き上がり、女子からは歓声と笑い声があがった。三人の教師たちも笑っている。
「さあ、あたしは質問に答えたし、写真のモデルにもなってあげたんだから、みんなもちゃんと授業を受けてちょうだい。もうすぐ受験でしょう」

めぐみはそう言いながら眼鏡をかけるとマーカーを手に持った。しかし教室のざわめきはいっこうに治まる様子はなかった。マンガを出して読んでいる男子や、友達と携帯のメールを打っている女生徒もいる。そうしているうちに一時間目の終了時間が迫ってきた。

めぐみはざわめく生徒たちを背に、ボードにマーカーを走らせた。

「たかが地理だからって馬鹿にしないでね。この五つは、国立の入試に出るかもしれない重要なポイントよ。あなたたちに静かに授業を受けてとは言わないけど、あたしが大事だって言ったところはノートにとっておいたほうがいいと思うわよ。あと二分だけこのままにしておいてあげるけど、二分後には消すからね」

めぐみはそう言ってボードクリーナーを持ったまま腕時計を見た。そのとたん、ざわめいていた生徒たちはそろってボードの内容をノートに書き始めた。

めぐみはその様子を見て笑った。

太田めぐみのことが気になっていた教頭の三河は、一時間目の最初から教室のドアのところに立って中の様子を聞いていた。札付きの生徒ばかりが集まっているC組を担当クラスに決めたのは財津校長と三河だったのだ。

我が北星の代表として、国立大学級の生徒を行かせます。ご希望どおり一番手のかかるクラスを担当させてください。

北星高校の三宅校長が電話でそう言った。まさか女生徒とは思いもしなかったが、その女生徒が、噂の、あの伝説の女だとは…。

太田めぐみの生徒の扱いを聞いていて、これはもしかすると…、と三河は思った。

今までこの三年C組の教室から、歓声や笑い声などは聞いたこともなかった。要注意のレッテルを貼られた生徒ばかりを集めて雰囲気が暗いせいもあり、ほかの教諭、特に女性教諭は行きたがらなかった。それが、たった一時間目にして、太田めぐみは生徒の心を自分のペースに巻き込んでしまったのだ。

「太田先生、どんな様子ですか？」
教員室に戻っためぐみに、教頭の三河が声をかけた。ほかの教師もめぐみに視線を集中している。教員たちには、太田めぐみが、あの伝説の女であることは言ってある。ただし厳重な口止めを言い渡してあった。
空知管内でその名を轟かせいてる伝説のスケ番が、札付きの生徒四十人にどんな接し方をするのか、教員たちも興味津々なのだった。各教員には、時間があれば太田めぐみが担当する三年C組の授業を見るようにと言ってある。
「正直なところ、手を焼きそうな生徒が何人かいます。ま、わたしと同じ高校生ですし、とりあえず初日ですから…」
めぐみは笑顔で言った。
「いろいろと変な質問されたでしょう？。女性教師はたいていそのての洗礼を受けます」
三河は机に着いためぐみに言った。
「はい。スリーサイズと下着の色を聞かれました」
めぐみは机に頬杖をついて答えた。
「そんなことを…」
三河は、わざとに驚いた表情でめぐみを見た。
「ちゃんと答えました。正直に…」
めぐみは笑った。
「わたしもそうですけど、いろいろと興味がわく時期なんですよね。そんな質問くらいは答えてあげないと…」
めぐみは三河教頭に言った。
「次の担当は体育ですので、今のうちに着替えてきます」
めぐみは立ち上がって三河に頭を下げた。
二時間目は、めぐみの担当ではなく空き時間になる。その間に実習の内容と成果や反省事項などをまとめておかなければならない。

三時間目と四時間目は体育で、男子は野球で、女子はバレーボールだ。
二時間目の終了チャイムが鳴ったのを確認し、めぐみはレポートを教頭に提出した。
科目授業とちがって体育となると、生徒たちはさっさと着替えて除雪されたグランドで早くもボールを追っかけている。
ま、そりゃそうだ…。
教員室からグランドを見ていためぐみは笑った。
めぐみは薄い色のスポーツサングラスをかけ、学校から貸与された真っ赤な運動着の上下に同じ色のスポーツキャップをかぶり、グランドコートを羽織った姿で出ていった。教員室の窓からは、教科の担当時間のない三人の教師と、教頭の三河がグランドの様子を見つめている。
「杉田くんと金子さん。あたしのところに来て！」
めぐみは散らばっている生徒に大声で叫んだ。体育委員の杉田俊夫と金子恵美子がめぐみのところに来た。
「あたしは全体を見てるから、杉田くんは野球の審判で、金子さんはバレーの審判をたのむわ。それから、怪我しないように準備運動をちゃんとさせてね」
めぐみは二人に言った。
「準備運動なんかしたってしょうがないじゃないか。みんな勝手にやってるよ」
杉田俊夫が不満そうにめぐみを見た。
「あらそう。あなたは体育委員なのに、みんなに準備運動もさせられないの。リーダーシップがないのね。名前だけの委員なんだ」
めぐみは杉田に言った。
「準備運動もしないで誰かが怪我でもしたら、担任のあたしが責任とるだけじゃすまないのよ。体育委員の杉田くんや金子さんも、校長先生やギャーギャーうるさいＰＴＡのオバンたちから名指しで責められるんだからね。それでもいいの？」

めぐみはそう言って笑った。その言葉に金子恵美子が笑った。
「わかったよ。うっせーなー」
杉田俊夫は面倒くさそうに言うと、キャッチボールをしている男子に声をかけ、ダラダラとではあるが形だけの準備運動を始めた。女子も金子恵美子に渋々としたがって準備運動をしている。めぐみも男子と女子の間で生徒たちに合わせて準備運動を始めた。安西孝典は準備運動もしようとしない。
「ほう…。準備運動なんかしたことのない連中が…」
教頭の三河は、生徒たちが準備運動をはじめたのを見て腕を組んで笑った。
「へえー…」
担当時間外の教師も、信じられないという表情でグランドの様子を見つめている。

「先生はやんないのかよ！」
出席点呼のとき、返事をしなかった安西孝典がピッチャーマウンドで叫んだ。
「あたしは、安全のためにみんなを見てるのが仕事なのよ！」
めぐみはみんなに聞こえるように叫んだ。
「なんだよ。けっきょくできないって話だろ。女の先公におれの球を打てったって無理だよな！」
安西孝典は笑いながら叫んだ。ほかの男子も笑っている。
「校長が言ってたスポーツが万能ってのも、あんがい怪しかったりしてよ！」
そう言った安西孝則の言葉に生徒たちがひやかすように笑った。
「趣味が格闘技だってのも、うそなんじゃねえのか！」
安西はまた大声で叫んだ。
にゃろー！、クソ生意気なガキどもめ！。
めぐみは笑みを浮かべながら心の中でつぶやいた。

「あのねー…」
めぐみは雪の上にグランドコートを脱いでたたむと、持っていた出席簿とノートをその上に置いた。運動服姿になった足が長い。
「あたしは、挑戦されれば何事にも背を向けないたちなの。貸しなさい」
めぐみは、ウェイティングサークルにいた大高陽一から木のバットを受け取った。
え?。硬式用?…。
めぐみはバットが実業団やオリンピックで使う八十四センチ、九百五十グラムの硬球用のものだと知った。
よく見ると、安西が投球練習をしているボールも、体育の授業ではめったに使うことのない公式野球連盟で認可された硬式ボールだ。
はじめからしくみやがった。
めぐみはため息をつくと、軽く二・三回素振りをしてバットの感触を確かめた。女生徒たちはバレーボールの手を休めて見つめている。
めぐみはバッターボックスに入ると、足元をならしながらマウンドの安西孝典を見た。安西は挑戦的な笑いを浮かべている。
「まちがって、その顔に当たってもしらないぜ!」
安西はそういってボールを握りなおした。めぐみはその言葉にふと笑った。
大きく振りかぶった安西は力をこめてボールを投げた。ど真ん中に入ってきたボールをめぐみは目で追いながら見送った。パシッという鋭い音がしてボールは橋田とおるのミットに納まった。
「ストライク!」
審判の杉田俊夫が大声で叫んだ。
「へえー。いい球を投げるじゃない」
めぐみは感心したようにマウンドの安西を見た。
「ふん!」
鼻で笑った安西に、「今度はあたしもバットを振るわよ。外野は

もっとバックしといたほうがいいわ！」と言うと、バッターボックスをはずし力を込めて二度素振りをした。ビュッ、ビュッとバットが空気を切り裂く音がする。

その素振りに安西孝典の表情が変わった。

「生意気な先公め！」

大きく腕を回した安西は、初球以上に力をこめて二球目を投げた。

高校生にしては体が大きい安西孝典の腕から繰り出される速球がキャッチャーミットをめがけて飛んでくる。めぐみは狙いすましてバットを振った。カキンという硬式ボール独特の音がして、ボールはレフトを守っていた岸田勉の頭上を大きく曲がりながらはるかに越えてファールグランドの一番深いところに落ちた。マウンドの安西孝典は、あぜんとした表情でボールが飛んでいった方向を見ている。

「あーあ、ファールか…」

めぐみはため息をついた。

「安西くん。あなたの球が遅いから、早く振りすぎてファールになっちゃった。もっと本気で投げていいのよ！」

めぐみは安西孝典に大声で言った。

「ちくしょう…」

安西孝典は、バッターボックスのめぐみをにらんだ。その顔に笑いが浮かんだ。

思い知らせてやる。安西孝則は大きくため息をついた。

安西は大きく振りかぶるとボールに思い切りシュート回転を加えて投げた。

あぶない！。

女生徒の誰かが叫んだ。

安西孝典が投げたボールは、鋭くシュートしながらバットを構えるめぐみの顔をめがけて飛んできた。避ける余裕もないほどの速さだ。パシッという音がした。バッターボックスのめぐみは左手でそ

のボールを顔の直前で受け止めていた。見ていた生徒たちからざわめきの声が上がった。
「ボ、ボ、ボール！」
審判の杉田俊夫が慌てて叫んだ。
つ…。
武道の受身を応用してかなりショックを和らげたとはいえ、左手に走る強烈な痺れに顔をしかめそうになったのを必死でこらえた。
「いいシュートだけど、ストライクゾーンから、だいぶ外れてるわ」
めぐみは、痺れて感覚が無くなった左手から右手にボールを持ち換えると、力を込めてマウンドの安西孝典の胸をめがけて投げ返した。
安西孝典はめぐみが投げたボールをグローブで受けた。女が投げるボールにしては男並みに速くて重い。グローブをはめていてもピシッと手のひらに響く球だった。手がしびれている。
やろう…。
安西は顔をしかめてつぶやいた。めぐみと安西孝典をつつむ空気が緊張している。
めぐみは足元の雪を握って手を湿らすと数回素振りをした。そしてもう一度しびれる左手で足元の雪を握った。おそらくは内出血しているだろうが、雪を握った感じでは骨折はしていないようだ。冷たい雪のおかげで手のひらの痺れは急速にやわらいだ。ゆっくりとバッターボックスに入って足元を慣らし、バットを構えて大きく息をした。
安西はバッターボックスのめぐみを見据えて振りかぶった。
レフトのはるか頭上を越えていった今の球とて、決して力を抜いたわけではなかった。三球目は力を抜いてわざとに顔を狙った。
力を抜いた球とはいえ、ボールは硬球だ。当たれば大怪我をする。だが、当たったら当たったで、体育時間中の事故ということで言い訳はつく。しかし、あの女実習生は顔色も変えずに素手でその球を受け止めた。もうそんなことは出来ない。

なによりも、二球続けて女の顔を狙ったとなれば、手が滑ったでは言い訳にならない。安西は学校でも一目おかれる悪と自負している。身長が百八十センチと一番体が大きい自分としては、たとえ実習生であろうと、女に向かって二球も顔を狙ったのでは、同級生や下級生に対してしめしがつかない。

勝負だ！。

安西は大きく振りかぶって勢いをつけ、渾身の力をこめてど真ん中に四球目を投げた。

ど真ん中にボールが飛んでくる。すさまじく回転しながらシャーッと空気を引き裂く音が聞こえるようだ。めぐみは両脇を締めて思い切りバットを振った。真芯でボールを捕えた十分な手ごたえがあった。ボールはセンターを深く守っている酒井大輔の頭上を越える勢いで飛んでいった。

折れた…。

めぐみは、ボールの速さとインパクトの強さに耐え切れず、バットが折れた感触に唇をかみ締めた。

「大輔、捕れー！」

マウンドの上の安西が叫んだ。深く守っていたセンターの酒井大輔が、グランドの境目を越えて除雪した雪の上を懸命にバックしている。そして落下してくるボールと重なるように勢いよく雪に倒れこんだ。その酒井大輔がボールの入ったグローブを高々と差し上げた。その瞬間、見ていた生徒たちから大きな歓声と拍手が沸きあがった。

しゃあないか…。

めぐみは心の中でつぶやいた。

「酒井くん、よく捕ったね！。ナイスキャッチよ！」

めぐみは大声で言いながら、持っていたバットを大高陽一に渡した。

「やるじゃないの。今の球、最高だったわ！」

めぐみはそう言って安西に笑いかけた。安西は得意そうな表情で

めぐみを見ている。
「さあさあ、体育の続きよ！。ボーッと立ってたら風邪をひくから！」
めぐみの大声に女子がバレーボールを始めた。
「孝、これを見ろよ」
大高陽一は、大きく斜めにひびがはいったバットを安西孝典に見せた。
「これで、あそこまで飛ばしたのかよ」
安西は斜めにヒビが入ったバットと、女子のバレーボールの副審判をしているめぐみを見比べた。
「もし、ヒビが入らなかったら…」
安西は大高の顔を見た。
「完全に場外だ。おまえや俺でも、あそこまでは…。社会人か、それ以上…」
大高はそう言って安西を見た。
「教頭先生。あの人って…。ほんとに女子高生なんですか？」
窓からグランドの様子を見ていた二年一組を担任している本間規子が、笑顔を浮かべている教頭の三河に聞いた。
「そうですよ。前に話したとおり、あの名門、北星高校の三年生。伝説のスケ番です…。空手、合気道、柔道の有段者で、学業もスポーツも国立の現役大学生をはるかに超えるレベルで、特にフィギアスケートはオリンピック級だと聞いています」
三河の言葉に、教員室にいた三人の教諭は大きなため息をついた。

砂川光陵高校に実習生として通い始めて三日が過ぎた。
めぐみは相変わらず出席点呼に返事をしない安西孝典や片桐智明らの扱いに苦慮しながら教壇に立っていた。
ただひとつ変わったことがあった。それは、初日の一時間目の地理のとき、ここは国立の入試に出る可能性が大きいと言い、二分後

にはボードを消すと言ったとき、生徒たちはあわててノートに書き始めた。めぐみは他の教科の時もそれをやってみた。すると、めぐみが思ったとおり大事だと言った事はノートに書くようになったのだ。

「先生よ。風呂にはいったとき、どっから最初に洗うんだ？」

さすがに札付きばかりを集めたクラスだけあって、担当科目がない時間の教師が見守っている中でも、授業の途中で男子生徒は必ずと言っていいくらいそんな質問をしてくる。その頃になると、なぜかほかのクラスの生徒たちがC組の教室を覗きに来る。それを待っていたかのように、男子の誰かが下ネタの質問をするのだ。

授業を見ている教師たちは、何があってもいっさい口を出したり手を出したりはしないように校長から言われていた。

「またそんな質問？。ほかにもっとマシな質問はないの？」

めぐみはあきれ顔で生徒を見渡した。窓から覗いている生徒たちも笑っている。

「だってよ。退屈な授業ばっかりじゃ、眠くなっちゃうんだ」

佐野幸一がそう言いながら机に両足を乗せて組んだ。

「ちょっと佐野くん！　机は足を乗せるところじゃないわよ。おろしなさい！」

めぐみは鋭い声で言った。その声と佐野を見据える眼鏡の奥のキラリと光る目に、佐野幸一は机から足をおろした。

「これだけは言っておくけど…」

めぐみは教壇を降りて腕を組むと、生徒たちの机の間をゆっくりと歩いた。

「あたしに対して、どんなくだらない質問をしようと、授業を聞かなくてもノートをとらなくても。教室を抜け出そうとも、早弁をしようとも、そんなことはいっこうにかまわないわ。ただ、出席をとるときは返事くらいはしなさい。あしたから一回目で返事をしない

場合は、たとえ教室の中にいても欠席扱いにするからそのつもりで！。それから、机に足を乗せたり、椅子を蹴ったりするのもやめなさい。そんな人は、机と椅子を取り上げて、床に正座させるわよ！」
めぐみは強い調子で言いながら生徒たちを見回した。
「ちゃんと授業料払ってんじゃねえか。先公にそんな権利があんのかよ！」
男子の藤井利治が言った。その藤井利治のほうをめぐみは振り返った。授業を見ている教師や、覗いていた他のクラスの生徒もあぜんとしている。
その時、めぐみの真後ろに座っていた池端雅彦が、ポケットから素早くカメラ付きの携帯電話を出し、そのカメラをめぐみのスカートの下から入れてシャッターを押した。一瞬フラッシュが点滅した。そしてもう片方の手でスカートの上からめぐみの尻をさわった。それを見た生徒たちがざわめいた。池端雅彦は得意そうな表情で握った両手を上げた。
もう…。
めぐみはため息をつくと、振り返りざまに得意そうにしている池端雅彦の胸倉をつかんで立たせ、間髪おかずに平手で往復ビンタをはった。パンパーンと小気味いい音が教室に響いた。そして胸倉をつかんだまま池端雅彦を椅子に勢いよく座らせた。
「今度こんなことしたら、平手くらいじゃすまないわよ！」
めぐみは頬をおさえている池端雅彦をにらんだ。教室の中が静まりかえった。
「これは預かっておくわ。放課後にでも、お父さんとお母さんに事情を話して、一緒にとりにいらっしゃい」
めぐみは取り上げた携帯電話をポケットに入れた。
「なにすんだよ！。池端の携帯返してやれよ！」
池端雅彦の前の机の三浦康之が勢いよく立ち上がった。
めぐみは、自分と同じほど身長がある三浦康之の学生服の襟元をつかむと、タイミングを計って力任せに持ち上げた。体重七十キロ

以上はあろうかという三浦康之の足が三十センチほど床から浮いた。めぐみはその三浦康之を叩きつけるように椅子に座らせた。男子を軽々と片手で持ち上げためぐみに、教室の中はしんとなった。

「よけいな口をはさむんじゃない！。今はあたしが話してんだ。いい子にして座ってな！」

めぐみはそう言って三浦康之を見据えた。その目の鋭さに三浦康之は青ざめた表情で机に目を伏せた。授業を見ている教師たちも、いったいどうなるのかと顔色を失っている。

「もっとも、このあたしに喧嘩を売りたいってんなら話は別よ！。いつでも相手になってあげる！。この学校の誰でもいいわ。あんたたちの誰か一人でも、このあたしに指の一本でも触れたらたいしたもんだよ！」

めぐみはそう言って男子生徒をひとりひとり見据えた。

「それから、藤井くん。ほかの人もよく聞いて」

めぐみは教壇の前に移動した。

「さっき、ちゃんと授業料を払ってるって言ったわよね」

めぐみは藤井利治を見据えた。眼鏡をはずして教壇に置くと両手を腰に当てた。

「偉そうな口きくんじゃないよ！」

めぐみは大声で怒鳴った。その迫力に教室の中は水を打ったように静まった。後ろに立っている教師や教室を覗いている生徒たちも目を見開いてめぐみを見つめている。そのひとりひとりをめぐみは鋭い目で睨み返した。その鋭いまなざしは、空知管内の悪たちから悪魔のように恐れられている伝説のスケ番〈アイシャドーのめぐみ〉のものだった。

「この中の一人でも、自分で働いたお金で授業料を払っている奴がいたら手を上げな！。あんたたちのお父さんやお母さんが一生懸命に働いてくれるおかげで、あんたたちみたいなでき損ないでも、曲がりなりにも授業が受けられるんじゃないか！」

めぐみの迫力に、生徒たちは声も出せずにあぜんとしている。

「それを、自分だけがこの世で一番偉いようなツラして…。親や先生に対して口のきき方も知らないクソガキども！」
めぐみは大声で怒鳴った。
「大人を馬鹿にすると承知しないよ！。あたしにタイマンで勝てる自信のある男子がいたら、今ここで相手になってやる！。タイマンに自信が無いんだったら束になってかかっといで！」
めぐみは燃えるような目で生徒たちにらみを効かせた。生徒たちは完全にめぐみの迫力にのまれている。
「言っとくけど、あたしはスタイルもいいけど喧嘩も強いんだ！。かたっぱしからみっつに折りたたんで生ゴミに出してやる！」
めぐみはそう怒鳴りながら握った両拳に力を入れた。武道で鍛えた関節がポキポキと音を出した。生徒たちは言葉も出せずにめぐみを見ている。
めぐみは鋭い目で生徒たちを見据えたまま、ゆっくりと教壇に上った。そして、あぜんとして自分を見つめる生徒を見回して小さくため息をついた。
「それから…」
めぐみの表情がおだやかになった。
「さっきの、佐野くんの質問の答えだけど…」
めぐみに笑みが浮かんだ。
「あたしがお風呂に入って一番先に洗うのは、長い髪とニキビが四つある顔。次は首から腕と、形のいいふたつの胸」
めぐみは笑顔を浮かべて両手で胸を下から持ち上げるしぐさをした。
「すべすべした背中。引き締まったお腹。そして桃のようなお尻と、あたしの大事なところ。最後にスラリと伸びた長い足…」
めぐみはオーバーなしぐさをしながら笑った。
見守っていた教師たちから小さな笑いが沸いた。生徒たちは、それまでのめぐみの迫力にまだ圧倒されているのか、壇上のめぐみを感嘆のまなざしで見つめたままだった。

「当番！。きょうの授業は終わり！」
めぐみの鋭い声に、当番の矢島明子がはじかれたように立ち上がった。
「起立！」
矢島明子の声に全員が立ち上がった。
「礼！」
全員頭を下げた。
「姿勢が悪い！。やり直し！。立つときはパッと立ちな！」
めぐみのするどい激が飛んだ。
「起立！」
「礼！」
もう一度矢島明子の声が響いた。今度はある程度そろっていた。
「はい、お疲れさま」
めぐみも頭を下げた。そして眼鏡を手に持つと教壇を降りて教室のドアを開けた。
「太田先生…」
矢島明子の遠慮がちな声にめぐみは振り返った。
「なに？」
「あの…。きょうの大事なところは…」
教室のみんながめぐみを見つめている。いつも試験の重要なポイントをボードに書くはずが、きょうは書かなかったから生徒たちは気にしているらしい。
じょうだんじゃないわよ。さんざん手こずらせといて…。
めぐみはふと笑った。
「大事なところは…」
めぐみは生徒たちを見回した。
「うーん…」
やがて、めぐみは満面の笑顔になった。
「今晩、お風呂でちゃんと洗うわ！。じゃーあねー！」
その言葉に教室と廊下は大爆笑と拍手に包まれた。それを背中で

受け止めながら、めぐみはドアを締めてため息をついた。
やれやれ。なんかあたし、だんだん月丘に似てきたような気がする。
めぐみは、ふだんは真面目な授業をする月丘も、時々冗談を言ってクラスを爆笑の渦に巻き込むことがあるのを思い出した。
え？…。
めぐみは立ち止まった。
ひょっとして、月丘も、中学か高校のときスケ番だったりして…。
それって、かなりありえるわ…。
「アハハハ…」
めぐみはそう思うとなんだか笑いがこみ上げてきた。
教室の前に立っていた教頭の三河に気づき、笑顔で会釈をして教員室に向かった。

第17話　痛み

その日の放課後、池端雅彦が両親に連れられて教員室にやってきた。財津校長が留守のため、めぐみは仕事で残っていた有働教諭に簡単に事情を話し、雅彦と両親を教頭室に案内した。部屋では教頭の三河が雅彦の両親にあいさつをした。

「教育実習生の太田めぐみです」

めぐみは池端雅彦の両親に頭を下げた。

「母親の池端真理子です」

池端雅彦の母親は、心なしか怒りをたたえた目でめぐみを見ている。

「父親の高彦です」

父親の池端高彦は深く頭を下げた。そして教頭が勧めるソファーに腰をおろした。

「さっそくですが先生。うちの雅彦が先生にぶたれたと言っていますが、それは本当でしょうか。携帯電話も取り上げられたと…」

雅彦の母親はめぐみに聞いた。

「はい。たしかに平手で二回…。携帯電話も預かっております」

めぐみは池端夫婦に答えた。

「まあ…。子供の体罰は世間で問題になっているのをご存知でしょう。なんてことを…」

雅彦の母親は、教頭の三河とめぐみを交互に見ながら言った。

「親の私どもでさえ、この子に手を上げたことがないというのに！」

池端雅彦の母親は、だんだん興奮してきたのか、顔が赤くなっている。

「教頭先生。学校側とこの方からひと言謝罪がない限り、今度のＰＴＡの役員総会で、この問題を取り上げさせていただきます。よろしいですわね！」

母親の真理子はめぐみをにらんだまま教頭の三河に言った。めぐ

みは黙って池端雅彦の母親の顔を見つめていた。
「おい。いいかげんにしないか！」
池端雅彦の父親が妻の真理子に言った。
「あなたは黙ってらして！」
真理子は正面に座っているめぐみをにらんだまま言った。
「わかりました。池端さんが議題として提出されるとおっしゃるのであれば…」
三河はそう言って、めぐみとうつむいている雅彦を見た。
「当たり前ですわ。こんなことは、光陵高校始まって以来の不祥事ですよ！」
真理子は上品な手つきでお茶を口に運んだ。
「だいたい…」
真理子は茶碗を置いてめぐみを見据えた。
「こちらがどんなに優秀な方かは存じませんけど、大学の受験を控えている雅彦を、よりによって教育実習生なんかに…。校長先生のお気持ちがうかがい知れません！。それに、生徒を平手で二回も叩くなんて。いったいどんな教育を受けていらしたのかしら！」
真理子は憤懣やり場のない様子でめぐみを睨んでいる。
「池端くん…」
めぐみは座ったままうつむいている池端雅彦を見つめた。
「はい…」
雅彦は小さな返事をした。
「叩かれたのは、初めてだったの？」
めぐみは雅彦を覗き込むように言った。
「当たり前です！。人さまに後ろ指をさされないように。どこに出しても恥ずかしくないようにと、しっかり教育だけはしてきたつもりです！。それを…」
「おかあさま…」
めぐみは真理子を見た。
「わたしは息子さんとお話をしています。わたしへのお叱りでした

ら、のちほどいくらでも受け賜ります」
めぐみはそう言って、また雅彦を見た。
「まあ…」
真理子は唇を震わせてめぐみを見ている。
「あたしは、あなたと話がしたいのよ。ちゃんと顔を上げてあたしを見なさい！」
めぐみは少し強く雅彦に言った。雅彦は顔を上げてめぐみを見た。
「あなたの電話、返すわ…」
めぐみはポケットから雅彦の携帯電話を出してテーブルの上に置いた。
「まだ消してないけど、中の写真はどうするの？。記念に残しておく？。あたしはかまわないわよ。だって、顔が写っているわけじゃないから誰だかわかんないもの。あれ、けっこう鮮明に写ってたわ。キティちゃんの柄も…」
めぐみは笑って雅彦に言った。
雅彦の両親は、話の内容が理解できずにめぐみと雅彦を交互に見ている。教頭の三河は無言でその様子を見ていた。
「叩かれて、痛かった？」
めぐみが聞いた。雅彦は下をうつむいた。
「ちゃんと顔を上げて、あたしの目を見なさい！」
めぐみの言葉に、雅彦は顔を上げてめぐみを見た。
「あたしに叩かれて、痛かった？」
めぐみが聞いた。
「うん…」
雅彦はめぐみの目を見たままうなずいた。
「そう…」
めぐみはほほえんだ。
「あたしも、手と心が痛かったわ」
めぐみは言った。
「池端くんも、将来学校の先生になるかもしれないし、いずれは子

供を持つ父親になると思うのよね…」
　めぐみは雅彦の目を見た。
「あたしにも、大好きなお父さんとお母さんがいるし、小学校四年生のかわいい弟もいるわ…」
　めぐみは微笑んで雅彦を見つめた。
「子供の頃、あたしが何か悪いことをしたとき、この手が悪い。この足が悪いことをしたからだって、何度も手や足を叩かれたわ。そうするうちに、これは悪いことなんだ。してはいけないことをしたから、お父さんとお母さんに叱られたんだって、自分なりに判断するようになったの。あたしの両親は、世の中のルールをしっかり教えてくれたのよ。ただ、女の子だったから、顔だけは叩かなかった」
　めぐみは子供の頃を思い出しながら言った。
「でもね。悪いことをしたあたしを叩くお父さんやお母さんだって、きっと辛かったと思うの。自分の子供を好きで叩く親なんていないもの…。池端くんのご両親もそうよ。できればあなたを叩きたくないはずだし、ずーっと叩かないですめば、それに越したことはないの。だけど、子供が悪いことをしたときには、親は心を鬼にして、悪いことは悪い。大人になって悪いことをすれば警察に捕まるんだって、身をもって教える責任があると…。それが家庭教育だとあたしは思ってる」
　めぐみはそう言いながら、雅彦を見つめた。
「あたしが悪いことをしたとき、それを見て見ぬ振りをしないで、悪いことは悪いって、正面からあたしに向き合ってくれた両親に心から感謝してるわ。もっとも、あたしも素直じゃないから、今でもなかなか口に出して、ありがとうって言えないけどね」
　めぐみは笑った。
「たった三週間しか、あなたたちと一緒にいられないけど。あたしは、あなたたちがどんなに札付きの悪でも、縁があって受け持ったあなたたちが大好きなの。だから、あたしは、あなたがしたことは悪い事だって思ったし、大人になってあんなことをしたら警察に逮

捕される。そんな結果になってはいけないし、誰も教えないのなら、担任のあたしが教えなければと思ったの。だから心を鬼にして叩いたのよ」
めぐみはそう言って雅彦を見つめた。
めぐみの脳裏に、年の離れためぐみを、時には母親か先生のように慕う八才下の弟の憲弘の顔が浮かんだ。その憲弘と、目の前の池端雅彦の顔がオーバーラップして、めぐみの胸に熱いものが込み上げてきた。
「……」
雅彦はじっとめぐみの眼を見ている。
「…。先生も、痛かった？」
雅彦が言った。
「うん…」
めぐみはうなずいた。
「心が痛くて、辛かったわ」
めぐみも雅彦の目を見つめた。その雅彦の表情がくずれ、とうとう声を出して泣き始めた。雅彦の両親は、急に泣き出した息子を見ておろおろしている。
「おれが悪いんだ…」
雅彦は泣きながら言った。
「おれが、先生のスカートの中を携帯のカメラで撮ったんだ。そして先生のお尻に触ったから。だから叩かれたんだ。おれが悪いんだ！」
雅彦は手で涙を拭きながら自分のしたことを両親に告白した。
「まあ…」
真理子の顔から血の気が引いた。
「雅彦。あなたそんなことを…」
「おかあさま」
めぐみは真理子を見つめた。
「正直に話しているんですから、お叱りにならないでください。わ

たしがたくさん叱っておきました。教師とご両親の両方から叱られたら、雅彦くんは心のよりどころが無くなってしまいます。お父さまやお母さまが、心のドアを開けて味方になってさしあげないと…」
めぐみは真理子に言った。真理子は額を押さえてソファーにもたれかかった。
「池端くんはちゃんと反省してくれました。わたしの気持ちが少しでも通じれば、それでいいんです」
めぐみは笑った。
「ねえ」
めぐみは身を乗り出して池端雅彦の顔ををのぞき込んだ。
「あたしの大事なお尻にさわった初めての男性は池端くんよ。今度から、池端くんのそばに近づくときは、スカートの中に画鋲をたくさん入れておくからね！」
めぐみは雅彦をにらんで笑った。
「もうしないよ。おれ、警察に捕まるのいやだから…」
雅彦は下をうつむいて言った。
「そうね。でも、うちのクラスはさ、あんたも含めて悪ガキばっかりだから、また誰かにさわられそうな気がするけど…。まあいいじゃない。一度や二度さわられたって、べつに減るもんでもないし」
めぐみは笑って教頭の三河を見た。三河は何度もうなずいた。
「もう帰りなさい。宿題やって。お風呂にもはいって大事なところもきれいに洗うんだよ！。それから、出席点呼のときは、ちゃんと返事すること。いいね」
めぐみはそう言って立ち上がった。
「先生…」
立ち上がった雅彦の父親がめぐみに頭を下げた。
「家内が、大変失礼なことを…。わたしどもが出来なかった心の教育を、先生が…。なんとお礼を申し上げてよいのやら…」
雅彦の父親は何度もめぐみに頭を下げた。
「知らぬこととは申せ、大変失礼なことを…。このとおりでござい

ます」
母親の真理子も、目頭を押さえながら深々と頭を下げた。
「こちらこそ。わざわざお越しいただいて恐縮です。お気をつけてお帰りください。それから、くれぐれもこれ以上お叱りにならないで…」
めぐみは笑顔で頭を下げた。
やばい。ほんとに月丘みたいになってきた。祟りかな…。
めぐみは、月丘の顔を思い浮かべて小さなため息をついた。

「あ、あの写真…」
池端雅彦とその両親が帰ったあと、めぐみは雅彦の携帯電話に残っている写真のことを思い出した。
「写真って…。池端が写したという、先生のスカートの中の写真ですか？」
教頭の三河は、思い出したように言った。
「はい…。ちゃんと消しとけばよかった…」
めぐみはそう言って肩を落とした。
「ははあ、なるほど…。今度、池端から借りて、わたしも拝見しましょう…」
「教頭先生！」
めぐみは目を丸くして三河を見た。
「しかし、顔が写っていないし、誰だかわからないからと、先生はおっしゃった。なかなか鮮明に写っているとも…。キティちゃん、でしたか…」
三河は笑ってめぐみを見た。
「もう…」
めぐみは顔をしかめてため息をついた。

「先生よ。B組のダチに、ぜったい聞いてくれってたのまれたんだけど…」
男子の香取健一が、ボードに数学の公式を書いているめぐみに言った。
その日は生徒の父兄が授業の様子を参観する日だった。教室の後ろには五十人ほどの父兄に混じって財津校長も立っている。
札付きのワルや落ちこぼればかりを集めたクラスだけに、今までの授業参観日などは誰一人として来る父兄はいなかった。しかし今回に限っては、財津校長が『こんな楽しい授業はありません。太田先生の授業をぜひ一度ご参観を』とC組の父兄に呼びかけた結果だった。そしてきょう。しぶしぶと参観に来た父兄たちが最初に驚いたのは担任の太田めぐみが教室に入ってきたときだった。地元の警察からも不良としてレッテルを張られているワルたちが、当番の声で一斉に立ち上がり、教壇のめぐみに礼をしたのだった。父兄の中には、めぐみのスカートの中を携帯のカメラで撮影し、めぐみに平手で往復ビンタをはられた池端雅彦の両親もいる。
「その声は香取くんね。なに？」
めぐみはマーカーを走らせながら聞いた。
「先生って、好きな男いるのかってさ。いるんだったら、もしかして、もう食べられちゃったのかって！」
その言葉に教室がどっと沸いた。財津校長が待ってましたとばかりに手を叩いている。
めぐみはマーカーを置いて振り返った。
教室の後ろに立っている父兄や校長、担当が空き時間の教師のほかに、見ると、教室の窓から数十人のほかのクラスの生徒がのぞいている。その中には三年B組を担任している成田教諭もいた。
やれやれ。またか…。
めぐみはため息をついた。
「あんたたちねー…」

めぐみは、教壇のかどに片手を置いて教室を見渡した。
「見物してるB組や、ほかのクラスのみんなもそうだけどさ。たまには、五十分間くらいまともに授業を受けたらどうなの？。だいいち、きょうはあんたたちのご両親が参観にきてんだよ。みんなオツム弱いんだから、アホはアホなりに、少しは勉強してんだっていう姿勢くらい見せなよ！」
めぐみはあきれ顔で言った。生徒たちからどっと笑いがおきた。
「だってよ。先生このあいだ、どんなくだらない質問してもかまわないって言ったじゃねえか！」
香取が大声で言った。生徒たちの中から、そうだそうだという歓声があがった。見ている教師や生徒の親たちも笑っている。
「まったく…」
めぐみは腕を組むとまたため息をついた。
「あんたたちってさ。脳みそは赤ちゃんなみに弱いくせして、つまんない事だけはよく覚えてんだね！」
その言葉に大きな笑いが沸いた。
「まあいいわ。答えて上げるわよ。あたしの授業に点数をつけてる校長先生や、参観してくださるみんなのご両親も、覗いている成田先生やほかのみんなも、数学の公式だけじゃ退屈でしょうから…」
めぐみはそう言って、笑っている後ろの父兄と教師たちを見た。
「あたしはね。こう見えても男には不自由してないんだ。ボーイフレンドだったら掃いて捨てるほどいるよ！」
めぐみはそう言うと、後ろでまとめている髪を解いて軽く頭を振った。背中までとどく長い髪がしなやかに踊った。そして上着を脱いで椅子にかけると、腰に両手を当てて教室を見渡した。
背中まで届く長い髪。そして薄いピンクのブラジャーと身体の線がかすかに透けて見える白いブラウス姿になっためぐみに、男子のオーッというざわめきが沸いた。女子たちからは、「先生すてき！」という声と拍手が起こった。カメラ付き携帯電話のフラッシュがいっせいに点いた。めぐみは微笑んで片手をあげてポーズをとった。

「だいいち考えてもみなよ。あたしのようないい女を、世の中の男性たちが放っておくと思うの？」
　めぐみはざわめきが少しおさまるのを待って自慢するように言うと、かけていた眼鏡をはずして教壇の机に置いた。まだ携帯のフラッシュが点滅している。
「じゃあ、もうそのへんの男に食べられちゃったのか？」
　香取は大口を開けて笑った。教室に爆笑と口笛がわきあがった。参観の父兄たちは顔を見合わせて笑っている。
「得意の空手かなんかで脅しちゃったんじゃねえのか！。あたしを食べてくれなきゃ、ぶん殴るぞって！」
　香取が大声で言った。また大きな笑いがおこった。めぐみは教壇に片手をついたまま笑顔で生徒たちの騒ぎを聞いていた。
「柔道で投げ飛ばしたのかもしれないぜ！」
「そして、むりやりその男にのしかかったんだ！」
「じゃあ、反対に男を食べちゃったのか！」
　南向井忠明が叫んだ。
「それじゃ、どっちが男だかわかんねえじゃねえか！」
　橋田とおるが大声で笑った。
「絶対にありえる！」
「あるある！」という声が次々とあがった。
「いやだー！」という女子の声にまた大きな笑いがわいた。
「バカみたいに大口開けて笑ってんじゃないよ！。校長先生までなんですか！。ちょっと成田先生。よだれが出てますよ！」
　めぐみは大爆笑している教室の生徒と、覗いているB組の成田教諭と生徒たちを指さして言った。その成田教諭が手でよだれを拭くしぐさをした。それを見てまた生徒と父兄から大きな笑いが巻き起こった。母親たちはハンカチで目を拭きながら笑っている。
「こんなウブな女をつかまえて、ずいぶんと好き勝手なことを言ってくれるじゃないか。あたしはレイプ魔か！」
　めぐみは笑い転げている生徒たちを見渡した。校長や参観してい

る父兄たちはめぐみの次の言葉を目を輝かせて待っている。
「あたしが大好きな人は、この世でたったひとりだけさ！。その人にだったら、あたしはいつ食べられてもいいんだけど、相手が食べてくれないんじゃ、これぱっかりはしょうがないじゃないの！」
しなやかな髪を躍らせ、教壇を叩いてそう言っためぐみにまた大きな笑いが起こった。
「あたしだって、大好きな人を早く食べたいわよ！」
めぐみは口を尖らせて不満そうに言った。その言葉に生徒と父兄から大きな拍手と歓声がわきあがった。男子の橋田とおるがピーピーと指笛を鳴らした。
「女ってのは、どんなに相手が好きでも、自分から、あたしを食べて、なんて言えないのよ。あたしだっておしとやかな日本女性だもの、そのくらいの奥ゆかしさはあるんだ！」
めぐみはそう言って腕を組んだ。
「だったら、先生まだバージンなのか？」
佐藤晃一が大声で聞いた。女生徒から「いやだーっ！」という歓声があがった。
「うるさいね！。二十二歳のバージンなんていくらだっているよ！。あたしは、このナイス・バディをおいしく食べてくれる王子様を待ってるだけさ！」
生徒と父兄たちの爆笑の中で、めぐみは組んでいた腕を解いて腰に当てた。
「じゃあさ。俺たちの中の誰かに食べられるとしたら、誰がいい？」
香取が聞いた。参観している母親と教室の女子たちは顔を真っ赤にして手をたたいて笑っている。
「ふん！。生意気言ってんじゃないわよ！」
めぐみは腕を組んで教壇の上から生徒たちを見渡した。
「あんたたち、親に扶養してもらってるくせに、けっこう一人前のこと言うじゃないか。さっさと大人になって、大金持ちになってからあたしを誘ってほしいもんだわ！」

めぐみは笑いながら生徒を見つめた。
「あたしの好物は、三センチの牛ヒレステーキと、マツタケのホイル焼きと土瓶蒸し。一杯二千円以上のカクテル。ホテルに連れ込んであたしを食べたいんだったら、一泊十万円以上のスゥイートルーム。そして、真っ赤なポルシェにでも乗ってきたら付き合ってあげるわよ！。それまで、大事なところをしっかり洗っときな！」
めぐみの言葉に教室は笑いと拍手の渦と化した。
「先生よ！。先生の好きな男って、そんなに金持ちなのか？」
男子の立花純一が大笑いしながら聞いた。父兄たちは腹を抱えて笑っている。
「バッカねー。いい立花くん。いまの条件は、あくまでもあんたたちを対象とした場合じゃないの。あたしが大好きな人だったら、たとえ毎日がカップラーメンだって、いっしょにメイク・ラブするだけで幸せなのよ！」
めぐみはそう言ってふと天井に目をやった。
「あーあ…。あんたたちのせいで、彼のこと思い出しちゃった…」
めぐみは天井を見つめたままでつぶやいた。
「パンツだって、毎日かわいくて色っぽいのはいてんだからさ…。早く食べられたいなー。今が最高の食べ頃なのに…」
めぐみはしみじみと言った。その脳裏に、さわやかな笑顔の板倉旭の面影が浮かんでいた。父兄と生徒たちは、天井を見つめているめぐみを口をあけて見ている。
「そうだ…」
めぐみは、何かを思い出したような表情で生徒たちを見た。そして慌てたしぐさで教科書と出席簿を閉じた。
「彼に、早くあたしを食べてって電話しなくちゃ！。アホ面したあんたたちと遊んでる時間なんか無いんだ！。じゃあーねー！」
めぐみはそう言って上着を持つと、そそくさとドアを開けて教室を出た。
「エーーッ！。なんだよ太田のバカヤロー！。なにがじゃーねーだ

！。数学のポイントも言わずに、なんで彼氏に電話なんだよ！。おれ、不良になっちゃうぞ！」
安西孝典の大声が聞こえた。
「もうなってるじゃん！」
そう言った南やす子の声に、父兄たちをまじえた爆笑と拍手の中で生徒たちが大声で騒ぐ声が聞こえてくる。
アハハ、シカトしてやった。ざまあ見ろ！。
廊下には教頭の三河が立っていて、舌を出して歩いてくるめぐみに笑いかけている。
めぐみは三河に笑顔で会釈をした。それとほぼ同時に四時限目の終了を知らせるチャイムが鳴った。
あ、眼鏡忘れた…。
めぐみは小さなため息をついて笑った。

第１８話　父と娘

「めぐみ、学校から電話だよ！」
参観日の次の日。学校から家についてまもなく、母親の憲子が階下で叫んだ。
「わかった。いま行く！」
めぐみは大急ぎでジーンズに着替えると階段を下りた。母の憲子がコードレス電話の子機をめぐみに渡した。
「もしもし、太田です」
めぐみは受話器を耳に当てた。電話は三河教頭だった。
「はい…。はい…」
受話器を耳に当てているめぐみの顔色が変わった。Ｃ組の安西孝典、岸田勉、大高陽一の三人が、町でチンピラ風の四人と喧嘩をしたという。
「わかりました。すぐに行きます！」
めぐみはそう言って受話器を置いた。
「父さん！」
めぐみは居間へ駆け込んだ。
「お願い、学校まで送って！」
「どうしたんだ…」
めぐみの慌てようを見た父の恵一が聞いた。
「生徒が喧嘩に巻き込まれて…」
「よし、わかった！」
父の恵一は上着を着て車のキーを持った。めぐみもジーンズのベストの上からコートを羽織ると父の後について居間を出た。母の憲子と弟の憲弘が心配そうな顔でめぐみを見つめている。めぐみは運動靴を履いて立ち上がった。父の恵一はすでに車を用意している。
「お姉ちゃん…」
憲弘が心配そうにめぐみを見上げた。

「すぐ帰ってくるから心配しないで」
めぐみは弟の憲弘の肩に両手を置いて言った。
「憲、ちゃんと宿題するんだよ」
めぐみは憲弘を抱き寄せると、頭をなでて憲弘の頬に唇をつけた。

「生徒たちはどこに！」
学校に着いためぐみは教員室に駆け込むと、すでに来ている教頭の三河に聞いた。
「砂川警察署で事情聴取の最中です。いま校長先生が身柄の確認と引き取りに…」
三河は表情を曇らせてそう言った。
「わたしも行きます！」
そう言うと同時にめぐみは教員室を飛び出した。
「父さん、砂川警察署へ行って！」
車に飛び乗ったためぐみは父の恵一に言った。父は無言で陽が落ちた国道を飛ばしてゆく。
いったいどうなっているのか、めぐみには事情がよくわからない。三河教頭からの電話で、安西、岸田、大高の三人が学校の帰りに喧嘩をした、とだけ聞いて飛んできたのだ。
警察署に向かって走る車の中で、生徒たちにもしものことがあったらとめぐみの心に不安がよぎった。怪我でもしていなければ…。めぐみは心の中で祈った。
十分ほどで父が運転する車が砂川警察署に到着した。
「光陵高校の太田です。うちの生徒たちは！」
めぐみは車から飛び降りると、玄関のところに立っている警察官に聞いた。
「二階の青少年保護課です」
その言葉を聞くと同時にめぐみは玄関から正面の階段を駆け上った。そしてまわりを見渡し、青少年保護課と看板が掲げられている

部屋のドアを開けた。中にいた警察官が振り返ってめぐみを見た。
「太田先生…」
椅子に座っていた財津校長が立ち上がった。
「校長先生。この子たち、いったい何を…」
めぐみは財津校長の顔を見た。
「先生。まあ落ち着いて…」
財津校長はめぐみの肩を叩いて椅子を勧めたが、めぐみはその椅子も目もくれず、並んで椅子に座っている生徒を見つめた。安西孝典、岸田勉、大高陽一の三人が、目を伏せて座っている。
「あんたたち、怪我はなかったの！」
めぐみは三人に駆け寄って聞いた。
「うっせえな、怪我なんかしてねえよ…」
大高が顔を少し上げて言った。
「なにしに来たんだ。女の出る幕じゃねえよ！」
安西はそう言ってめぐみをにらんだ。
「……」
めぐみは大きなため息をついた。
「見せて…」
めぐみは殴られた痕だと思われる安西の頬と口に手で触れてみた。大高も岸田も顔に数ヶ所あざがついている。切れた傷口から血がにじんでいた。めぐみはハンカチを出して自分の唾液で湿らし、三人の傷口の血を拭いてやった。
「担任の先生ですか？」
制服の襟に警部の階級章をつけた警察官が声をかけた。青少年保護課長らしい。近藤という名札をつけている。
「はい。太田と申します…」
めぐみは頭を下げた。
「経緯はよくわかりませんが、大変なご迷惑をおかけして…」
めぐみはまた頭を下げた。
「まあ、擦り傷と打ち身程度で、双方ともたいした怪我はないよう

です」
近藤警部は、めぐみと三人の生徒たちを交互に見た。
「ただ、喧嘩をしたのは事実でして。相手が逃げてしまっていますので、いちおう補導したおたくの生徒に事情だけはと…」
近藤警部は腕を組んで三人を見つめた。
「いんねんをつけてきたのは相手側のほうらしく、どうやら三人の話から判断すると、相手は私服を着ていましたが、年齢は彼らと同じ高校生か大学生くらいだと…」
近藤警部はそう言って三人を見た。

安西たちは学校の帰りに砂川の繁華街を歩いていた。
光陵高校は学生服での通学になっているが、札付きのレッテルを貼られているC組の生徒たちは、ボタンを全部はずしたり、ズボンのすそを改造したりと、学生服をまともに着ていない。
安西たちもそのとおりで、三人はいかにも不良という格好で繁華街を闊歩していた。
安西、岸田、大高の三人は高校生としては身体が大きいほうで、その中でも安西は百八十センチの身長がある。岸田にしても大高にしても百八十センチ近い。ボタンをはずした学生服を着て、肩を怒らせて歩いていれば目立つだろう。町のヤクザやチンピラに目を付けられて当然だ。
繁華街を歩く三人の前に、どこから見てもチンピラという顔つきの四人が立ちふさがった。安西たちはうさん臭い目で相手をにらみながらも、一応は道をあける格好で四人の男たちとすれ違った。
てめえら、光陵かよ。
四人の一人が立ち止まって言った。
光陵だったらどうだってんだ。
安西も振り向いて相手を睨み返した。男たちは冬のさなかだというのに、上着も着ず、派手な模様の長袖のシャツだけだった。
気にいらねえんだよ!。

男のひとりがいきなり岸田に殴りかかった。岸田は持っていたカバンで相手のこぶしを受けると、そのままカバンを相手の顔に押し付け、右足で相手のわき腹を蹴った。それをきっかけのように七人が入り乱れての殴り合いとなった。

誰かが電話をしたらしく、まもなく警察官が走ってきた。それを見た相手の四人は安西たち三人を残してバラバラの方向へと姿を消したのだった。

「あいつらが先に仕掛けてきたんだ。おれたちが悪いんじゃねえよ！」

大高がめぐみに言った。

「三人とも、立ちな…」

めぐみは三人に言った。三人は無言でめぐみを見上げている。

「立ちな！」

めぐみは三人に怒鳴った。三人は渋々と立ち上がった。

めぐみは安西の頬にいきなり平手を飛ばした。パンという音が部屋に響いた。めぐみは岸田と大高の頬も平手で叩いた。三人は突然のことにあっけにとられた顔でめぐみを見つめている。財津校長も近藤警部もそれを見てぼうぜんとしている。

「あんたたち、校則を忘れたのかい！」

めぐみは大声で言った。

「札付きのあんたたちが校則破って喧嘩したら、即刻退学か長期停学じゃないか！」

めぐみは怒鳴った。

「あんたたちみたいなろくでなしは、どこの学校だって引き取りゃしないよ！。せっかくいままで勉強して卒業も近いのに、ここで退学になったらどうすんだい！」

めぐみは唇を震わせて三人をにらんだ。

「いつでも退学にすりゃいいじゃねえか！。どっかの誰かが勝手に作った校則なんかクソくらえだ！」

岸田勉が大声を出した。

「バカッ！」
めぐみは岸田の頬を思いきり平手で叩いた。
「あんた、それでも男かい…」
めぐみは頬を押さえている岸田を見つめて言った。
「それでも男かい！」
めぐみの大声が響いた。
「そんなに校則が気に入らないんだったら、あんたたちが大人になってから、自分たちに都合がいい校則でも法律でも作りゃいいじゃないか！。親のすねかじってるくせして、一人前のツラすんじゃないよ！。どっちが先に手を出したって、そんなことは問題じゃない！。喧嘩は両成敗って決まってんだ！。やったらやったで、男らしく校長先生やお巡りさんに謝ったらどうなんだい！」
めぐみは涙声で三人に怒鳴った。三人はだまったまま下を向いている。
「どうしてさ…」
めぐみは悲しそうな表情で三人を見つめた。その目に涙が浮かんだ。
「出来の悪いくせして、こんな乱れきった格好で…」
めぐみの目から涙がこぼれ落ちた。
「学生らしいキチンとした服装なら、チンピラに因縁なんかつけられないのに…。ちゃんとした服装のほうがずっとカッコいいのに…」
めぐみは涙声でそう言うと、ひとりずつ学生服のボタンをかけていった。
自分が北星高校に入学した頃のことをめぐみは思い出していた。派手な服を着て喧嘩に明け暮れ、担任の月丘の言うことも聞かずにいきがってばかりだった。
そんなめぐみを、月丘は付かず離れず見守り、地獄の底であえいでいためぐみの心を救い出してくれた。そのことを思い出すと涙があふれてくる。この三人も、あの頃の自分と同じだと思った。
三人は下をうつむいてめぐみのするがままにしている。悔しくて

悲しくて、涙が頬を伝うのもぬぐわずめぐみは三人の服装を整えた。
「校長先生…」
めぐみは三人の服装を直すと財津校長を振り向いた。そして冷たいタイルの床に正座して両手をついて頭を下げた。
「大変なご迷惑をおかけしました」
めぐみは床に手をついたまま言った。床にめぐみの涙が落ちた。
「実習生とはいえ、わたしはこの子たちの担任です。この子たちのした事はわたしの責任です。バカはバカなりに勉強して、やっと何とか…。もうすぐ卒業できるところまできています。今後このような不始末は絶対にさせません。ですから、このバカどもの処分は、どうぞご猶予を…」
めぐみはそう言って額を床に擦り付けた。
「わたしの指導がいたらなかったせいです…」
めぐみは土下座したまま必死で校長に懇願した。
光陵高校の校則では、喧嘩をしたものは最低でも十日間の停学。何度も喧嘩をした場合は無期限の停学か退学にすると決められている。ましてやC組の生徒たちは札付きばかりだ。その中でも安西たちは要注意のレッテルを貼られている。
今度のことで重処分は免れないだろう。卒業まであとひと月もない。長期の停学処分でも受けたら、やっとレベルがほかのクラスに追いついたかいもなく、この三人は卒業できないのだ。
「わたしが責任を取ることで、このバカどもをお許しいただけるのでしたら、どのような処分でもお受けいたします。どうかご猶予を…」
めぐみは床に頭をつけたまま財津校長に言った。涙が床にいくつも落ちている。
「先生…」
財津校長はひざをついてめぐみの肩に手を置いた。
「どうかもう…。太田先生のお気持ち、確かに受け賜りました。先生のお心に免じて、よく検討することを約束します」

財津校長はそう言って立ちすくんでいる三人の生徒を見つめた。
めぐみは床に手をついたまま、あふれる涙をふいた。

彼女は…。

青少年保護課の部屋に入ろうとした防犯課長の霜田警部は、大声で怒鳴りながら三人の生徒を平手で叩く女性を見てドアの影に身を隠した。振り向いて床に土下座をする顔に見覚えがあった。

トレードマークのアイシャドーこそしていないが、間違いなく空知管内の悪たちから恐れられている伝説の女、〈アイシャドーのめぐみ〉だった。

なぜ彼女がここに…。

霜田はドアの影で中の話を聞いていた。

あの伝説のスケ番が涙を流して土下座している。聞けば、どうやら砂川光陵高校に教育実習生として出向しているらしい。その受け持った生徒たちが喧嘩をして、それは自分の責任だと学校側に処分の保留を懇願し、校長に土下座しているのだ。

伝説の女の、涙か…。

霜田は、ふーーっと深いため息をついた。

冷たい風が吹く中、めぐみは安西たち三人と砂川警察署を出た。

警察のほうでは、担任教師と校長が身元を引き受けるということで、とりあえず処分保留を決定し、三人とも自宅に帰すことにしたのだった。

めぐみは無言で三人の自宅がある方へ歩いていった。時おり冷たい風が道路の雪を舞い上げながら吹き抜けてゆく。夜の九時を過ぎた砂川の町は商店の明かりも消えて閑散としている。後ろから安西たちがついてくる。

なぜか心がさびしかった。

自分は教師の柄ではないことはめぐみ自身がよく知っている。し

かし、受けたからには全身全霊を傾けてそれに対峙する。それがめぐみのやりかただった。そしてそのとおり、自身をさらけ出し、全力でC組の生徒たちに正面から向かっていった。
だが、きょうの事でそれは無駄だったことを思い知らされた。めぐみが誠意だと思ってしてきたことは、C組の生徒たちにはまったく通じていなかったのだった。それを思うと自分に腹が立ってきた。
なにがスケ番だい！。
めぐみは自分のふがいなさに自身を呪った。
明日、校長に実習の終了を自分から申し出るつもりだった。それで責任を取れるとは思っていないが、こんな気持ちで教壇に立てはしない。
いくら身体が成長して大人ぶっていても、心の成長はそれに伴っていない。自分はやはりただの女子高生にすぎなかった。
「だれ！」
めぐみは異様な気配を感じて建物の影をにらんだ。雪が残っている建物の影から派手な長袖のシャツを着た四人の男たちが飛び出してきた。手には木刀を持っている。
「恥かかせやがって！」
ひとりの男が木刀を構えてにじり寄ってくる。
「うちの生徒に喧嘩売ったってのは、あんたたちかい！」
めぐみは少し後ずさりしながら男たちに言った。薄暗い街灯にめぐみの目が光った。
「いい女じゃねえか。叩きのめしてじっくり輪姦してやる！」
にじり寄る男は薄笑いを浮かべてめぐみをにらんだ。
「先生！」
安西たちがめぐみをかばうように横に並んだ。
「さがってな！。あんたたちは絶対に手を出すんじゃないよ！」
めぐみは男たちから目をそらさず安西たちに言った。安西たちはめぐみの迫力に圧倒され、数歩後ろに下がった。
「きょうは特別機嫌が悪いんだ。怪我してもしらないよ！」

めぐみは着ていたコートを脱いで後ろに放り投げると、腰を少し曲げて左手を前に出し、片足を爪先立ちにして空手の構えになった。目の前の男の後ろにいる三人は木刀を何度か振り下ろして威嚇しながらにじり寄ってくる。めぐみは呼吸を整えて相手の動きをうかがいながら左へ動いて建物を背にした。

「やろう！」

一番前にいた男が木刀を振りかぶって突進してきた。めぐみと二メートルほどの距離になったとき、歯をむき出した男が木刀を振り下ろした。

めぐみは素早く間合いを詰め、振り下ろしてきた木刀を素手で受けると、エイッと気合を込めて右の手刀を木刀に振り下ろした。バキッという音がして木刀が真っ二つに折れた。その勢いのまま男の顔に左ひじを打ち当てた。相手の鼻の骨が折れた感触がめぐみのひじに伝わってくる。

「ヤアッ！」

返す手で額に手刀を打ち込むと、男は建物の壁に身体を打ち当てて気を失った。男のシャツが鼻血で染まった。

素早く構えなおしためぐみは残りの三人の男たちを見据えた。男たちは仲間が倒されたのを見て顔から血の気が引いている。

「このやろう！」

三人の男が一度に飛びかかってきた。

「エイッ！。トアッ！」

めぐみは右手でひとりの男の木刀を振り払うと同時に身体を回転させ、気合とともに左足で男のわき腹に回し蹴りを叩き込んだ。

「ハッ！」

また身体を回転させると、木刀を振り下ろそうとしていた男の左側頭部に右の後ろ回し蹴りを入れた。

ふたりの男があっという間に地面に這いつくばった。

「まだやるかい！」

めぐみは残った男に怒鳴った。男は木刀を構えたまま青ざめた顔

でめぐみを見つめている。腰が完全に引けていた。
　めぐみは足元に落ちている木刀を拾い上げると、片方を地面に当てて右の手刀を振り下ろした。ベキッと真っ二つに木刀が折れた。その折れた木刀を残っている男の前に放り投げた。道路に木刀が転がった。
「こんな出来損ないでも、あたしのかわいい教え子だ！。仲間にもよく言っときな！。あたしの目の黒いうちは、光陵の生徒に手を出したらただじゃおかないよ！」
　めぐみは男に怒鳴った。男は木刀を震わせながら構えたままめぐみを見ている。
「仲間を連れてさっさと消えな！」
　拳に力を入れためぐみの関節がポキポキと音を出した。男は腰を引いたまま倒れている仲間の身体を揺すっている。めぐみを見上げる目がおののきに変わっていた。
「行くよ…」
　めぐみはコートを拾い上げた。あぜんとして突っ立っている安西、岸田、大高の三人に言うと、コートを着て先に立って歩き出した。

「……」
「……」
「……」
　三人は無言でめぐみのあとからついてくる。
「先生よ…」
　岸田勉は、自分の家の近くにきたとき、立ち止まってめぐみに声をかけた。
「なに？…」
　めぐみは三人を振り返らず無愛想な返事をした。岸田はめぐみの前に回ってきた。
「おれ、喧嘩なんかして悪かった。謝るよ。ごめん…」
　岸田は神妙な顔で頭を下げた。

めぐみは無言でその岸田を見つめた。
「先生が、喧嘩強くておっかないから言うんじゃないんだ…」
岸田は、腕を組んで立っているめぐみに言った。
「親たちにも見離されてる俺たちみたいな半端もんでも、先生は本当に心配してくれてんだって…。おれ、さっきサツで先生が泣いたのを見て…」
岸田はそう言ってうつむいた。
「泣いて、土下座までして校長に謝ってくれたのを見てさ。おれ、このまんまじゃいけないって…」
その言葉にめぐみはまた横を向いた。こらえている涙があふれそうだった。
「責任とって、辞めるなんて言わねえよな」
大高陽一もめぐみの前に回ってそう言った。安西孝則もめぐみの前に回ってきた。
「辞めたりなんかしやがったら、一生恨んでやるぜ」
安西はそう言ってめぐみを見た。
「ふん…」
めぐみは横を向いたまま鼻で言った。
「あたしのようないい女を泣かすなんて、あんたたちもいい性格してるよ」
めぐみは三人を見つめた。
「さっきのビンタを忘れんじゃないよ。遅刻は絶対に許さないからね！」
めぐみは腕を組んだまま、涙があふれる目で三人に言った。
「サンバカトリオ。きょうはここで解散だ。さっさと帰って宿題でもやんな！」
めぐみは涙が流れ落ちたのをぬぐいもせず、大声で言った。

安西孝則、岸田勉、大高陽一の三人の生徒と別れ、めぐみは滝川

行きの最終バスを待っていた。教頭の電話で慌てて家を出てきたからポケットには百円硬貨が二枚しか入っていない。二百円では滝川市内の新町あたりまでしか行けない。父には砂川警察署で先に帰ってもらっている。

「やれやれ…」

めぐみはため息をついた。

「行ける所まで行って、あとは歩くか…」

めぐみは、二枚の百円硬貨を見つめてつぶやいた。

そのバス停に父の恵一が運転する車が止まった。

「父さん…」

「めぐみ、帰ろう…」

助手席のドアを開けた父が言った。

めぐみは助手席に座ってドアを閉めた。車は国道を走り出した。

「待っててくれたの？」

めぐみは前を見たまま父に言った。

「おまえが心配で、ずっとついて行ってた…」

父の恵一は運転しながら言った。

「じゃあ、あたしがしてたこと全部見てたの？」

めぐみは聞いた。

「大事な娘を置いて帰れるわけがないだろう」

恵一は運転したまま言った。

もし自分たちの後をついて来ていたとすれば、あのチンピラたちと渡り合ったのも、父はどこかで見ていたのかもしれない。

「憲弘と母さんが、おまえの帰りを待ってる」

父の恵一は少し笑った。

恵一は車でめぐみたちの後を目立たないようについていった。先に帰ってとめぐみは言ったが、娘をひとり残して帰れるはずがない。

突然めぐみたちの前に木刀を持った四人の男たちが飛び出してきた。恵一は車から飛び降りた。めぐみに何かあったら…。恵一は近

くに落ちていた雪まみれのこぶし大の石ころをふたつ拾うと、めぐみたちのほうに向かって走り出していた。その目に、木刀で殴りかかってきた男をあっという間に空手で打ち伏せる娘の姿が映った。

そういえば…。

恵一は、娘が〈アイシャドーのめぐみ〉と呼ばれるスケ番だということを思い出した。自分がしゃしゃり出ては、伝説のスケ番と呼ばれている娘の意地と誇りに傷をつけることになる。助けるのは危ないと判断したときでも間に合う。

恵一は少し離れた建物の影に入って様子を見ることにした。

自分が出るまでもなく、めぐみは目にもとまらぬ早技で二人の男を叩き伏せてしまったのだった。娘は倒れている男たちに一喝すると、生徒たちを連れて歩き出した。

恵一はまた車に乗ってめぐみたちの後をついて行った。

生徒の一人が立ち止まってめぐみに何かを話しかけ、頭を下げているのが見えた。残りの二人もめぐみに喧嘩したことをあやまっているようだ。めぐみは腕を組んで三人に何かを言っていた。そして三人の生徒はめぐみを残して家路に着いた。

「大きく、強くなったな。めぐみ…」

父はそう言って笑った。めぐみはその父の横顔をじっと見つめた。

「父さんは、生徒たちのために、身体を張ってあそこまで一生懸命になれるおまえを誇りに思うぞ。父さんと母さんの、最高の、自慢の娘だ」

父は前を見たまま言った。

「父さん…」

めぐみの目から涙があふれ出た。

従兄弟の柴田良介にレイプされかかったことと、撮られた裸の写真騒ぎで両親と喧嘩して滝川から飛び出し、そのまま北星高校に入学して以来、やっと両親との心のわだかまりが解けたとめぐみは思った。

「これは、必要なかった…」
父の恵一は、足元にころがっている石を拾い上げてめぐみに見せた。
「なにこれ…」
めぐみはその石を受け取り、父と石を交互に見た。
「父さんは、喧嘩はあまり強くない…」
恵一は笑った。
「アハハハ…」
めぐみも父から渡された石を見て笑った。
娘が危ないと思ったとき、父はこの石を握って飛び込んでくるつもりだったらしい。
「父さん…」
めぐみは流れ落ちる涙の目で父の横顔を見つめた。
「ん？」
父は前を見たまま返事をした。
「父さん、大好き。大好き…」
めぐみは父の腕に自分の腕をからませ、父の肩に顔をつけて声を出して泣いた。父の身体から出てくるほのかなタバコの臭いがめぐみの鼻に伝わってくる。
あの事があってから、ほとんど父と会話をしたことのないめぐみだった。しかしめぐみはただの一度とて父や母のことを嫌いだと思ったことはなかった。ただあのときを境に、めぐみが自分から両親を避けていたのだった。
自分の子供を嫌う親はいない。両親とて、あれを機に家出同然に飛び出して北星高校に入学した娘に、自分たちの心をどう伝えようかと困惑していたに違いないのだ。何があろうと自分は両親が大好きだ。その気持ちに一生変わりはない。
両親が大好きなくせに、長いこと素直な気持ちになれなかったことを、北星高校に入学してからもずっと悔いていた。その父に、やっと自分の気持ちを正直に伝えることができたのだ。

夜の十時になろうとする圧雪の国道十二号線に、めぐみと父親の恵一を乗せた車のライトが行く手を明るく照らしていた。

その夜、家に帰った父と娘は差し向かいで酒を酌み交わした。
「まあ、一杯付きあえ…」
父は娘に言った。
「かあさんも一緒に飲もう。お猪口をふたつたのむ」
父が笑顔で母親に言った。母親はいつもと違う夫と娘の様子に戸惑いながらも、サイドボードから小さなガラスのお猪口を出して、そのひとつを娘に手渡した。
「さあさあ」
笑顔で銚子を差し出し、母と自分に酒を注ごうとする父に、娘は母から渡された小さなお猪口を両手で持って父の酒を受けた。
母親は注がれた酒を少し飲んでテーブルに置いた。
娘は生まれて初めて酒を飲んだ。ほろ苦い冷酒が胃の中に落ちてゆく。
「どうぞ…」
少しむせながら娘も父に酌をした。娘の酌を受ける父の顔が笑顔になっていた。
「ほら…」
そう言ってまた酒を勧める父に、娘は笑ってお猪口を差し出した。その酒を娘はひと口で飲んだ。
「酒は初めてか？」
父が聞いた。
「あたりまえじゃない。あたしは花の女子高生よ」
娘は笑った。
「初めての、酒の感想はどうだ？」
父は嬉しそうに聞いた。
「少し甘くて、ほろ苦いって感じ…。嫌いな味じゃないわ」

娘は父に酌をしながら父を見た。
「嬉しいときの酒は、何物にも変えがたい」
父もまた娘に酒を注いだ。
「父さんの娘だから、きっと酒飲みになるかもね」
父の嬉しそうな顔を見つめながら、娘は頬杖をついて笑った。初めて飲んだ酒のせいで自分の顔が火照ってくるのを感じた。
幸せだったころにやっと戻れた。今度からは、今までまともに顔も見なかった父と正面から顔を見合わせ、毎日でもこうして差し向かいでいられる。学校で色々あったことを話が出来る。娘はそう思うと嬉しくてたまらなかった。
母と弟も食卓椅子に座って、父と娘が酒を酌み交わすのを見つめている。
よかった…。
母親はそっと涙をふいた。長かった冬がやっと終わったのだ。
娘のとなりに座っている息子は、夫と娘の酒の肴をつまみ食いしてご機嫌だった。
「ほら、もう一杯…」
父が娘に酒を勧める。
「自分の娘を、酒に酔わせてどうすんのよ」
娘はお猪口に酒を受けながら笑った。
「お茶目で、ほんとに可愛い娘だった…」
父は、大きく、そして美しく成長した娘を目を細めて見つめた。
「へえー。いまは可愛くないんだ…」
娘は笑って父をにらんだ。
「いまは、母さんに似てすっかり女らしくなった」
父は笑った。その父の言葉に、娘は母と顔を見合わせて笑った。
「久しぶりに…」
父は娘を見つめて酒を飲んだ。
「子供のときのように、子守唄を歌いながら抱っこして眠るか」
父はそう言って娘を見つめた。

「いいよ。今晩いっしょに寝てあげる」
おどけた父と娘の会話に、母親と娘は大声で笑った。小学四年の弟は会話の意味が飲み込めぬまま一緒に笑っている。
「ねえ父さん…」
娘は父の顔を覗きこんだ。
「ん？」
父は顔を上げて娘を見た。
「いっしょに、お風呂はいろうか」
娘はそう言って父を見つめた。
「娘の成長、見たくない？」
娘は頬杖をついて父を見つめた。
「あたし、いい女になったよ」
その言葉に、父は口の中の酒を吹き出しそうになった。
「こいつめ。いくらいい男だからって、父親を誘惑してどうするつもりだ！」
「アハハハ…」
父親の慌てように、母と娘は大声で笑った。

第１９話　別れのとき

「太田先生。さすがに三宅校長が推薦するだけのことはあります。あのＣ組の生徒が、まるで生まれ変わってしまいました。先日参観に来た父兄の方たちも、すっかり先生のファンになったようです」

教育実習最終日の二月二十五日の放課後。最後の英語の授業が終わり、あいさつに行った校長室で三河教頭が笑顔で言った。

「いいえ。わたしこそ貴重な経験をさせていただいて、皆さんには感謝しています」

めぐみは財津校長と三河教頭に頭を下げた。

「それに、あの三人の処分を免除してくださって…」

めぐみはまた頭を下げた。

「いえ。先生の心意気に打たれたんです」

財津校長は笑顔でめぐみを見た。

「さすが、アイシャドーと異名をとった人、まさに伝説のスケ番。いずれＣ組の生徒たちがそのことを知ったら飛び上がるでしょうな。驚いたことに、小試験の平均点数もはね上がっています。この様子では、進学希望の全員が志望校に合格するかもしれません。センター試験の結果が楽しみです。ほかの教師たちも、あなたの授業を見ていて、本当の教育とはどうあるべきか、考えを新たにしているようですよ」

財津校長は表情を崩して三河教頭と顔を見合わせた。

「まさに、愛情は力の中に育ち。そして力は愛情を生む…。先生の生徒に接する姿を拝見していて、つくづくそのことを実感しました」

財津校長は目を細めてめぐみを見つめた。

「わたしも時々…。いや、ほぼ毎日。例の時間になると、先生の切れ味のいい講義を廊下で聞いていましたが、ほんとうに楽しくて、何度も声を出して笑いそうになりましたよ」

三河は思い出し笑いをしている。

「先生のスカートの中を写した、例の写真…」
「見たんですか！」
めぐみは目を丸くして聞いた。
「それが、まだでして…。まだ消していなければ、いずれ近いうちに、池端から…」
三河は嬉しそうに言った。
「もう…」
めぐみはため息をついて三河と財津を見つめた。
そのとき、勢いよく校長室のドアが開いた。
「先生！」
飛び込んできたのはC組の安西孝典だった。
「安西くん…」
めぐみは戸惑った表情で安西孝典を見た。
「先生、行っちゃうのかよ！」
安西孝典はドアのところで言った。
「あたしの実習はきょうで終わり…。だから、みんなとはお別れよ」
めぐみは言った。
「そんなのねえよ！。おれたち真面目に勉強するようになったんじゃねえか。喧嘩だってしねえし、返事だって掃除だってちゃんとするようになったんだ。それを今さら、さいならってことないよ！」
安西孝典は大声で叫んだ。
「校長先生。教頭先生もよ！。なんとかなんないのかよ。太田先生を残してくれよ！。おれたち、もっと真面目になるからさ！」
安西孝典は、大声で言って何度も校長と教頭に頭を下げた。校長と教頭は顔を見合わせて困惑の表情をしている。
「みんないるの？」
めぐみが聞いた。
「みんな来てるよ。雅彦の両親や、おれたちの親もきててさ。先生を引きとめようって！」
安西はドアのほうを指差した。C組の生徒たちがドアの影に見え

隠れしている。
「みんなを連れて教室に入って…」
めぐみが言った。
「だってよ…」
「いいから、教室に戻ってな！」
めぐみの声が響いた。
その声に押され、安西は「みんな、先生が教室に戻れってよ」と、廊下で言っている。
めぐみは校長と教頭に頭を下げると、教員室から三年C組の出席名簿を持ち、背筋を伸ばして教室に入った。教室の後ろには池端雅彦の両親や、先日の授業参観の日に来ていた親たちを含めて五十人近い父兄が立っている。父兄たちは教壇に立っためぐみに深く頭を下げた。
「起立！」
当番の山田友香の声に全員が立ち上がった。
「礼！」
全員がそろって頭を下げた。めぐみも腰を折って礼をした。
「なおれ！」
「着席！」
山田友香の声が教室に響き渡った。
「起立や礼が、ちゃんとできるようになったんだね。たいした進歩じゃないか」
めぐみは笑って生徒たちをゆっくりと見回すと眼鏡をはずして教壇に置いた。生徒たちは射るような目でめぐみを凝視している。
「みんな。あたしは、きょうで実習を終わって、また元の生活にもどるんだ。だから、みんなとはきょうでお別れだよ…」
めぐみは愁いを浮かべた目で教室を見渡した。
「ちょうど、みんなのご両親がいらしてるから、あたしの個人的な見解を言うけど、あたしの独り言だと思って聞いて…」
めぐみは腕を組んで生徒たちを見た。

「あたしは、いい大学を卒業するだけが人生じゃないと思ってる。ただ、本当に自分がやりたいことがあって、そのために大学に行って勉強することが必要なら、絶対に進学すべきだよ。でもね。自分がこれから先、生きてゆくために何をしたいのか、どんな勉強をしたいのか…。それが定まらないんだったら、とりあえずは大学に行くことを勧める。学歴は邪魔にならないし、四年間と言う時間は、自分の進路を決めるためには有効だと思うの。ただし、四年間という貴重な時間と、みんなのご両親が身を削るようにして払ってくれる高い学費を、絶対に無駄にしないでね」

めぐみは言った。

「自分が本当にやりたいことに大学の四年間を賭けるのも人生だし、高校を卒業して社会ですぐに役立つ技術を身に付けて働くのも人生…」

めぐみはそう言って生徒たちを見渡した。

「あたしは大学に進学することを否定するんじゃないの。ただ、みんなが、先生や両親から大学に進学するように言われたから仕方なく受験するんじゃなくて、十八歳の人間として、自主性と主体性をもって自分自身の進路を決めてもらいたいのよ…。人間、赤ちゃんで生まれたときから…。その瞬間からその人だけの人生が始まるの。誰のためでもなくて、ひとりひとりのための人生がね…。それだけを最後に言いたかった…」

めぐみは、自分を見つめる生徒たちをゆっくり見回した。

「みんなと過ごした三週間。みんなの心の中に、そういえば、生意気な太田っていう実習の先公がいたなって、少しの思い出が残ればそれでいいの…。さすがに校長先生が言った通りの悪ガキばかりだったけどね…」

めぐみは笑顔で教壇から降りて、生徒たちの机の間をゆっくりと歩いていった。コツコツとめぐみの靴音だけが教室に聞こえている。そのめぐみを見つめる生徒たちの目は、心なしか涙で潤んでいた。

「本当に楽しくていい思い出だったわ。飾ることなく、隠すことも

なく、あたしの本性そのままでみんなと過ごせた。そしてみんなも本音であたしと接してくれた…」
　めぐみはそう言いながら生徒たちひとりひとりをみた。
「ちゃんと返事も出来るようになって、先生たちへの礼儀も板についてきたし、服装もキチンとしてきた…。掃除をサボってた男子も、女子と協力してするようになった…。女子は女子で、髪を染めなくなった子もいるし、女子高生らしく可愛らしくなってきた。それがとってもうれしかったよ。みんなのおかげで、心に沁みた実習だったわ」
　めぐみの言葉に数人の女生徒が声を出して泣き出した。父兄の中の数人の母親も目にハンカチを当てている。
「女々しいよ！」
　めぐみが怒鳴った。
「三週間の付き合いが終わっただけじゃないか！。みんなだって、この日は来るって知ってたじゃないの。なんで涙で別れなきゃなんないのよ！。最初のころは敵意丸出しだったくせに！」
　めぐみの大声に、また女生徒の泣き声が増えた。父兄も唇をかんで涙をこらえていた。
　教室の入り口では財津校長と三河教頭がその様子を見ている。
　めぐみは、自分も泣き出しそうなのを必死で抑えながらひとつため息をついた。
「今から、あたしの最後の課外授業だ！」
　めぐみは教壇に登ると、教室を振り返って言った。
「出席をとるよ！。出席番号の順に、廊下に並びな！」
　めぐみは大きな声で言うと出席簿を手に持った。生徒たちは立ち上がって廊下に並びはじめた。
「声の小さいやつは、この出席簿で頭をひっぱたくからね。覚悟しな！」
　めぐみはそう言って教壇から降りた。校長と教頭がめぐみを見つめている。父兄たちも廊下に出てきた。池端雅彦の母親の真理子は

ハンカチであふれる涙をふいている。
「三年C組、課外授業の出席をとる！。根性すえて返事しな！」
廊下にめぐみの大声が響いた。
「赤石洋子！」
「はい！」
「足立啓太！」
「はい！」
「安西孝典！」
「はい…」
安西孝典は下をうつむいていた。その唇が小さく震えている。
「声が小さい！。でっかい図体して、なんだいネズミの屁みたいな返事は！。あたしにデッドボールを投げた勢いはどうしたんだい！」
めぐみの大声が廊下に響いた。
「頭を出しな！」
めぐみは、分厚い表紙の出席簿で安西孝典の頭を力を入れて叩いた。バンという鈍い音がした。
「安西孝典！」
「はい！」
「よし！。その元気を忘れるんじゃない！。次！」
めぐみは大声で言った。
「池端雅彦！」
「……」
名前を呼ばれた池端雅彦は、体を震わせながら服の袖で涙を拭いていた。
「呼ばれたら返事をするんだろ！」
めぐみは池端雅彦に怒鳴った。
「池端雅彦！」
「はい…」
池端雅彦は、学生服の袖で涙をぬぐいながら小さな返事をした。
めぐみは池端雅彦の頭を出席簿で思い切り叩いた。

「あんたはなんなんだい！。蚊の子供かい！。ヤブ蚊だってもっと大きな声を出すよ！。あたしのお尻にさわった元気はどこ行ったんだい！」
めぐみは池端雅彦の顔を見て言った。
「池端雅彦！」
「はい！」
池端雅彦は精いっぱいの声を出した。
「やればできるじゃないか！。次！」
めぐみは廊下に並んだ三年C組の名前を次々と読み上げていった。
池端雅彦の母親は声を出し泣いていた。
「大高陽一！」
「はい…」
大高は涙目で返事をした。
「なんだい、半分くたばったような声は！。女子だってもっとましな返事するよ！」
めぐみは大高の頭を思い切り出席簿で叩いた。
「大高陽一！」
「はい！」
「よし！。その元気だ！。甲斐千恵子！」
「はい…」
「声が小さい！。腹に力を入れる！」
めぐみは甲斐千恵子の頭を出席簿で叩いた。
「甲斐千恵子！」
「はい！」
「よし、次！。香取健一！」
「はい！」
「金子恵美子！」
「はい…」
金子恵美子が泣きながら返事をした。
「声が小さい！」

めぐみはそう言って金子恵美子の頭を出席簿で叩いた。女子には手加減をしていたが、それでも鈍い音が廊下に響いた。
「金子恵美子！」
「はい！」
「よし！。片桐智明！」
「はい！」
「北邊昭人！」
「はい！」
「岸田　勉！」
「はい…」
岸田が涙声で返事をした。
「声が小さい！。腹に力を入れな！」
めぐみは岸田の頭を出席簿で叩いた。
「岸田　勉！」
「はい！」
「よし！。その根性を忘れんじゃない！」
めぐみは大声で岸田勉に言った。
「小島優子！」
「はい！」
めぐみに名前を呼ばれた生徒の声が廊下に響いている。いつしか廊下にはクラブ活動の生徒や教師が集まってきていた。声が小さい生徒の頭を出席簿で叩きながら、めぐみの目からも涙があふれ落ちていた。
「酒井大輔！」
「はい！」
「佐々木純子！」
「はい！」
「佐藤晃一！」
「はい！」
「佐野幸一！」

「はい！」
「島内志津子！」
「はい！」
「杉田俊夫！」
「はい！」
「立花純一！」
「はい！」
めぐみはあふれる涙もぬぐわず、生徒たちの名前を呼び続けた。
「津田由希子！」
「はい！」
「寺島好美！」
「はい…」
「もっと大きい声で返事をする！」
めぐみは泣いている寺島好美の頭を出席簿で叩いた。
「寺島好美！」
「はい！」
「よし！。その元気を忘れるな！」
めぐみは大声で叫んだ。
「南向井忠明！」
「はい！」
「南やす子！」
「はい…」
「声が小さい！。南やす子！」
めぐみが出席簿で頭を叩く音がする。
「はい！」
「よし！。森村あかり！」
「はい！」
「橋田とおる！」
「はい！」
「藤井利治！」

「はい！」
「三浦康之！」
「はい…」
「声が小さい！。あたしに逆らった元気はどうしたんだい！」
めぐみは三浦康之の頭を出席簿で叩きながら言った。めぐみの手にある出席簿は、表紙が割れてボロボロになっている。
「三浦康之！」
「はい！」
「よし次！。矢島明子！」
「はい！」
「山田友香！」
「はい！」
三年C組、四十人全員の名前が呼ばれた。
「いじょう。三年C組の四十人、全員出席！」
めぐみは廊下に響く声で言った。女子全員が声を出して泣いている。
「メソメソするんじゃない！」
泣いている生徒にめぐみが怒鳴った。
「辛くなったときや悲しくなったときは、腹の中から今のような大きな声を出して、〈太田のバカヤロー！〉って叫んでみな！。入試のときもそうさ。緊張しそうになったら、腹に力を入れてあたしの顔を思い出すんだ！。少しはシャキッとするはずだ！」
めぐみは並んだ生徒たちに言った。
「いいかいみんな！。辛さや悲しさに、負けるんじゃないよ！」
「はい！」
生徒全員が大きな返事をした。
「先生への、礼儀を忘れるんじゃないよ！」
「はい！」
「両親や兄弟を、大事にするんだよ！」
「はい！」

「男は、優しさと強さだよ！」
「はい！」
「体を鍛えて、女子を守るんだよ！」
「はい！」
「女子は、いつも笑顔を忘れんじゃないよ！」
「はい！」
めぐみの声に生徒たちの返事が響いた。
「あたしのようないい女を、忘れるな！」
「はい！」
「女子は、あたしのような、いい女になるんだよ！」
「はい！」
「人生を、大事にするんだよ！」
「はい！」
「みんなのこと、大好きだよ！」
「はい！」
めぐみはそこまで言うと、じっと自分を見ている生徒たちひとりひとりの顔を見つめた。しばらくの静寂が廊下を支配した。
「これで、あたしの最後の授業を終わる！。当番！」
「はい！」
めぐみの声に、当番の山田友香が一歩前に出た。涙がこぼれ落ちている。
「きをつけ！」
山田友香の大きな涙声に、生徒たちは姿勢を正した。
「わたしたちの大好きな、太田先生に、礼！。ありがとうございました！」
「ありがとうございました！」
山田友香の掛け声に、生徒たちが大きな声で頭を下げた。
「みんな元気でね。思い出をありがとう。さようなら…」
めぐみも頭を下げた。そして並んでいる生徒たちひとりひとりの顔を見つめ、その手をとって握り締めた。生徒たちはあふれる涙を

ぬぐいながら、自分の手を握るめぐみを嗚咽で身体を震わせながら見つめていた。

めぐみは財津校長以下、全教師にあいさつをして三週間通った生徒専用の出入口から日が暮れた校庭に出た。

なぜか心が晴れ晴れとしていた。自分の持てるすべてをこの三週間で生徒たちに残してきたのだという爽快感と、生徒たちと別れる一抹の寂しさが交錯している。

「太田先生の、バカヤローーっ！」

校門に向かうめぐみの背後で大声がした。振り返ると、校舎の二階の窓から三年C組の生徒たちが顔を出している。

「太田先生の、バカヤローーっ！」

大きな声が何度も校庭に響き渡った。

「太田先生の、バカヤローーっ！」

さようなら。みんな元気でね…。

「太田先生の、バカヤローーっ！」

めぐみはその大声にせいいっぱい手を振って応えながら、砂川光陵高校の校門を出て行った。

「見たかい校長。これでよかったかい、月丘！」

めぐみは満面の笑顔でつぶやいた。

第２０話　ふたりの写真

南富良野町北星にも春の足音が聞こえるようになってきた。三月十五日は三年生の旅立ちの日である。

卒業式まで一週間後に迫った金曜日、絵里は担任の月丘恵子に教員室に呼ばれた。

「突然で悪いんだけど、あなたに卒業式で送辞を読んでほしいの」

月丘が言った。ほかの教師も黙って絵里を見つめている。

「でも、送辞は二年生の代表が読むことに…」

絵里は月丘とほかの教師を見ながら言った。

「二年生のみんながね、今年の送辞を読むのは板倉さんしかいないって。二年生みんなの意見なの。もちろん三年生はそのことを知らないわ…」

月丘は突っ立っている絵里を見上げてそう言った。

「……」

「立ってないでお座りなさい」

月丘が椅子を勧めた。絵里は黙って腰をおろした。

「たしかに、過去の卒業式で一年生が送辞を読んだことはないわ。前代未聞と言うべきよね。でも、それが二年生全員の総意なら、先生たちもみんなの意見を反映するのが勤めなの。あとはあなたの気持ちしだい。難しいことだとは承知しているけど、校長先生もほかの先生も、二年生全員の気持ちなら、それをはぐくんであげたいと思っているわ。もちろんわたしも…」

「……」

月丘は無言の絵里を見つめている。そしてため息をついて立ち上がった。

「いっしょにいらっしゃい」

月丘は絵里をうながして教員室のドアを開けた。絵里はほかの教師に頭を下げて月丘に続いた。月丘は無言で廊下を歩いてゆき、二

年生の教室のドアを開けた。
「板倉さん、お入りなさい」
月丘はドアの外で躊躇している絵里に言った。絵里はうつむいたまま二年生の教室に入った。美術の授業をしていた様子で、担当のアート時永こと、時永教諭が月丘にうなずいて教壇から降りた。その教壇に月丘恵子が上がった。生徒たちはしんとして月丘と絵里を見つめている。
「みなさん…」
月丘は座っている二年生に言った。
「板倉絵里さんです。事情は話しました。でも板倉さんは、先輩の皆さんをさしおいて自分が送辞を読むことに迷っています。皆さんから申し出があった、三年生を送り出す送辞を読むという大役に心を決められないでいるのです。みなさん、どうしましょう…」
月丘恵子は、教壇の横に立っている絵里と二年生たちを交互に見ながら言った。
二年生の真意はすでに決まっている。それは月丘も承知していた。クラス委員長の宮永俊夫と副委員長の淺川美江から、送辞を一年生の板倉絵里に、との申し出があったときは正直いって驚いた。こんなことは前代未聞だからだ。
月丘は、緊急の職員会議の招集を校長に申し出た。
「前代未聞だろうがなんだろうが、一年生が送辞を読んじゃいけない理由も決まりもありません。もしもそれが二年生全員の真意なら、結果はどうあれ、このさい板倉絵里にやらせてみてはどうですか」
校長の三宅が言った。田上教頭やほかの教師たちが校長の意見に賛同した。月丘は大きくため息をついた。
「板倉、やってくれ。おれたちの代わりに三年生を立派に送り出してくれ」
クラス委員長の宮永俊夫が立ち上がった。
「そうよ絵里。ぜひやって。わたしたちみんなの意見だから、断らないで！」

女子の淺川美江も立ち上がって絵里に言った。その言葉に教室から拍手が沸いた。絵里はその拍手に大きく腰を折って頭を下げた。
「先輩の皆さん。わたしには荷が重すぎます。失敗して赤っ恥をかくに決まってます…」
絵里はそう言ってうつむいた。
「赤っ恥でも、それに心がこもっていればいいじゃないか。どんなに上手な言葉や文より、卒業生の心にしみる送辞なら、それが一番だ。それができるのはおまえしかいないんだ。だから、おれたち二年生の代わりをやってくれ！」
宮永が真剣な表情で絵里を見つめていた。ほかの生徒も食い入るようなまなざしで絵里を見ている。
「卒業生の答辞は、太田先輩が読むことは百パーセント間違いない。板倉は太田先輩にかわいがられているし、俺たちみんなも、陰から学校と下級生を支えてくれた太田先輩が大好きだし尊敬しているんだ。おまえが卒業してゆく太田先輩に対する思いを、そのまま送辞にすればいいじゃないか。それで三年生に俺たち在校生の心はじゅうぶん通じるよ。なあみんな！」
宮永はそう言って教室を見渡した。
「いーたくら！、いーたくら！…」
教室に板倉コールが湧き上がった。絵里は戸惑いながら月丘と美術の時永教諭を見た。
月丘と時永が何度もうなずいた。
「みなさん…」
絵里は心に熱いものがこみ上げるのをこらえて二年生たちを見渡した。
「およばずながら、一生懸命やらせていただきます」
絵里はそう言ってまた頭を下げた。教室からいっせいに拍手が沸きあがった。絵里は頭を下げたままその拍手を聞いていた。あふれた涙がひとつ、またひとつと床に落ちた。

「先輩、お願いがあります…」
絵里は、月丘から送辞を読むように言われた次の日の土曜日、その日の授業が終わって部屋に戻った太田めぐみに言った。
「なによ、あらたまっちゃって…」
めぐみはベッドに座って笑いながら絵里を見た。
「わたしと、ツーショットで、記念の写真を写して欲しいんです…」
絵里はそう言ってめぐみを見つめた。
「え?。写真?…」
「先輩と一緒に…。一緒に写真に写りたいんです…」
そう言った絵里の目から大粒の涙があふれた。
「だって…。先輩、もうすぐ卒業してしまうし、ずーっと一緒にいるのに、先輩と写真撮ったことないじゃないですか。あかしがないじゃないですか…」
絵里は涙をふきながら床に座った。
「絵里…」
めぐみはベッドから立ち上がって、絵里と向かい合わせに座った。
この子は、もしかして…。
めぐみは泣いている絵里をじっと見つめた。
絵里は自分の写真嫌いを知っている。確かに一年間絵里と一緒にいるのに二人で写した写真は一枚もない。初めて絵里と一緒に写したのは、今年の正月に水島夫婦のところで撮ったのが唯一のものだ。
最近は写真を写すことに以前ほどの拒否反応はなくなったが、それでもカメラを向けられると体が硬くなる。入学式や修学旅行などの集団で写すものはともかく、ひとりや誰かと一緒の写真はほとんど写したことがなかった。砂川光陵高校の教育実習では生徒に何枚も写真を撮られたが、メガネをかけたり化粧をすることによって気持ちは別人になり、多少は大胆になれたのだ。
めぐみの脳裏に、三年前に従妹の良介に裸の写真を撮られて滝川じゅうにばら撒かれた事、そして二年前にはこの部屋で上級生の男

子三人にレイプされそうになった、あの忌まわしい記憶がよみがえっていた。あれ以来めぐみは写真をとられるのが嫌いになっていたのは確かだった。
でも絵里は…。自分の忌まわしい過去を、絵里は知っているのかも…。
そんなはずはない。あのことを知っているのは、月丘と今の同級生くらいだ。同級生が絵里にそんな話をするはずがない。とすれば、月丘が話したのかもしれない。
「……」
めぐみは泣きじゃくっている絵里を見つめていた。
もしもあのことを月丘が絵里に話したとすれば、絵里は自分と月丘のすべてを知ったことになる。絵里に自分や自身の過去を話した月丘恵子の真意は…。
月丘と自分には共通の過去がある。というよりも、自分は月丘に病んでいた心を救われた。月丘がいなければ今の自分はない。あのとき三人の男子に次々とレイプされ、身も心もズタズタに切り裂かれて、すさみきった人生を送っていただろう。もしかすると自ら命を絶っていたかもしれないのだ。
月丘…。絵里を使って、あたしの写真嫌いまで治そうって腹なのかい？。
めぐみは天井を見つめ、心の中で月丘に言った。
花吹雪め、なかなかやるじゃないか。上等だよ…。
めぐみはふと笑うと、涙をふいている絵里を抱き寄せた。
「絵里、一緒に写真とろうか！」
めぐみは笑顔で絵里に言った。
「本当ですか、先輩…」
絵里は涙でぬれた目でめぐみを見つめた。
「たくさん写そう。絵里とあたしの記念に…。涙ふいて、デジカメもっといで！」
めぐみの言葉に、絵里は満面の笑顔で立ちあがった。めぐみと絵

里はセーラー服のまま部屋を出た。めぐみは近くを歩いていた生徒をつかまえ、シャッター係りをさせた。
学校の校門、玄関、体育館の前、寮の前、月丘恵子の社宅の前、金山湖の湖畔、北星神社、妙現寺、水島商店と北星駅など、思いつくすべての場所で、抱き合って頬をすり寄せたり、めぐみが絵里を背負ったり、その反対に絵里がめぐみを背負ったり、肩を寄せたりして数十カットの写真を写した。
絵里は嬉しかった。めぐみの表情は太陽に向かって一気に開いたひまわりのように光り輝いている。やっとめぐみの心に残っていた氷が溶けたのだと絵里は思った。

「ねえ絵里…。ふたりだけの、秘密のツーショットを写そうか」
部屋に戻ったためぐみが絵里に言った。
「はい！。秘密の写真ですね？」
「そう。あたしと絵里だけの、秘密の記念写真さ…」
めぐみは絵里をじっと見つめていた。
めぐみは部屋の鍵をかけ、絵里の物入れからカメラの三脚を出してデジカメを取り付けた。そして窓のブラインドをおろすと、薄暗い中でセーラー服を脱ぎ始めた。
「着替えるんですか？」
そう聞く絵里に、めぐみは黙ったままセーラー服を脱ぎ、とうとう下着も脱いで全裸になった。
めぐみはゆっくりと絵里を振り向いた。絵里はそのめぐみ見つめた。
いつもめぐみや寮の女生徒たちと一緒に風呂に入っているが、きょうのめぐみは、同性の絵里が見てもため息が出るほどきれいだった。
「先輩…」
絵里は、笑みを浮かべて立っているめぐみを、まばたきもせずに見つめた。

「絵里も、さあ脱いで…」
めぐみはそう言って絵里を見つめた。
「絵里とあたしだけの、秘密の写真さ。だけど、あたしと絵里の間に秘密はないの…。そのあかしのツーショットだよ…」
めぐみは笑みを浮かべて絵里に言った。
「先輩…」
絵里はめぐみの心がわかって胸がいっぱいになった。絵里も笑顔でセーラー服を脱ぎはじめた。めぐみと絵里は生まれたままの姿になって向き合った。
「きれいだよ、絵里…」
めぐみはカーテンを引いた薄暗い部屋の中で、裸になった絵里の全身を見つめてほほえんだ。憂いを含んだめぐみの笑顔が美しかった。
「めぐみ先輩、とってもきれい…」
絵里はそう言ってめぐみに抱きついた。めぐみの肌から伝わってくる温かさに絵里はそっと目を閉じた。めぐみは絵里の背中と頭を強く抱きしめた。
はしゃぎ、そして笑い声を上げながら、めぐみと絵里はベッドに座り、立って向きあい、頬に唇をつけ、床に座って肩を寄せ合い。先輩と後輩の女子高生が、生まれたままの姿で、ふたりだけの秘密の記念写真を写した。

第21話　送　辞

三月十五日、南富良野町北星高校は卒業式を迎えた。
紅白の幕がはられた会場の体育館には、来賓の江島区長、助役、卒業生の父兄と一年生、二年生、一番前列には旅立つ三年生が並んで椅子に座っている。父兄の中には滝川からやってきためぐみの両親と弟の憲弘。そしてめぐみの晴れ姿を見ようとやってきた水島玄作とアキヨの姿もあった。
「ただいまから、富良野市立北星高等学校、第百期生・五十人の卒業式を挙行いたします。全員起立」
体育館に田上教頭の声が響いた。
「壇上の日の丸に、礼」
田上教頭の言葉で、生徒や教師、父兄たちが壇上の壁に掲揚されている日の丸に一礼したが、中には頭を下げない父兄もいた。
「君が代、斉唱」
生徒と父兄が君が代を斉唱した。

「来賓祝辞。北星区長、江島正三郎様」
田上教頭が江島区長を紹介した。江島は登壇すると日の丸に一礼し、会場の全校生徒を見渡した。
「三年生の諸君、本日は卒業おめでとう！。そして春には新入生を迎え、それぞれ落第することもなく、無事に進級する予定の在校生の諸君。その中でも、四月から三年生となる二年生の諸君は、口やかましい上級生がいなくなり、やっと自分たちの天下がきたと、内心喜んでいることと思う！」
江島区長は大声で言った。会場から大きな笑い声が湧き上がった。
「かくいう区長のわたしも同感である」
江島は大声で言った。
「この一年間というもの、針のむしろに寝ているような気分だった。

激しい区長いびりと、いかに北星のためとはいえ、まつりごとがあるたびに三宅校長の手先となり、生徒会長を先頭に、区長室に大勢で押し寄せて、ああしろだのこうしろだの、やれ金を出せ、物を出せと、我がままを言いたい放題の現三年生がめでたく卒業ということで、これで少しは枕を高くして眠ることができると、この小鳩のような小さな胸を、ホッと撫で下ろしているところである！」

その区長の言葉に、会場から大爆笑とやじが飛んだ。その爆笑とやじがおさまると、江島はもう一度前列に座っている卒業生ひとりひとりを見渡した。

「多くは言わん。きみたちは北星の宝であり、我が子ある！。きょう、北海道、いや、日本一の名門。北星高校をめでたく卒業し、この地を離れて、どこか知らない土地で生きることとなっても、この北星の出身であり、北星が諸君のふるさとだということを、決して忘れないでもらいたい！。挫折し、つまづき、心と身体が疲れ傷ついたとき、その心と身体を受け止めてくれるのは、きみたちの母なる、この北星だけだ！…」

江島はそう言って卒業生を見渡した。

「そしてその時、このわたしが区長でいる限りは、大船に乗ったつもりで、安心して北星に戻ってくることだ！。しかしながら、その大船を出して、傷ついたきみたちを出迎えるためには、大人になったきみたちの、清き一票が必要である！」

その言葉にまた爆笑とやじがわいた。自分の言葉に、当の江島区長も吹きだしそうな顔をしている。

「なにはともあれ、将来の有権者諸君！。本日は、卒業おめでとう！」

江島区長のユーモアあふれる祝辞が神妙な会場を爆笑でわかせ、そのあと月丘恵子が各地からの祝電を読み上げた。その祝電の中には、二年前から毎年かかさず祝電を届けてくる旭川、滝川、深川、富良野、美瑛、占冠など、近隣の市町村長と各警察署長のほか、道内の各高校や大学、札幌の絵里の両親と兄の旭の三人の名前で太田

めぐみ宛に打たれた電報。学校祭と北星神社祭、花火大会の会場でＹＯＳＡＫＯＩ・ソーラン踊りを披露したレディース・バイオから、卒業生ひとりひとりの名前で打たれた五十通の祝電もあった。

「最後に、北海道立砂川光陵高校から、卒業生の太田めぐみさんあてに届いた電報をご紹介いたします」

月丘恵子の声が体育館に響いた。会場のざわめきの中で、めぐみはマイクの前の月丘を見た。月丘は笑みを浮かべて最前列のめぐみを見た。

「伝説のスケ番、〈アイシャドーのめぐみ〉こと、太田めぐみ先生。ご卒業おめでとうございます。先生に教え導かれた楽しかった三週間の思い出が、わたしたち三年Ｃ組の心の中につい昨日のようによみがえってきます。わたしたち四十人の悪ガキも、本日無事に卒業式を迎えることが出来ました。太田先生と過ごした三週間の思い出を心の支えに、それぞれ自主性と主体性と根性を持って生きてゆきます。実習最後の日、先生に頭を叩かれてボロボロになったＣ組の出席簿は、太田先生と過ごしたわたし達の栄光の記念としてＣ組の教室に飾ってあります。大好きな太田先生。わたしたち三年Ｃ組の悪ガキたちを忘れないでください。そして、先生もお体に気をつけられ、ますますいい女になってください。最後に、太田先生の、バカヤローッ！」

月丘恵子の声が体育館に響き渡った。会場から大きな拍手が沸きあがった。

めぐみが教育実習生として三週間通った、砂川光陵高校三年Ｃ組の生徒たちからの電報だった。

めぐみは前を見たままその電文を聞いていた。その表情にかすかに笑みが浮かんだ。

卒業おめでとう。みんないい男といい女になったんだね。

めぐみの脳裏に、あの三年Ｃ組の生徒たちひとりひとりの顔が次々と浮かんでは消えていった。

今頃は、光陵高校の卒業式の中で、めぐみが三年Ｃ組あてに打っ

た電報も読まれているはずだった。めぐみが考えに考えた電文に、おそらく式場は爆笑に包まれているに違いない。
アハハ…。
そう思うと笑いがこみ上げてきた。

「校長先生、ごあいさつをお願いいたします」
区長の祝辞と祝電のあと、三宅校長が壇上に上がった。三宅は壁に掲揚された日の丸に頭を下げ、壇に立った。
「卒業生のみなさん、きょうは本当におめでとう」
三宅校長はそう切り出して、前列に整列している三年生ひとりひとりの顔をゆっくりと見渡した。
「きのうまで降り続いていた雪がやんで、この良き日を天気も祝ってくれているようです。北星高校の第百期生の旅立ちにふさわしい天気となりました。みなさんはもちろん、ご家族の方々も、この日をどんなに待ち望んでいたことでしょう。富良野市をはじめ、遠くは旭川、砂川、滝川、美瑛、上富良野、中富良野、占冠などから、ひとりで学生寮に入り、家族のもとから離れて生活し、この三年間を頑張りとおしてきた卒業生のみなさん。地元北星の生徒たちも、遠くからきて入寮している仲間たちの面倒をよく見てくれて、よく勉強し、よく遊び、一緒に成長してきたこと。それを考えると、先生たちは心から北星高校の生徒たちを誇りに思います」
三宅校長の低く重い声が、しんとした体育館に響いた。
「私は校長として、日本中に大声で自慢したい。わが北星高校の生徒ほど、仲良く、心の温かい生徒はいない。私もこの北星高校の校長で本当に幸わせです。そしてきょう、素晴らしく、大きく成長した皆さんを送り出すにあたり、みなさんひとりひとりに、直接卒業証書を手渡す役目をさせていただくことは、わたしの教師生活のなかで、生涯最大の良き思い出となります」
そう言って口ひげの生えた顔に笑顔が浮かんだ。
「ありふれた言葉ですが、卒業生のみなさん。江島区長のおっしゃ

ったとおりです。北星高校の出身だということを誇りに、小さな何もない田舎の高校で、嬉しいことも辛いことも共に乗り越えてきた仲間たちと、いついつまでもお互いの絆を大切にして、これから社会に出ようと、さらに上の学校に進学しようと、ここでの勉強と生活を心の励みに、ますます大きく成長していただきたい」

そう言って、またひとりひとりをゆっくりと見渡した。その目が少し潤んでいるようだった。

「みなさん。卒業、ほんとうにおめでとう！」

三宅校長は力をこめてそう言って頭を下げた。それに全校生徒も頭を下げた。

「卒業証書を授与いたします」

式次第にのっとり、三宅校長のあいさつのあと、三年生五十人の出席番号の順に、一人一人に卒業証書が授与されるときがきた。

「青木裕介」

「はい！」

一番先に名前を呼ばれた生徒が壇上にのぼり、校長の前に立った。

「青木裕介。右の者、高等学校の全課程を修了したことを証する。富良野市立北星高等学校。校長、三宅恭一。おめでとう！」

卒業証書が読み上げられ、校長から卒業生の青木裕介に手渡された。そして記念のメダルが青木祐介の首にかけられた。

「青山陽子」

「はい！」

「飯沼朋絵」

「はい！」

「井上景子」

「はい！」

「植田　聡」

「はい！」

「上原浩一」

「はい！」
「大出典子」
「はい！」
「大岸高志」
「はい！」
名前を呼ばれた卒業生が次々と壇上に上った、校長から卒業証書が読み上げられ、記念のメダルを首にかけられた卒業生は、壇上から降りて自分の席に座った。
「太田めぐみ」
「はい！」
絵里はめぐみの名前を呼ぶ田上教頭の声と、めぐみの透き通った返事で我にかえった。　太田めぐみが卒業する。もう二度と一緒の寮で過ごすことはない。会話をすることもない。勉強を教えてもらうこともない。風呂で背中を流しながらはしゃぐこともない。
めぐみが壇上に上がって三宅校長の前に立った。
「太田めぐみ。右の者、高等学校の全課程を修了したことを証する。富良野市立北星高等学校。校長、三宅恭一。おめでとう！」
涙がにじんでいた。その涙のむこうで、太田めぐみが三宅校長から卒業証書を受け取り、記念のメダルをかけてもらっている。めぐみは一歩下がって校長に頭を下げ、下手の階段に向かっている。
先輩…。
絵里は涙でぼやけためぐみの姿を必死に追いかけていた。
「田川雅彦」
「はい！」
「千葉祥子」
「はい！」
「南野良和」
「はい！」
やがて五十人の卒業証書授与が終わった。
「続きまして、在学中の三年間を通じて、最も優秀な成績を修めた

生徒を表彰します」
田上教頭がひと息ついた。そして前列の卒業生に視線を移した。
「受賞者、太田めぐみ！」
「はい！」
太田めぐみが立ち上がり、校長の待つ壇上へあがった。三宅校長は自分の前に立った太田めぐみをじっと見つめた。そして賞状を持った。
「最優秀成績賞、太田めぐみ。右は、三年間の在学中、全課程・全科目でもっとも優秀な成績を修めた。よってここにその努力を称え表彰する。富良野市立北星高等学校。校長、三宅恭一」
読み上げた賞状と太田めぐみを交互に見ながら、三宅は賞状を手渡した。
「素晴らしい番長だった。太田くんがいてくれたおかげで、我々はどんなに助かったか…。太田めぐみ。われわれ教師は、北星高校の伝説となるその名前を一生忘れることはない。いろいろと本当にありがとう。卒業、おめでとう！」
三宅はそう言って右手を差し出した。太田めぐみは三宅校長と握手をした。
「ありがとうございます」
めぐみはそう言って校長に一礼し、ゆっくりと全校生徒を振り返った。その太田めぐみに大きな拍手が送られた。
「みんなのおかげだよ。みんな、ありがとう！」
笑顔の太田めぐみは賞状を全校生徒に高く掲げて見せた。その太田めぐみに、また惜しみない大きな拍手がわいた。太田めぐみはゆっくりと壇を下りて自分の椅子に座った。

「送辞」
太田めぐみの最優秀成績賞受賞の興奮がさめないなか、体育館に田上教頭の声が響いた。絵里は大きく深呼吸した。
「在校生代表、第一学年、板倉絵里」

「はい！」
絵里は返事をして立ち上がった。体育館がざわめいた。一番前のほうに座っている三年生も驚いたような表情で後ろを振り返った。卒業生の前列に座っていた太田めぐみも〈え？、絵里が送辞…〉と我が耳を疑った。ざわめきの中でめぐみは大きくため息をついた。やがてその顔に笑顔が浮かんだ。
「絵里、がんばって！」
絵里のすぐうしろに座っていた宮地かおるが小声で言った。
「うん！」
絵里はうなずいて中央のマイクのほうに進み出た。そして壇の壁の日の丸と卒業生に深く一礼し、折りたたんだ送辞を取り出した。絵里が日の丸に一礼したとき、父兄と生徒の中から少しざわめきが起こった。
「送辞…」
絵里の澄んだ声が体育館に響いた。
「本日ここに、北星高等学校創立百周年にふさわしい卒業を迎えられた、第百期生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在校生一同より心からお祝いを申し上げます…」
「思い起こしますれば、ちょうど一年前、右も左もわからない未熟な私たち一年生を、弟か妹のように温かい手を差しのべ、大きな胸で抱きとめてくださり、時には叱り、時にはほめ、北星高校の輝かしい伝統に導いてくださいました…」
「おかげさまで私たち下級生も、北星高校の学生だと胸をはれるようになりました。わたしたちが心から敬愛する、先輩の皆さまがご卒業されるのは本当におめでたいことです。でも、在校生の私たちは本当に淋しくなります。皆さまのご卒業の日が迫るにつれて、この日が来なければ、卒業式がなくなればいいのにと、何度思ったか…」
送辞を読む絵里の声が震えていた。声がつまってうつむいた数秒間、送辞が中断した。沸きあがりそうな涙を懸命に飲み込みながら、

絵里はまた送辞の書面に目を上げた。
「春休みが終わって、新学期の朝、私たちが登校しても、皆さまの姿も、やさしい笑顔も、声も、この校舎にはありません。一緒にクラブ活動をしたり、金山湖でキャンプをしたり、お魚を釣ったり、寮のお風呂で背中を流したり。勉強を教えてくださったり、楽しくお話をしながら食事をしたり、一緒に学校祭や体育祭で騒いだり…。あしたからは、それが出来ません…。今となっては、先輩の皆さまと過ごした日々が…。本当に楽しかったことばかりが思い出されます」
「先輩のみなさん、どこにも行かないでください。卒業なんかしないでください…。ほんとうは、大声でそう叫びたいんです…」
絵里の頬を涙が伝った。声が震えて途切れそうになっていた。あちこちですすり泣く声が聞こえる。教師も父兄もハンカチで目を抑え、あるいは上を向いたまま目を閉じるものもいた。
「四月から、私たちはそれぞれ進級いたします。二年生の方々は三年生となり、卒業した皆さまの教室で…。私たち一年生は、二年生の方々が学んだ教室で、それぞれの先輩方がお使いだった机や椅子で、また新たな一歩を踏み出します。そして、卒業された皆さまが作り、守り抜いた北星高校の輝かしい伝統は、私たち在校生がしっかり引き継ぐことをお約束いたします」
「ご卒業される皆さまの笑顔と声を、私たちは忘れません。私たちも、本日卒業されて巣立たれる皆さまのように、この北星の空を大きくはばたきます」
「卒業されるみなさま。くれぐれもお体を大切にされ、それぞれ歩まれる道で、北星高校の校章と伝統を胸に、よりいっそうがんばってくださることをお祈りして、在校生の送辞といたします。富良野市立北星高等学校、在校生代表、板倉絵里…」
読み終えた絵里は、送辞をたたんでマイクの前の机に置き、卒業生に深く一礼した。体育館は水を打ったように静かだった。一礼した絵里が顔をあげると、卒業生の中からいっせいに拍手が沸いた。

その拍手につられるように一年生や二年生、来賓、父兄が全員立ち上がり、校長や教師からも大きな拍手が沸きあがった。その中には、卒業生の最前列の真ん中にいる太田めぐみの姿もあった。絵里は涙でぬれた目でめぐみを見つめると、また卒業生と来賓の方に向かって深く一礼して自分の椅子に歩いていった。

胸がいっぱいで張り裂けそうだった。涙がいくすじも頬を伝っている。絵里はその涙をぬぐわず自分の椅子に座った。

自分が言いたかったことは、すべて送辞の中にしたため、それを絵里は読み上げた。これで卒業生への思いを吹っ切れる。大好きな太田めぐみが卒業しても、その淋しさを乗り越えられると思った。

「答辞」

田上教頭がマイクに言った。

「卒業生代表、太田めぐみ」

「はい！」

名前を呼ばれた太田めぐみが立ち上がって前へ進んだ。太田めぐみは壇の下に準備されているマイクに見向きもせず、上手の階段から壇上にあがった。そして壁に掲揚されている日の丸に深く一礼した。その姿に体育館は大きくざわめいた。

その中から、ひとり拍手するものがいた。板倉絵里だった。

絵里の拍手に共感するように、生徒や父兄や教師の中から拍手が沸き、その音はしだいに大きくなって体育館全体が拍手につつまれた。三宅校長と江島区長も大きくうなずいている。月丘恵子やほかの教師も生徒の拍手に加わった。

太田めぐみは拍手を黙って聞いていた。ひとつため息をつくと、拍手が鳴りやむのを待って壇の一番前に進んだ。

太田めぐみは両手を腰にあてて体育館の中をゆっくりと見渡した。

「まさか、一年生の板倉絵里が、同室のあたしに内緒で、いつのまにか送辞を準備をしていたとは夢にも思わなかったわ。おかげで、夜も寝ないで考えた答辞は役に立たなくなっちゃった。一年生もそうだけど、先生たちも二年生のみんなも、なかなか意表をつくじゃ

ないか…」
　めぐみは笑みを浮かべて全校生徒を見渡した。
「在校生のみんな。そして送辞を読んだ板倉絵里。女々しくて、未練たっぷりの送辞をありがとう。スケ番といわれたあたしも、悔しいけど泣けちゃったよ」
　めぐみは全校生徒を一人一人見つめながら言った。絵里は壇上の太田めぐみをまばたきもせずに見つめた。もう太田めぐみのセーラー服姿は二度と見られないのだ。
「あたしたち三年生は、きょう北星高校を卒業した。新学期からは、もうこの学校で勉強することはない。みんなや先生たちにスケ番といわれ、陰の生徒会長といわれたこのあたしが、心ならずも校長先生から答辞を任されたからには、たとえ意表をつかれたとはいえ、あたしは卒業生の代表として、在校生の送辞に答える義務があるんだ。だからあたし流で答える。あたしの言葉は、卒業生全員からの答辞だ。よーく聞きな！」
　太田めぐみは、視線を一年生と二年生の列に移した。
「伝統を守るというのは、古いものにしがみつくということじゃないよ。悪い伝統は取り去り、良き伝統を作ってそれを守り、次の世代に伝えることなんだ。あたしたち卒業生も確かにいろいろな伝統を作った。でもその伝統は、たったいまこの場で終わった…。あしたから北星高校の新しい伝統を作るのは、在校生として北星高校に残り、次の一年生を育てはぐくむ、あんたたちの役目なんだ…」
　太田めぐみは透き通る声で言った。腕を組んで壇上を左右にゆっくりと歩きながら生徒たちを見渡している。
　この三年間、伝説のスケ番〈アイシャドーのめぐみ〉、あるいは陰の生徒会長と異名をとり、北星高校の風紀と伝統を支えてきた太田めぐみの、一世一代の大舞台だった。
「卒業して北星高校を出てゆくあたしたちには、あんたたちに残すべきものは何もない。あるのは在籍名簿の名前と、教員室に飾られる記念写真。あとは、あんたたちの心の中に残っている、思い出だ

け…」
　めぐみはそう言ってまたみんなを見渡した。その口が一文字に結ばれ、感極まっているのが絵里にもわかった。
　体育館は太田めぐみの言葉と、その一挙手一投足にしんと静まり返っている。そのめぐみを見つめている絵里の胸に熱いものが込み上げていた。
♪「あおーげば、とおーとしー、わーがーしのー、おーんー…」
　突然、壇上のめぐみが透き通った声で歌い始めた。
♪「おーしーえの、にーわーにも、はーやーいくーとせー…」
「三年生、たちな！」
　めぐみは歌いながら、前列に座っている三年生たちに両手で合図した。その合図に三年生が全員立ち上がり、在校生や父兄に向かって壇の下に整列した。
「みんな、最初からいくよ！」
　めぐみは壇上から叫んだ。
♪「あおーげば、とおーとしー、わーがーしの、おーんー。おーしーえの、にーわーにも、はーやー、いーくーとせー。おーもーえば、いーとーとし、こーのーとーしーつきー。いーまーこそー、わーかーれーめー。いーざー、さーらーーばー」♪
　体育館の中に卒業生全員の歌声が響きわたった。父兄や在校生の中にはハンカチで涙をふく者もいる。壇上の太田めぐみと、それに合わせて一緒に歌う三年生の姿を見て、月丘恵子もポケットからハンカチを出してあふれる涙を拭いた。
「いまじゃ、どこの卒業式でも歌われない懐かしい歌だよね。一緒に歌ってくれてありがとう」
　めぐみは笑顔を浮かべて言った。卒業生は壇上の下に立ったままだ。
「これも、あたしたち卒業生が、在校生と先生たちに、感謝をこめた答辞のうちと思ってほしいんだ」
　そう言ったためぐみは、壇上をゆっくりと歩きはじめた。そして壇

の真ん中で立ち止まって腕を組んだ。
「さて。しんみりはあたしの性に合わないんだ。だから、みんなへの答辞はにぎやかに締めくくろうじゃないか」
めぐみは腕を組んだまま生徒や父兄を見つめ、大きくため息をついた。
「さあ、みんな立ちな！」
めぐみが両手で生徒たちに合図した。座っていた在校生が立ち上がった。
「ねえみんな。きょう、卒業するあたしたちのひとりひとりに祝電をくれて、去年の夏と今年の二月の花火大会にもきてくれた、ＹＯＳＡＫＯＩ・ソーランのチームを覚えてるよね。レディース・バイオ。あの踊りと掛け声、かっこ良かったね。ヨィヤサーッ！、セィヤーッ！。あれを見て以来、あたしも一度やってみたいと思っていたんだ」
太田めぐみに笑顔が浮かんだ。そして足を半歩開き、組んでいた両手を腰に当てると、ひとつ大きく深呼吸した。
「板倉絵里、北星高校は、好きかーっ！」
太田めぐみの大声が体育館に響いた。
「ヨィヤサーッ！」
絵里の大声が体育館に響いた。
「みんな、北星高校は、好きかーっ！」
「セィヤーッ！」
体育館の全員が声をそろえて叫んだ。
「しっかり、勉強しろーっ！」
「ヨィヤサーッ！」
「みんな、仲良くなーっ！」
「セィヤーッ！」
「次の一年生を、よろしくなーっ！」
「ヨィヤサーッ！」
「先公を、いじめるんじゃないよーっ！」

「セィヤーッ！」
「区長を、いびるんじゃないよーっ！」
「ヨィヤサーッ！」
「良き伝統を、作れーっ！」
「セィヤーッ！」
「みんなのこと、忘れないよーっ！」
「ヨィヤサーッ！」
「あたしたちのこと、忘れるなーっ！」
「セィヤーッ！」
「みんな、元気でなーっ！」
「ヨィヤサーッ！」
絵里は太田めぐみの掛け声に夢中で叫んでいた。涙で太田めぐみの姿がぼやけてゆがんでいる。それでも絵里は叫び続けた。
「みんなのこと…」
そう言った太田めぐみの声が詰まった。壇上で腰に両手を当てたまま天井を見上げている。その目から涙があふれているのがわかった。
めぐみ先輩…。絵里は心の中で叫びながら壇上の太田めぐみを見つめた。
「最後に、みんなのこと、大好きだよーっ！」
めぐみは震える声でそう叫んだ。
「セィヤーッ！」
体育館の全員が大声で叫んだ。立ち上がって太田めぐみの掛け声に会わせ答えていた卒業生と在校生たちが小さく身体を震わせていた。流れる涙を懸命にぬぐう生徒もいた。体育館の全員が壇上の太田めぐみを見つめている。
「みんな、あたしのセーラー服姿の見納めだよ。一瞬だから、よーく見な！」
めぐみはそう言って両手を肩の高さに広げるとその場で爪先立ちになり、右足を軸にすばらしい速さで回転した。めぐみの髪とスカ

ートのすそが見事に広がり、スラリと伸びた長い足と真っ白い下着が見えた。三回転しためぐみは両手を挙げてピタリと止まった。会場が「ウォーッ！」とざわめき、大きな歓声と拍手が沸き起こった。

「みんな、しっかり見たかーっ！」

めぐみが笑顔で叫んだ。

「ヨィヤサーッ！」

めぐみの掛け声に会場の全員が叫んだ。

「答辞、終わります！。富良野市立北星高等学校、第百期生、卒業生代表、太田めぐみ！」

太田めぐみは透き通る声で三宅校長に言い、全校生徒と来賓や父兄のほうに一礼した。壁の日の丸に一礼するとゆっくりと階段を下りた。会場から割れんばかりの拍手が起こった。その拍手の中を、太田めぐみは頬を伝っている涙もぬぐわず、ゆっくりと歩いて一年生の列にいる板倉絵里に笑顔で近づいた。そして絵里に向けて両手を開いて差し出した。絵里はめぐみに駆け寄りその腕の中に飛び込んだ。それを見ていた体育館の全員が抱き合う二人に大きな拍手を送った。

「絵里。あたしは、あんたの送辞に答えたよ」

絵里を抱きしめながら、めぐみは絵里の耳元で言った。

「先輩…」

絵里はめぐみの胸に涙でぬれた顔をうずめた。

第２２話　月丘、めぐみ、そして絵里

北星高等学校校歌　　作詞　凪沙　峻

一　清流たたえる金山の
　水面に映える学び舎に
　　集える健児と乙女らは
　　崇高なりたるこころざし
　　胸に想いをたぎらせて
　　この地に強く根をはるる
　　ああ、われ等は北星の
　　社満射のふもとに育ちゆく

二　緑の風のトマム山
　吹きゆき香る穂の波に
　集える健児と乙女らは
　命をはぐくむこころざし
　心の絆を結びつつ
　この地とともにたずさえて
　ああ、われ等は北星の
　神住むふもとに育ちゆく

卒業式の会場となった体育館に、全校生徒が歌う北星高校の校歌が響きわたった。

「卒業生、退場」

田上の声に、一・二年生が見送りのため、体育館から出て、校舎の玄関から校門にかけて並んだ。五十人の卒業生が一列に並んで体育館の出口に歩いて行った。

「お世話になりました…」

列の一番最後にいた太田めぐみは、江島区長、助役、三宅校長、田上教頭、教諭たちとひとりひとり握手した。そして月丘恵子の前に立った。めぐみと月丘はじっとお互いを見つめた。めぐみは無言で月丘恵子に抱きついた。月丘もめぐみを強く抱きしめた。

「先生…」

めぐみは感極まっていて涙があふれそうになっていた。

心がすさんで逃げるように北星高校に入学した三年前。不良にならなければ、精一杯強がっていなければ、あのときの自分は生きていられなかった。

従兄弟の柴田良介に裸の写真を何枚も撮られ、レイプされそうになり、自分の裸の写真を滝川中の高校にバラまかれ、生きているのも辛かった。その地獄の悪夢から逃げ出すためには、滝川から離れたところで生きてゆくしかなかった。手の付けられない不良に変身することで自分の本当の姿と弱さを隠した。

担任の月丘恵子にも反発し続けた。自分の心の弱さを、過去を見抜かれたくなかった。自分には怖いものなどない。誰も近寄らなくなった不良のめぐみにはその自信があった。滝川での忌まわしい出来事も、両親や弟のことも、不良になっていきがっている時はすべて忘れられた。

ある日のこと、三年生の男子が三人いきなり部屋に飛び込んできた。あっという間に着ていた服を引き千切られ、素っ裸にされて押さえつけられた。

リーダー格の五十嵐浩太は、血走った目でめぐみの裸を食い入るように見てズボンとパンツを脱ぎ捨てた。五十嵐浩太は足を大きく広げられためぐみに襲いかかり、めぐみの胸と下半身をわしづかみにした。しかし五十嵐浩太が女の身体に慣れていなかったことが幸いし、もたついている間一髪のところに月丘が飛び込んできたのだった。

もしも月丘が来てくれなかったら、次々と三人の男子にレイプされていたに違いない。

あの時の月丘の姿は忘れられない。三年生の男子三人にひるむことなく全裸になり、仁王立ちで大見栄を切った月丘恵子。まかり間違えば自分が三人の男子生徒にレイプされるのを承知で、身体を張って生徒を守ろうとした、教師としての誇りを賭ける大人の女がそこにいた。

すさみきっていた自分を生き地獄から救い出してくれた月丘恵子。その月丘恵子に、卒業式が終わった今、はじめて素直な気持ちになれた。

「太田さん、元気でね…。あなたのこと忘れないわ。学校のこと、色々ありがとう…」

月丘は自分よりも身長が高い太田めぐみをしっかりと抱きしめた。月丘恵子の目からも涙があふれていた。

「先生、あたしを地獄から救ってくれて…。ずっと感謝してたんだ。でも、あたしバカだから…」

めぐみはそう言って泣いた。

「わかっていたわ、ずーっと前から…」

月丘はそう言ってめぐみの背中をなでた。

「何も言わなくても、わたしには太田さんの心はわかっていたわ…。あなたは、わたしがお願いしたとおり、立派な正義の味方になってくれたじゃないの。そしてわたしたちを助けてくれた…。わたしだけじゃなく、区長さんも校長先生も、ほかの先生たちもみんな、あなたの心はわかっていたわ。全校生徒だって太田さんのことを心から尊敬していた…」

月丘はそう言って、めぐみの眼をじっと見つめてほほえんだ。

「あなたにね…」

月丘はを拭きながら、ポケットから一通の電報を出した。

「祝電よ。読んでごらんなさい」

月丘はその電報をめぐみに渡した。めぐみは電報を開いた。

『太田。卒業おめでとう。月丘先生のもとで、名門中の名門、北星高校を立派に卒業したことを、中学の担任として本当にうれしく、

おまえの担任だったことを誇りに思う。しかし太田。もっとつまずけ。もっと挫折しろ。そして起き上がれ。そのおまえを先生は見ているぞ。胸を張って生きてゆけ。おまえの人生は光り輝いている。滝川より。鈴木真一』

その電報を見つめるめぐみの目から大粒の涙が流れ落ちた。

「鈴木先生…」

めぐみの脳裏に、いつもやさしかった中学の担任の鈴木の笑顔が浮かんだ。

「鈴木先生ね。あなたが入学して間もなく、わたしを訪ねてきたのよ。太田はいいやつだって…。計り知れない可能性がある。それを育ててほしいって…。あなたのこと心配して何度も何度も電話をくださったわ」

月丘は涙を流すめぐみに言った。

「ひとりぼっちじゃなかったのよね。太田さん」

月丘が笑顔でめぐみを見つめた。

「太田さん。卒業、ほんとうにおめでとう！」

月丘は力をこめてめぐみに言った。

「ありがとう、先生…」

めぐみの目からまた大粒の涙があふれた。

「月丘でいいわよ！」

そう言ってまためぐみを抱きしめた。

「さあ、みんながあなたを待ってるわ。板倉さんも…。いつもの太田さんらしく胸をはって、シャンとしなさい！」

「うん…」

月丘の言葉に、めぐみはうなずいて涙をふいた。そして二人を見守っていた教師たちに深く頭を下げた。

「伝説のスケ番、アイシャドーのめぐみ、バンザーイ！」

区長の江島が両手を挙げて叫んだ。三宅校長以下の全員がそれに同調してバンザイを叫んだ。めぐみはまた深く頭を下げた。

「めぐみ…」
体育館を出たところにめぐみの両親と弟の憲弘が待っていた。
「父さん…」
めぐみは、笑顔で見つめる父の胸に飛び込んでいった。
「父さん…」
めぐみは父の肩に顔を押し付けて泣いた。
「卒業、おめでとう」
父の恵一はめぐみをしっかり抱きしめた。母の憲子もめぐみの肩を抱いて泣いている。
あの忌まわしいことがあっていらい、父の胸に抱かれるのは久しかった。砂川でチンピラを叩きのめし、父が車で迎えに来てくれたとき、親子の間を凍らせ続けていた氷が溶けはじめていた。しかし、あの中学三年のときの出来事。あのときを境に、まともに顔を合わせずに暗い気持ちで高校生活を送ってきためぐみだった。
北星がめぐみの心を救ってくれた。月丘や絵里、この北星の人たちが手の付けられない不良だっためぐみを地獄の底から救い出してくれたのだ。そしていま、心の中ではいつも申し訳ないと思っていた両親に抱かれた自分がいる。
「ありがとう。父さん、母さん、大好き…」
めぐみは涙が流れるのもかまわず、父と母の頬に唇をつけた。大好きな両親に対する心からの感謝のしるしだった。
「おねえちゃん、おめでとう」
憲弘が笑顔でめぐみを見上げている。
「憲、ありがとう！」
めぐみは憲弘を抱きしめ、頬に唇をつけた。

絵里は一年生の列の校門に近いところに並んでいた。首にはめぐみから誕生日に贈られたオレンジ色の毛糸のマフラーを巻いている。
校門のところでは父兄が卒業生を見送る列を作っている。その中には水島玄作とアキヨの姿もあった。

体育館から出てきた卒業生が見送りの在校生の前をゆっくりと歩いてくる。絵里の目からはあふれる涙が止まらなかった。校舎の屋上に付けられているスピーカーから〈蛍の光〉が流れている。
絵里は一番最後から歩いてくる太田めぐみの姿を見つけた。
「先輩…」
絵里は小さな声でつぶやいた。
「絵里、かわいそう…」
いっしょの列に並んでいた横田ひとみがそう言ってハンカチを目に当てた。
太田めぐみは絵里がプレゼントした真っ赤な手袋をはめた手で、笑顔で見送りの生徒たちに手を振りながら歩いていた。卒業記念のメダルを胸にかけ、筒に入った卒業証書を左手に持っている。その笑顔は絵里が今まで見てきたどんな太田めぐみよりも美しく輝いていた。
めぐみが一番最後にいた絵里の前で立ち止まった。
「太田、ゆっくり別れを惜しんでこい！」
すでに見送られて校門の外に集まっている卒業生の中から声があがった。父兄や在校生たちも太田めぐみと板倉絵里を見つめている。
「絵里…。あたしの、かわいい絵里…」
めぐみは絵里を見つめた。開いた両手の中に絵里は飛び込んで、めぐみの首に両手を回して力いっぱい抱きついた。そして声をあげて泣いた。
「先輩、行かないで！。卒業しないで！」
絵里は大声で泣きながら叫んだ。見送りの生徒たちがそのふたりを見つめていた。スピーカーから流れる〈蛍の光〉だけが聞こえている。めぐみは目を閉じてしばらく絵里のするままにしていたが、やがて、しがみついている絵里の両手を持つと、ゆっくりと引き離した。
「たった一年間だったけど、あんたの先輩でいられて幸せだったわ」
めぐみは澄んだ目でじっと絵里を見つめた。めぐみは、卒業証書

の筒を絵里の隣にいる横田ひとみにあずけると、M・OHTAと刺繍してあるセーラー服の赤いスカーフをはずし、それを絵里の首に巻いた。
「これ、記念だよ。あんたにあげる…」
「先輩…」
絵里は、差し出されためぐみの右手を両手でしっかりと握った。この手を放したくない。放せば、めぐみ先輩は自分の手の届かないところへ行ってしまう。そう思うとまた涙があふれてきた。何かを言おうとしても胸が震えて声にならなかった。涙でゆがむ向こうで大好きな太田めぐみが絵里を見つめていた。
「絵里、泣くんじゃないよ」
めぐみは絵里を見つめてそう言った。
「がんばりな絵里。あたしには、絵里の背中に翼が見えるよ。その翼で思いっきり羽ばたくんだ。それを楽しみにしてるからね。それから、ふたりで写した写真…。秘密の写真…。一生の宝物にするからね」
めぐみは絵里をじっと見つめてそう言った。そして絵里をしっかり抱き寄せて頬に唇をつけ、声をあげて泣きじゃくる絵里の頭を何度もなでた。
「さよなら、絵里…」
耳元でめぐみが言った。
「……」
心が震えてさよならと言えず、ただ頭を横に振りながら、絵里は涙で唇を振るわせたまま、めぐみを見つめてその手を握っていた。
めぐみは絵里の手をゆっくり解きはなすと、横田ひとみにあずけた卒業証書の筒を受け取り、もういちど絵里を抱きしめた。そして在校生の拍手の中、太田めぐみは笑顔で見送りの列を離れていった。

風に翼を広げて　　おわり

第二部「続・風に翼を広げて」に続く。

第２２話　月丘、めぐみ、そして絵里（後書き）

「風に翼を広げて」を読んでいただき、ありがとうございました。
第一部はこの２２話で終了いたしますが、この作品は二部構成です。奇想天外な物語は第二部の「続・風に翼を広げて」から始まります。まだまだ面白くなりますので、どうぞお読みください。
この小説は、ある時に見た夢を元にしています。朝目が覚めても克明に記憶に残る夢でした。こんな田舎の高校が実際に存在するとは思えませんし、これほど無垢で純粋な女子高生がいるかどうかもわかりません。しかし、「いてもいいし、あってもいい」と思います。５０歳の半ばを過ぎたわたし（オヤジ）の「夢」。それを実現したのがこの「風に…」の二部作です。
わたし自身は、元々がバイオレンス・アクションが得意分野で、学園や青春小説は初めての取り組みでした。
本日時間が空いた時から「続・風に翼を広げて」を送信し始めようと思っております。どうぞお楽しみに。
また、この作品に対する皆様のご意見・ご感想をお待ちいたしております。

凪沙　峻　拝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5765d/

風に翼を広げて

2010年11月25日17時10分発行